

平成 11 年度

京都市埋蔵文化財調査概要

2002 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序

平安建都以来 1200 年、京都市は都市として生き続けています。これは世界的にみても都市自体が貴重な遺産といえます。これからも歴史都市として世界の注目を集めることは間違いありません。もちろん、平安京が建設される以前の歴史も長く、数多くの遺跡が点在しています。京を囲む山々には、多数の古墳が今にその姿をとどめていますし、平野部の土地の下には、遺跡が連綿と埋没し今なお新たな遺跡が発見されています。京都市ではこれら遺跡の所在位置を「遺跡地図」としてとりまとめ周知し、開発に伴う破壊にさいしてはその発掘調査等を指導しています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした市内遺跡の発掘調査を昭和 51 年度より開始し、昨年 25 周年をむかえることができました。この間、数多くの調査成果を現地説明会の開催や当概要報告書、さらに「リーフレット京都」や遺跡ごとの報告書などを通し公表することで、市民の方々に京都の埋蔵文化財のすばらしさを御伝えしてきました。今後も 25 年間の成果を可能な限り市民の方々に活用いただけるよう努めてまいりたいと考えています。

当概要報告書は、平成 11 年度に市内で実施しました発掘調査や試掘・立会調査の成果を報告するものです。平安京跡をはじめ 45 件の概要を掲載しています。継続調査としては京都迎賓施設建設に伴う京都御所東方公家町跡の調査などがあり、多くの新たな成果を付け加えることができました。

今年度の調査の中で、特異な調査として東寺講堂須弥壇の調査があります。日頃の調査は、建物建設や道路建設に伴う遺跡の破壊に対する緊急調査として行っているものですが、この例は保存のための講堂本尊大日如来台座下部構造を確認する目的で実施したものです。

最後になりましたが、調査を依頼された原因者の方々、京都市をはじめ関係諸機関の方々には多くのご協力をいただきましたことに対して厚く感謝し、お礼申し上げます。

平成 14 年 6 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

凡 例

- 1 本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が平成 11 年度に実施した、事業の年次報告である。発掘調査（第 1 章）、試掘・立会調査（第 2 章）、資料整理（第 3 章）、普及啓発事業等報告（第 4 章）とした。
- 2 調査継続のため次年度に報告するものについては表 5・6 に示した。
- 3 本書中に示した方位・座標値は、使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系 VI によった。ただし座標値は単位（m）を省略している。座標は、京都市遺跡測量基準点と京都市水準点を使用した。
- 4 本書中の地図は、京都市長の承認を得て、同市発行の都市計画基本図（縮尺：1/2,500）、市街図（縮尺：1/25,000）を複製して調整した。
- 5 長岡京の条坊呼称は、新呼称に準拠した。
- 6 遺構表示のうち、表示記号で示したものは奈良国立文化財研究所の用例に従った。
- 7 土器編年の型式は、当研究所『研究紀要』第 3 号の「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」に従った。なお、「平安京 I～V 期」「京都 VI～XIV 期」を「京都 I～XIV 期」で統一した。
- 8 調査位置図の方位は、北を上配置し、縮尺は付記した。各調査位置図に示した黒塗り部分が、今年度実施した調査地点および調査対象地である。
- 9 図版 1・2 の調査地点番号の I は発掘調査、II は試掘・立会調査をあらわした。
- 10 平成 11 年度発掘調査のうち、文化庁国庫補助事業による調査は、『京都市内遺跡発掘調査概報』平成 11 年度に報告している。
- 11 写真は、遺物写真と一部を除く発掘調査の遺構写真は資料課（村井伸也・幸明綾子）が、試掘・立会調査の写真とその他の写真は、各調査担当者が撮影した。
- 12 各報告は、文末に記した各調査担当者が執筆（連名の場合は初出の者が主として報告）した。
- 13 本書の作成にあたっては、編集・調整は資料課が行った。

目次

第1章 発掘調査

I 平成11年度の発掘調査概要	1
II 平安京跡	
1 平安京左京北辺四坊	3
2 平安京左京三条二坊・ 史跡旧二条離宮	11
3 平安京左京六条三坊	14
4 平安京左京七条二坊・名勝滴翠園	19
5 平安京左京八条二坊	22
6 平安京右京一条二坊	26
7 平安京右京三条一坊	37
8 平安京右京六条一坊1	41
9 平安京右京六条一坊2	42
III 鳥羽離宮跡	
10 鳥羽離宮跡141次調査	47
11 鳥羽離宮跡142次調査	49
IV 中臣遺跡	
12 中臣遺跡79次調査	53
V 長岡京跡	
13 長岡京左京一条三坊1	59
14 長岡京左京一条三坊2	65
15 長岡京左京一条三坊3	69
VI その他の遺跡	
16 京都大学構内遺跡	74
17 六波羅政庁跡	76
18 中久世遺跡	85
19 大藪遺跡	86
20 醍醐廢寺	92
21 史跡醍醐寺境内	97

22 下三栖遺跡	103
23 伏見城跡	109

第2章 試掘・立会調査

I 平成11年度の試掘・ 立会調査概要	114
II 平安宮・京跡	
1 平安宮朝堂院・豊樂院跡	115
2 平安宮朝堂院跡	123
3 東寺講堂須弥壇	124
4 平安京左京九条四坊	127
5 平安京右京六条一坊	128
III その他の遺跡	
6 鳥羽離宮跡	129
7 長岡京左京九条四坊	130
8 史跡仁和寺御所跡	131
9 法性寺跡・貞観寺跡	133
10 醍醐廢寺	138
11 久我東町遺跡	141
12 京都市内遺跡	143

第3章 資料整理

1 測量	144
2 保存処理	147
3 復元彩色	149

第4章 普及啓発事業等報告

1 普及啓発および 技術者育成事業	150
2 京都市考古資料館状況報告	153
3 役職員名簿	157

図版目次

図版 1	調査位置図 1	平安京・長岡京・白河街区・伏見地区調査位置図
図版 2	調査位置図 2	1 長岡京地区調査位置図 2 山科・醍醐地区調査位置図
図版 3	平安京左京北辺四坊	1 1区江戸時代後期全景 2 1区江戸時代前期全景
図版 4	平安京左京北辺四坊	1 1区S F 12 2 1区S D 15 B 3 1区S D 113 4 1区S D 1407
図版 5	平安京左京北辺四坊	1 2区江戸時代後期全景 2 2区江戸時代前期全景
図版 6	平安京左京三条二坊・ 史跡旧二条離宮	1 第1面全景 2 第3面全景
図版 7	平安京左京六条三坊	1 1区平安時代前期から中期全景 2 町小路東側溝S D 1111 3 古墳時代川S D 1500
図版 8	平安京左京六条三坊	1 室S X 1494 2 2区古墳時代全景
図版 9	平安京左京七条二坊・名勝滴翠園	1 全景 2 枯滝・入水口・滝口 3 築山断ち割り
図版 10	平安京左京八条二坊	1 第1面全景 2 第2面全景 3 S K 5 犬骨検出状況 4 S K 2 犬骨検出状況
図版 11	平安京右京一条二坊	1 御土居 2 平安時代全景
図版 12	平安京右京三条一坊	1 D-3・4区全景 2 E-1区全景
図版 13	平安京右京三条一坊	1 E-2区全景 2 G-1区全景 3 F区S X 91

図版 14	平安京右京六条一坊 2	1 第 2 面全景
		2 第 4 面全景
図版 15	鳥羽離宮跡 142 次調査	1 第 1 面全景
		2 第 2 面全景
図版 16	中臣遺跡 79 次調査	1 2 区全景
		2 3 区全景
図版 17	中臣遺跡 79 次調査	1 3 区竪穴 31
		2 3 区竪穴 51
図版 18	中臣遺跡 79 次調査	1 2 区古墳 3
		2 1 区古墳 7
図版 19	中臣遺跡 79 次調査	1 2 区墓 1
		2 3 区墓 8
		3 2 区墓 2
		4 2 区墓 2 土器出土状況
図版 20	中臣遺跡 79 次調査	1 5 区竪穴 54 土器出土状況
		2 3 区掘立 10
図版 21	長岡京左京一条三坊 1	1 長岡京期全景
		2 弥生時代全景
図版 22	長岡京左京一条三坊 1	1 弥生時代 1 号方形周溝墓
		2 弥生時代 2 号方形周溝墓
		3 2 号方形周溝墓遺物出土状況
図版 23	長岡京左京一条三坊 2	1 東区全景
		2 西区全景
		3 S D 438
図版 24	長岡京左京一条三坊 3	1 全景
		2 東三坊坊間東小路東側溝 S D 18
		3 東三坊坊間東小路西側溝 S D 66
図版 25	京都大学構内遺跡	1 全景
		2 落込
図版 26	六波羅政庁跡	1 9 区南半部全景
		2 9 区北半部全景
図版 27	六波羅政庁跡	1 10 区第 1 面全景
		2 10 区第 1 面路面
図版 28	六波羅政庁跡	1 10 区第 2 面全景
		2 10 区第 3 面全景

図版 29	六波羅政庁跡	1	10区第4面全景
		2	10区第2面暗渠
		3	10区第4面井戸 250
図版 30	中久世遺跡	1	弥生時代から古墳時代全景
		2	飛鳥時代から奈良時代全景
図版 31	大藪遺跡	1	B1区鎌倉時代から室町時代全景
		2	B1区SK 15鏡の鋳型出土状況
		3	B1区SE 12
図版 32	大藪遺跡	1	B2区全景
		2	C1区鎌倉時代から室町時代全景
図版 33	醍醐廃寺	1	第2面全景
		2	石列 40
図版 34	史跡醍醐寺境内	1	2B区全景
		2	2C区全景
		3	1C区全景
		4	2B区土器出土状況
		5	出土青白磁合子
図版 35	下三栖遺跡	1	1区第1面全景
		2	1区土壌 169
		3	1区第2面全景
		4	1区第4面全景
図版 36	伏見城跡	1	1トレンチ全景
		2	2トレンチ全景
図版 37	伏見城跡	1	1トレンチ建物3・4
		2	カマド3
		3	立売通路面と側溝
図版 38	東寺講堂須弥壇	1	創建須弥壇上面
		2	須弥壇断ち割り状況
		3	杭検出状況

図 目 次

図	1	平安京左京北辺四坊	調査位置図	……………	3
	2	〃	室町時代前期以前遺構平面図	……………	4
	3	〃	室町時代後期・桃山時代遺構平面図	……………	5

図 4	平安京左京北辺四坊	江戸時代前期遺構平面図	6
5	〃	江戸時代中期遺構平面図	7
6	〃	江戸時代後期遺構平面図	8
7	平安京左京三条二坊・	調査位置図	11
8	史跡旧二条離宮	遺構平面図	12
9	〃	主要遺構配置図	13
10	〃	柱穴 75	13
11	平安京左京六条三坊	調査位置図	14
12	〃	地鎮遺構 P it2417 出土土器実測図	14
13	〃	遺構平面図	15
14	〃	町小路路面 S F 1400 と側溝 S D 1111・1490 土層図	16
15	〃	S E 1123 出土土器実測図	17
16	〃	S K 525 出土土器実測図	17
17	平安京左京七条二坊・	調査位置図	19
18	名勝滴翠園	調査区配置図	19
19	〃	滄浪池旧池石組み実測図	20
20	〃	築山断ち割り断面図	21
21	平安京左京八条二坊	調査位置図	22
22	〃	遺構平面図	23
23	〃	S K 20 出土土器実測図	24
24	〃	S K 2・5 平面図	25
25	平安京右京一条二坊	調査位置図	26
26	〃	平安時代遺構平面図	28
27	〃	中・近世遺構平面図	30
28	平安京右京三条一坊	調査位置図	37
29	〃	調査区配置図	37
30	〃	遺構平面図	38
31	〃	出土文字資料	40
32	平安京右京六条一坊 1	調査位置図	41
33	〃	遺構平面図	41
34	平安京右京六条一坊 2	調査位置図	42
35	〃	遺構平面図	43
36	〃	流路 338 出土土器実測図	45
37	鳥羽離宮跡 141 次調査	調査位置図	47
38	〃	調査区全景	48

図 39	鳥羽離宮跡 142 次調査	調査位置図	49
40	〃	第 1 面遺構実測図	50
41	〃	第 2 面遺構平面図	50
42	〃	出土瓦実測図	51
43	〃	本御塔実測図	52
44	中臣遺跡 79 次調査	調査位置図	53
45	〃	調査区配置図	53
46	〃	遺構平面図	54
47	〃	竪穴 54・60 出土土器実測図	56
48	長岡京左京一条三坊 1	調査位置図	59
49	〃	遺構平面図	60
50	〃	出土遺物実測図	61
51	〃	縄文時代から弥生時代の遺構検出地点位置図	63
52	長岡京左京一条三坊 2	調査位置図	65
53	〃	弥生時代遺構平面図	65
54	〃	平安時代以降遺構平面図	66
55	〃	C-2 区出土土器実測図	68
56	長岡京左京一条三坊 3	調査位置図	69
57	〃	崩壊した護岸と土囊による応急修理	69
58	〃	遺構平面図	70
59	〃	出土土器実測図	72
60	京都大学構内遺跡	調査位置図	74
61	〃	遺構平面図	74
62	〃	基本層位図	75
63	六波羅政庁跡	調査位置図	76
64	〃	9 区遺構平面図	77
65	〃	10 区第 1 面遺構平面図	78
66	〃	10 区第 2 面遺構平面図	78
67	〃	10 区第 3 面遺構平面図	79
68	〃	10 区第 4 面遺構平面図	80
69	〃	井戸 250 実測図	80
70	〃	試掘 1 区石組み	81
71	〃	試掘 1 区遺構実測図	81
72	〃	10 区落込焼土層・湿地状堆積上面出土土器実測図	82
73	〃	10 区井戸 250 出土土器実測図	83

図 74	中久世遺跡	調査位置図	85
75	大藪遺跡	調査位置図	86
76	〃	主要遺構配置図	88
77	〃	出土土器実測図	90
78	〃	B2区しがらみ検出状況	91
79	醍醐廃寺	調査位置図	92
80	〃	遺構平面図	92
81	〃	調査地形と旧地形	93
82	〃	第2面築地と周辺遺構実測図	94
83	〃	土壌19出土土器実測図	95
84	〃	出土軒丸瓦実測図	96
85	史跡醍醐寺境内	調査位置図	97
86	〃	調査区配置図	98
87	〃	遺構実測図	99
88	〃	出土土器実測図	101
89	〃	出土軒瓦実測図	101
90	〃	出土平瓦実測図	102
91	下三栖遺跡	調査位置図	103
92	〃	1区遺構平面図	104
93	〃	2区遺構平面図	105
94	〃	出土遺物実測図	106
95	〃	溝2出土須恵器実測図	107
96	伏見城跡	調査位置図	109
97	〃	1トレンチ第2面遺構平面図	109
98	〃	1トレンチ第3面遺構平面図	110
99	〃	2トレンチ遺構実測図	111
100	〃	焼土層出土土器実測図	112
101	平安宮朝堂院・豊楽院跡	調査位置図	115
102	〃	遺構検出地点位置図	116
103	〃	No.23・85地点断面図	117
104	〃	出土瓦実測図1	118
105	〃	出土瓦実測図2	119
106	〃	出土軒瓦	120
107	〃	出土凝灰岩実測図	121
108	〃	111地点朝堂院修式堂跡凝灰岩出土状況	122

図 109	平安宮朝堂院跡	調査位置図	123
110	〃	No.3・5地点位置図・柱状断面図	123
111	東寺講堂須弥壇	調査位置図	124
112	〃	遺構実測図	125
113	〃	木杭位置関係図	126
114	平安京左京九条四坊	調査位置図	127
115	〃	調査区配置図	127
116	平安京右京六条一坊	調査位置図	128
117	〃	3区調査状況	128
118	鳥羽離宮跡	調査位置図	129
119	長岡京左京九条四坊	調査位置図	130
120	史跡仁和寺御所跡	調査位置図	131
121	〃	遺構平面図	132
122	法性寺跡・貞観寺跡	調査位置図	133
123	〃	出土遺物実測図	135
124	醍醐廢寺	調査位置図	138
125	〃	遺構平面図	139
126	久我東町遺跡	調査位置図	141
127	〃	調査区配置図	141
128	〃	3区全景	142
129	測量	G P S 作業風景	145
130	復元彩色	首里城跡京の内出土陶磁器の彩色指導	149

表 目 次

表 1	京都市内遺跡	国庫補助による立会調査件数一覧表	143
2	保存処理	保存処理済み一覧表	147
3	復元彩色	復元彩色件数一覧表	149
4	京都市考古資料館状況報告	入館者数一覧表	156
5	平成 11 年度発掘調査一覧表		159
6	平成 11 年度試掘・立会調査一覧表		161
7	平成 11 年度その他契約一覧表		162

第1章 発掘調査

I 平成11年度の発掘調査概要

平成11年度の発掘調査の委託契約件数は29件で、うち文化庁による国庫補助事業は2件である。昨年度に比べ3件の減少である。遺跡別の内訳は、平安京跡12件(左京域7件、右京域5件)、鳥羽離宮跡3件、中臣遺跡2件、長岡京跡3件、その他遺跡9件である。平安宮域内の発掘調査は0件である。

このうち、平安京左京北辺四坊(99HK-GS004)、平安京右京三条一坊(99HK-RA003)の2件については、調査終了後報告書作成中で当概要報告書には含めていない。また、鳥羽離宮跡(99TB-TB143)、中臣遺跡(99RT-NK080)、西飯食町遺跡(99TB-SC001)は次年度で報告する。今回報告する発掘調査の項目は23件である。

平安京跡 平安京左京北辺四坊(1)の調査は、継続実施してきた京都和風迎賓施設建設に伴うもので、京都御苑内で実施したものである。江戸時代前期・中期・後期の公家町の変遷をとらえることができた。

平安京左京三条三坊・史跡二条離宮(2)の調査は、二条城の南側を東西に通る押小路通内の共同溝建設に伴うもので、神泉苑の東側にあたる木工寮の厨町の推定地である。押小路通内では地下鉄東西線建設に伴う調査を実施し、規模の大きな建物が検出されていたが、今回の調査でも規模の大きな柱穴が新たにみつき、近辺に密集して建物が配置されていることがわかった。

平安京左京六条三坊(3)の調査地は、市立修徳小学校の跡地で実施したものである。左京の重層する遺構を調査し、古墳時代から近代にいたる変遷がわかった。調査地の西および南には平安京造営以来の通りである町小路と樋口小路が今も踏襲され、その変遷や側溝を検出する成果を得た。さらに、土地利用の大きな変遷もとらえることができ、あらためて左京域の実態資料となった。

その他、左京域の調査では、西本願寺国宝飛雲閣の庭園である名勝滴翠園整備に伴う継続調査(4)を、今年度も実施して池の北東部に築かれた導水路や滝石組み、これに続く池岸の石組みを検出した。また、京都駅前のビル建設に伴う調査(5)では、室町時代前半の墓域が検出され、人墓と犬の骨を複数納めた墓10基が検出された。

右京域の調査では、平安京右京一条二坊(6)で、桃山時代に築かれた御土居跡の一部を、平安京右京三条一坊(7)では、御池通改良工事に伴う調査で三条坊門小路北側溝を延べ110mにわたり検出する成果を得た。また、平安京右京六条一坊1(8)のJR丹波口駅周辺再開発に伴う調査では、近世とみられる大規模な土取穴、平安京右京六条一坊2(9)の朱雀第三小学校の増築工事に伴う調査では、平安時代・鎌倉時代・室町時代・江戸時代の各遺構面を検出したが、顕著な遺構はみられず耕作関係の遺構が目についた。

鳥羽離宮跡 鳥羽離宮跡では2件を実施した。141次調査(10)では、東殿北向不動院西側で整地層上にピットや土壌を検出した。142次調査(11)では、慶応年間(1865～1867)に建てられ、昭和36年(1961)の第二室戸台風で壊れた本御塔の根固め跡や江戸時代安楽寿院整備に伴う溝跡などを検出した。

中臣遺跡 中臣遺跡では、市営住宅の建て替えに伴う79次調査(12)を実施し、1万㎡近い面積を連続して調査することができ、多くの古墳・竪穴住居・掘立柱建物を検出した。

長岡京跡 長岡京跡では、継続調査している西羽束師川の河川改修工事に伴う調査を、東土川地区で3箇所が実施された。長岡京左京434次調査(13)では、弥生時代前期・中期の方形周溝墓、長岡京左京426次調査(14・15)では、室町時代の遺構多数、長岡京東三坊坊間東小路跡などを検出した。

その他の遺跡 白川改修工事に伴う京都大学構内遺跡の調査(16)では、縄文時代や弥生時代の遺物が出土している。京都国立博物館敷地内で実施している継続調査(17)では、方広寺南門より延びる鎌倉時代から室町時代・江戸時代の道路敷きと東側溝、平安時代の遺構を検出した。

中久世遺跡(18)の調査では、弥生時代・古墳時代・飛鳥時代から奈良時代・平安時代の各時期の遺構を検出しており、遺跡の変遷が長期にわたることがわかった。昨年度から実施している街路新設に伴う大藪遺跡の調査(19)では、大藪村の変遷を示す各時期の遺構が検出された。

団地建て替えに伴う醍醐廢寺の調査(20)では、調査地東方に位置する醍醐寺の、平安時代後期に造営された子院跡を新たに検出した。下水管敷設工事に伴う史跡醍醐寺境内の調査(21)では、南門東方に平安時代末期から鎌倉時代にかけて営まれた整地面や柱穴が検出されたことから子院の存在が明らかとなった。

油小路通共同溝敷設に伴う下三栖遺跡(22)の調査では、下三栖庄集落の一部とみられる鎌倉時代の遺構や、古墳時代後期の竪穴住居も検出され、巨椋池北岸にあたる当一带の遺跡の変遷や広がりについての資料が増加した。

老人ホーム等建設に伴う伏見城跡の調査(23)では、伏見城の城下町造営に伴う立売通に面した町屋跡が検出され、その区画や建物内の様子がわかった。 (長宗繁一)

II 平安京跡

1 平安京左京北辺四坊 (図版1・3～5)

遺構 京都和風迎賓施設建設に伴う第2回発掘調査を実施した。調査地は上京区京都御苑3番地にあたり、平安京左京北辺四坊八町・公家町跡に比定される。調査は、1区(930㎡)、2区(760㎡)に分け、1区を平成10年(1998)8月30日から平成11年(1999)3月30日、2区を同年3月31日から同年7月19日の期間に実施した。調査面積はあわせて1670㎡を測っている。また平成10年10月18日には、現地説明会を開催し市民に調査の状況と成果を公開した。

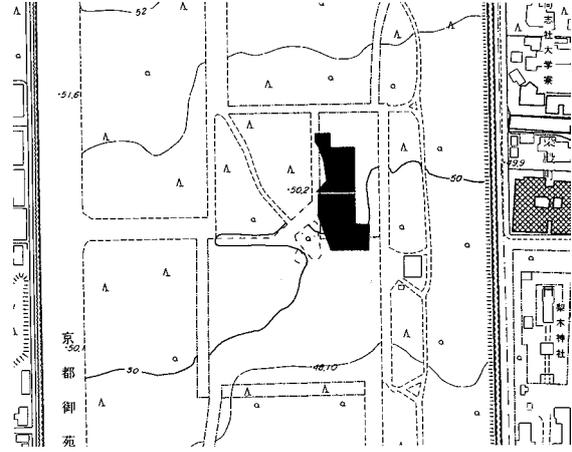


図1 調査位置図 (1:5,000)

1区・2区の調査の結果、古墳時代前期、平安時代中期、平安時代後期、室町時代前期(南北朝期)、室町時代後期(戦国期)、桃山時代、江戸時代、明治時代の各遺構を検出した。特に、江戸時代の遺構は公家町に関係したものとみられ、桃山時代の成立期から明治2年の東京遷都による公家衆の東京移転までの約280年間に及ぶ公家町の歴史的変遷を検証する重要な成果を得た。

調査地は、平安京の条坊地割りでは、左京北辺四坊八町とされ、平安京北東隅の町に位置する。この町は、平安時代前期には、昌泰2年(899)10月に落飾された仁和寺開祖宇多法皇の妃である藤原褒子の京極院があり、兄妹の右大臣藤原顕忠は押小路側北西1/4町を邸宅としたとされる。その後、褒子所生の行明親王に伝領され、さらには親王の遺児(源重熙ら)に遺贈されたとみられる。

平安時代中期後半には、藤原道長の妻、源倫子の西北院の敷地となり、治安元年(1021)12月に檜皮葺阿弥陀堂を供養している。この堂は康平元年(1058)2月の法成寺焼亡時に類焼したが、延久4年(1072)8月に藤原頼道によって再建・供養されている。その後、この地の記録は不明だが、室町時代中期の北野天満宮史料、応永32年(1425)付け『酒屋交名』に「次郎入道、憲浄在判、一条京極西南類」とあり、この町への酒屋の居住が知られる。八町を含めた一帯が、この時期前後に町屋地化したものとみられよう。

公家町の成立に関しては、天正元年(1573)4月の織田信長による上京焼き討ちの後、天正3年(1575)7月に御所の東と南に公家第を集住再建する意向を信長自身が奏上している。しかし、天正9年(1581)2月の信長による内裏東側の御馬揃えでは、御所東側東西2町、南北8町が馬場に設定され、天皇臨席による盛儀が挙行されている。この時期に公家第が建ち並んでいたと考えることはできない。やはり、天正18年(1590)の豊臣秀吉による洛中町割実施以降に、地

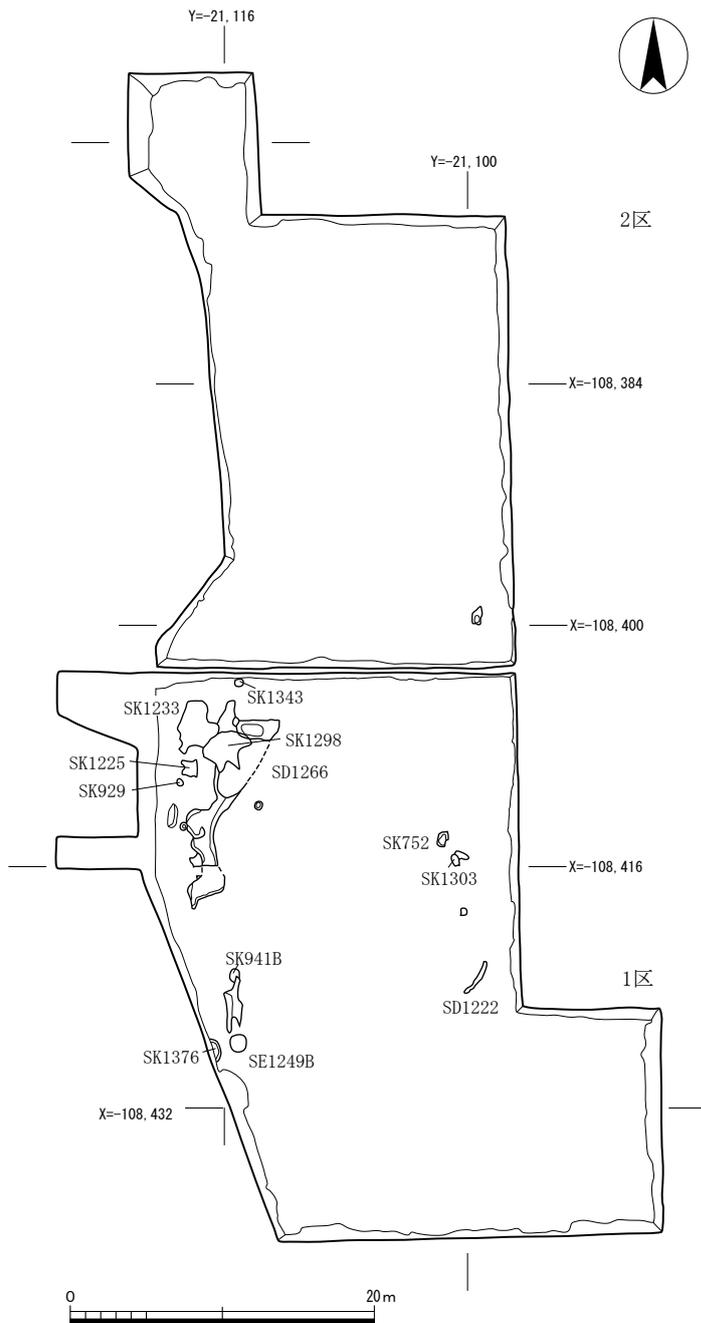


図2 室町時代前期以前遺構平面図 (1:500)

割りと建設が本格化したものとみられる。その後、徳川家康による慶長10年(1605)7月の禁裏拡張工事と、区域にあたる公家衆への替え地付与にいたり、公家町の大要が完成をみたものといえよう。

公家町は、万治4年(1661)1月の火災によって一部が罹災している。江戸時代中期前半の宝永5年(1708)3月には、京都の大部と禁裏、公家町を焼いた宝永の大火が発生する。この火災後の復興では、町屋の移転を含めた大規模な公家町の地割りと道路区画の変更が実施されている。

後期初頭の天明8年(1788)1月には、宝永の大火を上回る天明の大火が発生する。この大火は禁裏、二条城、公家町をはじめ、京都の町屋のほぼ全域を焼き尽くしている。この火災後の復興では、地割りの大規模な変更は実施されていない。その後、幕末の激動の歴史を経て、明治2年(1869)3月の東京遷都以降、公家町は解体に向かっている。

遺構 調査で検出した遺構は古墳時代前期前半の土壙、平安時代中期

前半の土壙、平安時代後期後半の溝・土壙、室町時代前期(南北朝期)の土壙・井戸、室町時代後期(戦国期)の土壙・溝・濠・柱穴、桃山時代の土壙・柱穴、江戸時代前期前半の溝・井戸・土壙・柵・柱穴、前期後半の溝・石積溝・土壙・井戸、中期前半の道路面・溝・井戸・土壙・柱穴、中期後半の道路面・溝・井戸・土壙、後期前半の道路面・石積溝・井戸・土壙・柱穴、後期後半の道路面・石積溝・土壙・柱穴がある。

古墳時代前期前半の土壙SK929は、1区西北部に検出した。平面円形で径0.35m、深さ0.5mを測る。庄内式古相期の土器4個体以上の埋納が認められた。平安時代中期前半の土壙SK941Bは、1区中央で検出した。平面不定形で、径0.4m前後、深さ0.1mを測る。柱穴の底部

が残存したものとみられる。他に、溝 S D 1222、土壙 S K 752・1303 がある。平安時代後期後半の溝 S D 1266 は 1 区中央北側から斜め西方に蛇行、深淺を繰り返して延びる。深さ 0.2～0.5 m、幅 0.5～2.0 m を測る。池庭に関係した遺水施設の可能性がある。同じく 1 区西北部で、土壙 S K 1343 を検出した。東西 0.7 m、南北 0.8 m の平面方形で、深さ 0.5 m を測る。他に、土壙 S K 1225・1298・1233 などがある。

室町時代前期（南北朝期）の井戸 S E 1249 B は 1 区西部に検出した。川原石を使用し、円形に組み上げた井戸で、内径 0.7 m、円形の掘形径 1.5 m を測る。石組み袋状井戸に分類される。同じく 1 区西部に検出した土壙 S K 1376 は、隅丸方形で東西 1.5 m、南北 1.3 m、深さ 1.2 m を測る。

室町時代後期（戦国期）の柵列は、1 区北側・2 区南端に検出した。S A 1113・1112・1168・540 がある。布掘りを施した溝内に柱を据えたもので、上部を平坦に揃えた石材および柱あたりの痕跡を溝底部に検出し

ている。3 条共に東西方向に延び、幅 0.3 m、深さ 0.4 m を測る。S A 1113 は S A 1112 の造り替えとみられる。S A 1168 は S A 1112 の北 6 m を離して平行する。S A 540 は 2 区南端に検出している。柱穴群は S A 1113 の北側一帯に集中して検出した。小規模な建物としてまとまる可能性がある。池 S G 529・529 B は 2 区中央に検出した。平面楕円形、東西 4 m、南北 5 m、深さ 0.6 m を測る。造り替えの痕跡が認められる。井戸 S E 535 はこのやや北東に位置している。掘形平面円形で、径 2.5 m、深さ 1.2 m を測る。石積みなどの施設は認められない。濠 S D 1407 は、1 区西側の拡張区で検出した。東西幅約 6 m、深さ 1.6 m を測り、さらに南北方向に延長するとみられる。他に、1 区南側で土壙 S K 777・859・985・1032・1191 などがみられ、2 区北側にも

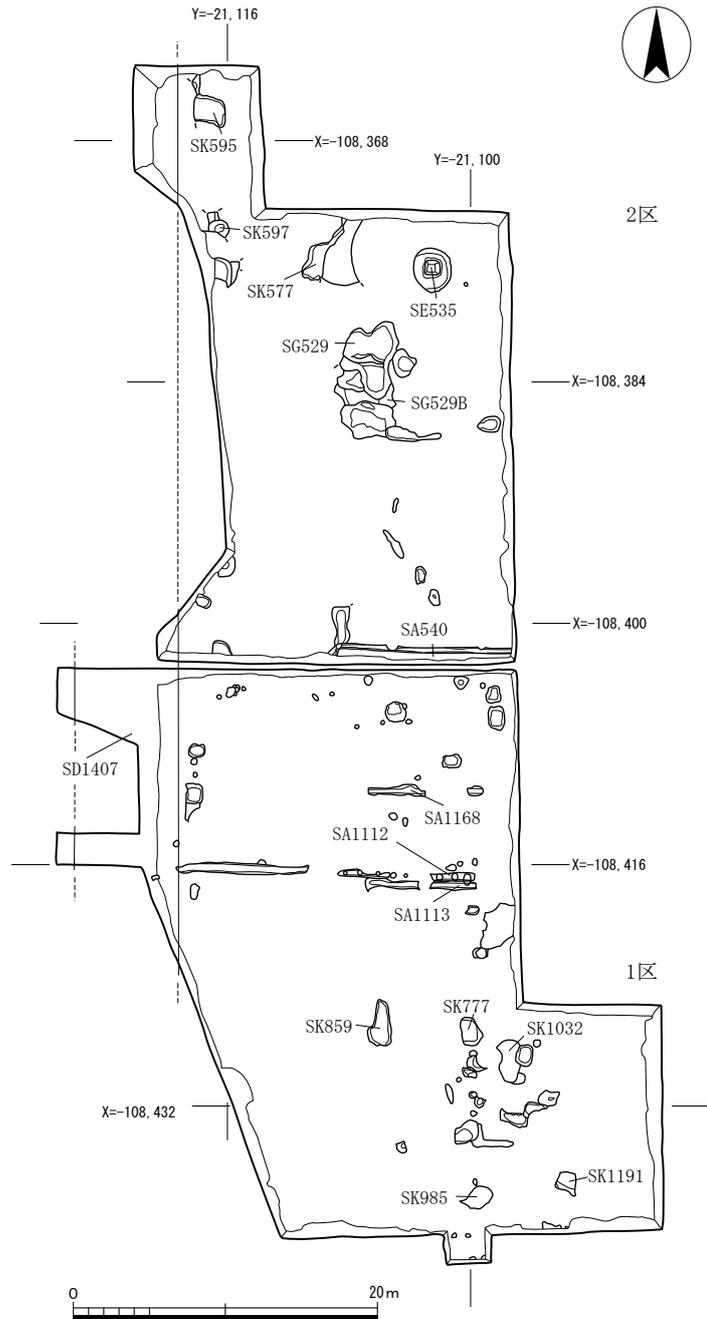


図3 室町時代後期・桃山時代遺構平面図(1:500)

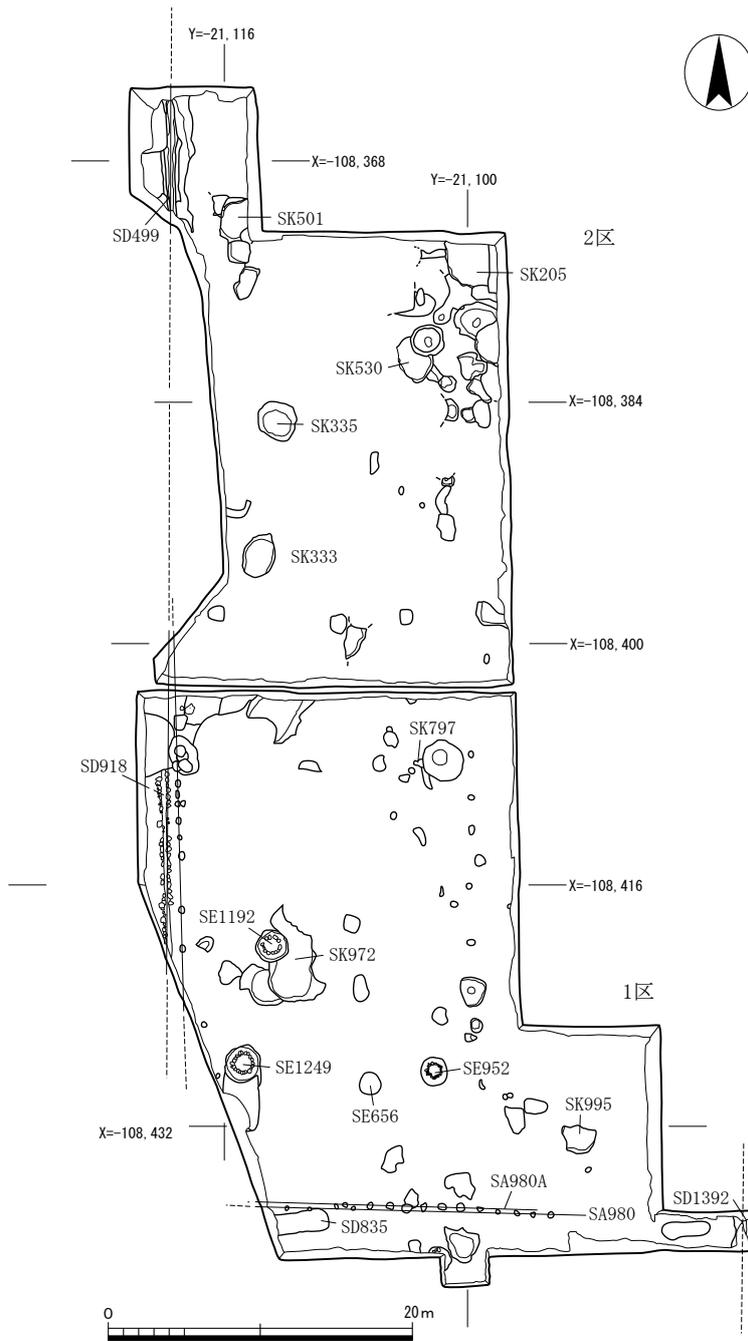


図4 江戸時代前期遺構平面図(1:500)

土壌SK 577・595・597などがみられる。

江戸時代前期前半は、1・2区西端に溝SD 918・499、1区拡張東端に溝SD 1392、1区南側に柵SA 980・980 B、溝SD 835を検出している。SD 918・499は幅1.5 m、深さ1.6 mを測る。1・2区で約60 m以上の延長を確認している。SA 980・980 Bは、柱間1.2 m、幅1.5 m、東西方向に20 m以上にわたり検出した。SD 835は東西方向溝で、1区中央付近で南方向に屈曲する。SA 980・980 Bとセットになるとみられる。他に1区土壌SK 797・972・995、井戸SE 656・952・1192・1249などがある。2区土壌SK 205・333・335・501・530などがある。前期前半は、SD 918・499の肩崩れが進行し、底部に切り石を積んだ溝になる。石積み幅0.3 m、石積みは3段が確認できる。西側壁の石材は径0.3 m前後を測る。同じくSD 1392も肩崩れ

が進行し、溝幅を拡大して深さは半減する。他に、井戸や土壌などが新たに形成されている。

江戸時代中期前半には、1・2区中央南北に道路SF 12・636と、この側溝とみられる1区溝SD 10・156、2区溝SD 4・51が出現する。SF 12・636は路面幅約15 mで、東半の路面は小礫を叩き込み舗装面を形成する。西半は簡単な整地のみで特別な地業を行わない。SD 156は深さ0.5 m、幅0.5 mを測る。SD 10は道路東側溝で幅0.7 m、深さ0.5 mを測る。西半の道路路面は通路として使用された形跡が希薄である。火除け地としての空閑地か植樹帯として設定されたとみられる。柵SA 297はSD 10の東側直近に位置し、南北に連なる。柱穴径0.2 m前後、柱間1.2 m前後を測る。1区南側には東西道路の北側溝SD 15がある。溝は幅0.3 m、深さ0.4

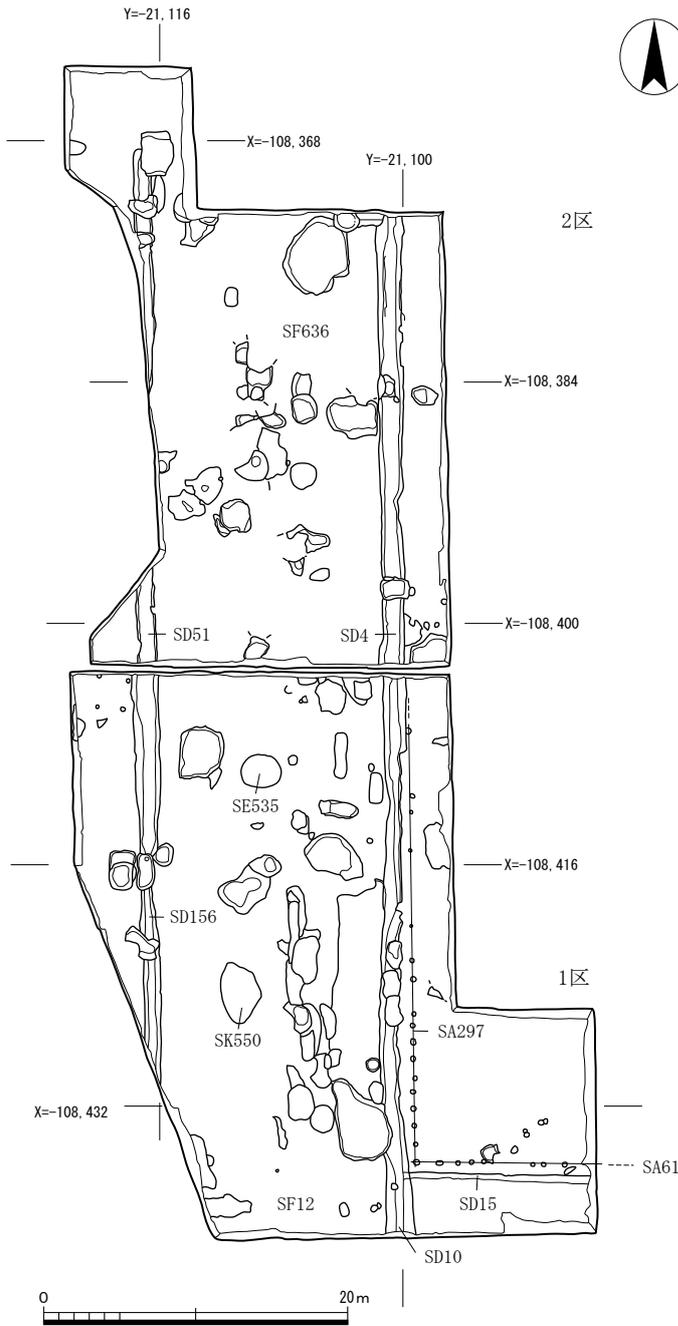


図5 江戸時代中期遺構平面図 (1:500)

mを測る。この溝の北側東西に柵 S A 61 がある。柱穴径 0.2 m、柱間 1.2 m を測る。その他、土壌 S K 550、井戸 S E 535 などがある。中期後半は道路面の補修の痕跡が確認される。S D 10・156・4・51 は、切り石による石組み溝に改修されている。両溝共に 3 段程度の石組みが遺存する。溝内径幅 0.5 m、深さ 0.4 m を測る。

江戸時代後期前半は、1・2 区 S F 12・636 の路面中央に溝 S D 11・9 を設置し、排水機能を強化している。西半は従来と同様の火除け地として機能したものとみられる。S D 11・9 は幅 1.6 m、深さ 0.7 m を測り、1・2 区中央南北に通る。東側の柵 S A 266 と、この柵の下を暗渠で排水する溝 S D 15 B がある。この溝は瓦を使用して構築されている。他に、土壌 S K 351・345 などがある。また、1 区溝 S D 156 から西側宅地へ分流させる目的の溝 S D 113 がある。石積みの溝で、内径幅 0.5 m、深さ 0.2 m を測る。後期後半以降は、肩崩れを防ぐためか、S D 11 が石積み溝に改造される。この南端では、東西溝 S D 3 との合流地点に形成された溝 S D 34 が、路面側に大きく抉り込んで成立している。

遺物 調査で出土した遺物は、古墳時代前期・後期、平安時代中期・後期、室町時代前期（南北朝期）、室町時代後期（戦国期）、桃山時代、江戸時代前期から後期、明治時代のものがある。

古墳時代前期の遺物は、土師器壺・甕がある。後期の遺物は須恵器杯身が出土した。

平安時代中期の遺物は、土師器皿、緑釉陶器碗、灰釉陶器碗、黒色土器碗、瓦、軒瓦、凝灰岩片がある。後期の遺物は、土師器皿、緑釉陶器碗、須恵質陶器碗、瓦器碗・皿、瓦が出土した。

室町時代前期（南北朝期）の遺物は、土師器皿、瓦器碗、陶器壺・甕がある。後期（戦国期）の遺物は土師器皿、瓦器釜、陶器壺・甕、輸入磁器碗・皿、瓦がある。

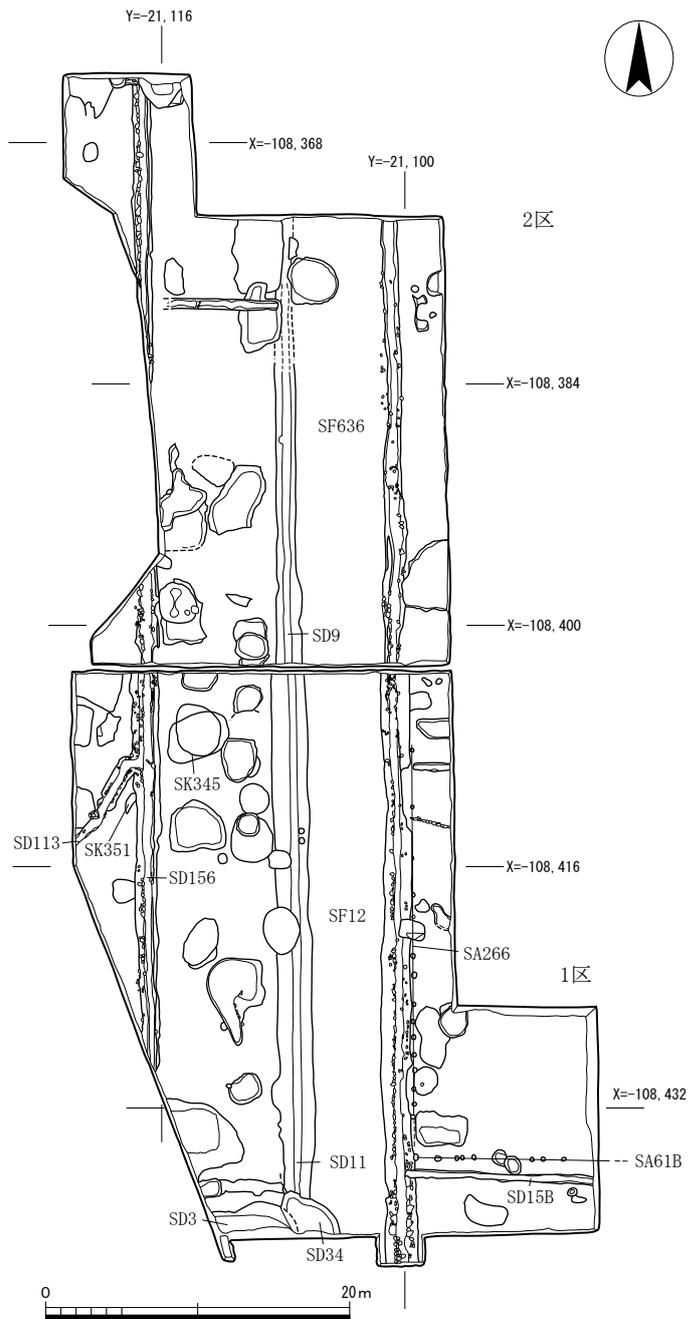


図6 江戸時代後期遺構平面図 (1:500)

桃山時代の遺物は、土師器皿、瓦器釜、陶器皿・椀・壺・鉢、輸入磁器椀・皿がある。また「開元通寶」他の輸入銭がある。

江戸時代前期の遺物は土師器皿・蓋、土師質陶器風炉・焙烙・塩壺、瓦質陶器火入・瓦燈、肥前磁器椀・皿、唐津・瀬戸・美濃・丹波・備前・信楽・京焼陶器皿・椀・鉢・甕・壺・盤・播鉢・徳利、輸入陶磁器椀・皿・壺・合子、銭貨、瓦、金属製品、石製品、土製品などがある。

江戸時代中期の遺物は、土師器皿・蓋、土師質陶器焙烙・火消壺、瓦質陶器火入・瓦燈・塩壺、唐津・瀬戸・美濃・丹波・備前・信楽・京焼陶器椀・皿・鉢・甕・壺、肥前磁器椀・皿・鉢、銭貨、瓦、金属製品、石製品、土製品などがある。

江戸時代後期の遺物は、土師器皿・蓋、土師質陶器焙烙・火消壺・塩壺、瓦質陶器火入・瓦燈、唐津・瀬戸・美濃・丹波・備前・信楽・京焼陶器椀・皿・鉢・甕・壺、肥前磁器椀・皿・鉢、瓦、銭貨、金属製品、石製品、土製品がある。

明治時代の遺物は、陶器皿・瓶、

硝子壺、金属製品などが出土している。

特殊な遺物として、福建省漳州窯系大皿2枚、「暫労永逸」銘の石製落款、石製印鑑、記年名陶器「元治元年」(1864)銘、「明和元年」(1765)銘、家紋入り飾り瓦、銭貨「寛永通寶」各種、「宝永通寶」「朝鮮通寶」「豆板銀」「桐小型大判金」、金属製品金製目貫・リムファイヤー式発射済薬莢・鎧小札・煙管(火口・吸口)・銀製勾玉・簪・小柄・匙・刀装具がある。鑄造製品取瓶・埵塙、土製品人形・ミニチュア品・土鈴・箱庭道具・泥面子。石製品石帯丸鞆(乳白色)2個体、基石・石臼・硯・砥石・翡翠石材・五輪塔・墓石・火打ち石・水晶製品、硝子製品小匙・簪・グラス・ボトル・鳥置物などがある。

小結 本調査では、当該地に関わる文献史料や絵図、調査で得られた知見から、京都地域での政治的、社会的画期を考慮の上、検出した遺構群の時代および時期を以下のように区分した。

古墳時代前期前半を庄内式古相期、平安時代中期前半は10世紀前半、平安時代後期後半は12世紀後半、室町時代前期（南北朝期）は14世紀代、室町時代後期（戦国期）は16世紀前半、桃山時代は16世紀後半、江戸時代前期前半は17世紀前半、江戸時代前期後半は17世紀後半、江戸時代中期前半は18世紀前半、江戸時代中期後半は18世紀後半、江戸時代後期前半は19世紀前半、江戸時代後期後半は19世紀半ばとした。

古墳時代前期前半の祭祀土壌は、1区西側の黄褐色泥砂層をベースに成立している。2回目調査地区北側一帯にこの土層が広がり、混入ながら遺物の出土も確認されている。調査地西北部から北側一帯に、この時期の遺構の存在が想定できよう。平安時代中期前半の遺構は、京極院の終末期から八町を伝領した行明親王、遺児の源重熙らの時代にあたる。遺構・遺物の数量は少量であるが、調査地への居住の痕跡は認められる。平安時代後期後半の遺構は、再建された西北院の終末期から院政期の時期にあたる。蛇行する溝や多量に出土する凝灰岩片は、西北院の施設に関係したものとみられる。

鎌倉時代は、遺構・遺物の検出はなく、この時期の居住痕跡は認められない。室町時代前期（南北朝期）には、1区西側に石積み井戸が造られている。しかし、その他の遺構は極めて少数である。一時期を限った短期的な居住があったものとみられる。その後、室町時代中期を経て、室町時代後期（戦国期）には、1区・2区の全域に土壌、池、柱穴、柵などの遺構群が出現する。文献にみえる酒屋、土倉などの居住記事を裏付ける遺構群といえる。1区では、約6m（2丈）を離して東西に平行する柵列が検出されている。この間には柱穴や土壌の検出は限られており、東西方向の通路が設定されていた可能性がある。2区では池が検出され、この池の北側には導水路とみられる蛇行した溝も検出されている。宅地内に池を配した庭を造作した富裕な居住者像がうかがえる。また、1区西端拡張区に幅約6m（2丈）を測る逆台形の断面を有した濠が掘られている。これは御所の東方と南方に設定された濠の一部とみられる。この濠に関しては、掘削や改修の記事が文献にみられる。室町時代後期（戦国期）の、京都をめぐる日常的な争乱状況を検証する遺構といえる。織田信長入京後の桃山時代は、遺構は極めて少ない。これは上京焼き討ち後、信長による上京復興計画で、公家第の集住化の構想があり、そのために意図的に空閑地とされたことに原因を求められよう。信長による御馬揃えでは、御所東方東西2町、南北8町の地が馬場として設定されている。濠などは御馬揃え直前に、すべて埋めもどされ、整地を受けたものとみられる。

江戸時代前期には、公家町が成立している。調査地はほぼ全域が正親町三条家の敷地となる。調査地東端から西方一帯は、北から富小路家、千種家、園家があり、背割り溝と垣塀によって正親町三条家と区画される。南側の宅地境も垣塀によって分けられている。正親町三条家は敷地東側の二階丁通に門を開け、主要な出入は東側といえる。調査で検出したSD 918がこの背割り溝、SD 1392が二階丁通西溝、SA 980・980Bが南側との宅地境の垣塀とみられる。正親町三条家

の南端である S A 980・980 B 付近での両溝間の東西距離は 17 間（約 34 m）を測り、正親町三条家南側の敷地東西幅として妥当といえる。宅地内には井戸、土壇、建物などが配置されている。この時期、土壇などは比較的小規模なものが多い。前期後半には、肩崩れを防ぐためか、背割り溝は石組みの溝に造り替えられる。

江戸時代中期前半には、調査地中央に路面をそなえた道路が設定されている。道路幅は 6 間半（約 13 m）を測り、東西の側溝は素掘りの溝である。これは、禁裏、公家町、京都の町屋の大半を焼いた宝永の大火の結果で、大火後の復興では、区画と地割りの大幅な変更が実施されたとみられる。園家や富小路家と分けた背割り溝は廃止され、火除け地を兼ねた幅広の二階丁通を調査地北端で西方にクランクさせ、南方へ延長設置している。この新造の二階丁通の路面東半は、小礫を叩き込んだ堅牢な舗装面を有するが、西半には舗装面が認められない。このため、交通は東半に限ったもので、西半は防火のための空閑地ないしは植樹帯などから成っていたとみられよう。この時、正親町三条家の敷地西半がほぼ二階丁通になり、東側の敷地は旧二階丁通の路面と合わされて、高倉家、町尻家、小野瑞心院御里坊の宅地に分割されている。それぞれの側溝の宅地側は垣塀を設置、区画されたとみられる。二階丁通の東西の側溝 S D 10、S D 156 は、中期後半には石組みの溝に造り替えられている。

江戸時代後期前半は京都のほぼ全域を焼き尽くした天明の大火の復興からはじまる。この復興では道路の付け替えなどの変更は行われなかった。二階丁通西側宅地の区画に小規模な変動がある。東側は高松家、堤家、三室戸家などになり、宅地分割と居住者の変動が絵図から読み取れる。後期後半以降には、二階丁通の道路中央南北に溝 S D 11 が設置されている。この付近での排水機能の強化を計ったものとみられる。当初、この溝は素掘りであるが、まもなく石積み溝にかえられる。また溝の西側南北方向に、石組みの垣塀基礎も検出されている。

明治 2 年（1868）、東京遷都による公家衆の東京移転が急となり、公家町の解体は決定的となる。明治 10 年（1877）には、御所を中心に、南北を今出川通と丸太町通、東西を烏丸通、寺町通を限り、周囲に石塁を築いて一帯を御苑として整備、現在の景観となる。この後、明治 13 年（1880）には、調査地北方直近に残されていた旧准后里御殿の仮校舎で、京都府画学校が開校されるが、まもなく織殿・勸業場跡に移転している。

（平田 泰・小檜山一良・小松武彦）

2 平安京左京三条二坊・史跡旧二条離宮（図版1・6）

経過 本調査は史跡旧二条離宮（二条城）内の共同溝埋設工事に伴うものである。調査地点は押小路通の道路内中央に位置しており、道路南端までが史跡範囲とされている。当地点は平安京左京三条二坊七町に属し、平安時代前期には七町西側の一・二町が、北側の八町に所在した木工寮の厨町である木工町にあてられたとされ、西側の神泉苑にも隣接した位置にある。

平成2年（1990）～平成4年（1992）に当地点西側で地下鉄東西線建設に伴う発掘調査が実施され、旧二条離宮の関連遺構として二条城外周の道路遺構を検出し、「木屋」銘線刻の緑釉陶器が出土、平安時代前期初頭の大型建物が検出された。この時期の大型建物は平安京内では検出例が少なく、神泉苑関連の遺構・遺物の発見と共に、平安京造営当初の都市景観を復元する上で注目を集めた。なお、発掘調査終了後には押小路堀川交差点部の工事掘削に伴う立会調査を実施した。

遺構 基本層位は、現地表が標高37.5～37.6mで、表土は層厚0.2～0.3mの現押小路通の道路敷きと層厚0.1mの旧二条離宮関連の道路敷きがある。その下に層厚0.2mの近世初期の整地層が認められ、地表下0.5m（標高37.0～37.1m）に黄褐色粘質土層（地山）が堆積する。

遺構は、史跡関連の近代から平安時代までの計88基を検出した。調査では、旧二条離宮関連を第1面、近世初頭の整地層排土後を第2面、平安時代前期を第3面として扱った。

第1面では道路敷き（道路敷1）、溝状遺構（溝状遺構2）を検出した。道路敷1は現路布設時に大半が攪乱されていたが、調査区北側で検出した。路面は径3～5cm大の小礫を固く締めた状態であり、旧二条離宮の外周道路に相当する遺構である。溝状遺構2は道路敷1の直下で南北方向に検出した。幅60cm、深さ80cmで、底部に二相式キャブタイヤケーブルが鋼管で保護、埋設されていた。二相式電線は現在使用されていないので、大正期以後の遺構と推定される。

第2面では江戸時代から平安時代までを調査したが、江戸時代の遺構は検出していない。旧二条離宮の時代に削平されたと考えられる。桃山時代の遺構は溝1条（溝4）、溝状遺構1条、柱穴1基、ピット1基など計4基がある。溝4は、幅65cm、深さ60cmで、東西から南北へ鉤形に屈曲する。室町時代の遺構は土壇1基、ピット2基で計3基がある。いずれも室町時代前半代の遺構である。鎌倉時代の遺構は柱穴1基、土壇4基、ピット7基で計12基を数える。平安時代後期の遺構は柱穴4基（柱穴16・30・31・71）、土壇3基、ピット3基など計10基があげられる。柱穴掘形は径30～50cmで、いずれも径20cm前後の柱あたりを検出したが、並びは認められない。平安時代中期の遺構は柱穴4基（柱穴9・36・41・67）、土壇2基、ピット22基など計28基を

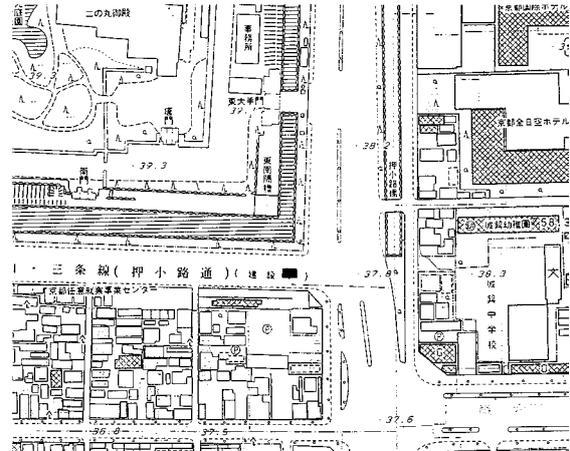


図7 調査位置図（1：5,000）

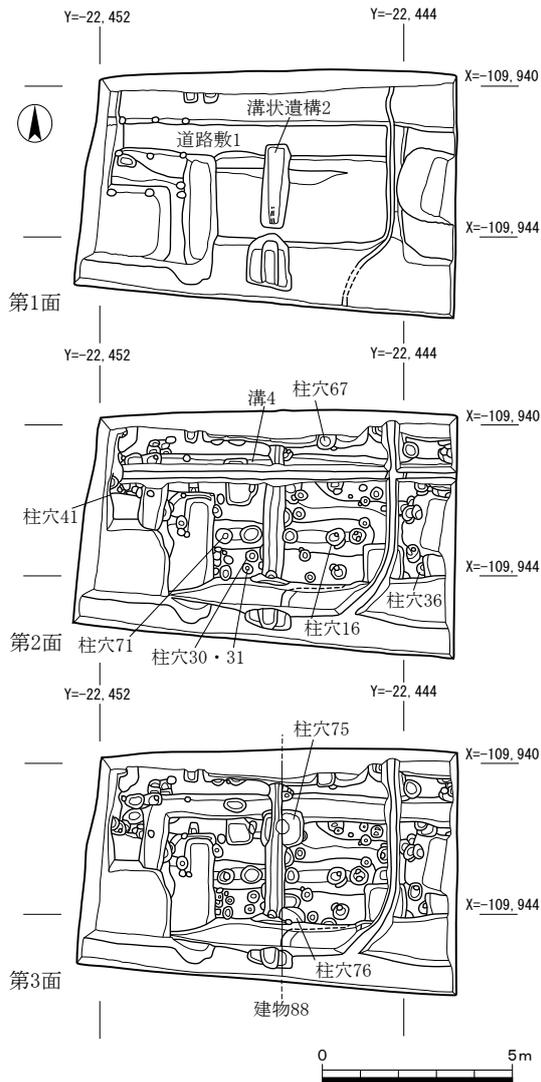


図8 遺構平面図 (1:200)

検出した。ピットは柱あたりが認められない径30 cm規模の遺構が14基あり、柱穴は径35～50 cmの規模であるが、並びは認められない。

第3面では平安時代前期の建物1棟(建物88)と土壇1基(土壇79)を検出した。建物88は南北方向に検出した柱穴2基(柱穴75・76)の並びを検出した。柱穴75は方形状の掘形を呈しており、一辺1.0～1.1 m、深さ0.5 mを測る。底部中央に八角形の柱痕跡を検出した。柱痕跡は深さ14 cmを測り、底部は固く平坦で、14～17 cm幅で面取りされ、直径41 cmの八角形柱であったことが判明した(図10)。柱穴76は方形状の掘形の北東部を検出した。埋土の特徴が共通することなどから柱穴75に対応するものと判断した。建物88に関して、柱穴75・76の推定柱間約2.7 m(九尺)の値を手がかりに関連遺構を精査したが、調査区内では検出できず、東側交差点部の立会調査でも検出されなかった。このことから、対応する柱穴は調査区外に位置すると想定される。柱穴2基は、南北棟建物の東側柱列の一部と判断し、建物88として扱った。土壇79は柱穴75を切った状態で検出され、土

師器皿の大型片などが出土した。この土師器皿は平安時代前期初頭に比定されることから、建物88もほぼ同時期か、ややさかのぼる時期の遺構と推定した。

遺物 整理箱にして8箱分が出土した。桃山時代は土師器、焼締陶器、瓦、室町時代は土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、瓦、鎌倉時代は土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦が出土した。平安時代は土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、白色土器、黒色土器、瓦器、輸入陶磁器、ガラス製品、瓦が出土した。ガラス製品は中期後半代のピット24から小玉2点が出土した。青緑色の鉛ガラス製小玉で、径0.6～0.7 cm、高さ0.5～0.6 cm、紐通し穴径0.2～0.3 cmを測る。装飾具あるいは祭祀具の一種であろう。

小結 第3面で検出した平安時代前期初頭の建物88は、先の調査における3棟の大型建物と同等の規模を持つ遺構であり、4棟目の大型建物を検出したことになる。建物88の柱列は先の東西棟建物から東約14.5 mの位置であり、4棟内では最も近接した位置にある。仮に建物88の梁行柱間を二間(十八尺:5.4 m)と仮定すれば、先の東西棟建物とは約9.1 mしか離れていないことになり、これらの建物は相互に関連した一連の施設であった可能性が想定される。

柱穴75で検出した八角形の柱痕跡は、同様の事例が、平城宮東院（柱根5例）、平安京淳和院（柱根2例、柱痕跡2例）などで知られている。奈良時代的な特徴を残した遺構とみられることから、この建物群の性格を考察する上で重要な資料を得たといえる。

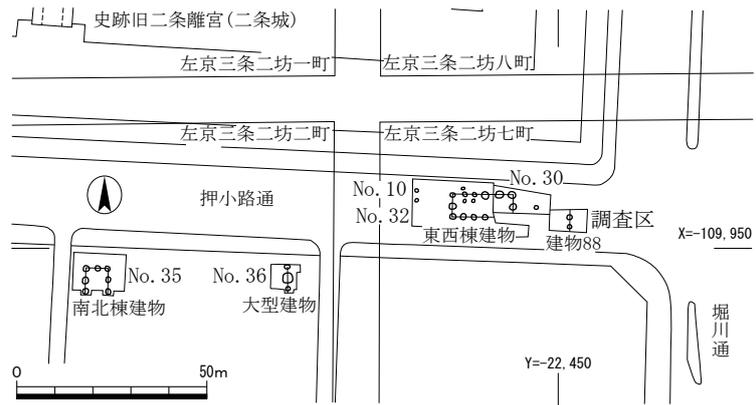


図9 主要遺構配置図 (No. は地下鉄東西線の調査区番号) (1:2000)

第2面で検出した平安時代中期から桃山時代の遺構群は、この地域の土地利用の変遷がうかがえる資料となった。今回の検出遺構は大半が小規模な柱穴、土壇、ピットなどであるが、数量的には、平安時代中期（32%）、中でも後半代（29%）が多く、次に平安時代後期（11%）、鎌倉時代（13%）となり、室町時代（3%）には減少し、桃山時代（5%）は性格の異なる区画溝状の遺構があらわれる。文献史料から、木工町は平安時代中期前半代まで存続していたことが読み取れるが、その後の後半代には小型の掘立柱建物などが建ち並び、この地域の国家的規制が徐々に衰えたことが想定される。この時期には二条大路北に冷泉院、堀川小路東に堀河院などがいまだに存続しているが、これより早く木工寮や付属施設の木工町が衰退していった様子が認められる。この様相は鎌倉時代まで続き、平安宮の南東近辺も、平安京から中世都市への変化に無縁ではなかったといえる。室町時代になるとこの傾向は顕著となり、市街地の中心部である上京や下京から離れた位置関係から、大内裏跡が内野と呼ばれていたのと同様、空閑地と化したと推測される。桃山時代になってやや活用が増すが、付近一帯の荒廃した状況に変化はなく、徳川家康が二条城を築造するためには、格好の条件が備わった地域になっていたと推察される。

第1面で検出した道路敷1は、先の調査成果を引き継ぎ、旧二条離宮（二条城）の外周道路がそのまま延長していたことを立証した。また二相式電気配線の遺構は、江戸時代から続いた二条城の外周道路を再整備すると共に、近代の電気設備もあわせて整えられていった様子うかがえた。
(長戸満男)

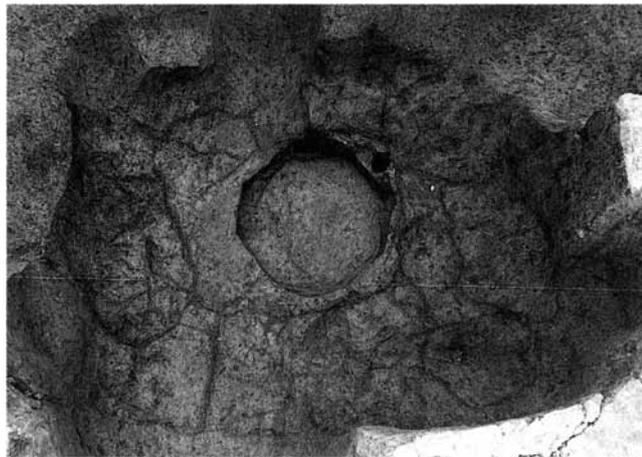


図10 柱穴75検出状況（北西から）

3 平安京左京六条三坊 (図版1・7・8)

遺構 この調査は京都市立修徳小学校跡地に予定される老人介護施設の建設に伴うものである。発掘調査に先立ち、遺構の残存状況確認のため旧校舎の基礎撤去工事に立ち会い、予備調査を行った。その結果、旧校舎の基礎は表土下約2.0 mまでおよび、以下にも遺構の遺存が確認された。また基礎による破壊の及んでいない区域では、古代から近代までの遺構が確認でき、遺物も多く、遺構も良好に残存していることが明らかになった。発掘調査を実施するにあつ

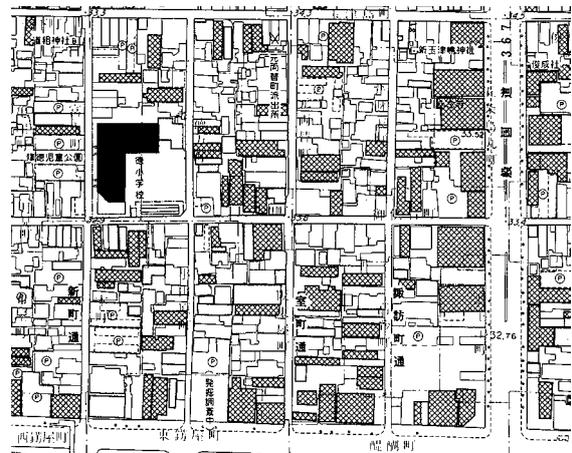


図11 調査位置図 (1:5,000)

て、敷地面積と掘り下げる土量を考慮し、調査区を北(1区)、南(2区)の二つに分けたが、1区で平安京の町小路に関連する遺構が良好に残っていたため、同小路と樋口小路との交差点を確認するための小トレンチ(3区)を設定した。調査の結果、江戸時代後半、江戸時代前半、桃山時代、室町時代、鎌倉時代、平安時代後期の溝、井戸、土壇など多数の遺構を検出した。さらに下層では、古墳時代前期の川や、川の左岸に広がる集落の一部と思われる竪穴住居を検出した。

遺構 遺構の時期は古墳時代から近代におよび、種類も多様である。古墳時代の川 S D 1500 は、北東から南西方向へ流れる自然流路で、左岸を検出したが右岸は調査区内では未確認である。岸に沿って多量の土器が出土し、2区南方で、柵とみられる柱穴や竪穴住居、土壇を検出した。

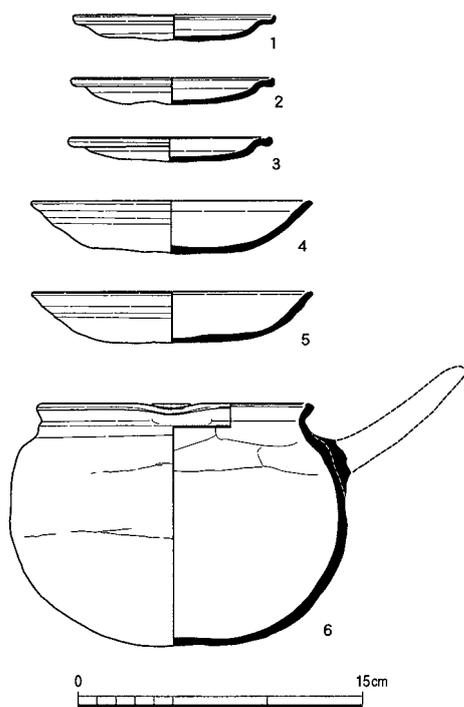


図12 地鎮遺構 Pit2417 出土土器実測図 (1:4)

平安時代の遺構は、掘立柱建物、井戸 S E 888・904・1123、町小路側溝 S D 1111、同路面 S F 1400、内溝 S D 1100・1200、3区検出の樋口小路内溝 S D 1498 などを検出した。この他にも、多数のピット、土壇、溝などがある。また1区西部の町小路築地推定位置と2区北部で、地鎮遺構と思われる小ピット (Pit1696・2417) を検出した。いずれも土師器甕の中に小石を入れ、甕の上部や周囲に土師器皿を埋納したものである。1区の掘立柱建物は東西5間×南北2間で柱間は3.0 m (10尺) 等間の大きな建物である。検出位置から中心的な建物とはいえないまでも、邸宅を構成する主要な建物とみることができる。町小路の路面および東側溝は1区と3区で検出した。路面 S F 1400 は、平安時代から鎌倉時代にかけて数回の舗装や補修がみられ、厚さ約1.4 mの堆積を確認している。側溝にあた

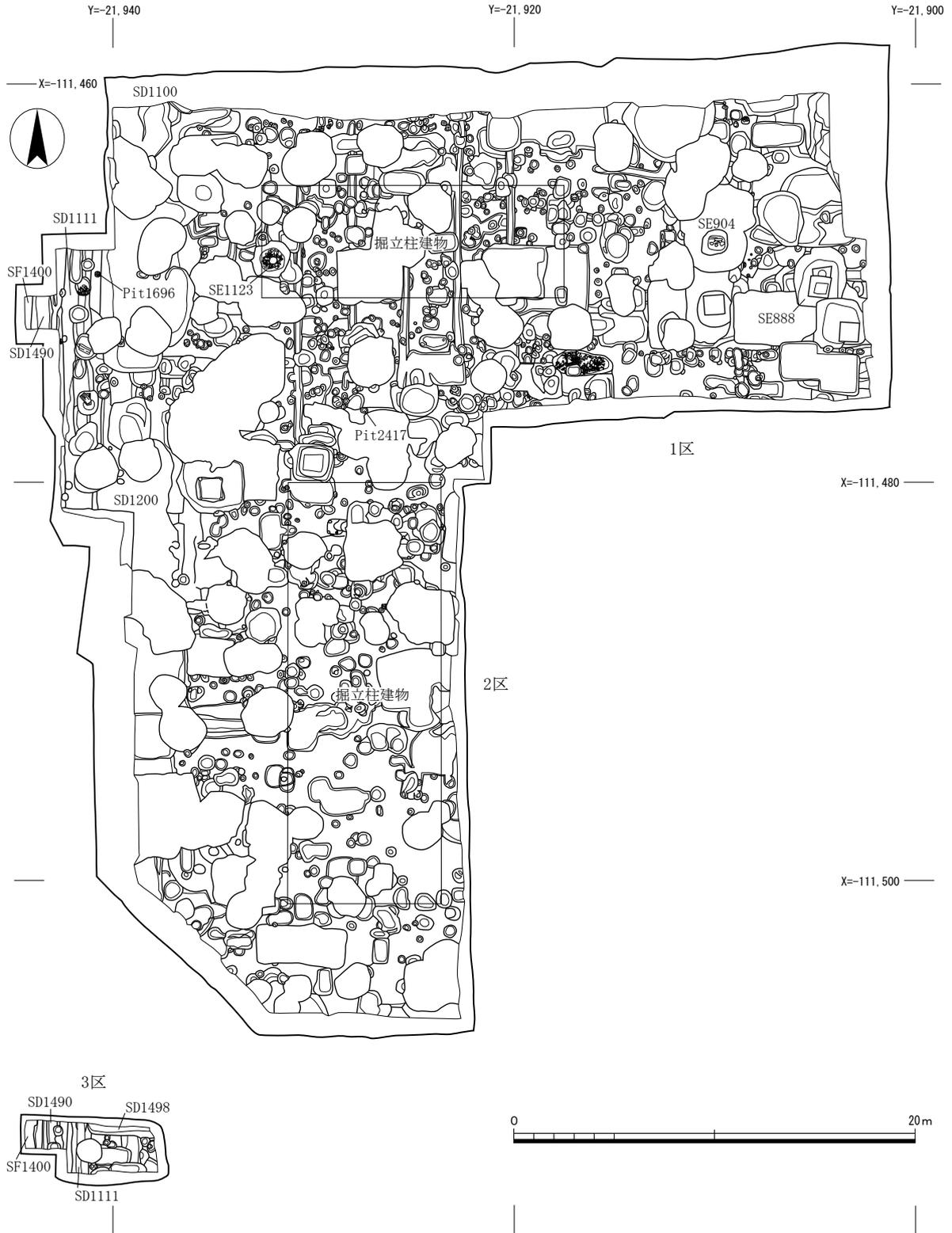


図13 遺構平面図(平安時代)(1:300)

る位置の上部が基礎のため破壊されており、各路面に対応する側溝をすべて検出することはできなかったが、SD 1111 が1区で2時期、3区で3時期、その西に複数時期にわたる溝SD 1490を検出した。鎌倉・室町時代の遺構は室とみられる方形土壇や井戸、溝、ピット、土壇などを検出した。室の床面には焼締陶器の甕の破片や礫を敷き詰め、周囲の壁に板を張ったもの、壁に沿っ

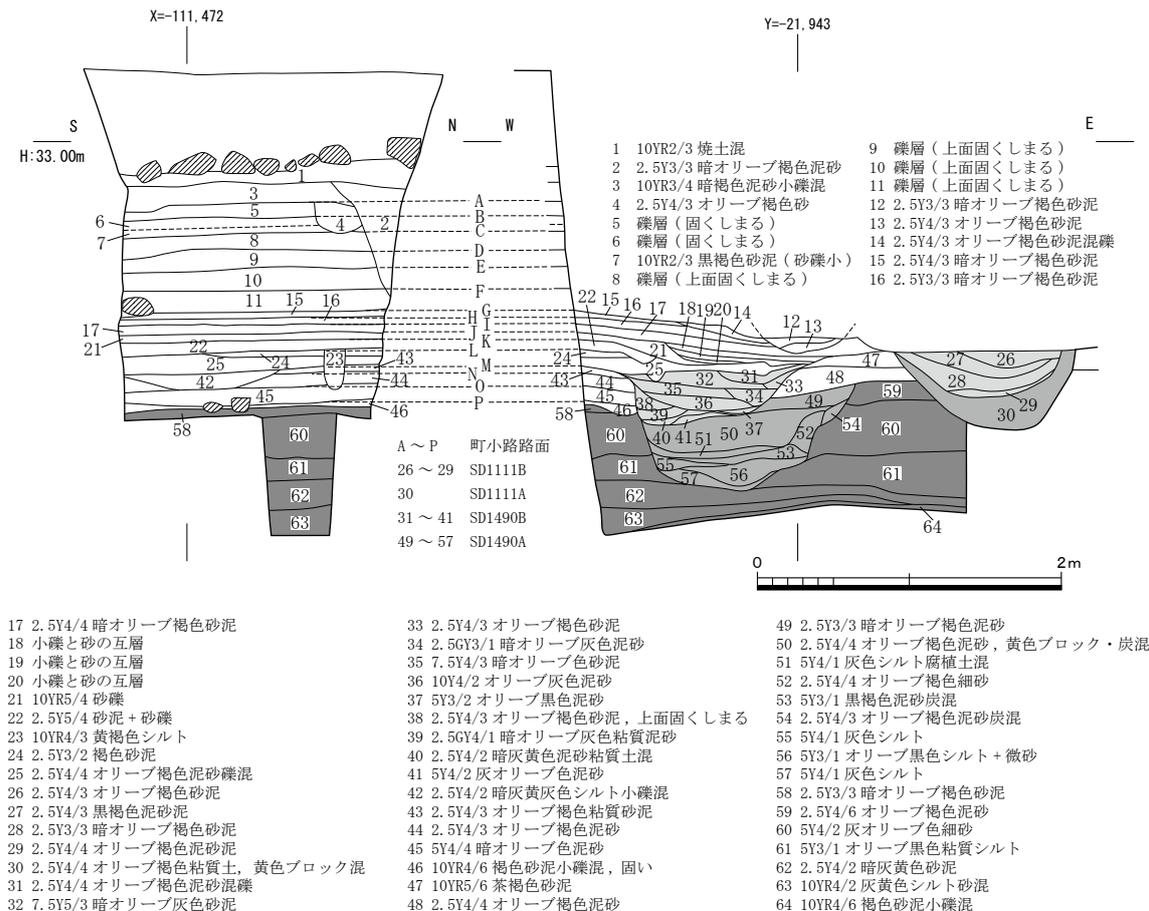


図 14 町小路路面 S F 1400 と側溝 S D 1111・1490 土層図 (1:50)

て並ぶ礎石や柱穴を持つもの、屋内に造られたもの、独立した建物の可能性のあるものもある。桃山・江戸時代初期の遺構には井戸、溝、土壇、柱穴などがある。特筆すべきものは S K 163・190 など方形で垂直に近い掘形を持つ土壇で、鉄滓、鞆の羽口、焼土、炉壁片などが多量に出土した。鋳型が含まれていないが、溶解炉に関係する遺物と思われる。付近に製鉄関係の工房があったことが推測できる。この他、近世の遺構には敷地の境界を示す溝や柱穴列などがあり、検討が進めばこの地域の土地利用の変遷が知れる資料となるだろう。

遺構 遺物は整理箱にして約 1300 箱出土した。その大半は土器・陶磁器類と瓦類で、他に銅銭、煙管、飾り金具などの金属製品や、硯、石鍋、石臼、砥石など石製品、あるいは下駄、木槌、漆器碗、箸などの木製品がある。土器・陶磁器類の破片数は 70 万片以上にのぼる。これらの遺物は現在整理中であるが、その一部の概略を以下に記す。

古墳時代の遺物は S D 1500 から多量に出土した土師器がある。出土分布は左岸近くに集中し、完全に復元できる土器もあり、川岸から投棄されて埋没したものが多数にのぼる。平安時代の遺物は S D 1111・1200、S E 880・1123・904 など溝や井戸からまとまった出土がみられた。土師器、須恵器、黒色土器を主体に、緑釉陶器、灰釉陶器など国産陶器の他、白磁、青磁、青白磁など中国陶磁器も多い。そのほか、2 区西半では石帯やその石材の破片が多量に出土した。図示した S E 1123 の土器類は総破片数 905 片で、そのうち土師器 75.4%、黒色土器 0.4%、瓦器 2.5%、

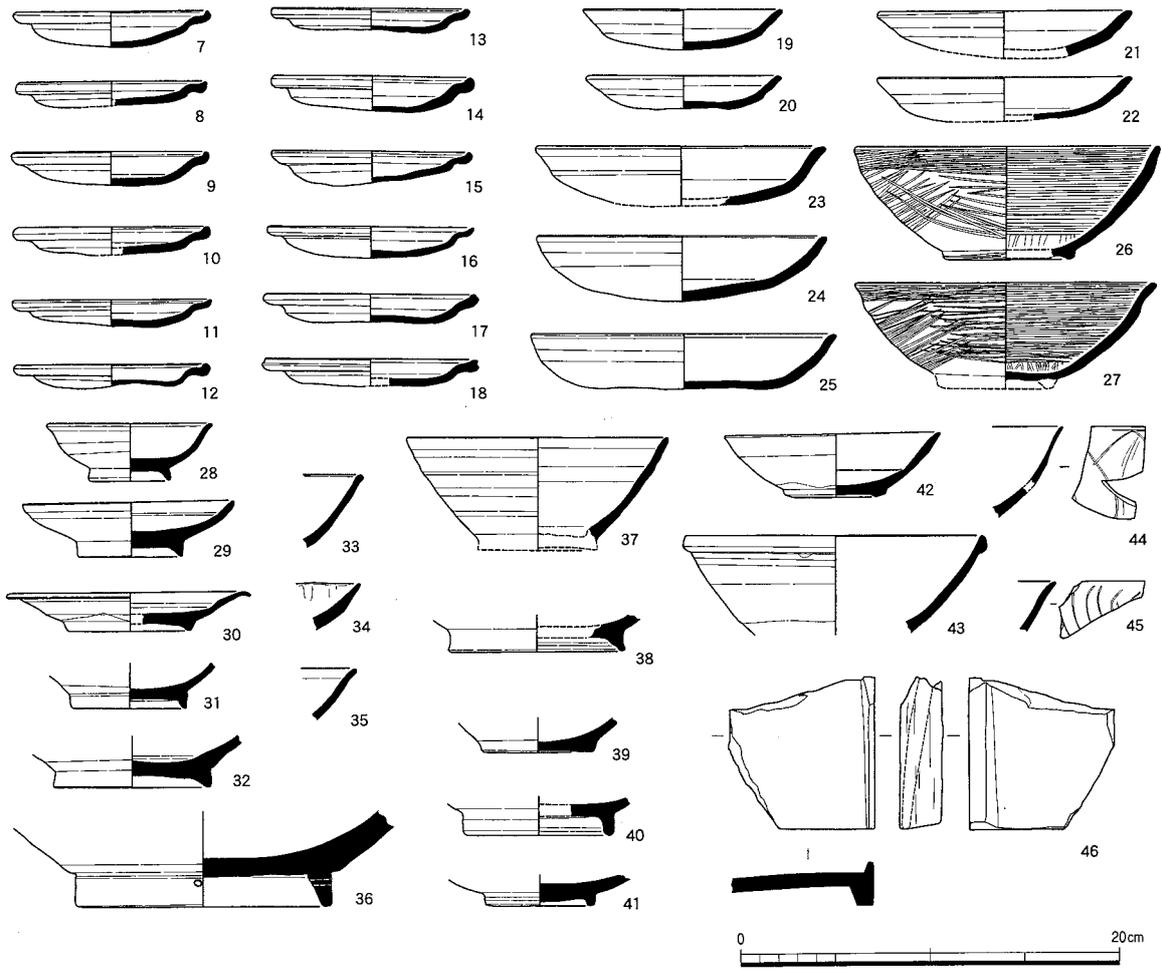


図15 SE 1123 出土土器実測図 (7～25: 土師器 26・27: 黒色土器 28～36: 灰釉陶器、
37: 須恵器 38: 緑釉陶器 39～41: 白色土器 42～45: 白磁 46: 石硯 (1:4)

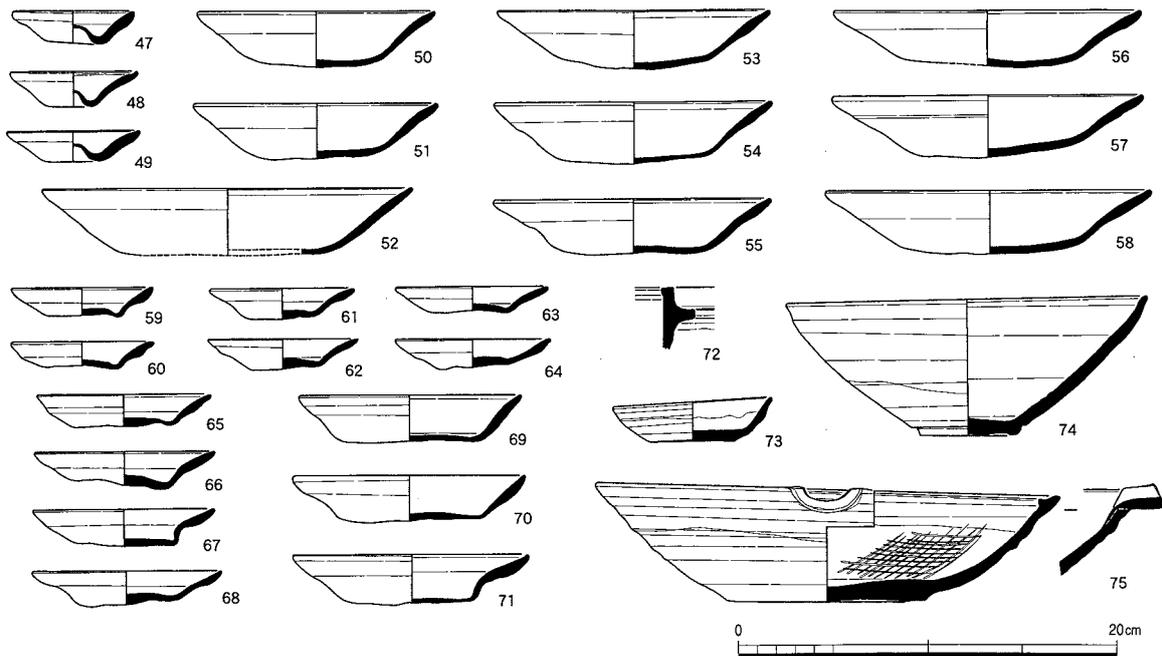


図16 SK 525 出土土器実測図 (47～71: 土師器 72: 瓦器 73～75: 古瀬戸) (1:4)

須恵器 6.4%、緑釉陶器 2.3%、灰釉陶器および山茶碗 5.1%、白色土器 4.4%、輸入陶磁器 3.4%となる。土師器を除いた食器類の比率は、灰釉陶器および山茶碗 26.7%、白色土器 21.3%、輸入陶磁器類 20.7%、瓦器 15.3%、緑釉陶器 13.3%、黒色土器 1.3%、須恵器 1.3%となる。平安京の土器編年では京都Ⅳ期中（11世紀半ば）に位置付けできる土器群である。鎌倉・室町時代の遺物は、土師器、須恵器、瓦器、常滑、山茶碗、古瀬戸や白磁、青磁、褐釉など中国陶磁器、漆器などがある。中国陶磁器の中には青白磁香炉や吉州窯の玳皮天目なども含まれている。ここでは京都Ⅸ期古（15世紀半ば）に属するS K 525の土器を報告しておく。S K 525から土師器を主体とする多量の土器類が出土した。総破片数は4172片あり、うち96.7%の4062片が土師器皿である。土師器を除いた他の器種137片についてみると、瓦器31.4%、須恵器系陶器21.9%、焼締陶器19.7%、古瀬戸16.8%、輸入陶磁器10.2%である。土師器以外の食器類では、輸入陶磁器類41.4%、古瀬戸34.5%、瓦器24.1%となる。数字上は輸入陶磁器類が卓越するが小片が多く、古瀬戸はほとんど完形品であり、瓦器も同様である。桃山・江戸時代の遺物は、土師器の他、志野、織部など瀬戸・美濃や唐津・伊万里あるいは信楽、丹波、備前など、豊富な国内各地の陶器類や明染付・白磁などがある。他に金属製品飾り金具や煙管、銅椀、釘がある。銅銭は、平安時代の「乾元大寶」から江戸時代の「寛永通寶」まで各期のものが400点以上出土している。各時期の遺物群には、単一の遺構からまとまって出土したものも多く、整理が進めば今後の調査研究の基礎資料として活用できよう。

小結 修徳小学校跡地は、平安京左京六条三坊八町の南西部に該当する。この周辺は平安時代には具平親王（村上天皇皇子）の千種殿をはじめ小六条院、六条殿、五条東洞院御所などの邸宅や院の御所が点在している。また室町時代には、商工業を営む人々が集住する左京の中心域の一画として機能していた地域である。今回の調査では、この地域の歴史的変遷を裏付けるように各期の遺構遺物を多数検出した。井戸はこの面積に対して78基を検出しており、生活密度の高さがうかがえる。これらの遺構の下層にも、一部ではあるが古墳時代前期の川や岸边に存在した集落が確認できた。

町小路、檢口小路など条坊区画に関する遺構や、平安時代前期の建物をはじめとする平安京関連の遺構、それに続く鎌倉・室町・桃山・江戸時代の多数の遺構・遺物群は、この地域の都市住民の生活・文化の歴史を明らかにする上で欠くことのできない重要な資料である。調査区の大半が旧校舎の基礎と重複していたにもかかわらず、このような成果が得られたのは、当地の遺構面（鎌倉時代以前）が予想以上に深く、また残存状況が良好であったことによる。今後の周辺の開発にさいして十分に留意すべき点であろう。

（平尾政幸）

4 平安京左京七条二坊・名勝滴翠園 (図版1・9)

遺構 西本願寺名勝滴翠園は国宝飛雲閣に伴う庭園で、境内の南東部に位置する。本調査は、1996年度から継続実施してきた庭園の整備事業に伴う第4次調査である。

滄浪池の本来の入水口は、池の形態や地形から北東隅にあったと推定された。1997年度の調査で昭和初期の土管による給水施設、1998年度にその北側で江戸時代の導水施設および滝石組みなどを検出し、入水口付近の様子が明らかになった。本年度は1998年度調査区を含めて、さ

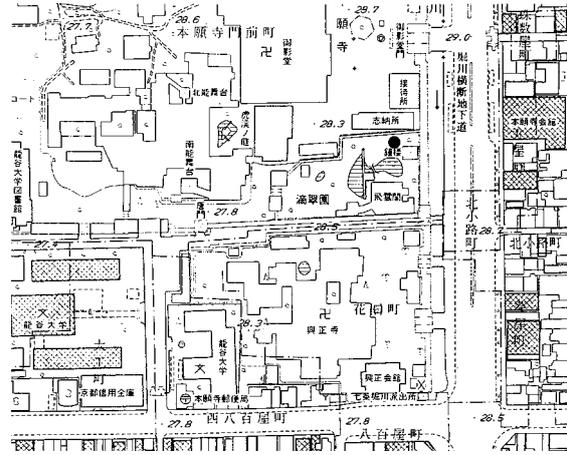


図17 調査位置図 (1:5,000)

さらに北側と西側を拡張し、旧池の庭石と現状庭石の関係を解明することを主な目的として調査を実施した。さらに検出した石組みに伴う旧築山の状態を確認するため、築山を一部断ち割って調査した。

遺構・遺物 1998年度の調査では、漆喰製の方形枡、花崗岩製の導水施設およびこれを組み込んだ滝石などの旧池庭石を検出した。本年度は1998年度に確認した石組みを再検出し、その延長の他、北側拡張部でもう一組みの滝石を検出した。

今回検出した滝石組みは、滄浪池北東隅、築山に沿ってくびれた部分の一番奥に位置し、飛雲閣からはちょうど右手正面にみえることになる。築山裾の土留めを兼ねた庭石に延長して、花崗岩立石を2石置き、脇には縦使いの石を配する。2段目は幅90cm奥行き60cmの平坦部を設け、

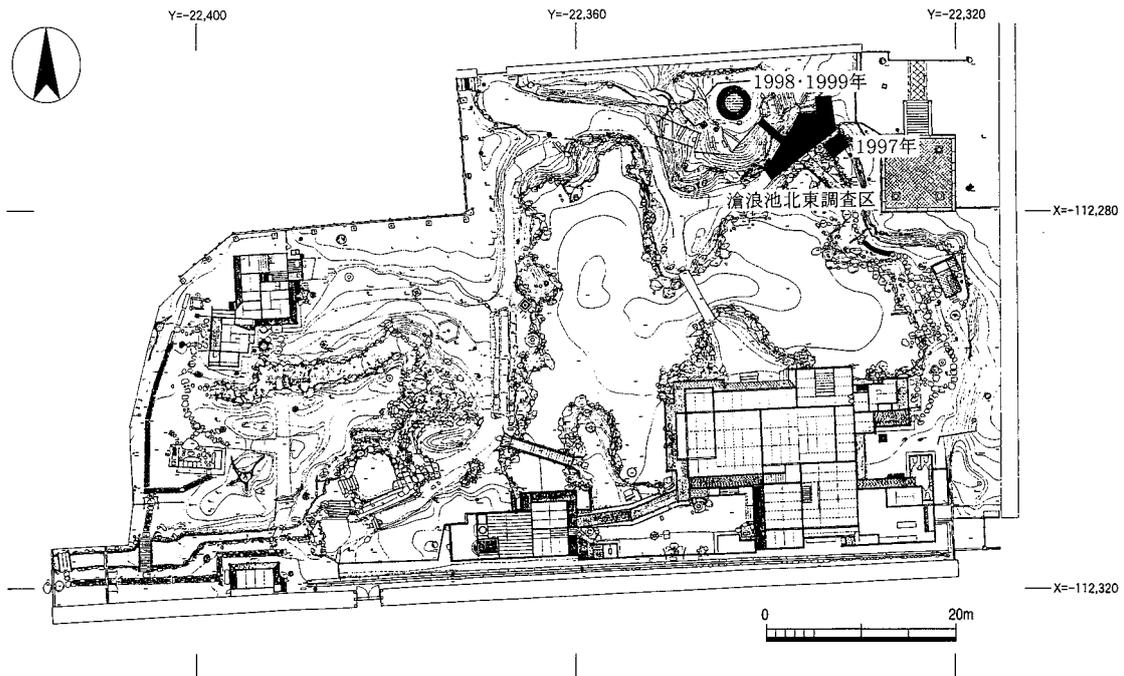


図19 滄浪池旧池石組み実測図 (1:40)

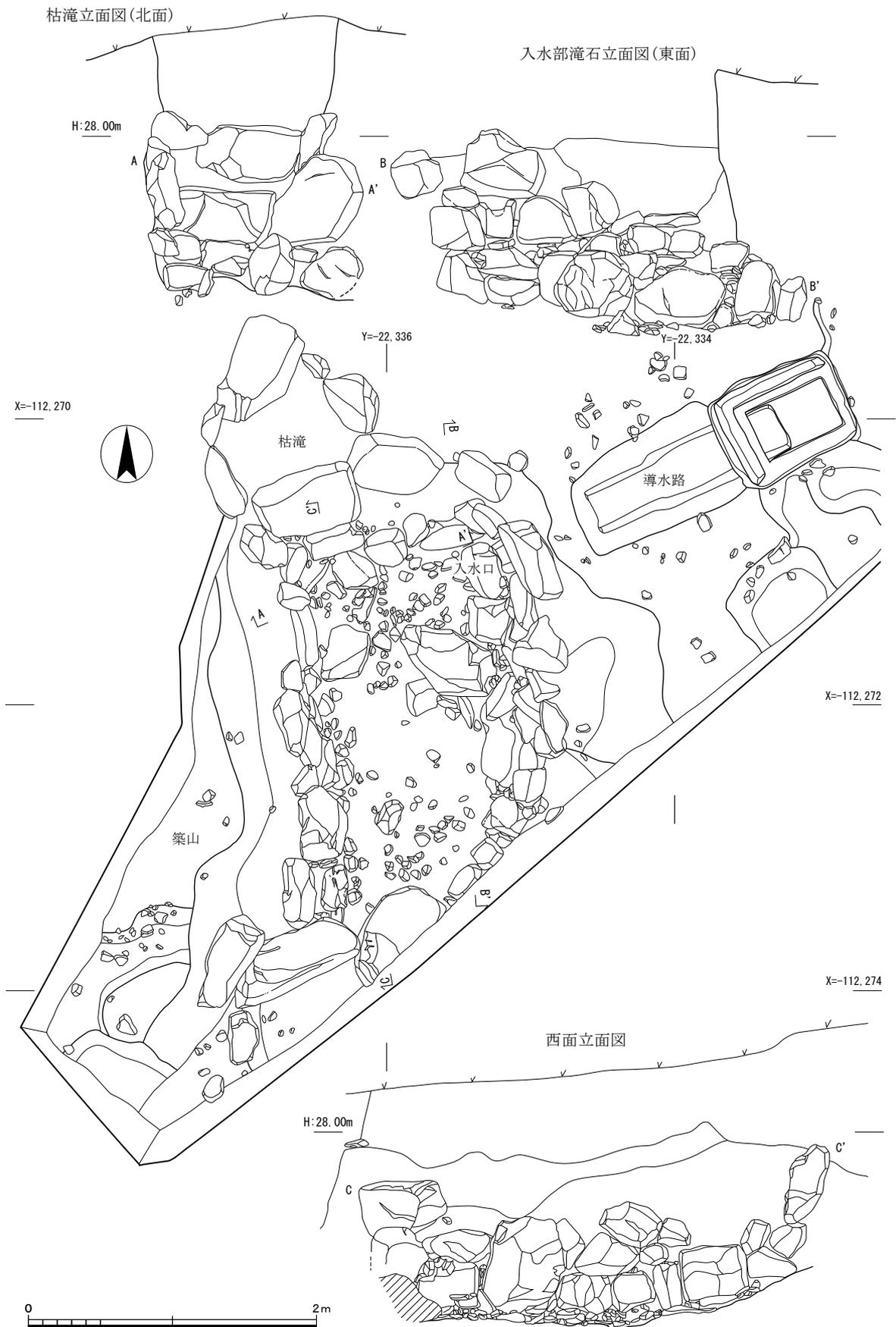


図 19 滄浪池旧池石組み実測図 (1:40)

その奥にやや大きめの石を据える。さらにもう一段あることも推定できるが、調査区外で確認できなかった。この部分に水の流れた痕跡はなく、枯滝であったことがわかる。水はすぐ右手の導水路を組み込んだ滝（1998年度検出）から落とし、枯滝下の平石を介して池へ流し込む意匠であったことを新たに確認した。池底は拳大の礫をやや粗く敷く。底には約15～20cmの腐植土と

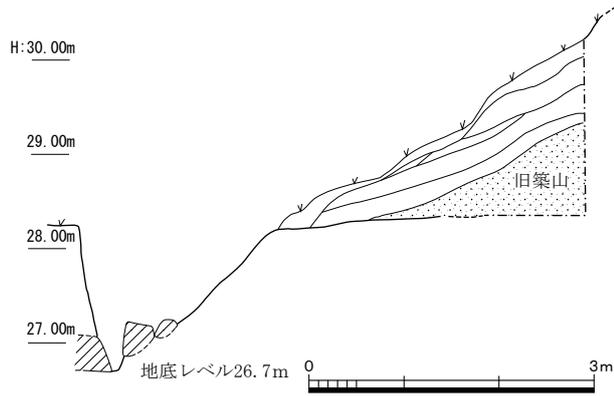


図20 築山断ち割り断面図（西壁）(1:80)

砂の堆積があり、土器などが少量出土した。なお池底レベルは現在の滄浪池北東部とほぼ等しく、水位が現状程度であれば水深は約20cmとなる。調査区西端の石は抜き取られ残っていなかったが、池の肩口はほぼ現在の汀線に延長することがわかった。したがって現状庭石の中には、原位置を保っているものもあると考えられる。

築山の一部を断ち割ったところ、旧池の庭石組みに伴う盛土は現在の築山のほぼ半分の高さで、その上に新たに土を盛っていることが観察できた。この新しい盛土は出土遺物から18世紀代に行われたものである。

小結 1998年度の調査とあわせて築造時の滄浪池北東部の様子を明らかにすることができた。まず、旧石組みに伴う築山は現状の半分程度で、旧地表面から約1.5mの高さだったことがわかった。この築山に沿って旧池の汀線は現在より約4.0m北側へくびれ、その一番奥まったところに枯滝が配されていた。1998年度に検出した滝石に組み込まれた花崗岩導水路以外に入水施設を確認していないため、二つの滝石組みが同時に存在したと考える。ただし飛雲閣から池を望んだ場合、その位置と方向から鑑賞用の意匠としての「滝」はあくまで枯滝である。

旧池に伴う池底腐植土から出土した遺物は乏しく、築造時期を決定するにはいたらなかった。しかし飛雲閣が、本願寺移転後まもない17世紀初頭（慶長～元和年間）に建築されて、それに伴う滄浪池も築造されたことは、旧池庭石が本願寺移転時の整地と同時に据えられており、ほぼ間違いない。築造年代はやはり17世紀初頭に限定できよう。

一方、旧池北東部が埋まった時期は、出土遺物から18世紀後半頃である。さらに築山の後世の盛土が池の埋土と非常によく似ており、出土遺物の年代も近いことから、築山のかさ上げと同時にに行われた可能性が高い。現在築山上には明和年間（1764～1771）の修復時に設けられた滴翠園十勝の一つである「胡蝶亭」があるが、この建築に伴って築山盛土をしたとすれば、旧池の埋没、沿道の敷設など周辺の整備はいずれも明和期の造作といえる。

（近藤知子）

5 平安京左京八条二坊 (図版1・10)

経過 調査地は、下京区東油小路町に位置し、社団法人近畿建設協会のビル建設工事に伴う調査を実施した。

当該地は平安京左京八条二坊十四町に比定され、周辺は既調査により平安時代から江戸時代の遺構が多数検出され、特に中世の遺構が良好に残存していた。北隣接地の調査では、鎌倉時代の鋳造関連遺構、西隣接地の調査では、室町時代前半の木棺墓が多数検出されている。また南隣接地の調査では、墓は検出されていないが、平安時代から近世にいたる遺構を検出しており、鋳造関連の遺物も出土している。

本調査は、近世層までを重機掘削により除去し、室町時代と平安時代から鎌倉時代の2面を中心に調査を行った。調査の結果、平安時代前期・後期、平安時代末期から鎌倉時代、室町時代前半の遺構を検出した。

遺構 遺構総数は246基で、主要な遺構について以下に述べる。

第1面は室町時代から江戸時代の遺構面である。人墓3基の内2基は木片を伴い、木棺墓であると思われる。人骨はいずれも少量で、1基は調査区北壁際で検出したため、詳細は不明である。犬墓は10基検出したが、7基は調査区の壁際や攪乱により破壊されており、遺構の全容は把握できなかった。方形とみられるものが6基 (SK 1・2・5・19・50・237)、南北長1.25 mの円形と思われるものが1基 (SK 20) ある。その他3基は円形に近い小規模な土壇 (SK 37・45・49) で、骨の一部を確認したにとどまる。SK 20からは完形の土師器皿が10個体以上出土した。いずれも室町時代前半である。

第2面は平安時代から鎌倉時代の遺構面である。

平安時代前期の遺構は、東西溝SD 235、土壇SK 149で、土壇より須恵器円面硯が出土した。

平安時代後期の遺構は南北溝SD 166で、南端で西に向きをかえ、SD 235を踏襲して東西方向になる。

東西溝SD 11は、調査区外に延び、平安時代後期から江戸時代の遺物を含むもので、江戸時代まで踏襲されたとみられる。東西両側の調査で検出された溝と同一の可能性はあるが、両調査では15世紀の遺物を多く含む溝であった。

鎌倉時代の遺構は、井戸を5基検出した。いずれも方形の木枠が底部に残存していた。縦板は確認できず抜き取られたものと思われる。SE 243は底部に曲物が残存していた。SK 5掘削後に検出したSE 245は、縦板組みの多角形の井戸である。底部には曲物を据えており、木枠内と掘形から出土した遺物に時期差が認められないため、短期間の使用であったことがうかがえる。

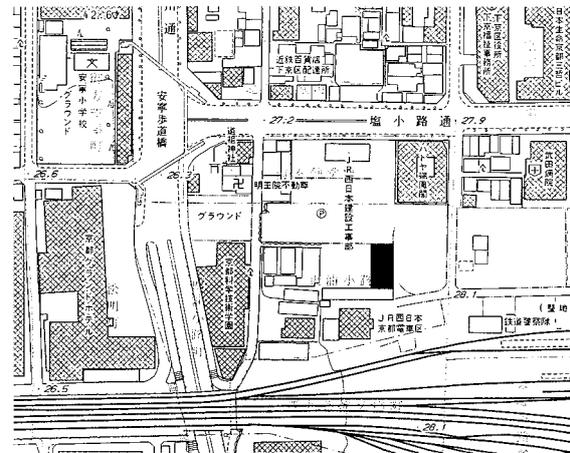


図 21 調査位置図 (1 : 5, 000)

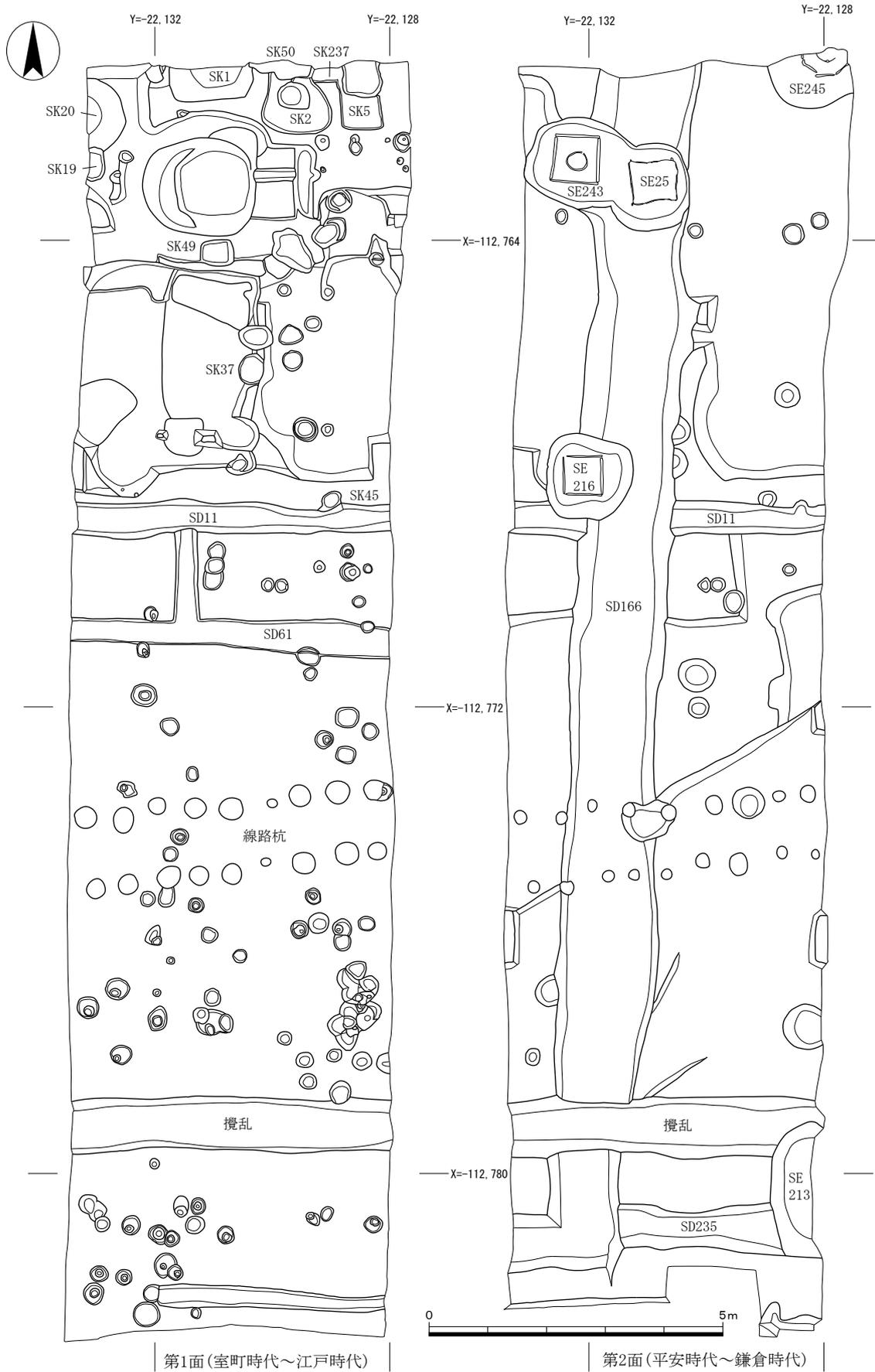


図22 遺構平面図 (1:100)

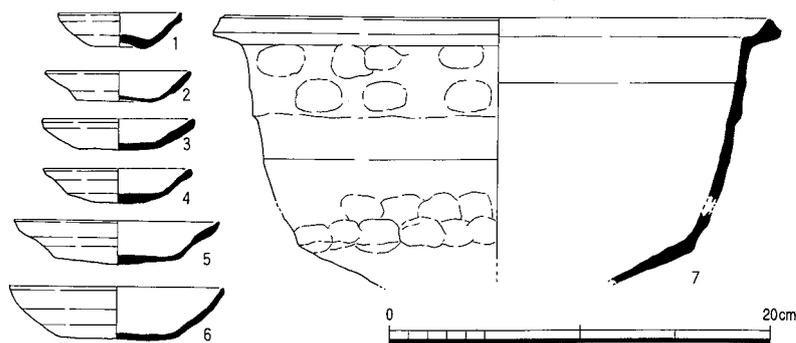


図 23 SK 20 出土土器実測図 (1:4)

井戸枠板・鑄造関連の埴塼・鑄型などが出土した。

土器類は、土師器皿・甕、須恵器杯・椀・蓋・甕・瓶子・円面硯・鉢、黒色土器椀・皿・甕、緑釉陶器椀・皿、灰釉陶器椀・皿、瓦器椀・鍋・羽釜、輸入磁器椀・皿・壺、焼締陶器甕、陶器椀・皿などがある。

特記するものとしては、土馬の一部、平安京成立以前のもと思われる竈の把手部分、平安時代前期の須恵器円面硯がある。また近現代の攪乱などから、汽車土瓶の破片も多数検出された。

ここではSK 20 出土の土器を図化した。1～6は土師器皿で、ほぼ完形であった。7は瓦器鍋で、口縁部の立ち上がりが小さく緩やかに外に開く。底部の器壁は体部より薄く、体部外面に指押さへの痕跡が残る。内面は横方向のハケ目調整が施され、外面には煤が付着している。すべて室町時代前半である。

小結 今回の調査地は平安京左京八条二坊十四町に位置し、鎌倉時代に発展する工房の連なる八条院町の西側である。周辺の調査では、多数の平安時代から室町時代の遺構が検出され、鑄造関連の遺構や共同墓地などを確認している。

当該地でも遺構としては検出されなかったが、鑄造に関連すると思われる鑄型・埴塼・有孔甄・焼締陶器などが出土した。また、木棺墓の一部を検出し、周辺調査の成果を裏付ける結果を得ている。

今回の調査地の特徴は、犬骨を含む室町時代前半の土壌を10基検出したことである。切り合うものもあるが、ほとんど時期差はない。出土した犬骨の頭骨・顎骨から推測すると20体は数えられ、土壌は形状・出土状況から大きく3つのパターンに分けられる。

SK 37は径50cm前後の円形で、頭骨・四肢骨のみで、四肢骨は平行に並べた状態で検出された。その他SK 45・49も同様に小規模な土壌であったが、骨の痕跡はあったものの形状は確認できなかった。遺存状態が悪かったため外傷などは確認できなかったが、出土骨が一部分であること、並べられたような状態であったことなどから、食用とした後、処理したものである可能性がある。

SK 20は完掘していないが南北長1.25mの円形で、完形の土師器皿が10枚以上出土し、2体の犬のほぼ全身骨を確認した。また骨が散乱していないことや鉄釘が出土したことから、木製の容器に納められていた可能性もある。何らかの儀式に使用されたものか、手厚く埋葬したもの

井戸枠内より漆器椀が出土した。

遺物 平安時代以前から近・現代までの遺物が整理箱に37箱出土した。土器類が大半であるが、瓦類も出土している。その他、鉄釘・砥石・漆器・

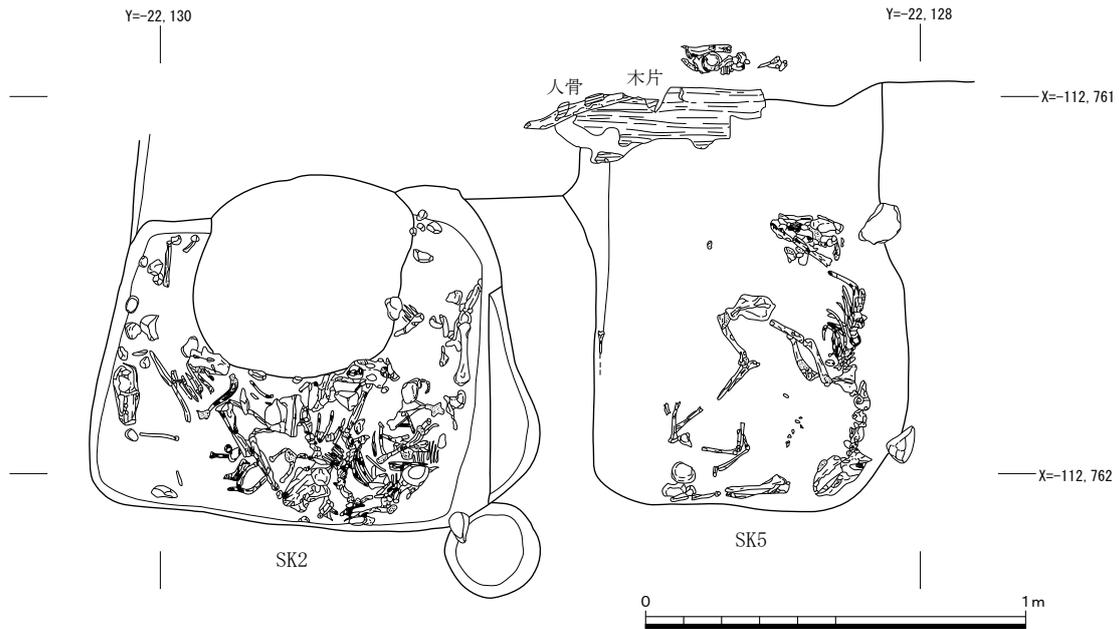


図24 SK2・5平面図 (1:20)

とみられる。

その他は方形で、全体を知りうる土壌がないため規模は判然としないが、体全体を確認できる状態のものが多い。これらの土壌の中でも、SK2・5では折り重なった数体の骨が検出された。頭蓋骨、顎などの骨からみて、不規則に投棄されたような状態であった。しかし、1体の骨は散乱しておらず、また体全体の骨を確認できるものもあるため、食用にした後に処理されたものとは考えにくい。可能性としては、まず犬の皮を使用するために皮を剥いだ後の処理、また疫病などで多量に死亡したための投棄、中世武士の武芸鍛錬法の一つである「犬追物」の犠牲になったなどが考えられる。土壌からは鉄釘が出土したものもあり、木製の容器に納められていた可能性もある。

このように室町時代の土壌から犬骨が集中して検出されたのは平安京内では例がない。骨の状態の良好なSK5は、出土状態のまま発砲ウレタンにより取り上げ、保存処理を施した。

その他、調査区南半で、周辺では検出例の少ない平安時代前期の遺構を検出した。また遺構に伴わないが、平安京成立以前の土師器竈も出土した。

(近藤章子)

6 平安京右京一条二坊 (図版1・11)

経過 調査地は中京区円町55-1に所在する。平安京の条坊では右京一条二坊十三町にあたる。二坊は、平安宮の西隣に位置し、東を西大宮大路、西を道祖大路、北を土御門大路、南を中御門大路によって画され、十三町は同坊の南西角に位置する。『拾芥抄』「西京図」によれば、二坊内には、兵庫町・右兵衛町・采女町などがみられ、平安宮を取り囲むように形成されたいわゆる諸司厨町の一角を占める。東隣する十二町は、京内に設けられた2箇所の獄舎のうち、右獄の所在地とされている。北東隣の十一町、北隣の十四町、当町の計3町は「叙弘知行」と記されている。「叙弘」は右獄を管理していた人物と推測され、同3町は「叙弘」に付属した私領と考えられている。中世には、北野天満宮に仕える神人が存在し、麴作りを生業としていたことが知られ、調査地の北側近接地域は神人達の居住地となっていたようだ。



図25 調査位置図 (1:5,000)

近世初頭の天正末年頃には、豊臣秀吉によって大規模な洛中の都市改造が行われ、それに伴い京城を取り囲むように、御土居と称されている大規模な土塁と濠が構築されている。この地区では現在の円町付近を取り込むように、西に逆コの字状に張り出す形で構築されていたことが、寛永初年頃の『京都図屏風』から知ることができる。御土居は左井通に重複する位置で南北に延びており、以後の古地図をみても近代に入るまでその姿をとどめていたことがわかる。調査地付近は、昭和初期頃まで耕作地として利用されていたが、昭和に入った段階で市街化がはじまり、その進行と共に御土居の大部分は地表から姿を消していく。調査地北方の北野中学校には、東西方向の御土居土塁部が残存しており、国の史跡に指定されている。

当調査地内においては、昭和63年(1988)に試掘調査が実施されており、平安時代の柱穴や、中世の柱穴・溝・湿地などが遺存していたことが報告されている。周辺地域での既調査の成果や、試掘報告からも、調査地を含めた当地域では、平安時代前半期の遺跡の遺存状態が比較的良好であることが明らかになっている。また、中世や近世の御土居関係の遺構が、良好な状態で遺存していることも知られている。

発掘調査は、対象地となる敷地の南半に、南北33.5m×東西48m(約1600㎡)の調査区を設定して、平成11年(1999)11月1日から作業を開始し、翌年3月25日で調査作業を終了している。調査の実施によって、平安時代前半期の遺構群が良好に遺存していたことが明らかになった。また調査区西辺部では、御土居の土塁基底部やその東側に並走する南北方向の溝などを検出することができた。他にも多くの新発見を得ている。

遺構 平安時代の遺構面は、地山上面に形成されており、現表土下0.7～1.2mほどの深さで

調査区全域に広がっている。

平安時代遺構面の直上には、暗褐色から黒褐色を呈する砂泥層もしくはシルトや粘土を含んだ砂泥層が、厚さ 30～40 cm で調査区全域に広がっている。場所によっては、3層あるいは4層に分層が可能などところがある。これらの土層は、平安時代後半から中世の耕作土層と理解される。調査区西半では、畝状の高まりを確認でき、畑地として利用されていたのであろう。調査区南東部に関しては、シルトや粘土を多く含んでいる黒褐色の砂泥層が広がっており、水田として利用されていた可能性が高い。南東部の地山上面は窪みがあり、湿地状を呈していたとみられる。水田としての利用は、そのような地山上面の地形の結果であろう。

調査区の西辺部では、中世耕作土層上面に南北方向の御土居土墨基底部が形成されている。土墨基底部の検出幅は、最大で東西 16 m ほどである。御土居以東は、中世耕作土層上面に近世の耕作土層が新たに形成されている。近世耕作土層上面は、近代に入っても耕作地として利用されており、昭和に入って以降新たな積土を行った後に、宅地等に利用されたようである。西辺部では、近代の建物などの建築物は御土居上面に直接形成され、御土居の削平土を用いて西へ拡張している。削平によって再整形された近代の御土居土墨部上面は、調査区西壁から西へ 1 m ほどで、左井通路面との間に 1.5 m ほどの段差が生じているが、近・現代には左井通に沿うように残存した御土居の上面に建物が建ち並んでいたようである。

地山上面では、平安時代以前の流路や湿地を検出している。西部で検出した流路は、東西幅 7～8 m、深さ 1.5 m で東北東から西南西方向へ流れている。流路底部直下で腐植土層を検出し、腐植土層の中位において薄い火山灰層を確認している。東南部で検出した流路あるいは湿地は、西肩部を検出したが、東肩部は東壁外であり、規模は明らかではない。同遺構の底面は東壁中央部付近から南西方向に徐々に広がり深くなっている。流れのある時期には、同方向に流れており、流水が止まっている時期には、南壁際の窪みを中心に池状の水溜りとなっていたとみられる。地山上面で検出したこれらの遺構は、自然形成されたものと理解している。

平安時代の遺構面は、地山直上の高みを削平し、低い部分に入れ土をして平坦面を造り出している。西部の自然流路も、平安時代以前に砂礫などによって埋没したとみられるが、平安時代に削平土を入れ土して平坦面を造り出している。南東部の窪みは、整地されることなく、平安時代を経過している。

平安時代初頭の遺構は、南壁際中央部付近で井戸 1 を検出したにとどまる。井戸 1 掘形は、東西 1.5 m、南北 1.4 m で隅丸方形のプランを有する。深さは検出面から 1.8 m であり、下部で掘形に沿うように横板が設置されていた。上部は、縦板を用いた方形の井筒が形成されていたとみられる。井戸の成立は、掘形の出土遺物によって、平安時代初頭とみられる。埋没は、井筒内からの出土遺物によって前期であったとできる。検出遺構が増加するのは、平安時代前期の 9 世紀末以降である。平安時代前期末から中期前半の遺構は、建物、井戸（井戸 2）、土壇、ピットなどを検出している。

西辺部において、柱穴 1～11 を検出した。柱穴の平面形は、一辺 1 m でほぼ方形を呈するも

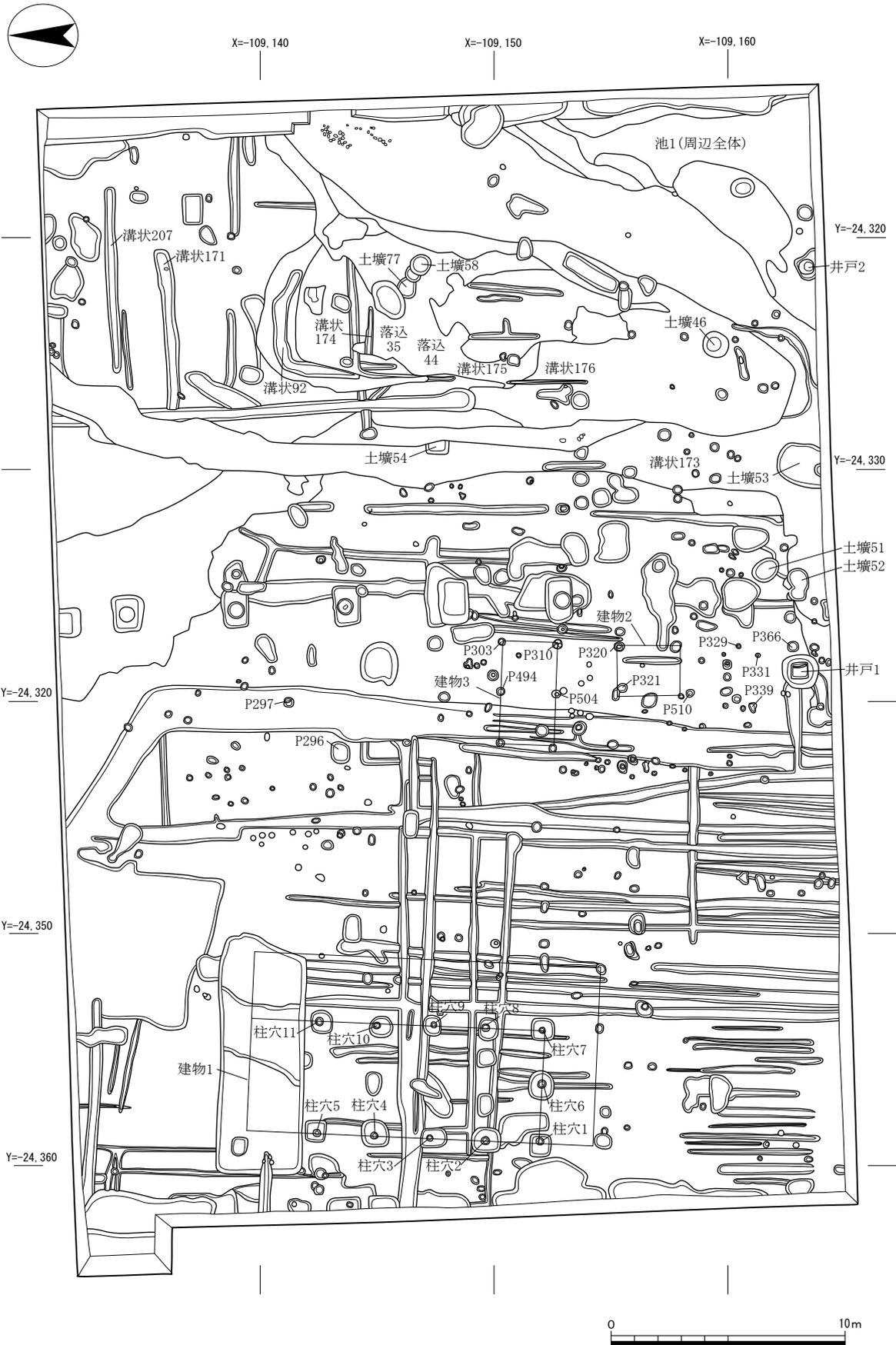


図 26 平安時代遺構平面図 (1:250)

のから、径1mの不定形な円形に近いものまでである。各柱穴では径30cmを測る柱当たりを確認することができた。柱穴8・9では、柱当たりの底部に柱根の一部が残存していた。これらの柱穴群は、北辺部が攪乱墳によって削平されているが、本来は2間×5間の南北棟の身舎を構成するものとみられる。柱間は、桁行、梁間とも2.4m（8尺）である。

東辺と南辺で、掘形径が40cm前後、柱当たりの径が20cmの、身舎に対応した庇の柱穴列を検出している。身舎との柱間は、東庇では約2.8mである。南庇の柱穴列は2列あり、新旧は、切り合い関係がなく不明だが、庇の造り替えが行われたのであろう。それぞれ身舎との柱間は、2.4m（8尺）と、2.8mを測る。この建物（建物1）は、東と南側に二面の庇を持つ南北棟と理解できる。建物1は、掘形の出土遺物から、9世紀末には築造されており、柱当たりの出土遺物からは、10世紀前半代のうちには廃絶したものと考えられる。

調査区内では、建物1に対応する建物は検出することはできなかったが、調査区中央部から東部にかけて、遺水（溝状遺構173）や園池（池1）になるだろうと推測している遺構を検出している。

池1は、平安京成立以前、自然地形としてすでに流路や湿地を呈していたとみられ、平安京の成立によって、この町内に取り込まれたものと考えられる。溝状遺構173は北方から池1に注ぎ込むように形成されている。東肩には、貼りつけたとみられる拳大の礫が一部残存していた。湿地を利用して遺水を形成し、庭園を造作したものと推測している。

町内での園池の位置から推測するならば、建物1と関連した寝殿などの中心的な建物群は調査区北隣に存在している可能性が高い。溝状遺構173の西側では、ピットを数多く検出している。このピット群には、柱当たりが残り、柱穴と確認できるものが多くみられる。掘形は径30cm前後を測る円形プランを持つものが多く、柱当たりの径は10数cmほどのものが大半を占めている。1間×1間、1間×2間の小規模建物（建物2・3など）が数棟確認できるが、大型建物になるような柱穴の並びは検出できなかった。これらの柱穴群の検出状況からは、幾棟かの小型の建物が隣接して建ち並んでいた景観が想定し得る。掘形の出土遺物から、10世紀前半には建ち始めたものと考えられる。建物1との関連は、建物1の廃絶期に一部重複する可能性は残るものの、廃絶以降に建ち始めた可能性が高い。また、東側に存在している溝状遺構173、池1なども、すでに多量の土器や瓦などが投棄されており、庭園もすでに廃絶していたものと推測される。1町規模の庭園を伴う邸宅が廃絶した後に、これらの小規模建物が成立していくものと推測される。10世紀半ばから後半代においても、町割りに伴う区画施設を検出できなかったが、居住に供された小規模建物群と考えるのが妥当であろう。

東部の南壁際では、同期の井戸2を検出した。井筒は曲物3段が組まれている。曲物の径は約60cmを測る。掘形の平面形は径約1mの円形を呈する。検出面から底面までは約1.5mを測る。井戸内からは、多くの土器・陶磁器・瓦・皇朝十二銭のうち「延喜通寶」「乾元大寶」などと共に、水晶片が出土しており注目される。再び湿地化した池1などが残存しており、小規模建物に居住した人々が使用した井戸とは考えにくい。南壁の南側の中御門大路との間に、この井戸を使用した人々の建物が存在していたと推測できる。この井戸の廃絶期は、出土した土器によれば10世

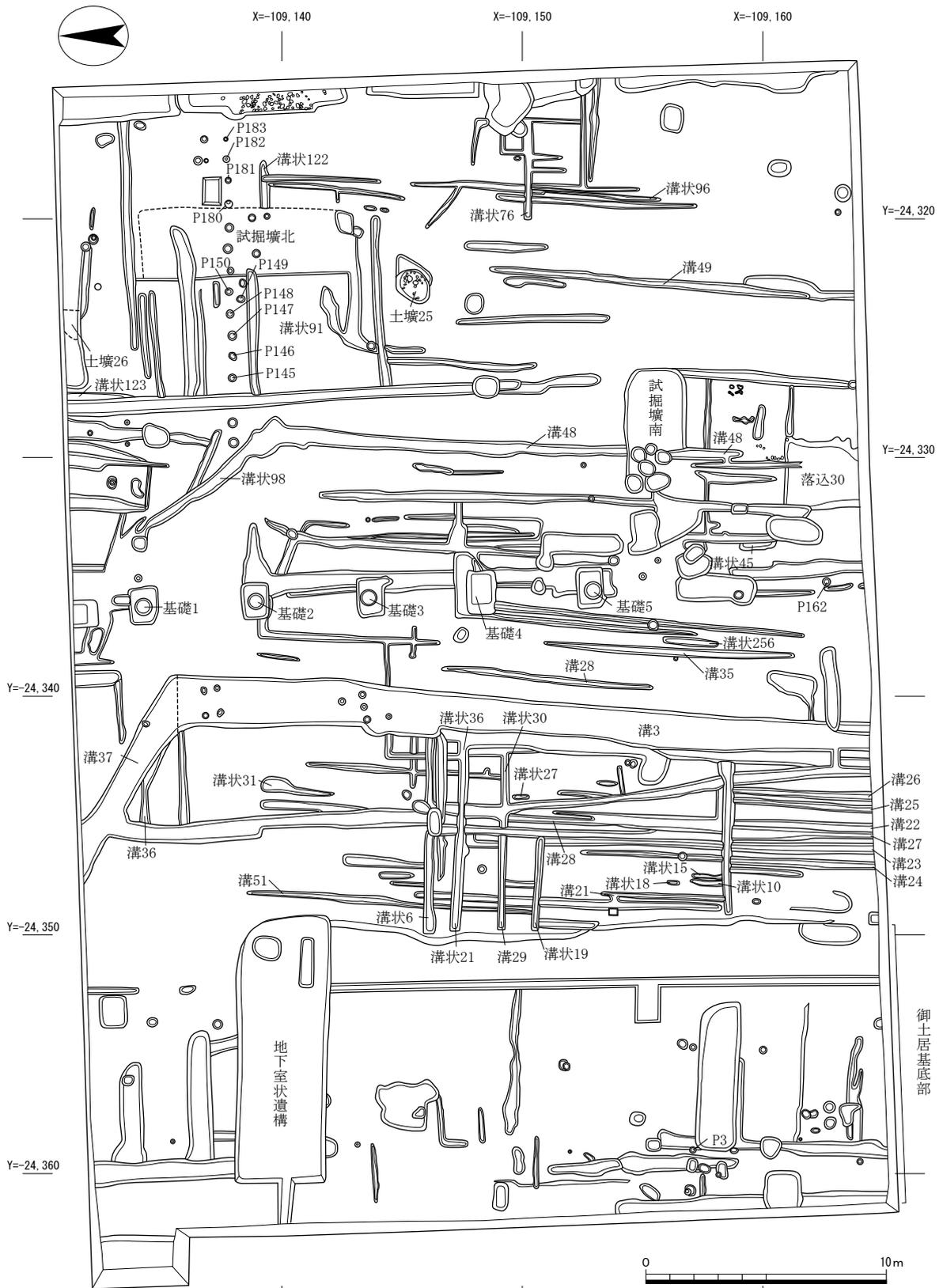


図27 中・近世遺構平面図 (1:250)

紀後半か11世紀初頭である。

上述してきた平安時代中期前半代の遺構群は、中期後半の11世紀代には姿を消していく。平安時代の遺構面に直接的に堆積している耕作土層があり、耕作地化した可能性が高い。その後、鎌倉時代から室町時代には、継続して耕作地としての利用が続いている。

調査地の西辺部で、御土居の土塁基部を、中世耕作土層の上面で検出している。基部は底面の幅が東西15～16mを測り、上面は東西13～14mを測る。東西方向の断面形は台形を呈する。積土は黄褐色から褐色味を帯びた当地周辺の地山土である。濠の掘削によって得られた地山土も利用している。基部直下の中世耕作土上面の検出状況からは、耕作土層上面を整地することなく、畑の畝や溝を残した状態で基部の積土作業が行われたとみられる。

調査区西壁の北端部において南北幅4m、西へ2m拡張して、土塁の追跡調査を行った。土塁基部の西辺部は、位置的にはほぼ調査区西壁付近から西側に急傾斜する。その斜面に沿うように、基部積土と類似した土層が下方へ連続する。現左井通と重複する位置に、土塁と並走する南北方向の濠のあることが、古地図などから知ることができる。検出した西方への傾斜面は、犬走り状の段がつく可能性もあり、濠の東側壁へ連続するとみられる。土塁と並走するこの濠は、土塁の積土を削平した土によって埋めもどされたと解することができよう。

現在の左井通路面と調査地内の表土面との間には2.2～2.4mの比高差がみられ、検出した土塁の残基部上面の間でも1.5m程の比高差がある。濠を埋めもどした時点での比高差もかなり大きい。調査地付近では、濠は肩部まで全面的に埋められたものではなからう。

御土居の濠が掘られたラインは、調査地周辺の地形観察からも、平安時代以前からの自然地形として存在していた小谷筋であったと推定される。御土居の土塁や濠が、完全に削平され埋められなかった理由に、このような原地形の存在があったと考えている。残存していた小谷筋地形を利用して、御土居の濠は設定されたと推測される。

御土居基部から東側へ約6mの位置で、並走する溝3を検出した。溝3は東西幅2m前後を測り、最も深い部分で肩部から約0.4mを測る。この溝の南側延長部は、JR山陰線の高架複線化工事に伴う既発掘調査で、御土居「内濠」とされる類似した溝が報告されている。位置や規模からは、その「内濠」の北側延長部ともみられる。しかし、溝3は、調査区内では北壁から南4mの位置で止まっており、溝3の北端部には北西から南東方向へ流れる溝37がとりついている。また、溝内からの出土遺物は、御土居の築造期より古いものである。当地域の北部や東部から南西部方向に流れ込む雨水の排水溝か、周囲にみられる畝溝の存在から推して、耕作に供した用排水の溝であろう。

溝3・37は、早くも江戸時代前期には埋没してその機能が失われている。御土居より東側は、以後江戸時代から近代にいたるまで耕作地としての土地利用が継続している。古地図等によれば、当地を含むこの地域では、御土居は土塁、濠ともに、近代まで耕作地帯の中に残存している。今回の調査によって検出した御土居上面に形成されている建物等の遺構は、昭和に入って以降のものと思われる。土塁上部の本格的な削平と濠の埋没もその直前まで下る可能性が高い。古地図な

どの記録資料と、調査所見とに大きな齟齬はみられない。

遺物 奈良時代以前の遺物は、平安時代以後の土層や遺構埋土への混入であり少量にとどまる。しかし、池1の底面近くから出土した軟質の土器片は、弥生時代後期から古墳時代初頭とみられる高杯や甕片である。同遺構が流路あるいは湿地を呈していた時期は、この時期までさかのぼる可能性がある。

平安時代以降から近・現代までの各時期の遺物が出土している。遺物に継続的な出土が認められるものの、時期によっては出土量に差がある。出土遺物の量的な推移は、土地利用の変遷を示しているものと考えられることができる。

平安時代前期のうち、8世紀末から9世紀代に比定できる遺物は、井戸1を除いて後代の遺構埋土や遺物包含層へ混入して出土している。土師器、須恵器、黒色土器A類、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦類などがみられる。土師器杯・椀・皿や甕、須恵器杯・鉢・甕などが中心であり、黒色土器A類、緑釉陶器、灰釉陶器類の出土量は多くない。前期のうちでは、9世紀初頭の資料の出土量が多く、9世紀半ばから後半の遺物は出土量が減少する。9世紀後半の遺構がほとんど検出されなかった結果に対応した出土傾向と理解できる。

井戸1の井筒内や掘形からは、平安時代初頭（京都Ⅰ期中～新）に比定できる土師器、須恵器、黒色土器、緑釉単彩陶器、製塩土器、瓦片、木製品などが出土している。井筒内から出土している土師器には杯・椀・皿・体部外面に煤が付着した甕があり、須恵器杯・鉢・壺・甕などがみられる。食器類では土師器が主体であり、須恵器は貯蔵具が主体である。緑釉単彩陶器は少数しか含まれていないが、椀と火舎とみられる破片があり、小壺の蓋も完形に近いものが1点出土している。小壺の蓋は二彩として製作された可能性が高いが、緑釉が全体にかぶり判然としないので緑釉単彩として報告する。木製品は、箸や曲物底板などの他に、櫛や楊枝とみられる小加工木が出土している。井戸1掘形からは、土師器杯・椀・皿・甕、須恵器壺・甕、瓦片など、京都Ⅰ期中に属する遺物が出土している。

平安時代前期末から中期前半の10世紀代には、検出遺構数の増加と対応するように遺物出土量も大きく増加する。溝状遺構92・173・175・176、池1、井戸2、落込35・44（A～C）、土壇25・46、ピット392などからは、土器、陶磁器類を主体とする多量の遺物が出土している。

この時期の遺物には、土師器食器・煮炊具、須恵器では食器類が少なく調理具・貯蔵具が多い、黒色土器A・B類の食器類やA類の煮炊具、緑釉陶器食器類、灰釉陶器食器類・貯蔵具、少数の白色土器、瓦類、木製品類、皇朝十二銭（「延喜通寶」少数、「乾元大寶」多い）などがみられる。これらの遺物は空白時期がなく継続的に出土している。遺構では、建物が継続的に存在しており、溝状遺構173や池1などが存在していた時期である。出土遺物は、儀器的に使用されたものも多く含まれるが、当町に居住した人々が日常的に使っていた生活用具類が中心と考えられる。

井戸2の曲物井筒内からは、土器陶器類が少数の瓦を伴って一括出土している。これらの土器、陶器類は、京都Ⅲ期新に属する資料が主体であり、10世紀後半から11世紀初頭の年代が与えられる。

これらの遺物に伴って、井戸2内からは水晶が100点以上出土している。水晶は比較的大きいものから小さなものまであり、折れているもの、基盤岩を伴うもの、透明度の高いもの、不純物を含み失透した白っぽいものがある。少数が出土する段階では祭祀に関連するものとみだが、精査の過程で、出土量が増加したことや出土状態から判断して、工芸品などの製造過程で不用原材が投棄されたものと推測している。

また井戸2の井筒内からは、完形の木製の柄杓が1点出土している。柄杓は、底場から少し上がった位置で検出している。杓部は曲物であり、木柄は曲物を貫いて斜めに取りつけられている。この井戸2の周辺は湿地があり、井戸水面が高かったとみられる。柄杓は水を直接汲み取れる道具であり、釣瓶などの汲み上げ道具ではない。このために、井戸2が柄杓で直接に水が汲めるタイプの井戸であったことを示唆する資料といえよう。

ピット392は、先述の井戸1掘形を切って形成されていた。位置は、掘形の南東部である。このピットからは、多数の土師器皿類と「乾元大寶」が30枚前後まとまって出土している。他の土器類は小片で少量しか出土していない。土師器皿類は井戸2出土資料に近似しており、10世紀後半から11世紀初頭前後に埋納されたもので、10世紀代の土地利用に関連した祭祀に関する遺構・遺物とみられる。

平安時代中期後半の11世紀代に比定される遺物出土量は大きく減少する。減少が顕在化する時期は11世紀に入ってからであり、11世紀前半代には急速に進む。中期前半の10世紀代とは土地利用のあり方が大きく変わった結果であろう。

出土遺物が少量になる状況は、その後、室町時代前期の14世紀まで継続していく。この期間の出土遺物には、土師器、瓦器、輸入陶磁器などが少数見受けられるが、遺構に伴う出土例はほとんどみられず、多くは新しい時代の層・遺構への混入として出土している。

出土遺物が再び増加を示すのは、室町時代中期の15世紀代に入ってからである。溝・溝状遺構などとした遺構からの出土が大半である。15世紀後半代に入るとさらに増加傾向を示し、御土居の成立期直前の16世紀後半代まで継続している。出土量が多い15世紀末から16世紀後半代の遺物が出土する溝と溝状遺構は、御土居に並走する溝3以西の地区に多く認められる。

室町時代後半代の溝・溝状遺構等から出土する遺物には、土師器皿、瓦器鍋・釜・火鉢、国産施釉陶器である瀬戸美濃産の灰釉陶器や天目茶碗、中国からの輸入青磁碗、染付碗・皿など、各種の土器陶磁器が認められる。これらには、使用痕を残すものも含まれており、日常生活の道具類として使用されたものが大半を占めている。これらの遺構埋土から出土した遺物は、隣接地の集落などに結びつく遺物であると考えるのが妥当であろう。

16世紀末に、調査区の西辺部に御土居の土塁部分が構築されるが、その直前の室町時代末から桃山時代半ばの遺物が、御土居基底部直下の耕作土層と基底部を形成している積土層から、土器・陶磁器を主体とする遺物が出土し、御土居と並走する溝3あるいは溝37の埋土からも出土している。

江戸時代に入ると、再び出土遺物が少ない状況となる。平安時代後期から室町時代の土地利用

のあり方と同様に、耕作地としての利用に帰するからであろうか。調査地内で再び遺物が増加するのは、昭和以降になるようである。当地の耕作地から宅地などへの利用は、昭和に入ってからのことによるためであろう。

小結 今回実施した発掘調査では、平安時代初期に部分的な整地作業によって形成されたとみられる遺構面を検出し、その上面に成立していた平安時代前半期の遺構群の様相とその変遷を把握することができた。

井戸1からは、当町の土地利用が、平安時代初期のうちでもかなり早い段階から開始された判明した。しかし、平安時代前期の9世紀半ばから後半にかけては、調査区内は高い密度での利用は行われていないようであり、居住に関連する遺構は検出できなかった。遺構数に増加が認められるのは、平安時代前期末頃の9世紀末から10世紀初頭からであり、密度の高い状況は中期半ばの10世紀末から11世紀初頭まで継続する。しかし、この古い段階とその後では、遺構群の様相が大きく変化する。古い段階では、調査区西辺部に2面庇で8尺等間の2間×5間に身舎を持つ南北棟（建物1）を検出し、中央部から東部に園池とみている池1を中心とする遺構群を検出している。

古い段階の遺構群は、調査区の町内位置などから、園池を伴う1町規模の寝殿造り邸宅を推定できよう。建物1は南西の対屋、調査区北東部の池1の北岸以北は南庭の一角の可能性もある。

10世紀前半には、古い段階の遺構は荒廃に向かい、池1なども埋没が進んで姿が変化している。中期前半代の10世紀半ばから後半段階に、調査区中央付近に形成される複数の建物は、小規模なものが中心である。南東部では、井戸2などが機能している。井筒内から多数出土した水晶片等からは、当町内に工房が存在した可能性も考えられる。

この段階の遺構群の様相からは、工人などの階層が当町内の土地利用の主体であったと推測される。しかし、この段階でも四行八門などの公的な町割りを示すような遺構は検出しておらず、町全体としては文献にみられるような私領的な管理状態が続いているとみられることもできる。

このように平安時代前半代中にも、遺跡の様相の変化が進むが、総じて京域内における都市的な土地利用としての変化といえる。しかし、平安時代中期中頃の10世紀から11世紀初め以降の平安時代後半代には、人々の居住に直接的に関連するような遺構がほとんどみられなくなる。中世には耕作地と理解できる遺構や土層が調査区全域に広がっているが、平安時代後半代の遺構や土層堆積の様相は、当地の中世耕作地へと通じるものである。周辺の既調査成果をみても、平安宮に隣接し、諸司厨町の一角を占めているこの右京一条二坊やその西隣の三坊においても、平安時代中期には非都市域化＝耕作地化が進むようである。当二坊の都市的様相の解体をみると、単に右京の衰退による平安京の変質という問題にとどまらず、律令国家体制弛緩の顕在化が進行しているとも考えられる。

中世には、耕作地としての土地利用が続く。調査区内では、中世遺構は耕作地に関連している小溝群（溝・溝状遺構）が大半を占めており、全域が耕作地であったと理解してよいだろう。しかし、御土居下のものを含めて、西辺北部の小溝群や耕作土層からの室町時代末期に比定できる

土器・陶磁器の出土量は、単なる耕作地関連遺構や土層からとは思えないほど多い。調査区のすぐ北隣りに、室町時代後半（戦国期）の建物などを含んだ遺構群（居住遺跡）が存在しているものと推定している。

近世初頭の御土居は、畦や畝などを残した中世耕作土上面に、直接積土して土塁の基底部を構築している。築造の性急さを示しているとみられ興味深い。基底部だけであっても、御土居の土塁部を30 m以上にわたって検出した発掘調査は、今回が初例であろう。そのような意味でも予想外の大きな調査成果である。

今回の調査で検出した南北方向の御土居の土塁基底部は、西大路を西へ越えて逆コの字型に張り出した部分の西辺の中央部付近である。この張り出し部は、全体よりも遅れて、後で拡張されたという見解もある。しかし、積土内からの出土遺物や、耕作土上層やその上面から出土した遺物からみれば、築造が開始されたとされている天正19年（1591）から遅れた築造とは考えにくく、一連で築造されたものとみられよう。

また西への張り出し部分に対する理解は、御土居が単に象徴的な施設ではなく、防御的機能も十分に意識して構築されていることを示した部分と考えるべきだろう。西側ラインを一直線に造るだけでは、いくら土塁や濠が大規模であっても、防御ラインとしては脆弱なものになってしまう。張り出し部分を作ることにより、土塁両側面の監視と臨機の攻守を保証する馬出しの役割りがみとれる。御土居を設置した本来的な目的に沿って、このような戦術防御機能を高める形状にしたと考えられよう。この地区の西への張り出しは、設計段階ですでに決定されていたとみるべきだろう。ただ、張り出し部西辺ラインを左井通の位置にきめた理由に、このラインに原地形を残した小谷筋が明瞭に残存しており、その窪地に濠を設定することによる土木作業量軽減と、調査区の北側隣地に存在していたと推定される戦国時代の施設を取り込むことがあったものと考えられる。

御土居と並存していたことが明確な遺構は、すぐ東側を南北に走る溝3および溝37と、幾つかの小溝に限られている。溝3以東は引き続き耕作土としての使用が継続したものと考えられる。御土居や関連する遺構の築造は、この地区の土地利用のあり方に大きな影響は与えていない。当町を含むこの地区は、近世から近代にいたるまで耕作地としての使用が中心のようである。この地区が農業生産地から脱し、数百年の歳月を経て市街地化に進むのは、昭和に入ってからである。

（小森俊寛・南出俊彦）

7 平安京右京三条一坊 (図版1・12・13)

経過 中京区西ノ京東月光町・西月光町地内で都市計画道路御池通改良工事が計画された。これに伴って、御池通南側拡張部分の七本松通から御前通までの約230 m間の発掘調査を実施した。

調査地は平安京右京三条一坊十・十五町の南端部に位置する。三条坊門小路北側溝および路面、西櫛笥小路との交差点部などの遺構が予測される地である。

調査は、東から七本松通と太平通間をD区(1～6区)、太平通と下ノ森通間をE区(1・2区)、下ノ森通と御前通間をF区・G区(1～3区)・H区(2000年度調査に変更)と設定し、既存建物の解体が終わった地区から随時調査を行った。

遺構 十町(D・E区)の基本層序は、盛土層(0.2～0.3 m)、耕作土層(0.1～0.15 m)、床土層(0.1 m)で、床土層下は黄褐色砂泥層の地山となる。地山上面の標高は34.20 m前後である。

近世:各調査区で耕作に伴う小溝群、D-6区で素掘りの井戸2基、E-1区で12角形の縦板組の井戸1基を検出した。

中世:遺構は検出されていない。

平安時代:三条坊門小路北側溝および側溝に流れ込む暗渠、路面、西櫛笥小路東側溝、柱穴列、土壌などを検出した。三条坊門小路北側溝(SD100)は延べ110 mにわたって検出した。断面形状は、2段に掘り込まれ、上部は幅1.6～2.0 mの半月形を呈し、下部は幅0.6 m、深さ0.4 mの逆台形を呈する。溝の深さは0.8 mである。埋土は6層に分層でき、下層は有機質を含む粗砂や泥土層である。E-1区では溝底中央部に杭が24本打ち込まれていた。宅地部と路面の比高差は、0.15～0.20 mあり、宅地部が高い。また宅地内から三条坊門小路北側溝に排水するための暗渠と考えられる遺構をE-1区(SX27)とE-2区(SX62)の2箇所で見出した。

E-2区の三条坊門小路と西櫛笥小路の交差点部では西櫛笥小路東側溝(SD66)が三条坊門

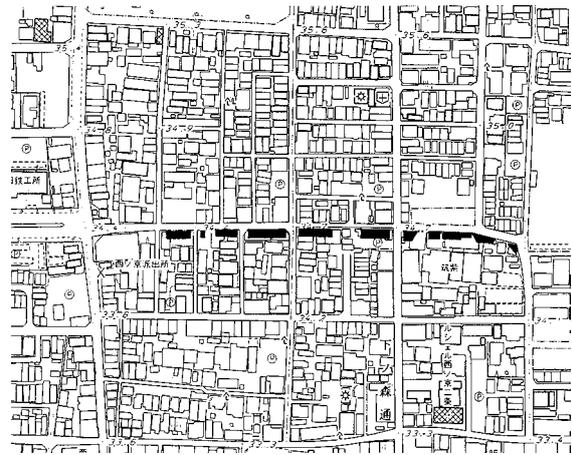


図28 調査位置図 (1:5,000)

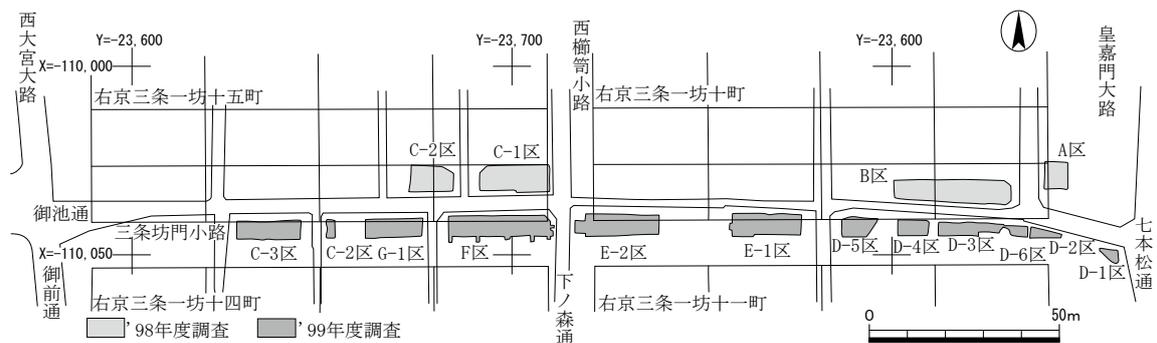


図29 調査区配置図 (1:2,000)

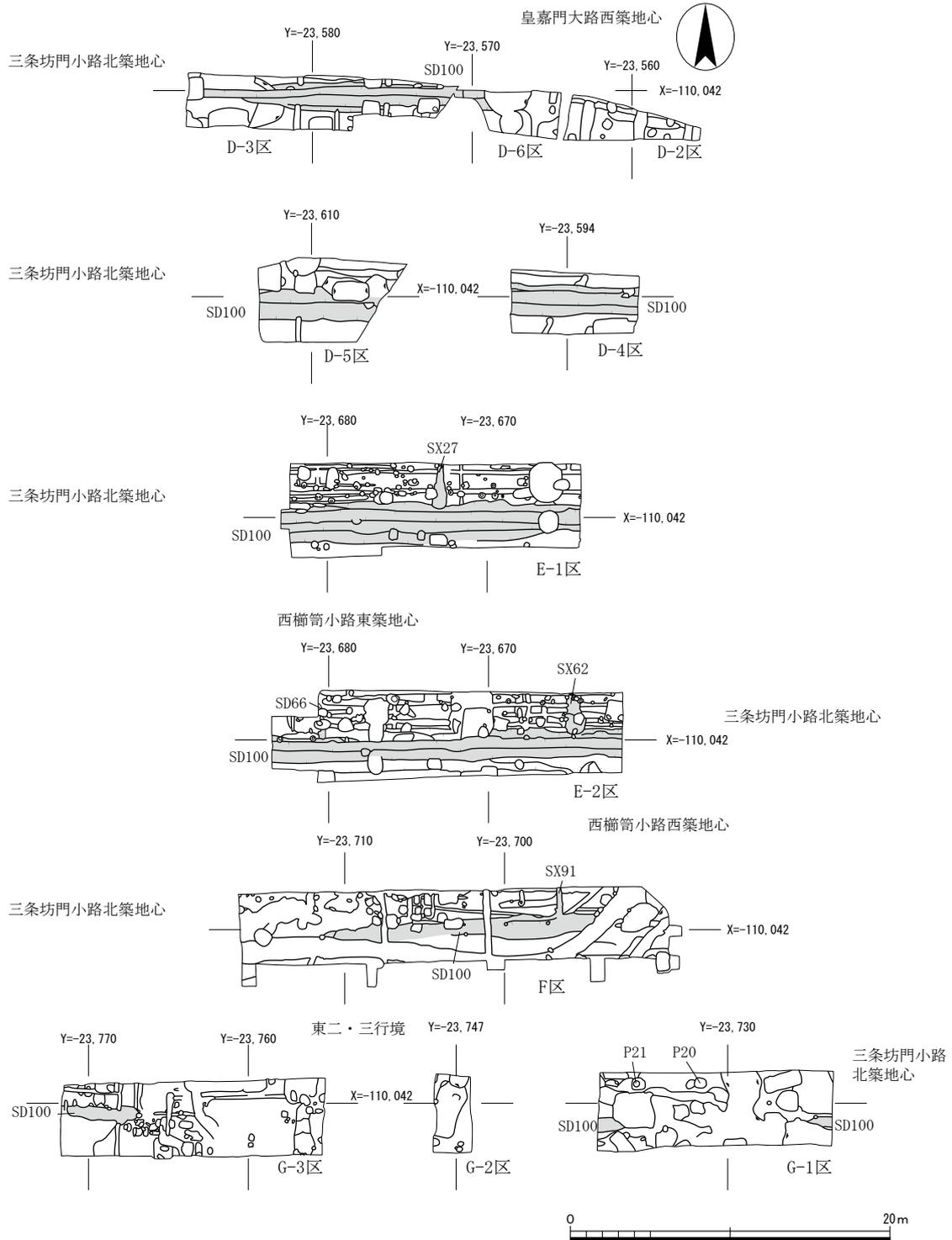


図30 遺構平面図 (1:400)

小路北側溝に流れ込んでいる痕跡を確認した。なお、SD 100はSD 66との交差点より西へ3 m以上伸びていることを確認した。

E-1・2区では北側築地心推定位置で、径0.3～0.5 mの柱穴が1.8 m間隔で並ぶ柱穴列を検出した。

十五町(F・G区)の基本層序は、基本的には十町と変わらない。現表土から地山まで0.1～0.3 mと浅いが、近代の溝や攪乱が多く、遺構の遺存状態は良くない。地山上面の標高は34.10 m前

後であるが、遺構の残存状態からみると、かなり削平されていると考えられる。

近代：F区からG-1区にかけて幅1.5m、深さ0.1～0.3mの溝を検出した。

近世：各調査区で耕作に伴う小溝、土壌などを検出した。

中世：F区で鎌倉時代の径約1.0m、深さ1.3mの素掘り井戸（SE73）を1基確認した。

平安時代：三条坊門小路北側溝、路面、暗渠、柱穴などを検出した。

三条坊門小路北側溝（SD100）はF区、G-1・3区で検出したが幅0.8～1.5m、深さ0.1～0.2mで断面逆台形を呈する。埋土は1～3層に分層できる。西櫛笥小路西側溝との交差部分は攪乱のため確認できなかった。

F区でも宅地内排水のための暗渠（SX91）と考えられる遺構を検出した。

路面はF区で検出したが、十町で検出した路面とは異なり、小礫や瓦細片が丁寧に敷きつめられていた。路面と宅地部の比高差は0.15mあり、宅地部が高い。

G-2区では三条坊門小路北側築地心推定位置上に根石を持つ径0.8mの柱穴2基（P20・21）を検出した。柱間は4mである。周辺部は攪乱を受けており不明であるが、門の一部と考えられる。

遺物 遺物は十町から295箱、十五町から55箱出土した。時期は弥生時代から近世に及ぶが、平安時代前期から中期に属するものが大半を占める。

十町（D・E区）近世：各調査区から土師器、陶器、染付などが出土しているが、特出するものはない。

中世から平安時代後期：各調査区から土師器、瓦器などが出土しているが、量的にも少なく遺構からは出土していない。

平安時代前期から中期：主に三条坊門小路北側溝（SD100）から出土した。土器類には土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、白色無釉陶器、黒色土器、白磁、青磁などの器種がある。大半が9世紀後半から10世紀前半の遺物であり、9世紀前半の遺物は少ない。土師器には杯、皿類などの他に鏝付甕がD-3・4区から出土した。須恵器ではD-3・4、E-2区から円面硯が出土した。緑釉陶器では香炉がD-4・E-1区から、把手付瓶がD-3区から、壺がE-2区からそれぞれ破片が出土した。

D-4区、E-1・2区、SD100から墨書土器が15点ほど出土した。緑釉陶器、灰釉陶器、白色無釉陶器椀類の底部外面に「内舎人所」「口舎人所」「山田安六」「東」「口東」などの墨書がある。

瓦類は奈良時代後期の京外からの搬入瓦や平安時代前期・中期に属する軒瓦類が80点以上出土しているが、いずれも破片であり文様の全容を知るものはない。「右坊」銘の文字瓦も22点出土しているが、西へ行くほど少ない。また緑釉丸瓦片も4点ほど出土した。

石製品は石帯が3点出土した。E-1区でSD100およびSX28から黒色の巡方が2点、E-2区でSD100から白色の丸鞆が1点出土した。

木製品はD-4区SD100底部から櫛1点とE-1区で長さ20～45cmの杭が24本出土した。

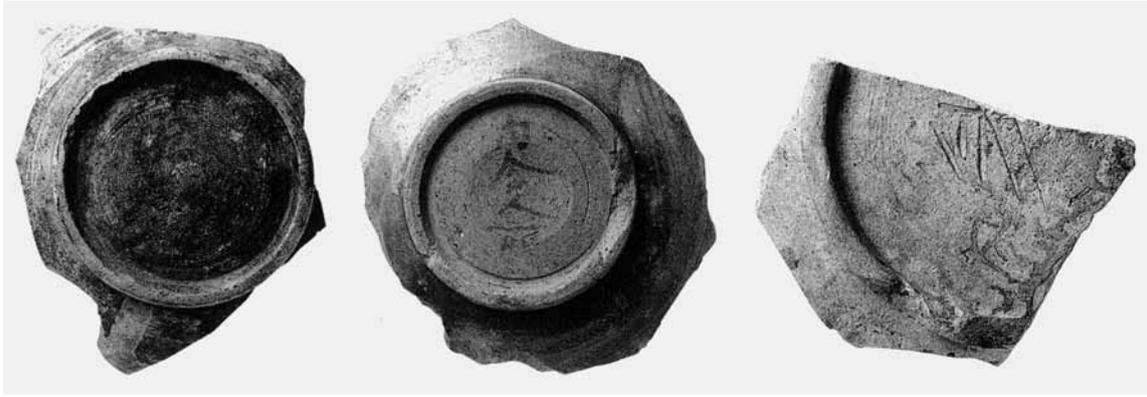


図31 出土文字資料

銭貨はE-1・2区SD 100 底部直上から「寛平大寶」が6枚ほど出土した。

十五町（F・G区）中世：F区、SF 73 から13世紀代の土師器皿が数枚出土したのみである。

平安時代前期から中期：三条坊門小路北側溝（SD 100）およびF区路面から土器類、瓦類、石製品が出土した。

土器類には土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、青磁などの器種があるが、いずれも小片である。G-3区出土の灰釉陶器碗の底部外面に刻書が認められる（判読不能）。

瓦類は、平安時代前期から中期の軒瓦11点と「右坊」銘の文字瓦2点が出土した。

石製品はF区路面から石帯巡方の破片が1片出土した。

小結 今回の調査地は平安京右京三条一坊十・十五町の南端部に位置する。三条坊門小路北側溝を延べ200mにわたって確認した。西櫛笥小路との交差点部分は、東接部（十町）で三条坊門小路北側溝が西櫛笥小路東側溝と合流、さらに西側へ延びており、暗渠で路面を横断していたと考えられる。しかし西接部（十五町）は近代の攪乱を受けており、その構造を明らかにすることはできなかった。

三条坊門小路北側溝の溝底の標高は、十五町内では34.00～34.10mであり、十町内では33.50～33.40mを測る。さらに皇嘉門大路西側溝の標高は33.10mであるので、雨水は東方に向けて排水され、さらに皇嘉門大路で南方へ排水されたと考えられる。

（伊藤 潔）

8 平安京右京六条一坊1 (図版1)

遺構 本調査は、JR丹波口駅周辺の再開発に伴う埋蔵文化財の16次調査である。

今回の調査対象地は、平成9年度に行われた13次調査4区の南西に位置し、平安京右京六条一坊六町に該当する。約230㎡の調査区を設定した。

遺構 調査区の基本層序は、現代盛土層(60～70cm)、中・近世の黒褐色泥土層(耕作土層20cm)で、その下層が鎌倉時代から平安時代の遺構面となるが、今回の調査では、26基の土取り土壌を検出したにとどまり、鎌倉時代から平安時代の遺構を検出できなかった。それ以外の遺構は、京都競馬場跡の外周溝SK1を検出した。

遺構 出土遺物は遺物整理箱に6箱で、すべて土器類である。内容は、平安時代から鎌倉時代の土師器、緑釉陶器、灰釉陶器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器青磁・白磁・青白磁、中・近世の焼締陶器、施釉陶器、近現代の陶磁器類などである。いずれの土器類も土取り土壌の埋土に含まれていたものである。

小結 調査の結果、中・近世の土取り土壌を検出したが、平安時代の遺構は、この土取り行為によって攪乱され検出できなかった。また、掘削断面の観察から、中・近世以降は耕作地として利用されていたと考えられる

(永田宗秀)

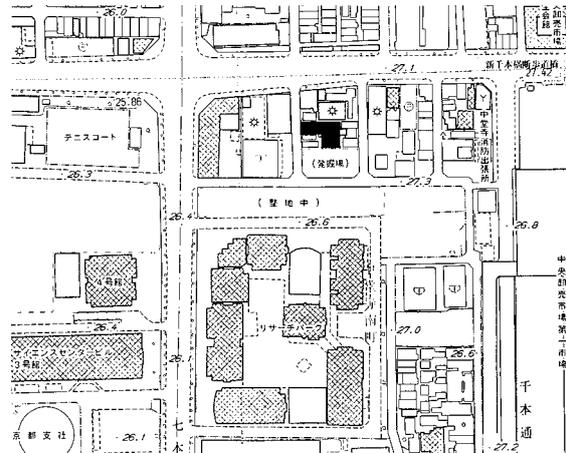


図32 調査位置図 (1:5,000)

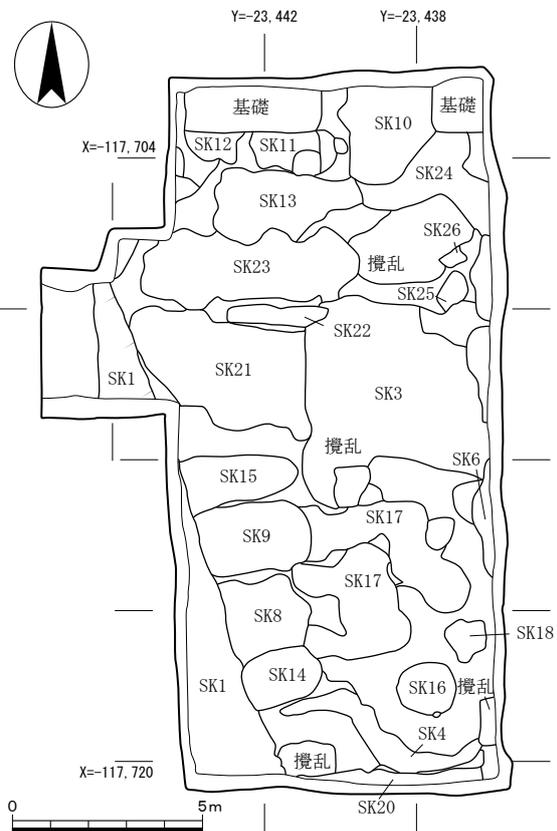


図33 遺構平面図 (1:200)

9 平安京右京六条一坊2 (図版1・14)

遺構 今回の調査は、京都市立朱雀第三小学校の増改築工事に伴う発掘調査である。

調査地は、平安京の条坊復元では右京六条一坊八町にあたり、北を五条大路（現在の松原通）、西を皇嘉門大路（現在の七本松通）、南を樋口小路（現在の万寿寺通）、東を西坊城小路（現在の東新道）に囲まれた区画の北西部に位置している。

調査地周辺の歴史的状況については、平安時代後期に調査地西隣の右京六条一坊九町が白河法皇の近臣の一人である高階為章の所領であったこと、桃山時代以降は中堂寺村の北部にあっていたことがわかっている。それ以外については文献から詳細を知ることは難しい。一方、近隣の調査成果では、調査地南側地域のガス管理設工事に伴う立会調査で平安時代の湿地、井戸を、五条通南側のリサーチパーク・大阪ガス敷地内の発掘調査で平安時代前期の街路、邸宅、庭園や平安時代後期から鎌倉時代にかけての街路、建物などを、JR嵯峨野線東側の公団住宅建設工事に伴う発掘調査で平安時代後期から鎌倉時代の街路、井戸などをそれぞれ検出している。

これらを受けて、調査地内で試掘調査を行ったところ、平安時代から江戸時代にかけての遺構面、遺物包含層が良好に残存していることが明らかとなり、発掘調査を実施することとなった。

調査区は既存の南校舎・受水槽・プールを避けて設定したため、いびつな形となった。

調査は重機掘削の後、順次第1面から第4面へと進め、各時代の精査・記録を行い、最後に断ち割り調査により下層の堆積を調べた。また、調査中の平成11年（1999）10月16日には地元を対象とした見学会を開くと共に、小学生の見学授業も随時開催し、調査成果の公開に努めた。

遺構 近代以降の盛土層は約1mの厚さがある。この下が江戸時代の遺構成立面となる（第1面）。第1面が成立する灰黄褐色砂泥層は約10cmの厚さで、調査区のほぼ全面に広がっている。下層には灰黄褐色砂泥層があり、その上面で室町時代の遺構を検出した（第2面）。灰黄褐色砂泥層も厚さ約10cmで、この下で平安時代後期から鎌倉時代の遺構を検出した（第3面）。第3面では調査区中央部を中心に暗褐色砂泥層が分布するが、調査区東部では下層の砂礫層がみられる。約30cmの厚さがある暗褐色砂泥層の下層は完全に砂礫層となり、調査区中央部に平安時代前期から中期の南北流路338が位置していた（第4面）。

調査で検出した遺構の数は全部で338基になる（図35）。第1面（江戸時代以降）では、耕作土層、柱穴、土壇、溝を検出した。調査区のほぼ全面に広がる灰黄褐色砂泥層は、耕作土層と考えられるので、調査地周辺は耕作地として利用されていたとみられる。柱穴は調査区全域に散在する。径は約15～40cmで、柱あたりが明瞭でない例が多い。そのため建物の復元はできていな

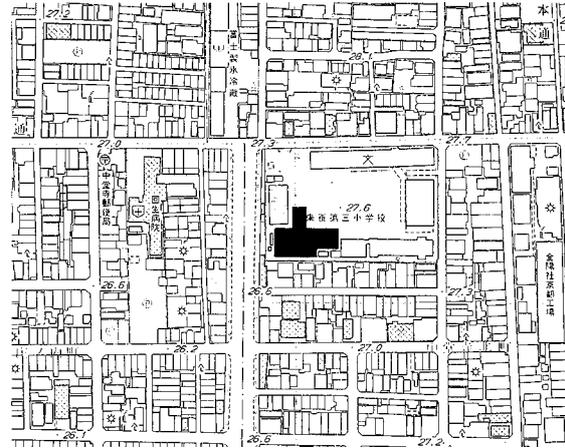


図34 調査位置図 (1 : 5,000)

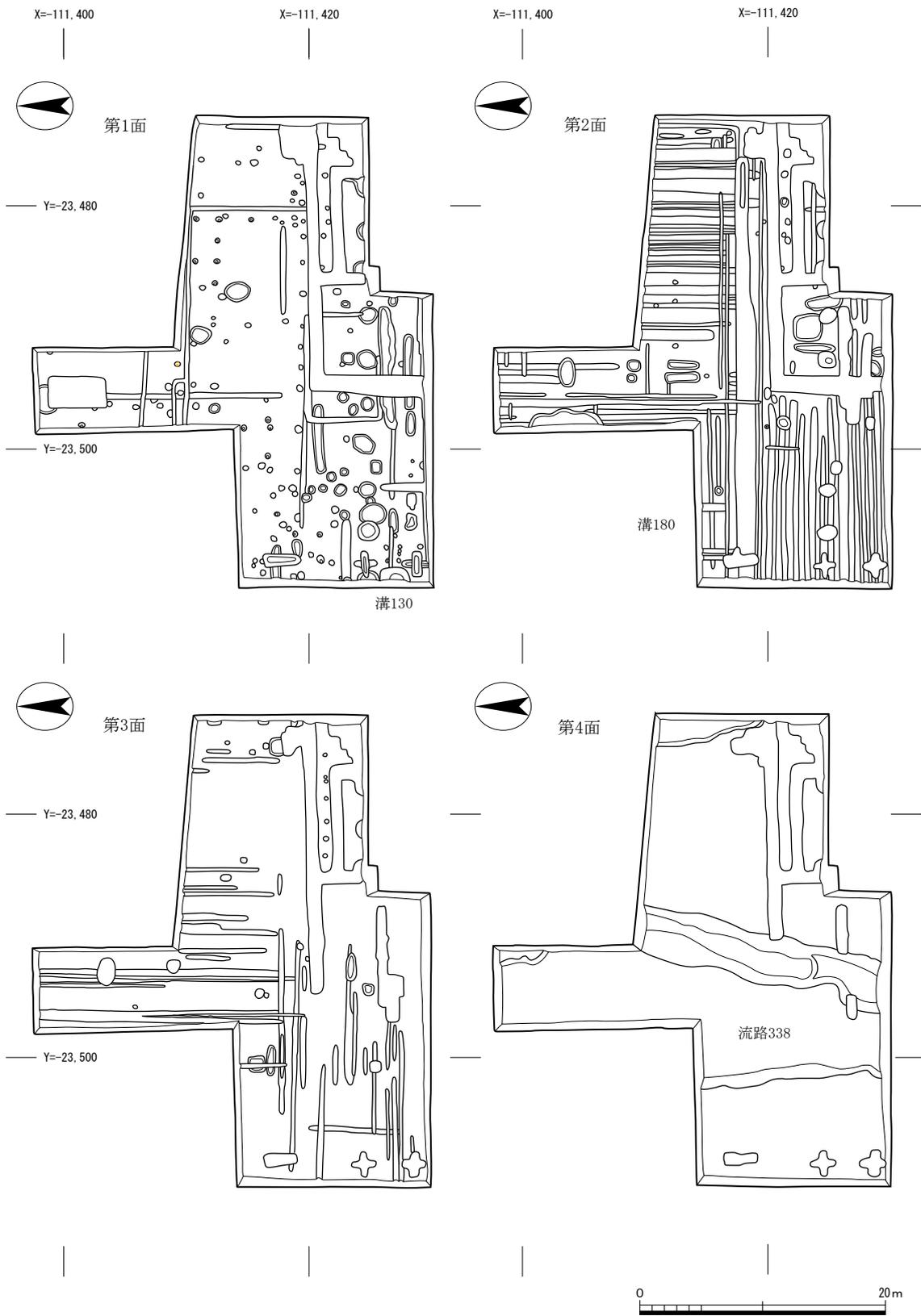


図35 遺構平面図 (1:500)

い。土壌は深さ 20 cm 程度の浅いものが多く、出土遺物も少ない。調査区東壁際の土壌 130 には、施釉陶器の便所甕が据えてあった。溝は東西方向が目立つ。なお、調査区南東部の攪乱はいずれも旧校舎の基礎である。これに沿って東西方向に並ぶ柱穴は旧校舎建築時の足場の跡であろう。

第2面（室町時代）では、柱穴・土壌・溝を検出した。柱穴はほとんどない。土壌は数が少なく、浅い例ばかりである。最も目立つ遺構は調査区全域で検出した多数の溝である。溝の幅は狭い例で約 20 cm、広い例では約 1.7 m あり、深さは約 10 ～ 20 cm である。溝は畑の畝溝か、湿気抜き溝と推定でき、調査地周辺がこの時期も耕作地として利用されていたことが明らかとなった。溝の方向は、調査区中央部の東西溝 180 を境界として北側は主に南北方向、南側は主に東西方向である。溝 180 は六条一坊八町の南北中心近くに位置しているため、溝の方向の違いは土地の所有者の違いか耕作単位を示しているとも考えられる。

第3面（平安時代後期から鎌倉時代）では柱穴・土壌・溝を検出した。遺構の状況は第2面と同様であるが、検出遺構の数は減少する。しかし、多数の溝を検出しており、この時期も調査地周辺が耕作地として利用されていたことがわかる。溝の方向の傾向も第2面と一致する。

第4面（平安時代前期から中期）では、南北方向の流路 338 を検出したのみである。幅約 8 ～ 10 m あり、最深部で検出面から約 70 cm あった。埋土は暗褐色やオリーブ黒色の粘土で、部分的に砂や礫が多いところもある。埋土中から平安時代前期の土器類や瓦が出土した。遺物は特に調査区北部に多く、近くに建物があつたと推定できる。

下層の断ち割り調査では、粘土や砂礫が切り合って堆積する状態を確認しており、調査区全体が平安京造営以前には流路であったことがわかった。少量の土器片や木片も出土した。おそらくこの流路は徐々に埋没が進み、第4面で検出した流路 338 は最終の状態であったのであろう。

遺構 調査では、第1面から第4面のそれぞれで遺物を採集した。江戸時代以降と室町時代の遺物が全体の約 4 割を占め、それより古い時代の遺物は 2 割程度である。古い時代の遺物が新しい時代の遺物包含層に混入している例が見受けられた。耕作によって土が攪拌されたためと考えられる。出土遺物は小さな破片になっていることが多く、個々の遺構から出土する遺物も少なかった。

江戸時代以降の遺物は、主に第1面の土壌、遺物包含層、攪乱埋土から出土した。土器類、瓦、土製品、石製品、金属製品などがある。大部分は江戸時代後期に属し、江戸時代前期から中期の遺物はわずかであった。土器類には土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、磁器がある。土師器皿・焙烙・コンロ、瓦器火鉢・甕、焼締陶器播鉢・壺・甕、施釉陶器碗・皿・鉢・蓋・鍋・土瓶・播鉢・壺・甕など、磁器碗・皿・鉢・蓋・れんげ・合子・水滴・香炉・壺・人形などがある。土師器、施釉陶器、磁器の食器類が多くを占め、次いで焼締陶器、施釉陶器壺・甕が多い。瓦類は丸瓦・平瓦・棧瓦・軒瓦がある。大部分は棧瓦が占める。土製品は埴塙・焼塩壺のほか、釜や播鉢を模した小型の土製品、泥メンコ・土人形・土鈴などの玩具も多い。石製品は硯・砥石・おはじきがある。金属製品は鉄釘・鉄製金具・銅銭・煙管・銅製金具があるが、腐食が進んでいるため元の形がわかる遺物は少ない。そのほか、貝殻、木片、焼木片、焼けた壁土もある。また、学校

創立後の遺物として旧校舎の煉瓦、土管、鉄製金具やガラス製インク瓶なども採集した。

室町時代の遺物は、主に第2面の溝、土壇、遺物包含層から出土した。土器類、瓦類、石製品、金属製品などがある。土器類には土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器などがある。土師器皿・椀、瓦器椀・鍋・釜・火鉢、焼締陶器鉢・壺・甕、施釉陶器椀・皿・鉢・香炉・壺、輸入陶磁器白磁椀・白磁鉢・白磁合子・白磁壺・青磁椀・青磁鉢・青磁盤・青磁香炉・青磁壺・青磁水注・褐釉盤・褐釉壺・染付椀がある。瓦類は丸瓦・平瓦の破片が出土した。石製品は砥石・滑石製鍋がある。金属製品は鉄滓ほかがある。

平安時代後期から鎌倉時代の遺物は、主に第2面・第3面の溝・包含層から出土した。量は少なく、土器類を確認したのみである。土師器、瓦器、焼締陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。土師器皿、瓦器椀、焼締陶器鉢・甕、灰釉陶器椀・壺、輸入陶磁器白磁椀・白磁鉢・白磁壺・青磁椀・青磁鉢・青磁壺・青白磁椀・青白磁鉢・青白磁合子・青白磁壺などがある。珍しい遺物としては高麗青磁の椀の破片を確認した。小破片であるが口縁部内側に象嵌技法を用いて文様を描く。第2面溝 190 から出土した。

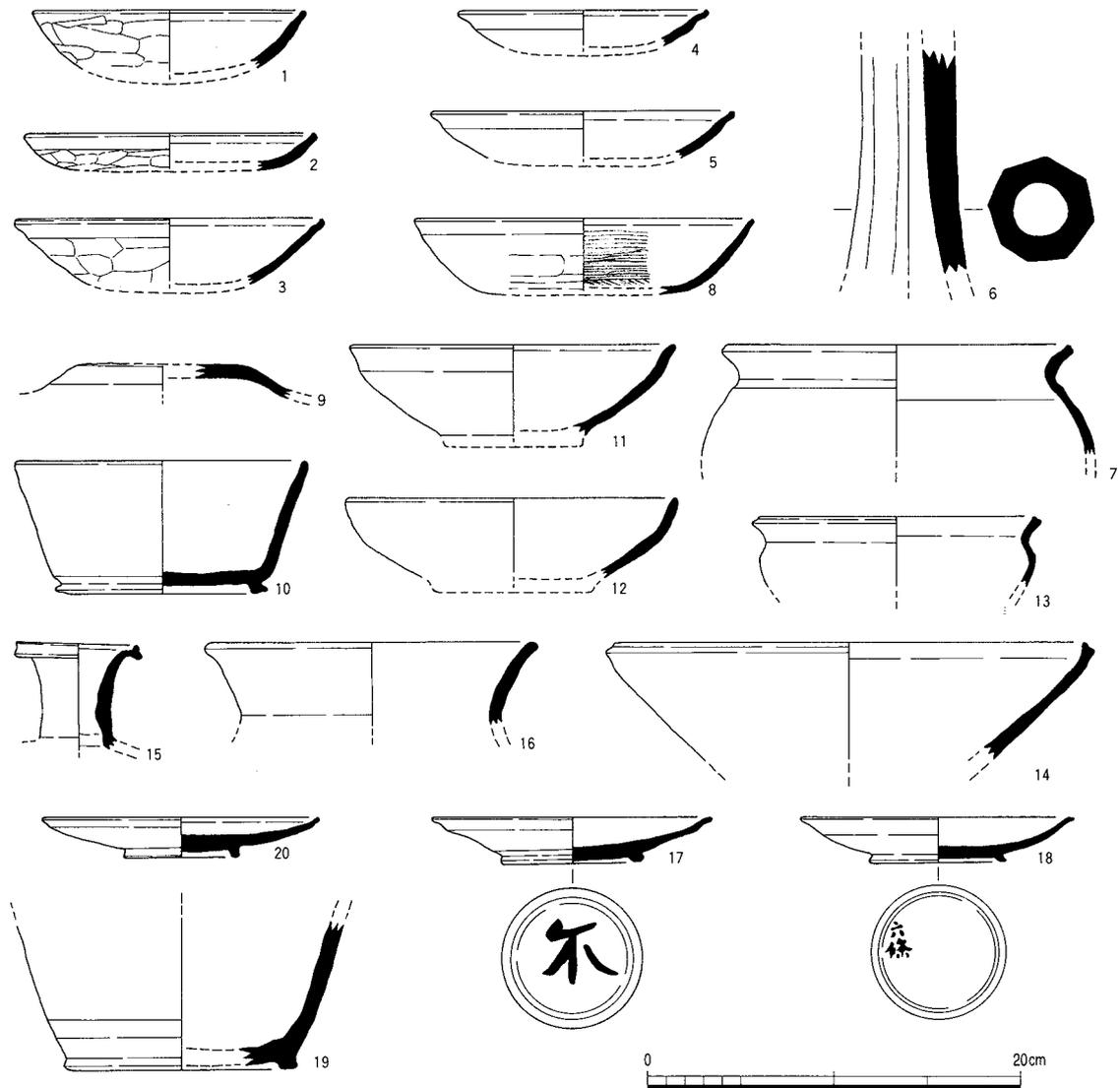


図 36 流路 338 出土土器実測図 (1 : 4)

平安時代前期から中期の遺物は、大半が流路 338 の調査区北部寄りから出土した。土器類、瓦、土製品、石製品などがある。大部分が平安時代前期に属し、中期の遺物は少ない。土器類の一部を図 36 に示した。器種は土師器（1～7）、白色土器、黒色土器（8）、須恵器、（9～16）、灰釉陶器（17～19）、緑釉陶器（20）がある。土師器の器形には皿（1～5）・蓋・高杯（6）・甕（7）がある。白色土器は蓋、黒色土器は椀（8）、須恵器は杯蓋（9）・杯身（10）・椀（11・12）・鉢（13・14）・壺（15）・甕（16）、灰釉陶器には椀・皿（17・18）・壺（19）・甕、緑釉陶器には椀・皿（20）などがある。9 は硯に転用した須恵器の杯蓋である。17・18 は底部外面に墨書が残る灰釉陶器の皿である。17 は「尔」と読める。18 は現状では退色してしまっていたが、出土時点では図示したように「六條」と判読することができた。平安京内での調査地の位置と対応し、重要な成果である。瓦には丸瓦・平瓦・軒平瓦があり、軒平瓦は瓦平城京からの搬入品であった。また、平瓦には「木工」の刻印が数回押されたものもあった。その他には須恵質の風字硯・砥石・木片・植物種子・馬歯が出土した。

また、下層の粘土や砂礫層から、新しい時代の遺構に混入して、縄文土器深鉢、弥生土器壺・甕、古墳時代の土師器高杯・甕、須恵器杯・甕・甕、飛鳥時代の須恵器杯・壺・平瓶などが出土したが、小破片のため詳細がわかる個体は少ない。また、流木も出土している。

小結 調査地周辺は、平安京造営以前からの流路であった。幅は 40 m 以上で、縄文時代から飛鳥時代の土器類が出土しており、平安京造営以前の集落の動向が把握するための参考になる成果である。

流路は徐々に埋没し、規模が小さくなったが、平安京造営後も第 4 面の流路 338 として痕跡を残していた。この時代の流路は五条通南側の調査でも複数検出している。調査区内では平安時代前期から中期に属する遺構は検出できなかったが、出土した遺物の量やまとまりから、調査区の近くに建物があった可能性は高い。また、平安京の条坊を示す「六條」と墨書した灰釉陶器の皿は、当時の地点表示の実態に迫れる参考資料となろう。

やがて平安時代後期には整地が行われて、調査地周辺は耕作地として整備された。その後、数回のかさ上げを経ながら鎌倉時代、室町時代、江戸時代にいたるまで耕作地として利用されたことが判明した。平安時代後期以降、平安京右京域が耕地化したことはすでに指摘されているところであるが、今回の調査では、平安時代後期から江戸時代にわたる耕地としての利用の様子を第 3 面から第 1 面にかけて考古学的に検証したことは大きな成果であった。

平安京右京六条一坊は、平安京の中でも調査が密に実施されている地域である。今回の調査で右京六条一坊の北部の状況が明らかにできたことは、調査地周辺の歴史的な動向を明らかにするための貴重な手がかりが得られたといえよう。（山本雅和・上村和直）

Ⅲ 鳥羽離宮跡

10 鳥羽離宮跡 141 次調査 (図版 1)

遺構 調査の対象地は、伏見区竹田浄菩提院町 76 に所在する宅地である。宅地は油小路通と新城南宮通羽束師墨染線の交差点北東角に位置し、東隣には平安時代末以来の歴史を持つ北向不動院が現存している。主な調査目的は、平安時代後期の鳥羽殿の遺構を明らかにすることである。

遺構・遺物 今回実施した調査によって、表土下 1.0～1.3 m で整地層を検出することができた。整地層は、上面が平坦であり調査区外にも広がる。出土遺物や上面に成立する遺構などから、平安時代後期の 11 世紀末から 12 世紀初頭に形成されたとみられる。上面では、柱穴とみられるピットや土壇、L 字状に設置された溝状遺構など、建物や建物に関連する遺構を検出している。遺構は 11 世紀末から 12 世紀初頭にはじまり、12 世紀前半のものが多い。しかし、平安時代末期から鎌倉時代初頭の 12 世紀後半には荒廃する。遺構埋土からは、土師器や瓦器碗と共に、平安時代後期の瓦が出土している。

整地層とその上面に展開している遺構は、東殿の造営に伴う地業とその上に形成された殿舎の一部か関連施設とみることができよう。

平安時代後期の整地層下に、さらに整地層を検出している。この土層は、上の整地層と時期的な隔たりは少なく、平安時代後期 11 世紀末の地業である。泉殿が造営された頃のものの、東殿に関連した地業が短期のうちに二度行われたものとの見方がある。

平安時代後期の東殿造営に伴うとみている整地層は、自然地形としてあった湿地を利用した水田上面を覆っている。整地土として用いられた土は、微高地を形成した地山土で、調査地北方にあったものと推測できる。北向不動院の東側から南側にかけて既調査によって検出されている園池は、当調査地周辺に存在していた湿地の一部を利用して造営されたと考えられる。

平安時代後期の整地土層上面に展開する東殿に関連するとみた遺構群は、平安時代末期から鎌倉時代初頭には衰退し、遺構・遺物ともに激減する。一帯は室町時代前半期までは明確な転用痕跡を示さないままに推移している。東殿が存在していた敷地は、主要殿舎が衰退して以降も、管理状態が続いたものとみられ、現在までに残る鳥羽天皇陵、安楽寿院、北向不動院などの存在が影響している可能性がある。しかし、室町時代後半には様相が変化し、耕作地化している。江戸時代前期には再び変化し、小単位の宅地となっている。以降は、現在まで宅地としての利用が続いている。

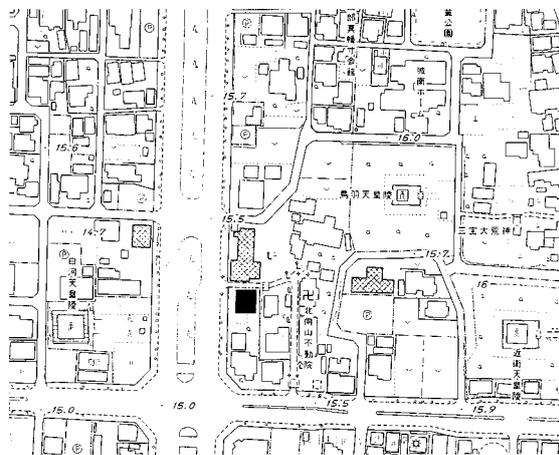


図 37 調査位置図 (1 : 5, 000)

小結 小規模な調査であったが、鳥羽殿が形成された平安時代後期を中心にして平安時代以前から現在にいたる当地の歴史の大筋を考古資料によって知り得たことは、今回実施した発掘調査の大きな成果である。(小森俊寛)

『京都市内遺跡発掘調査概報』平成11年度 2000年報告

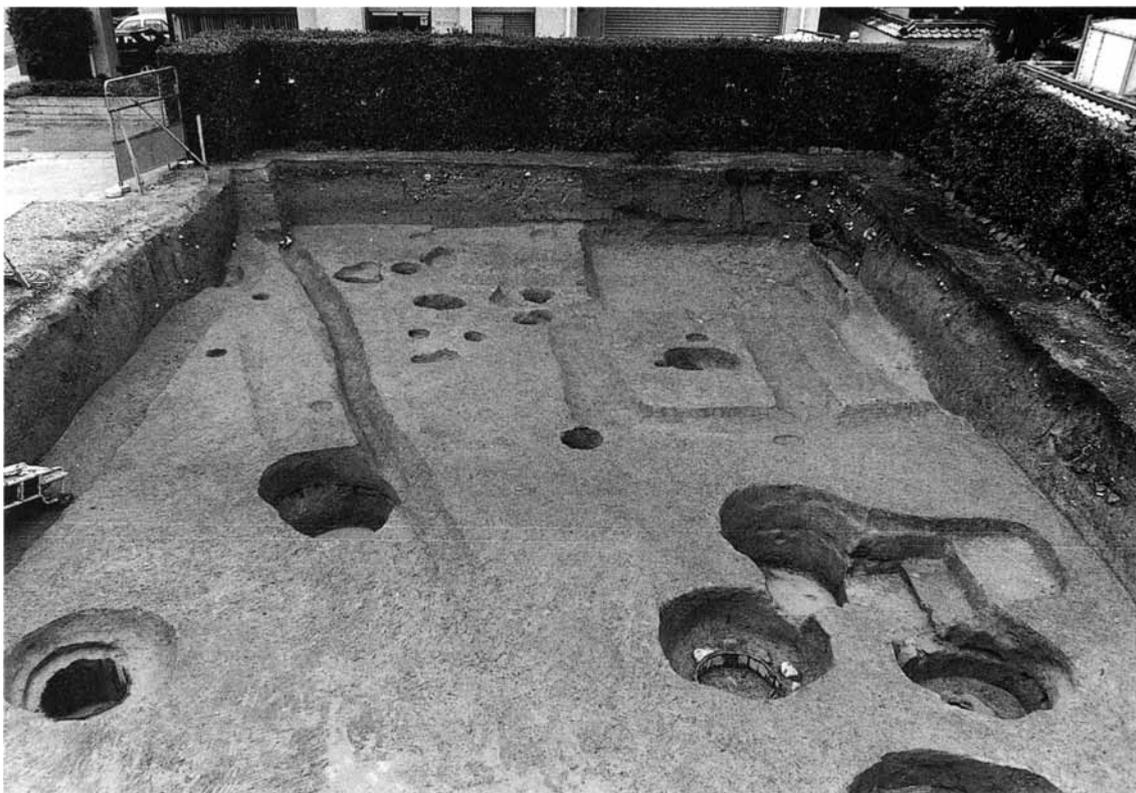


図 38 調査区全景（南から）

11 鳥羽離宮跡 142 次調査 (図版 1・15)

遺構 今調査は、試掘調査(本概要 2 章 III-6)を先に実施し、昭和 43 年(1968)まで当該区にあった本御塔の基壇の遺存が判明したため、本調査に移行した。今回は建物の全貌を明らかにする目的で、現在使用されている城南ホームの建物以外の駐車場と倉庫部分に調査区を設定した。建物の基壇化粧が残っている箇所では、部分的に北側と南側を拡張した。中央部には南北方向に使用中の消火栓と下水道の埋設管があり、土層断面観察用にこの部分は壊さずに残した。

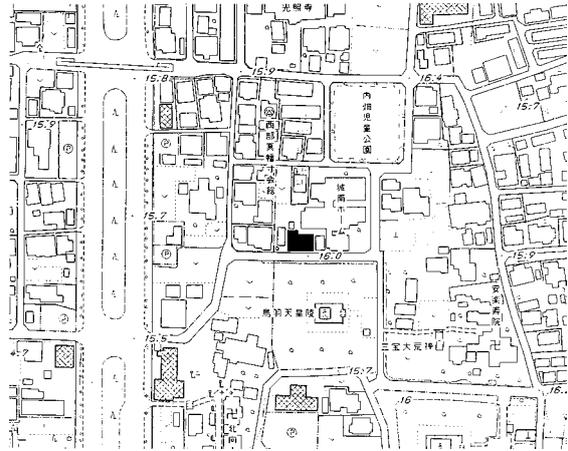


図 39 調査位置図 (1 : 5, 000)

遺構 基本層序は上から現代表土層 20cm、近世の整地層であるにぶい黄褐色砂泥層 30 cm、灰黄褐色砂泥層 15 cm、灰黄褐色粘質砂泥層が 10 cm である。その下は砂礫層 70 ~ 80 cm となり、自然流路の堆積である。さらに下は、緻密な灰色粘土層が厚く堆積する。

第 1 面で検出した建物 1 は一辺が 10 m を測る方形建物で、礎石の根固め跡を 14 基検出した。大きさは 1.0 ~ 1.5 m の方形掘形を持ち、中に拳大の河原石を根石としてつめ込んでいる。石と石の間に砂が入っている箇所もあり、突き固めた様子はみられない。根石の下には皮付きの丸太杭を 3 本ずつ打ち込んでいる。側柱筋と身舎の柱筋が通らない特異な建物である。基壇の化粧石は北側に残っており、他は抜き取られて、溝状に基壇の周囲をめぐる。北側と東側では雨落の石組みも遺存していた。一部破壊されているが、東側中央部に幅 3 m の階段がつく。基壇化粧石は 0.3 ~ 0.6 m、厚さ 0.3 ~ 0.4 m の花崗岩板石を縦に用い、雨落の石は 0.2 ~ 0.3 m 角、長さ 1.6 m の花崗岩を並べている。

第 2 面では、江戸時代の東西方向の溝 30 と、南北方向の溝 29 を検出した。溝 30 は幅が約 2 m、深さ 0.3 ~ 0.5 m を測る。溝の西部では近世の棧瓦と平安時代の瓦が南側から投げ込まれたように多量に出土した。溝 29 は東肩が調査区外に広がり不明であるが、東西方向の溝と同規模と思われる。土壙 28 は東西 4.5 m、南北 6 m 以上の長方形を呈し、深さ 0.2 m を測る。底部は平らで、棧瓦などの江戸時代後期の遺物が多く出土した。平安時代後期の溝 31 は調査区の南側に検出され、幅 0.8 ~ 1.0 m、深さ 0.4 m で東側でやや北に振れる。

遺構 巴文軒丸瓦(1~3)と唐草文軒平瓦(7~9)、鬼瓦(12)は尾張系の軒瓦である。9は愛知県大府市吉田1号窯から同文の出土例がある。図示していないが隅木蓋瓦の破片や丸瓦・平瓦もまとまって出土している。3と12には灰釉が施される。(4)は京都系の羯磨文軒丸瓦で、第134次調査に同範の出土例がある。(6)は鎌倉時代に属する蓮華文軒丸瓦で中房に卍を現す。(10・11)は京都系の折り曲げ式唐草文軒平瓦で、10は半截宝相華文から左右に唐草文が展開す

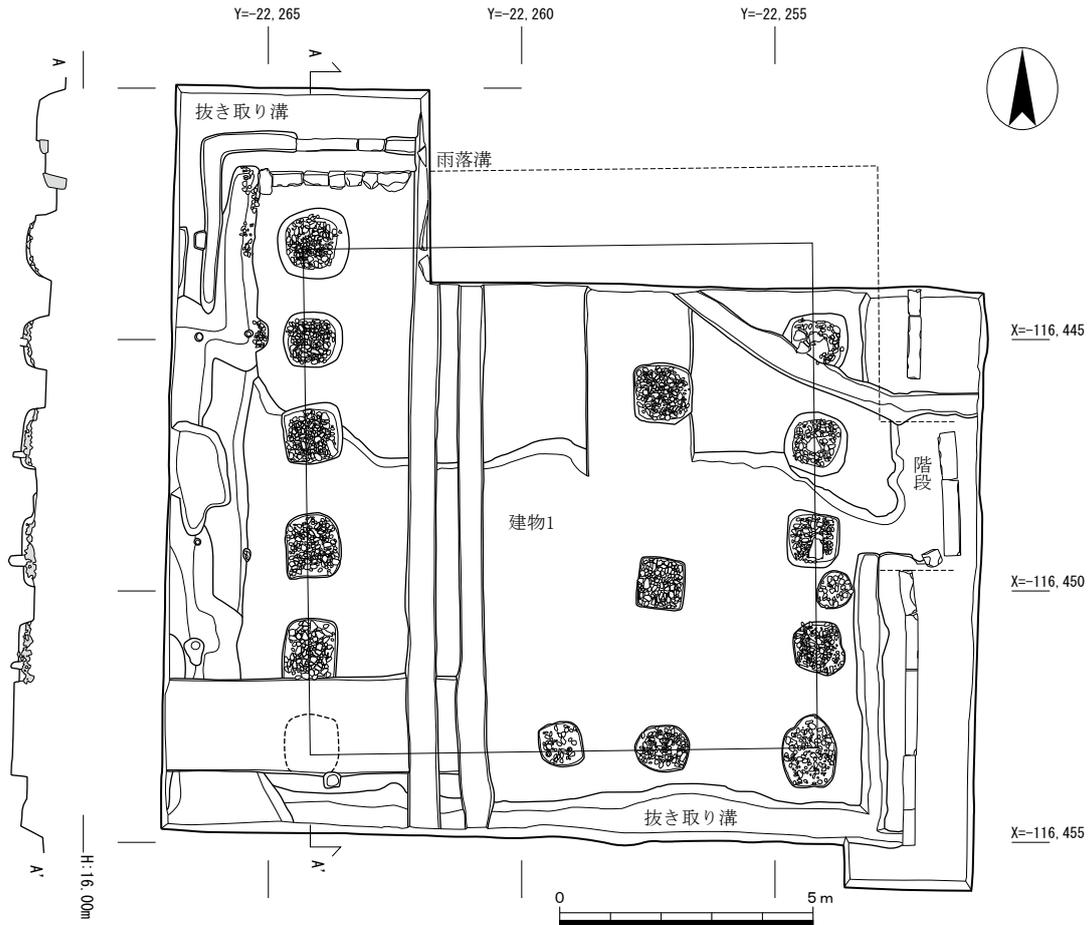


図40 第1面遺構実測図 (1:150)

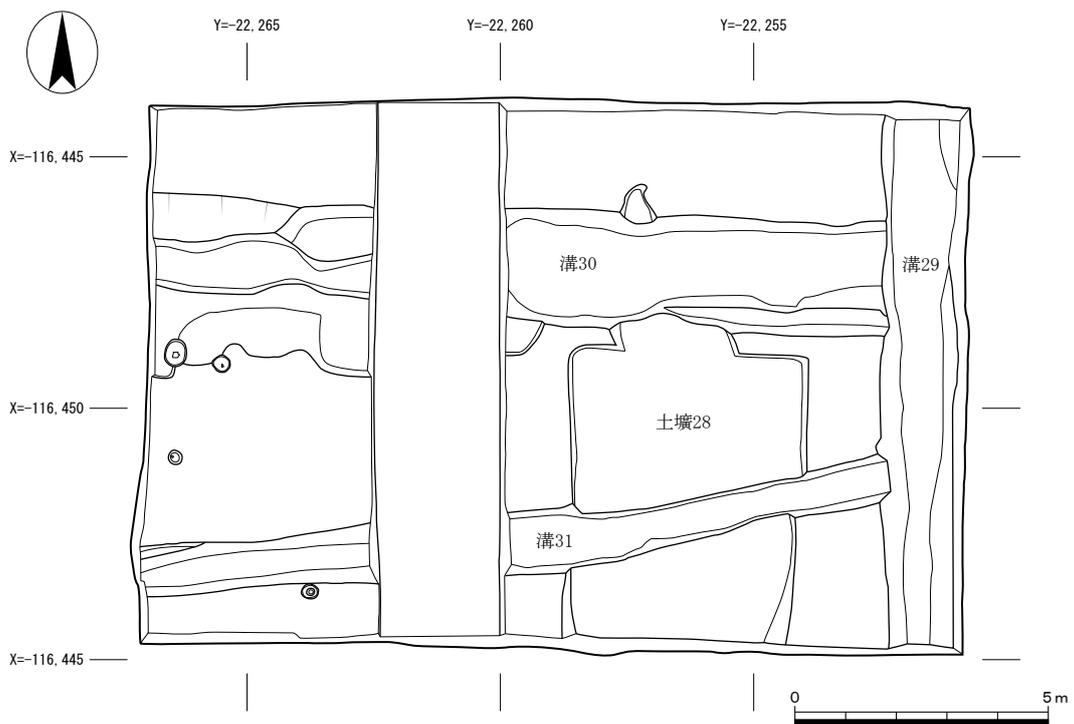


図41 第2面遺構平面図 (1:150)

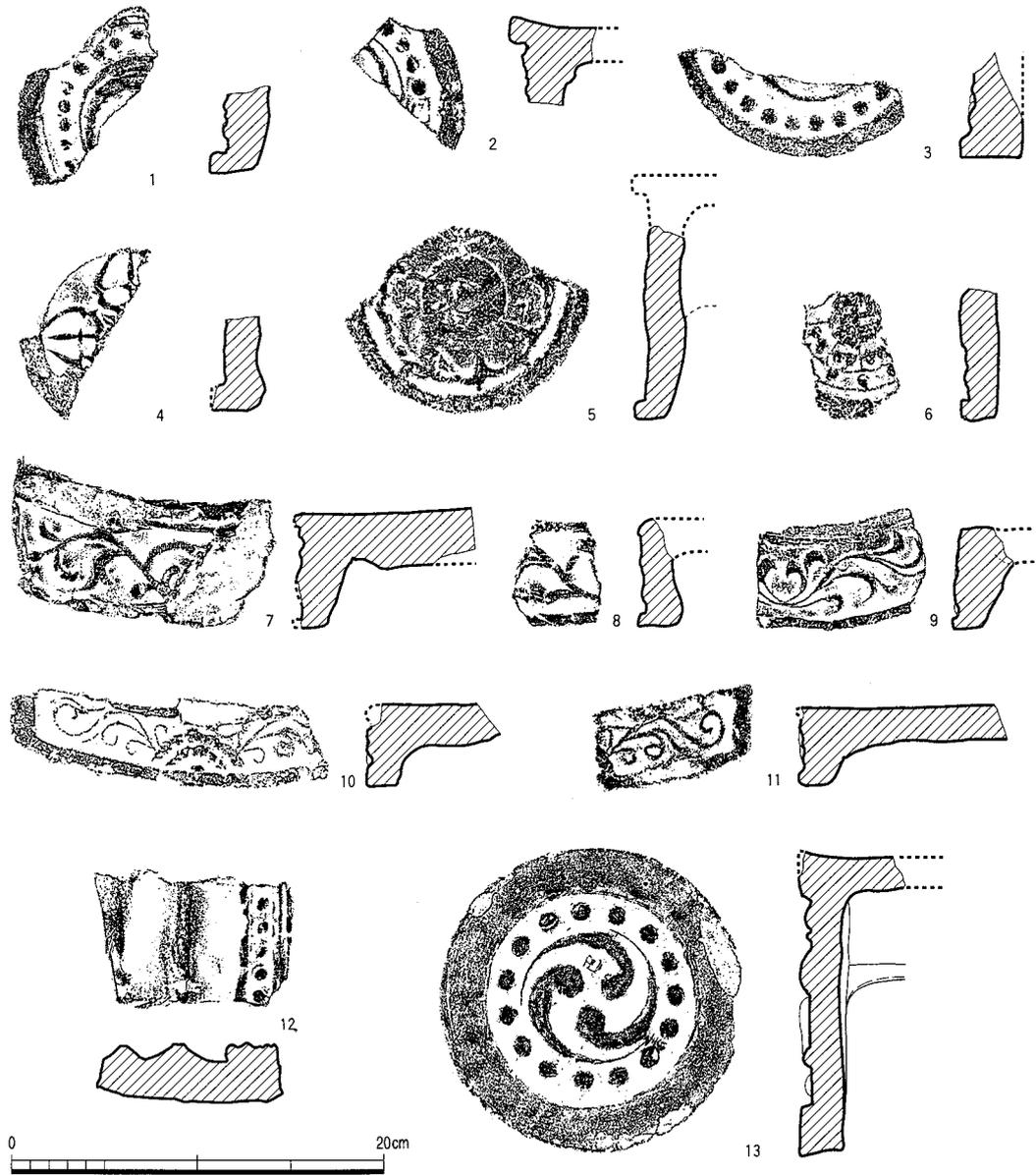


図 42 出土瓦実測図 (1:4)

る。(13)は近世の三巴文軒丸瓦で中房に「巴」、外区の珠文帯に「青」字を施す。他にも同じ文字の軒丸瓦がみられ、瓦当筭に刻んだものである。2・10・13は土壌28から、11・12は溝30で、他は近世の整地層から出土している。

平安時代後期の遺物は溝31から少量出土し、土師器皿、瓦器、白磁、灰釉瓦がある。中世の遺物は認められず、江戸時代の遺物は、整地層や溝・土壌から出土した。土師器皿、染付、焼締陶器、瓦などで江戸時代中期以降と思われる。

小結 今調査は試掘調査で検出された建物礎石の根固め跡や、昭和43年に実施された発掘調査概要^註の図面(図43)を参考にし、建物の全体を調査できるように調査区を設定した。その結果、基壇の北側と東側は基壇化粧の花崗岩と雨落の石列が遺存していたが、西側と南側は抜き取られていることが判明した。また、昭和43年には調査されなかった礎石根固めの工法を明らかにすることができた。杭を打ち込みその上に根石を多量に入れて頑丈にしているが、地盤が軟弱で湧

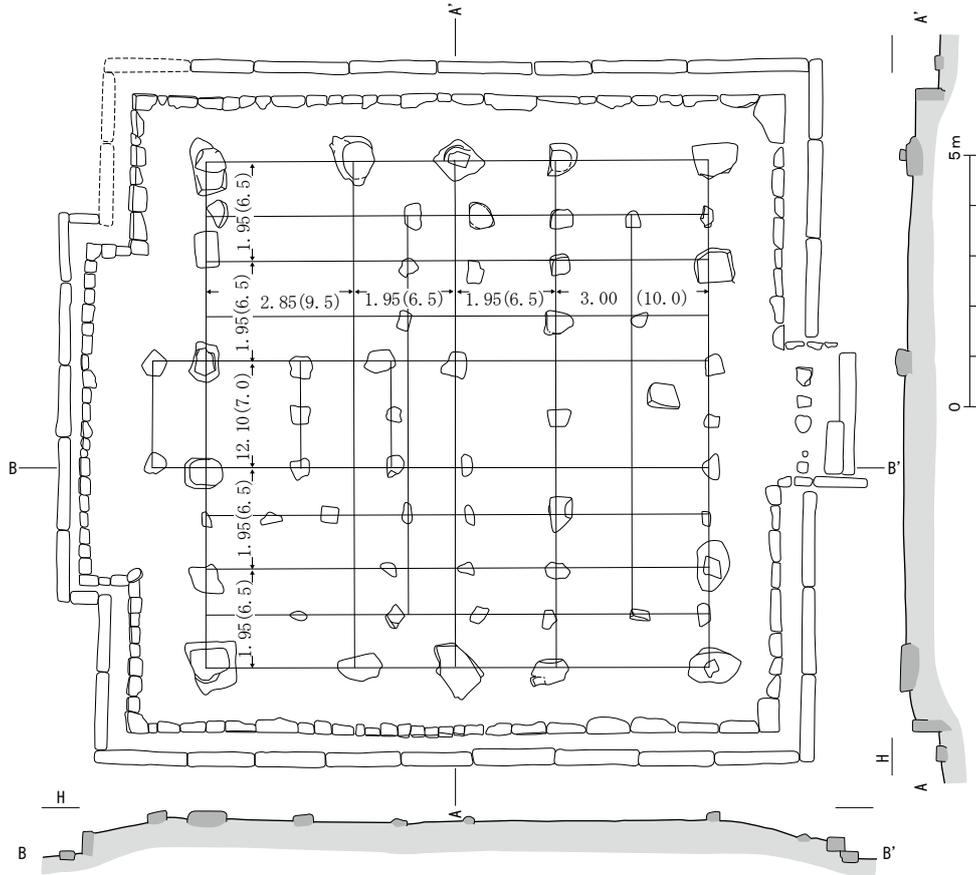


図43 本御塔実測図（昭和43年測量）（1:150）

水が激しく地盤沈下のため建物が傾き、第二室戸台風による倒壊を招いたことが予想される。

砂礫層の上面で検出した江戸時代後期の南北溝（溝29）と東西溝（溝30）は、安楽寿院の整備に伴い排水用の堀が掘られたものと思われる。溝31は少量ながら平安時代後期の遺物が出土し、東殿に関連した溝と思われる。しかし、遺構の成立している面は砂礫層の堆積で、平安時代の層は削平されたのであろう。この流路の堆積は、調査区北東部の第53次調査や西側の第69次調査でも確認され、北東から南西方向へ流れる流路で、旧鴨川の支流と考えられる。

出土遺物に関しては、江戸時代の整地層から尾張系の瓦が山城系や播磨系よりも多く出土した。付近に尾張系の瓦を葺いた建物が予想され、東殿の復元に関して重要な資料と思われる。

（前田義明）

註 杉山信三 「鳥羽離宮跡昭和43年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1969）』
京都府教育委員会 1969年

IV 中臣遺跡

12 中臣遺跡 79 次調査 (図版 2-2・16~20)

経過 この調査は、京都市勧修寺第二市営住宅団地の建築工事に伴うもので、中臣遺跡の第 79 次調査である。調査地は中臣遺跡の中央東寄りの地点にあたり、栗栖野台地東側の緩斜面上である。調査はまず、木造の旧市営住宅建物解体工事に伴う便槽撤去立会調査を、平成 10 年 (1998) 10 月 2 日から同年 10 月 26 日にかけて実施した。その結果、開発範囲全域にわたって古墳時代後期から飛鳥時代にかけての遺構が濃密に分布していることが明らかになった。建築工事の開始時期、現存街路の有効利用、残土置き場の確保などを考慮、発掘調査区全体を 8 個のブロックに分け、それぞれ 1 区～8 区と仮称した。発掘調査は、平成 10 年 11 月 16 日から開始した。2 区、1 区、3 区、4 区、5 区、7・8 区、6 区の順に調査を行い、平成 12 年 3 月 14 日にすべての現地調査を終了した。

調査遺構面は、基本的に縄文時代以降の遺構が検出される暗褐色から褐色シルト層上面 1 面を対象とした。しかし、既往の調査によって、暗褐色から褐色シルト層に後期旧石器時代から縄文時代早期の遺物が含まれていることが知られている。部分的に下層の調査を実施し、これらの遺物採取に努めた。なお、記録図面類はすべて手描きで作成した。

調査期間中の平成 11 年 (1999) 3 月 13 日に、2 区の調査成果を中心に現地説明会を開催した。また、同年 8 月 10 日・11 日の両日に、3 区の調査成果を中心に地域住民対象の現場公開を開催した。さらに、同年 11 月 27 日に、隣接

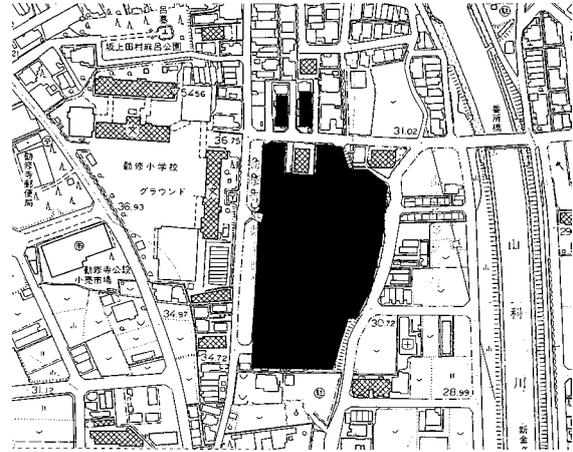


図 44 調査位置図 (1:5,000)

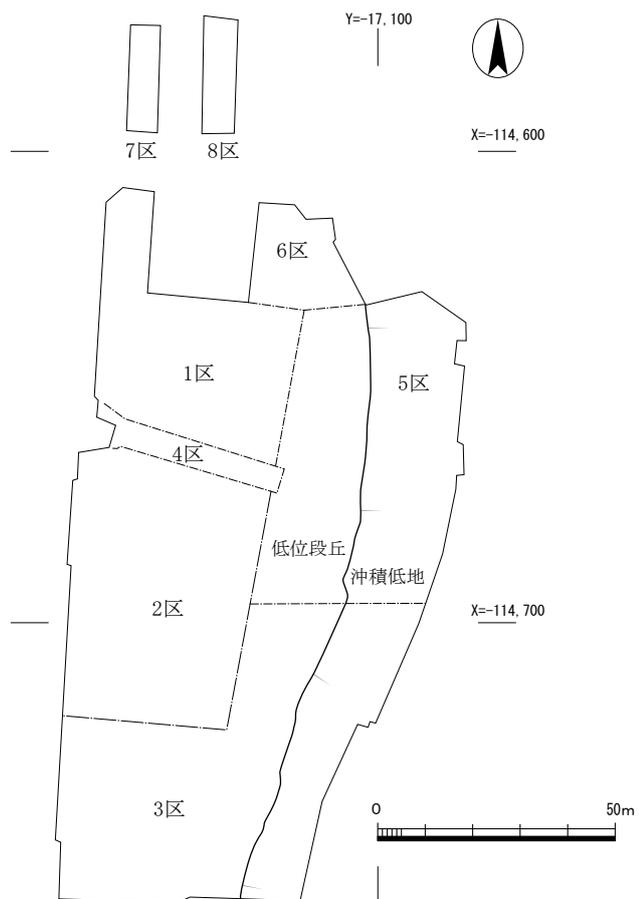


図 45 調査区配置図 (1:1600)

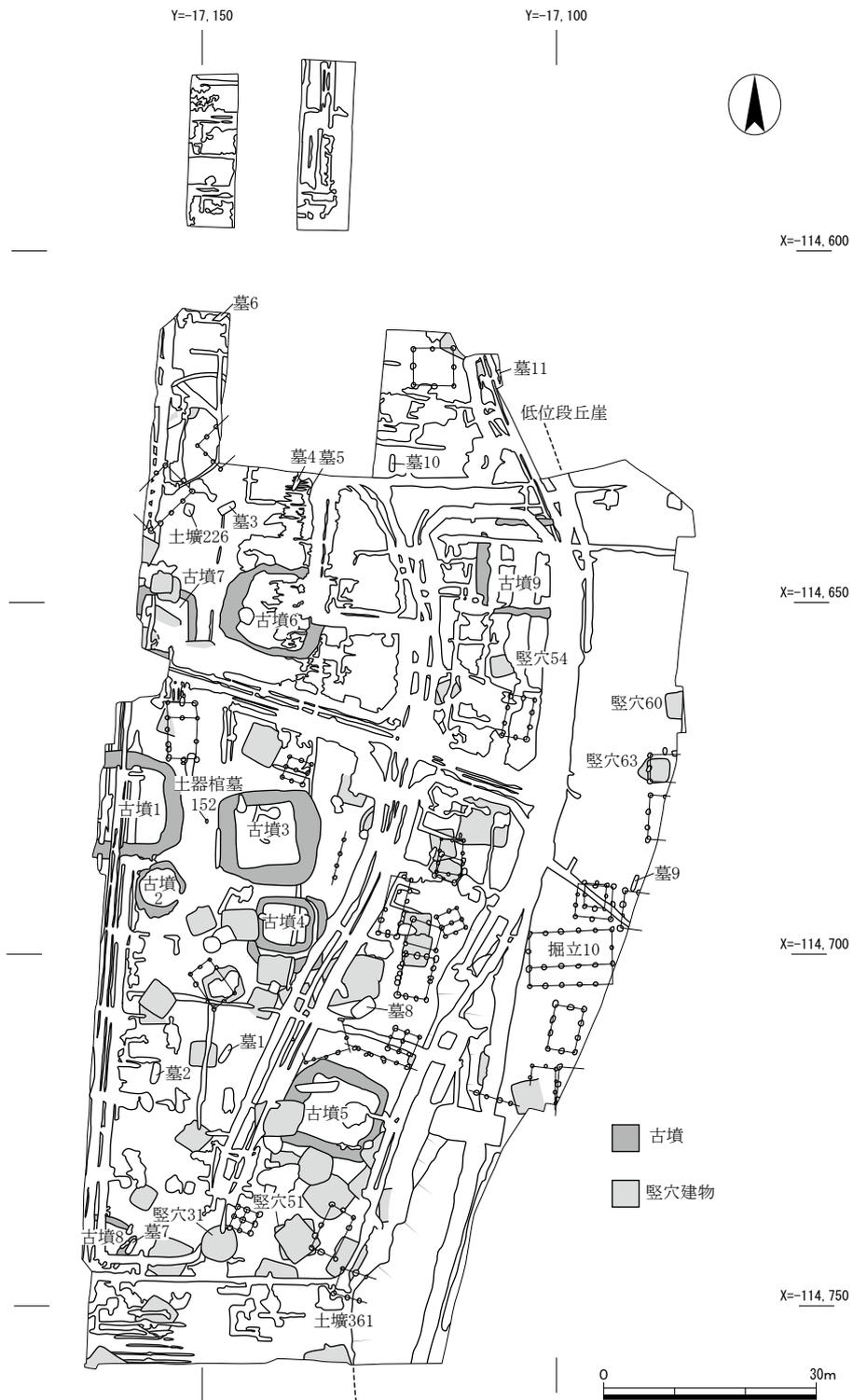


図46 遺構平面図 (1:1000)

する勸修小学校の施設を利用し、調査成果報告会を開催した。

遺構 調査地は山科川右岸の低位段丘上から沖積低地にわたって広がり、調査区内に低位段丘崖を含み込んでいる。この段丘崖は、現状で1.0～1.5 mの高低差がある。低位段丘および沖積低地は、東に向かって下る緩斜面であるため、前近代から近代にかけての耕地開発と旧市営住宅建設時の切り盛りで、部分的に著しい削平を受けている。現代盛土層、旧耕土層、近世から近代客土層下に遺跡の基盤層である褐色から黒褐色シルト層を認めるが、削平の激しい部分では下部の層準である褐色シルト層や砂礫層・礫層が遺構面を形成する。また、室町時代の遺物を含む黄灰色砂泥層や、奈良時代の遺物を含む黒褐色砂泥層が部分的に残存し、3区から5区にかけての東壁際の沖積低地部分には縄文時代から弥生時代の遺物を包含する黒色シルト層が堆積する。

縄文時代の遺構は、土器棺墓1基（土器棺墓152）を検出した。甕1個体を横に倒し、小規模な墓壇に納めたものである。弥生時代の遺構は、中期の竪穴住居1棟（竪穴31）と後期の竪穴住居1基（竪穴51）である。竪穴31は4本の支柱穴を有する円形プランの焼失住居で、床面上に土器類と共に炭化した上屋の部材が残る。竪穴51は4本の支柱穴を有する方形プランの建物である。古墳時代後期前半の遺構は、古墳9基と木棺墓3基（墓1・2・8）がある。この時代の住居跡は検出していない。古墳1と古墳8は、隣接する77次調査区内で西半部が検出されている。古墳は低墳丘で、いずれも封土と主体部が失われ、周溝のみ残る。円墳の可能性のある古墳2以外はいずれも方墳である。墳丘規模は一辺が10 m前後に及ぶ大型のもの（古墳1・3・5・6・9）と6 m程度の小型のもの（古墳2・4）、どちらにも属さない中型のもの（古墳7・8）とがある。大型のものは周溝幅が2 m以上あるのに対し、中型・小型のものは幅1 m程度である。古墳4は二重の周溝を有する特異なものである。古墳3・5～7の周溝底から、5～6個の完形土器を整然と並べた埋納遺構を、それぞれ一箇所検出している。古墳1の土器埋納遺構は、77次調査で検出されている^{註1}。時期は、古墳7が5世紀中頃（TK 208型式^{註2}）、古墳1～6が5世紀後半から末（TK 23～TK 47型式）、古墳9と古墳8は遺物が少なく明らかではないが、同様の時期であると考えられる。木棺墓は、長さ3 m程度の長方形の土壇内に完形土器数点が検出されるもので、木質は遺存しないが木棺を直葬したものと考える。墓1と墓2は幅約1 mある。墓8は幅1.5 mあり、墓壇内に木槨状の施設があった可能性がある。木棺墓はいずれも6世紀前半から半ば（TK 10型式）のものである。古墳時代後期末から飛鳥時代にかけての遺構は、竪穴住居64棟、掘立柱建物10数棟、木棺墓5基（墓3～7）、木棺墓もしくは土壇墓の可能性のある土壇1基（土壇226）がある。竪穴住居はいずれも方形か長方形プランで、壁面の一箇所にカマドを有する。支柱穴は4本のものが一般的で、支柱穴が検出できないものや2本のものがある。規模は一辺3 m程度の小規模なものから、一辺7 m以上の大型のものがある。竪穴住居は6世紀末から8世紀初頭（TK 209～TK 48型式）のものである。7世紀第4四半期から8世紀初頭にかけての竪穴住居の検出は今回の調査が初例で、中臣遺跡における竪穴住居の終焉時期を示すものと考えられる。掘立柱建物は後の時代のもも含めて26棟検出しているが、帰属時期が不明なものも多く、大半が飛鳥時代以前のものか奈良時代以降のものか区別がつかない。高床倉庫と思

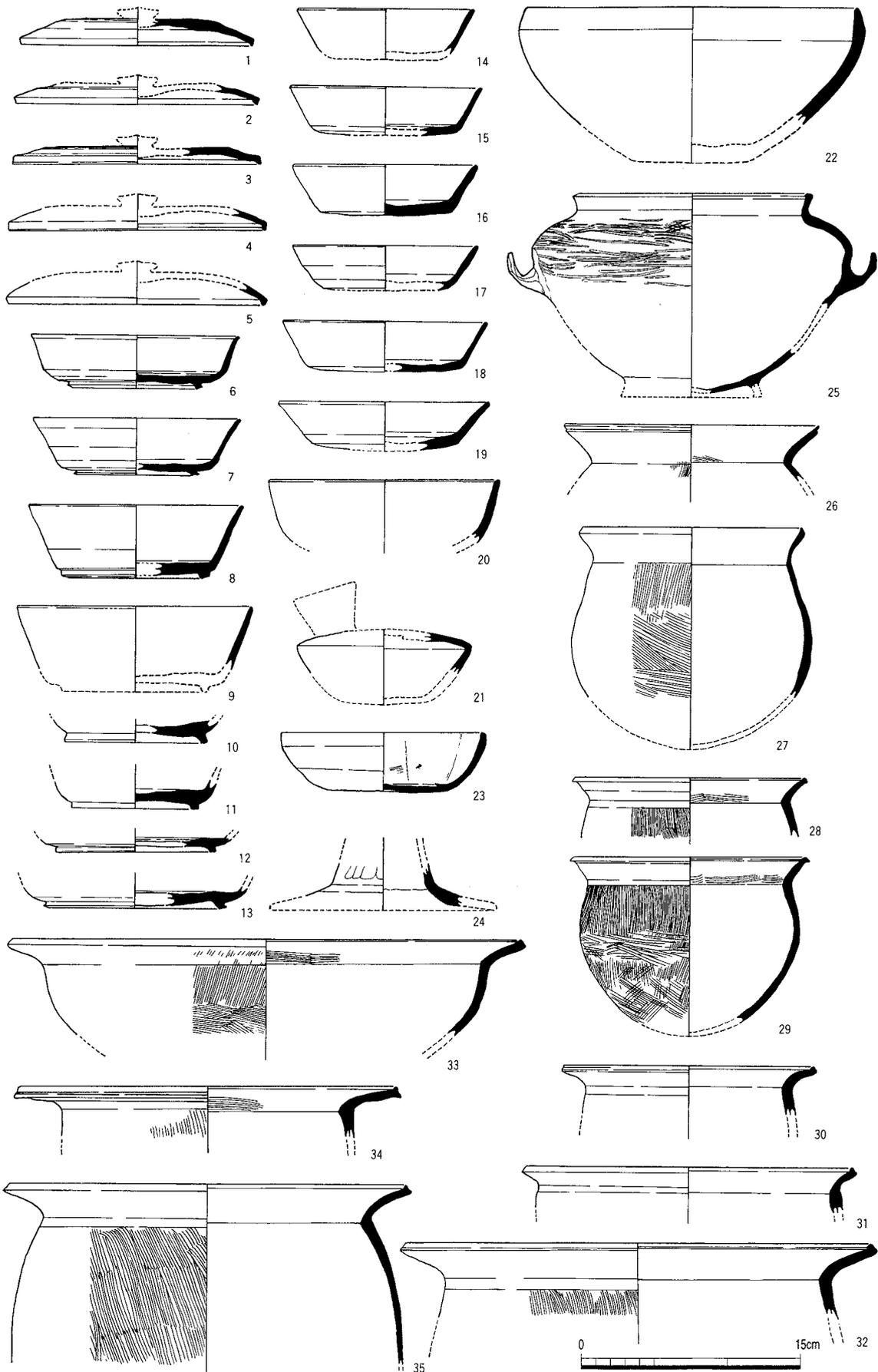


図47 竪穴54・60出土土器実測図(1～22:須恵器 23～35:土師器 竪穴54出土:8・16・17・22・23・25～27・29・35 竪穴60出土:1～7・9～15・18～21・24・28・30～34)(1:4)

われる2間×2間の総柱建物や、2間×3間の長方形プランの建物が多いが、間数や規模は様々である。木棺墓は、古墳時代後期前半のものと同構造であるが、墓壙の長さが2m程度で少し小さい。木棺墓類は6世紀後半から7世紀初頭（TK 43～TK 209型式）のものである。奈良時代から平安時代の遺構は、掘立柱建物10数棟、木棺墓2基（墓9・10）である。掘立柱建物は、帰属時期が不明なので触れないが、8世紀代の遺物がかかなり含まれている。掘立10は、南北2間×東西5間の身舎の南面に1間分の庇を有する規模の大きなもので、正しく南北方位にのる。時期は9世紀である。木棺墓は、前代のものと同様、木棺直葬墓である。墓9は11世紀、墓10は9世紀である。鎌倉時代以降の遺構は、各調査区の各所で散発的に検出している。

遺物 後期旧石器時代の遺物は、翼状剥片状のサヌカイト横形剥片が3点出土している。1点は2区の下層調査、他の2点は後世の遺構埋土と攪乱墳からの出土である。また、これ以外にサヌカイトの剥片や石核が出土しているが、明確な型式的特点を示さず、年代は不明である。

縄文時代の遺物は、土器と石器である。土器は下層の調査では早期・前期・中期の土器が、後世の遺構埋土からは早期と晩期の土器片が少量ずつ出土している。完形体に復元可能な土器は土器棺墓152の晩期土器甕のみである。石器は、草創期から早期にかけての尖頭器や剥片類が出土している。尖頭器はサヌカイト製が1点、チャート製が1点ある。剥片はチャートの縦形剥片が多く、これらは草創期から早期にかけての石器と考える。石鏃が3点、磨製石斧が1点出土しているが、いずれも縄文時代前期以降のものとする。また、チャート製の特殊形石鏃が1点出土しているが、これは草創期の尖頭器の可能性もある。弥生時代の遺物は堅穴住居31・51から出土している以外は極めて少ない。堅穴31からは弥生Ⅱ期の良好な土器の一括資料が出土している。

古墳時代前期前半の遺物は、古墳周溝埋土や土器埋納遺構、木棺墓から出土している須恵器類が主体である。土器埋納遺構や木棺墓出土の土器類は、完形のものが多い一括遺物である。田辺昭三氏による陶邑須恵器編年のTK 208型式からTK 10型式期のものである。特筆すべき遺物として、墓2から出土した朝鮮半島百済地域産と思われる甕がある。平底で鳥足文タタキ目を施す。また、1区の後世遺構埋土から線刻のある形象埴輪片が出土している。家形埴輪の一部と考える。古墳時代後期末から飛鳥時代の出土遺物は、今回の調査で得られた出土遺物の主体を占める。土器類では、須恵器、土師器の各器形が出土している。各堅穴住居埋土から、田辺氏編年のTK 209型式からTK 48型式にいたる各時期の良好な一括資料を得ている。中臣遺跡における堅穴建物終焉期を示す重要な遺物として、堅穴54と堅穴60出土の土器類を図47に掲げる。特筆すべき土器類として、墓3から丹塗りされた須恵器杯が2個体出土している。また、堅穴63から墨書のある須恵器杯が出土している。土製品は、土錘が堅穴47埋土から1点出土している。石製品は、各堅穴住居埋土から砥石、平滑な面を持つ石、カマド支柱石、搬入礫などが出土している。特筆すべきものに、土壙361から出土した管玉がある。鉄製品は、刀子15個、鎌6個が、各堅穴住居、土壙墓、土壙などの埋土から出土している。刀子は木質を残すものが多い。鑄造関連の遺物としては、鉄滓18個、鞆羽口が2個出土している。鉄滓は各堅穴住居埋土から、鞆羽

口は土壌から出土している。奈良時代から平安時代にかけての遺物は、土器類、釘、漆膜などがある。土器類は、土師器、須恵器各器形を主体とし、他に黒色土器、緑釉陶器の細片などがある。柱穴や包含層からの出土遺物が大半であるため、まとまりのある一括遺物はない。墓9からは、11世紀の土師器皿数枚に伴って、漆膜が出土している。何らかの漆器が副葬されていたもので、木質は残っていない。墓10からは、9世紀の須恵器瓶子が出土している。鎌倉時代以降の遺物は、極めて少ないが瓦器などの細片が出土している。なお、古墳に伴う土器埋納遺構、土壌墓出土の完形土器の内部の土などを「土サンプル」として取り上げている。また、各時代の遺構から出土した炭化木材も取り上げている。

小結 少量ながら後期旧石器時代の石器を検出できた意義は大きい。この時期の石器群が発見されている台地高位の74次調査地点から、低位段丘縁辺部にまで石器分布域が広がることが明らかになった。また、縄文時代草創期から中期にかけての石器や土器が発見されたことも重要である。この時期を対象とした調査を十分に果たせなかったことは反省点として今後に生かしたい。また、畿内第二様式の竪穴住居の発見は中臣遺跡では初めてであり、貴重な成果となった。古墳時代後期前半の古墳群の発見は今回の調査成果の中で特筆すべきである。この時期の建物遺構は発見できなかったが、7世紀に大型化する中臣遺跡集落のはじまりが、5世紀代である可能性を考慮する必要がでてきた。また、墓2から出土した陶質土器は、中臣遺跡と渡来人との関わりを示す貴重な資料となった。鳥足文タタキ目を有する韓式系土器は、陶質土器としては今のところ近畿地方唯一の資料である。7世紀代の竪穴住居と掘立柱建物は、中臣遺跡のこれまでの調査でも多数検出されているが、今回の調査ほど広範囲に多数の遺構の平面的な関係を知り得るデータはなく、貴重な成果となった。なお、従来中臣遺跡における竪穴住居の終焉時期は7世紀第3四半期頃と考えていたが、今回の調査で7世紀末から8世紀初頭まで下ることが明らかになった。掘立柱建物の帰属時期を出土遺物の分析を通して明らかにする必要がある。竪穴住居で構成されない分、遺構としては目立たないが、集落は8世紀を通じて存続するようである。平安時代前期の大型掘立柱建物である掘立10は、規模と構造から、一般農民層の住宅ではなく、貴族層の屋敷の一部を構成する建物と考える。周辺の調査成果とあわせて建物の性格を分析する必要がある。今回の調査は、調査面積の広さと調査成果の充実という意味で、中臣遺跡の既往の発掘調査の中でも特筆すべきものとなった。なお、現地調査では、亀田修一（岡山理科大学）、定森秀夫（京都文化博物館）、田中清美（財団法人大阪市文化財協会）、菱田哲郎（京都府立大学）、森下章司、山中一郎、吉井秀夫（以上、京都大学）の各氏にご指導をいただいた。朝鮮半島産陶質土器については、金正完氏（国立扶余博物館）にご教示を賜った。

（内田好昭・高 正龍・東 洋一・堀内寛昭）

註1 鈴木廣司・網 伸也「中臣遺跡77次調査」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
（財）京都市埋蔵文化財研究所 2000年、68～75頁。

註2 須恵器の型式名は、田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年による。
なお、最近の研究動向を考慮しているため、暦年代は田辺氏の比定と少し異なっている。

V 長岡京跡

13 長岡京左京一条三坊1 (図版1・21・22)

遺構 調査地点は、弥生時代から古墳時代に継続する東土川遺跡と、長岡京左京一条三坊十町に推定され、また、鎌倉時代から室町時代の戊亥遺跡にも隣接している。今回の調査は、長岡京左京 434 次として、西羽束師川河川改修関係ではB-2区として実施した。関係する調査は、北側で左京 203 次・318 次、南側では 236 次^{註3}調査などがある。北側では自然流路や建物群が検出され、出土した木簡から長岡京期に津が存在したことが明らかとなった。南側では古墳

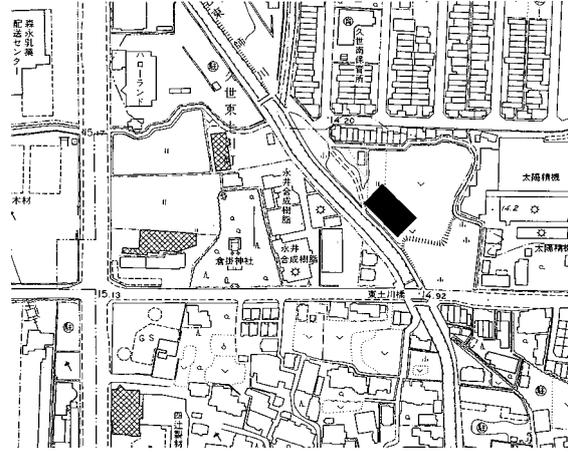


図 48 調査位置図 (1 : 5, 000)

時代の流路が確認され、今回の調査地でも同様の遺構の検出が予想された。また、東土川橋の南側で実施した調査では、15 世紀に村が成立し、現在まで続く景観の出発点となったことがわかった。

着手前は畑作地であったが、旧所有者によると水田からの転換は最近とのことで、旧水田耕作土層まで機械で掘削し、床土層から遺構検出を行い、近世層から弥生時代の遺構面まで、合計 5 面の調査を行った。なお、調査終了直前に 1 号方形周溝墓の完掘を目指して拡張を行ったが、暗渠排水溝・土壇など近世の遺構だけで、周溝墓南溝は検出できなかった。

遺構 基本土層は北壁中央部でみると、第 1 層はにぶい黄褐色泥砂層 (10YR4/3) で水田盛土層と畑耕作土層、第 2 層は暗灰黄色泥砂層 (2.5Y4/2) で水田耕作土層、第 3 層は浅黄色泥砂土層 (5Y7/3) の水田床土層、第 4 層は灰オリーブ色泥砂層 (5Y6/2) で中世遺物包含層、第 5 層は黄灰色粘質土層 (2.5Y5/1) の室町時代の遺物包含層、第 6 層は黄灰色粘土層 (2.5Y4/1) で平安時代から鎌倉時代の遺物包含層、第 7 層は黄灰色粘質土層 (2.5Y5/3) で長岡京期流路の肩を形成する土層、第 8 層は灰色砂礫層 (10Y5/1) の地山である。

発掘調査は上層遺構面から以下の過程で実施した。第 1 面-第 3 層の床土層上面での遺構検出、第 2 面-第 4 層の灰オリーブ色泥砂層上面での遺構検出、第 3 面-第 5 層の黄灰色粘質土層上面で遺構検出、中世前期末の低湿地を埋めた小石の地業を一部で確認、第 4 面-東部で長岡京期の河川の西肩部を検出。肩部は小石で整地、第 5 面-第 8 層上面で方形周溝墓を検出する。

以下、検出した主要な遺構について時代順に記述する。なお、第 2 面には遺構が存在しないため触れない。

第 1 面-近世水田床土面検出の遺構で、幅 5 cm 前後の溝が 35 本と多数検出されている。水田畦畔と同一方位で、異なる方位のものはなく、その深さは 2 cm 前後で、掘ると遺構の輪郭認識が

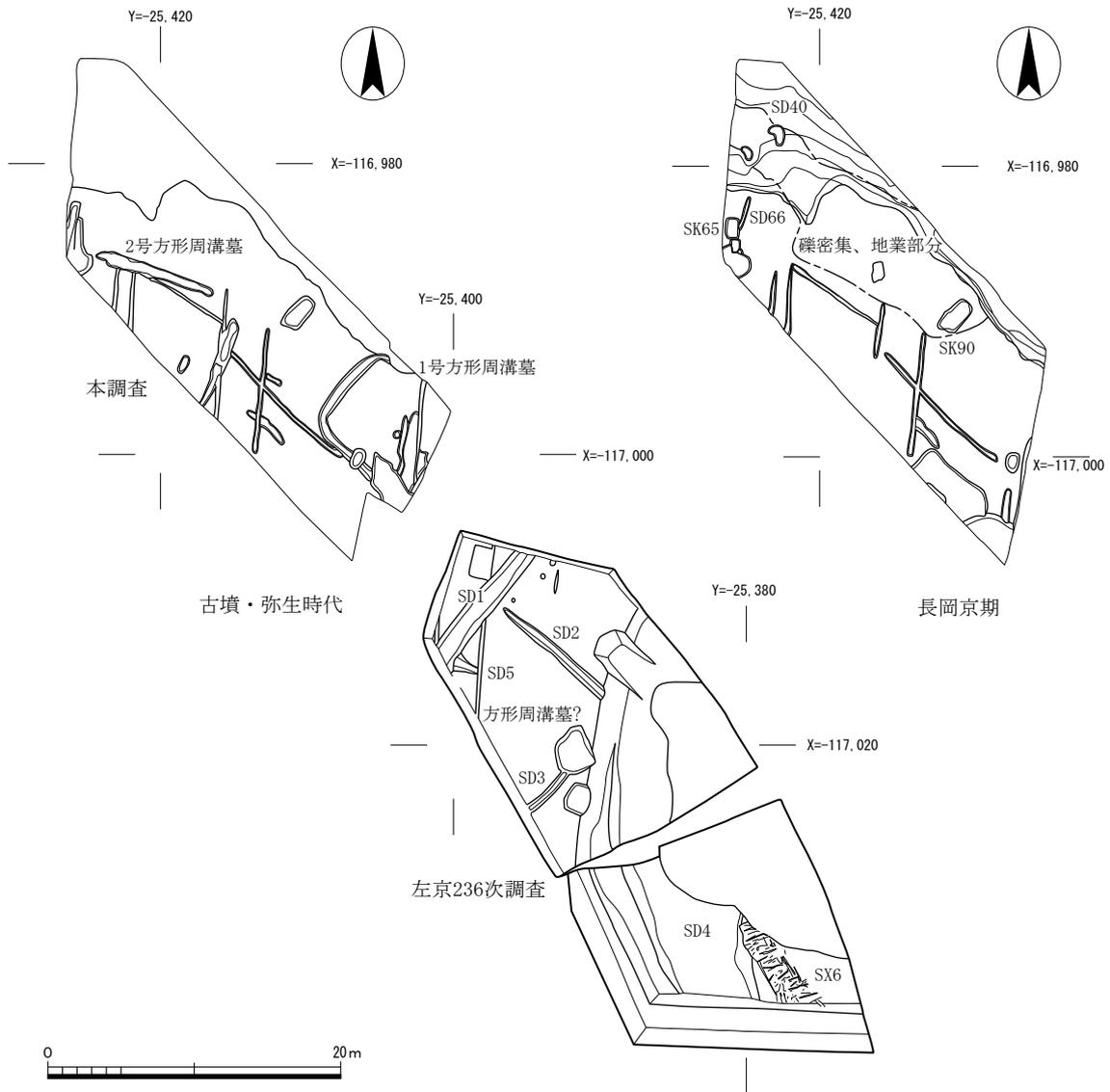


図49 遺構平面図 (1:500)

困難になる。埋土が水田耕作土層であることから、鋤先の痕跡と推定される。暗渠排水溝のSD 2・7・9・21・26・30などは、東西・南北の両方向があり、現畦畔とずれるものもある。規模は幅が20 cm前後で深さは15 cm、底には径5 cm前後の竹が埋め込まれている。竹は太さから真竹と推定される。

第3面—小石の集積遺構、灰オリーブ色泥砂層の下面から黄灰色粘質土層の上面で小石が集積された状態で検出された。当初は低湿地の地盤改良の仕事と判断されたが、面的な広がりがなく、粗朶なども存在しないことから判断を留保したい。

第4面—長岡京期の流路と地業層を検出した。北西から南東方向に流れる長岡京期の流路は、トレンチの北では東西方向に流れの方向をかえている。流路の底部からは長岡京期の遺物だけが出土しており、周囲で検出されている弥生時代から古墳時代などの古くから流れる流路を直接使用したものではないことがわかる。この時代まで継続して流れていた流路の肩部を傾斜角15度

ほどのなだらかな斜面に掘削・整形し、物資の槽運のための津の機能を付加した施設と推定される。また、長岡京期河川の西肩部では、径5～15cmほどの川原石で整地・地業した層が検出された。その範囲は肩部から流路内まで及んでおり、ほぼ流路に並行して5m幅で作業が認められる。これは、肩部が泥砂層で安定しなかったために、川原石を入れ安定させた結果と考えられ、地業の一形態と判断される。また、地業層表面の実測後の断ち割りで、地山砂礫層は流路側＝東側が標高が高く、西側は低いことが判明した。地山礫層の上に一部の地点では泥砂層を敷き、礫を入れて整地・地業をしていることがわかる。

第5面一方形周溝墓、弥生時代の周溝墓を2基検出した。1号周溝墓は南部にあり、一辺が6m前後と推定され、西・北・東の各辺が検出された。溝幅は0.5m前後、深さは0.2m、遺物は中層に小破片が10点ほどあり、中期のものである。周溝の方位は、北で東に50度前後傾いている。2号周溝墓はトレンチ北西部で検出している。四隅に陸橋部がある形態と推定され、南・東溝を検出した。溝幅は0.3～0.7m、深さは0.1～0.5m、東周溝は8.3m、南周溝は6.3mの規模で、コーナーの陸橋部は2mほど開いている。東周溝の南端底には握り拳大の礫が20個ほどあるが、地山の礫と考えている。南周溝東側の上位から平底の甕底部が出土し、この部分は3.2mほど溝の幅が広く溝底も深いことから、溝内主体部の可能性もあるが推定の域をでない。出土遺物は弥生前期に属する壺・甕などがあるが、小破片である。周溝の方位は、北で西に70度前後傾いている。1号周溝墓は弥生時代中期、2号周溝墓は前期で、規模・構造・方位が異なることもうなずける。

遺構 近世・中世・長岡京期・弥生時代の各時代の遺物がある。中心は長岡京期のもので、中

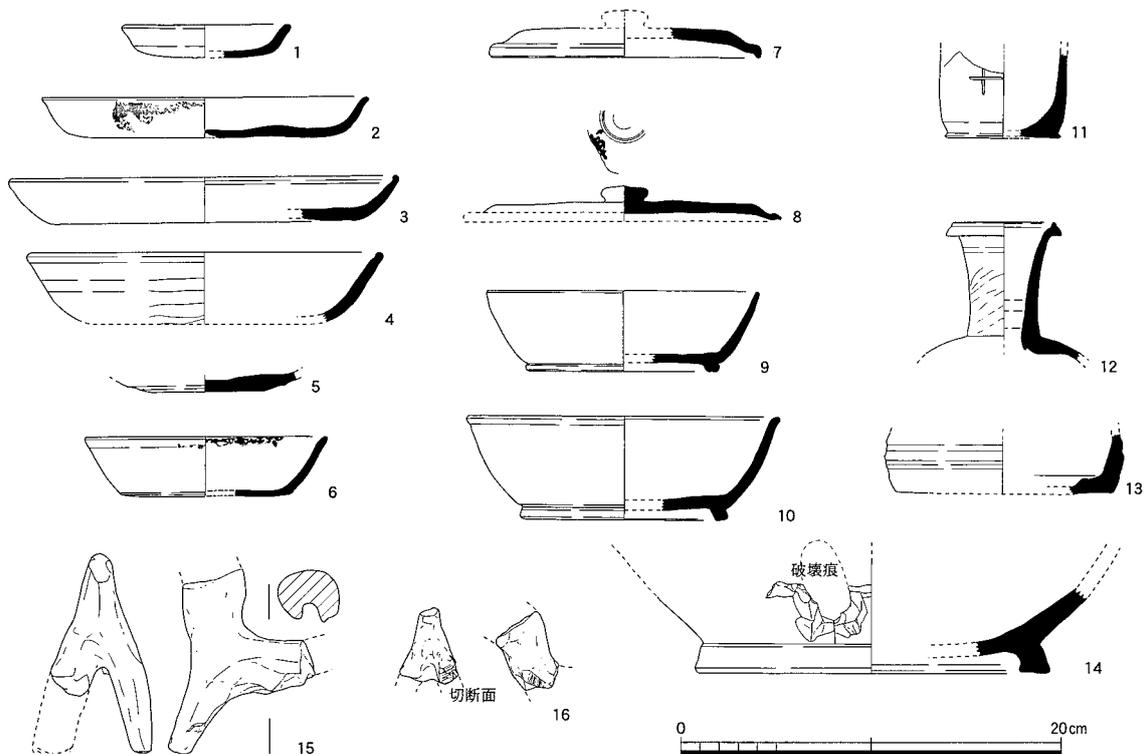


図 50 出土遺物実測図 (1:4)

世がこれに続くが、他の時代のもは少ない。近世の遺物は暗渠排水溝から出土しており、有田焼の椀などがある。中世後期の遺物には、土師器皿・信楽焼播鉢などがあるが量は少なく、前年度に調査した東土川橋南のC区などの調査地点とは対称的である。鎌倉時代の遺物は遺物包含層から出土し、トレンチの東側から北側にかけては、長岡京期の流路が湿地ないし池状の遺構として残存していたことがわかる。土師器皿、瓦器椀・皿・三脚羽釜・鍋、備前焼播鉢、東播系捏鉢・甕、龍泉窯青磁椀などが、湿地状堆積層から出土した。

平安時代後期の遺物には、土師器皿、白磁Ⅳ・Ⅴ類などがあるが量は少ない。平安時代中期の遺物は、緑釉陶器、灰釉陶器がわずかに出土している。

長岡京期の遺物は細片になったものが多い。須恵器杯A・杯B・蓋・皿・壺・鉢・風字硯、土師器皿A・杯A・杯B、黒色土器杯A、土馬、ミニチュア竈などがあり、須恵器には墨書土器もある。相対的に目立つのは土馬で、いずれも破片であるが12個が出土している。土馬が完形で出土することは少なく大半が破片であるが、これは祭祀時に破片化する行為に意味があるとされている。注意して観察すると破壊時の打撃点がわかる例があり、足ならばその先端に痕跡が残る。中には打撃では壊れずに刀子などの刃物で切断したものも認められ(図50-16)、目的の実現のために努力したことがわかる。その他、須恵器薬壺、土師器高杯などにも意図的に破壊した痕跡が確認でき、土馬の破壊との一連の行為とも考えられる。その他、「和同開珎」が1点出土している。

弥生時代の遺物は、甕や壺の破片が方形周溝墓や新しい時代の包含層から出土し、前期と中期のものが少量ある。

小結 調査成果の内、特徴的ないくつかの点について触れておく。

近世の水田 遺構としては暗渠排水溝が顕著であるが、排水溝の機能について考察すると、溝は柵などの付属施設を持たないことから単独で機能したことがわかる。構造は幅0.2m、深さ0.15mほどの溝を、水田畦畔に並行ないしは直角に掘る。調査例からは3～6m前後の間隔が多い。溝の先端(地形の高い部分)から節を抜いた真竹を置き、根本に先端を挿すなどして水道管のように連続させている。竹の終端は用水路に出し、暗渠内に集まった水が自然に水路に落ちるようになっていると考えられる。しかし、年中この状態では春から秋にかけても水田への灌漑が暗渠溝を通して抜けるので、先端に粘土を詰め込んで蓋をしておき、水が必要でなくなったら、栓を抜いて排水していたことが、耕作者の話からうかがえる。つまり、機能としては稲作終了後の排水機能が目的で、秋から春先までその機能が期待されて設置され、その期間の耕作、麦や野菜などの二毛作に関係したものといえる。

中世後期の水田開発 調査地の北部から東部にかけての長岡京期に流路として機能していた部分は、鎌倉時代には湿地帯として存続していたが、室町時代には整地され、水田化される。左京203次調査などの周辺部においても、弥生時代から古代にかけての旧流路の水田化が当該期から近世にかけて行われたことがわかっている。明治期の景観では、後背低地の土地は水田・集落・用水路などとして大半が使われていて、竹藪などの未開墾の土地はほとんど存在しないが、大規

船橋式の遺物が流路の堆積層から出土しているが、数が少なく限定的な状況にある。竪穴住居は左京 203 次調査で検出されているが、弥生時代後期から庄内期のもので、中期や前期の実体は不明である。

南に隣接する左京 236 次調査の S D 2・3 は単なる溝ではなく、方形周溝墓の一部と考えられ、今回の成果と総合して考えると、方形周溝墓の方位や形態が二群に分かれることが判明する。この状況は東土川遺跡の南部、左京 384・385 次調査などでも東に 50 度振るものと、西へ 70 度振るものがあり、同様の状況である。南の周溝墓群は周溝墓のみで構成されるが、今回の調査地点に隣接する左京 426 次などの調査地点での北群は、方形周溝墓と甕棺群が共存している。いずれの群も方形周溝墓は密集することなく、数基で 1 単位を形成し、3～4 単位がそのすべてであろう。周溝墓の年代は弥生時代前期から後葉まで造営された。

東土川遺跡の西南に接して鶏冠井遺跡があり、弥生時代中期の銅鐸鋳型を出土することで知られているが、両遺跡間には地形的な境界が存在しない。集落遺跡は『人間が居住し集団生活を営んだ場所とそれに付随する諸施設^{註6}』と定義されているが、発掘調査が綿密に行われている長岡京のエリアでは、弥生時代の遺構・遺物が空閑地を持たずに発見されることが多く、遺跡名の付与が重要なテーマと成りつつある。鶏冠井遺跡は、名神高速道路の建設に伴い 1962 年に調査され、命名された。北に隣接する東土川遺跡^{註7}は、1965 年の農作業に伴う工事で遺物が発見され、周辺での追認によって遺跡名として確定した。

このように、感覚的な距離感からの遺跡名の設定では、その実態や構造を見誤る可能性がある。今回検出した方形周溝墓群も、鶏冠井遺跡群に所属するのか、または東土川遺跡なのかでは、群構成の分析や配置など、その基礎的な分析視点が問題になるのである。長岡京域など発掘調査が綿密に行われている地域では、個別の遺跡を追加する段階^{註8}から、遺跡名の集約の段階に向かっており、その作業過程で豊かな遺跡論が成立する可能性が高い。

(百瀬正恒)

- 註1 百瀬正恒「長岡京左京一条三坊・戊亥遺跡」『昭和 63 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993 年
- 註2 加納敬二・永田宗秀「長岡京左京一条三坊・東土川遺跡」『平成 5 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996 年
- 註3 吉崎 伸「長岡京左京南一条三坊・東土川遺跡」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994 年
- 註4 「長岡京跡左京 435 次調査現地説明会資料」向日市埋蔵文化財センター・古代学協会 2000 年
- 註5 國下多美樹「総括」『鶏冠井遺跡 向日市埋蔵文化財調査報告書 第 45 集』(財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会 1997 年
- 註6 「集落」『国史大辞典』吉川弘文館 1986 年
- 註7 「東土川遺跡の発見(1)」『乙訓文化』第 52 号 1999 年
- 註8 平成 8 年版の『京都市遺跡地図』は、左京 203 次調査地点での弥生時代竪穴住居の発見を元に、古墳時代の集落遺跡として「宮ノ脇遺跡」を設定したが、遺跡範囲も 100 m と小規模で、実態を反映していない。むしろ東土川遺跡を拡大した方が、既往の調査成果と合う。

14 長岡京左京一条三坊2 (図版1・23)

遺構 本調査は、西羽束師川の河川改修工事に伴うもので、C-2区という調査地点記号を付している。北側はC-1区、南側はC-3区ですでに調査を終了している。この両地点に接する形で、南北約37m、東西約16.5mほどの調査区域を設定した。しかし、6月末の集中豪雨により下流で護岸の崩壊があり、緊急に復旧工事用の車両の通路を確保する必要が生じて、本調査区の東側(Y=-25,384mライン以东)を埋めもどし通路とした。このため、西側(Y=-25,384mライン以西、C-2区西)を先行して調査を進め、この調査が終了後に埋めもどして迂回通路を確保し、東側(C-2区東)の調査を行った。

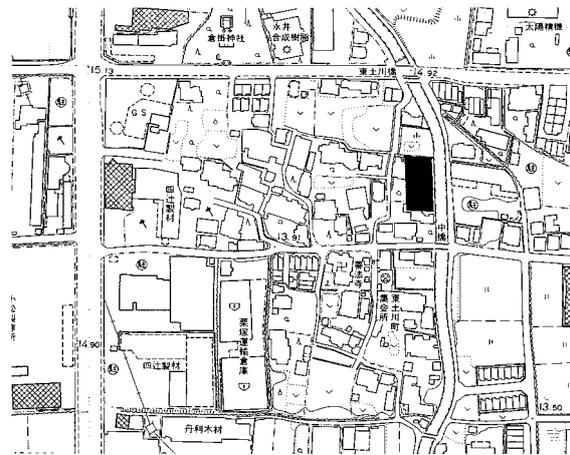


図52 調査位置図 (1:5,000)

本調査地点は長岡京左京426次調査の一部として実施し、東半部は長岡京左京東三坊大路、西半部は長岡京左京一条三坊十一町の推定地にあたる。また弥生時代から古墳時代の東土川遺跡にも重なっている。

南側のC-3区の調査では、弥生時代の溝や落込、長岡京の左京一条三坊十二町の北東コーナー部、平安時代後半から中世のピット群、中世末から近世前半の南北方向の溝などを検出している。また北側のC-1区では中世末から近世の溝群、ピット群などを検出している。

遺構 遺構群を検出した面は黄褐色系の泥砂層(地山)の上面で、同泥砂層の厚さは0.8~1.0mを測る。その下層は砂礫層となる。検出した井戸はすべてこの砂礫層まで掘り下げられている。調査中でもこの砂礫層以下には湧水がみられた。この地山面上層には15~20cmの厚さで2層ほどの耕作層が認められ、さらにその上層には15~40cmの厚さで整地層が認められた。X=-117,101mライン付近が調査前にあった建物の敷地境となっており、これより北側では少し違う状況がみられる。

遺構は557基を検出し調査した。

弥生時代の遺構にはP139、SD437・438がある。

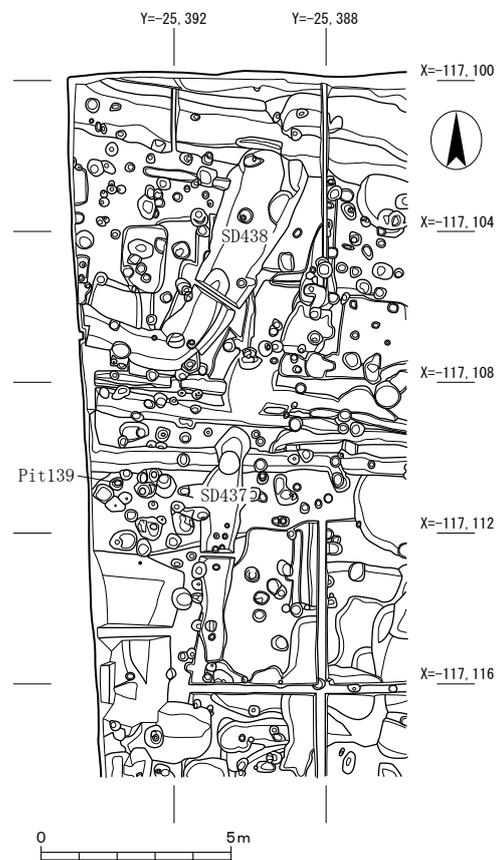


図53 弥生時代遺構平面図 (1:200)

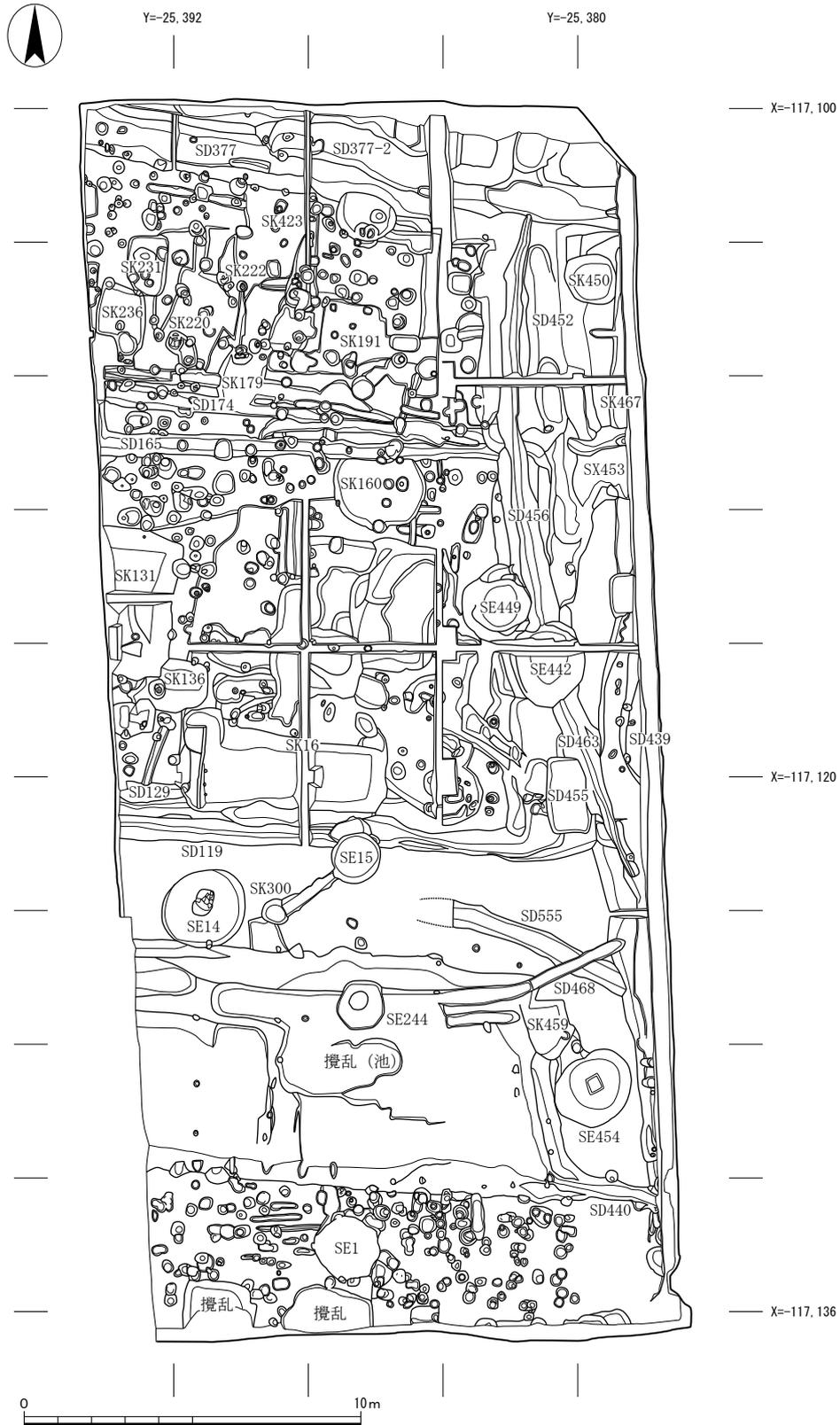


図54 平安時代以降遺構平面図 (1:200)

P 139 は弥生土器がつぶれた状態で出土し、その直下には径約 30 cm、深さ約 15 cmほどの円形の掘込みがあったが、遺物は出土していない。SD 437 は幅約 1.1 m、深さ 0.37 mを測り、長さ約 6.2 mほどを検出した南北方向の溝状の遺構で、構内より弥生土器 2 個体分が出土した。SD 438 は

調査区北西部で検出した方形周溝墓の一部で、幅 0.8～1.9 m、深さ 0.57 mを測り、東辺溝と南辺溝の一部、南東コーナー部を検出したものとみている。南辺溝の西側は調査区外に延び、東辺溝の北側は新しい溝などで切られており、全体の規模は推定できない。C-1区でも新しい遺構に切れ、続きは確認できない。南東コーナー部溝内で、別個体の土器（甕か）で蓋をした状態で、正立した壺形土器を検出した。弥生時代中期（畿内第IV様式）に属するものである。東辺溝内からも弥生土器が出土している。

古墳時代から長岡京期、平安時代前期・中期に比定できる遺構は検出していない。

平安時代後期と推定される遺構もピットなどが 20 基程度あるに過ぎない。いずれも調査区南部で確認でき、中部から北部には同期の遺構は認められない。鎌倉時代と推定できる遺構はない。室町時代前半の遺構は、調査区南部でピットなどが少数確認できるにとどまる。

室町時代後半期の遺構には井戸 S E 244 や多くのピットがある。今回の調査で検出されたピットの大多数はこの時期から江戸時代にかけてのものである。並びが確認できるものもあるが、検討は本報告にゆずる。S E 244 は桶組みの井戸側を持つ。室町時代末期の遺構には S D 377・452・456 などがある。S D 377 は調査区北端部で東西方向に西から東へ流れる溝で、S D 452 を切っている。S D 452 は調査区東部で南北方向の溝であるが、X=-117, 112 m ライン付近で浅くなり、途切れる。桃山時代から江戸時代前半にかけての遺構には井戸 S E 1・454 の他、土壇、溝、ピットなどがある。S E 1 は底部に石組みが一部残存していた。S E 454 は底部に一辺 42～45 cm、深さ 24 cm の板を方形に設置する。

江戸時代の遺構には S E 14・15・442・449、S K 16 などがある。S E 14 は桶組み、S E 442 は桶 2 段組みの井戸側が残る。S E 442・449 は江戸時代中頃、S E 14・15 は後半代に比定できる。

S D 439 は調査区東壁際で検出した溝で明治以降に埋没している。攪乱（池）は調査区南部南北 6～7 m、東西約 12 m 以上の規模で検出した。近代以降、現在の町並みができ上がる時に埋められたものと思われる。

遺構 弥生時代の土器には甕、壺、高杯などがある。方形周溝墓 S D 438 のコーナー部で正立した状態で出土した土器は、有段の受口を持つ広口壺で、頸部の凸帯は消失し、連続した刻み目紋様が施されている。畿内第IV様式の特徴を示す。石剣、石斧の破片も出土しているが、いずれも中世のピットに混入していたものである。古墳時代の遺物は確認できない。

長岡京期から平安時代前期の遺物は少量で、混入品として出土したものである。平安時代後期の遺物は土師器皿、瓦器椀が中心で、少量の輸入陶磁器（白磁椀）などがある。

鎌倉時代の遺物も、瓦器椀・羽釜、輸入陶磁器（青磁椀）などが少量認められるに過ぎない。いずれも遺構に伴うものではなく、新しい時期の遺構に混入して出土している。

室町時代前半の遺物も少量で、土師器皿、瓦器椀などが中心である。室町時代後半になると遺構の増加に伴い、飛躍的に量が増え始める。以降、江戸時代半ばまでは一定量の出土をみている。南側の C-3 区の出土状況と比較すると、中世前半期が少なくなり後半期にかけて増加する状況は似ているが、江戸時代に入ってから遺物がより豊富となっている印象がある。

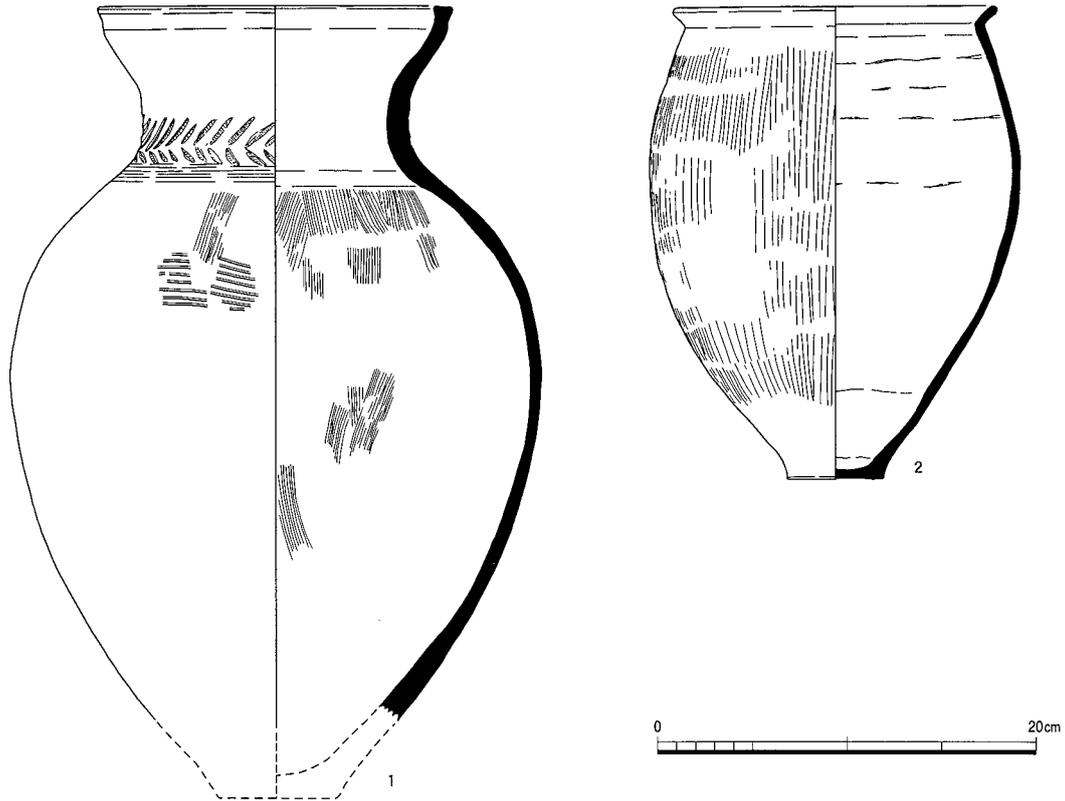


図55 C-2区出土土器実測図(1:SD438 2:SD437出土)(1:4)

小結 C-2区での調査で現在までに判明したことをまとめておく。

1. 弥生時代中期（畿内第IV様式）の方形周溝墓の一部を検出した。
2. 古墳時代および長岡京に関連する遺構は検出されなかった。長岡京の条坊遺構の推定地（左京東三坊坊間東小路・左京一条三坊十一町）にあたっていたが、痕跡を発見することはできなかった。
3. 平安時代前半代の遺構も未確認である。平安時代後半の遺構はピットなどが20基前後確認できるが、調査区南半部に集中し中部から北半部にはない。
4. 鎌倉時代から室町時代初頭の遺構は未確認であるが、室町時代前半期の遺構は少量ある。
5. 室町時代後半代に入って遺構が増加する。またピットも調査区全面に広がる。並びが確認できるものもある。またこの時代以降に南北方向の水路が作られるようになる。
6. 17世紀以降の遺構も一定数確認できる。これはすぐ南側のC-3区の様相とは大きく異なる点である。

(上村憲章)

15 長岡京左京一条三坊3 (図版1・24)

遺構 調査地点は、弥生時代から古墳時代に継続する東土川遺跡と長岡京左京一条三坊十二町にあたり、東三坊坊間小路が推定される。また、中世の戌亥遺跡にも隣接している。

今回の調査は、長岡京左京 426 次として、西羽東師川河川改修関係ではD-2・3区として実施した。

周辺では左京 361 次などの名神高速道路桂川サービスエリア建設に伴う調査や、西羽東師川河川改修工事に伴う左京 139・177・401・426 次調査などが行われている。前者では、弥生時代から平安時代後期に及ぶ各時代の遺構が検出されている。また、昨年度から継続している後者の調査では、東土川集落の東辺に南北のトレンチを入れることになり、村の成立から現在までの変遷をたどることができる格好の調査となっている。これまでの知見では、10 世紀から 14 世紀の遺構・遺物は、部分的であるが、15 世紀になると様相が一変し、柱穴・土壇・

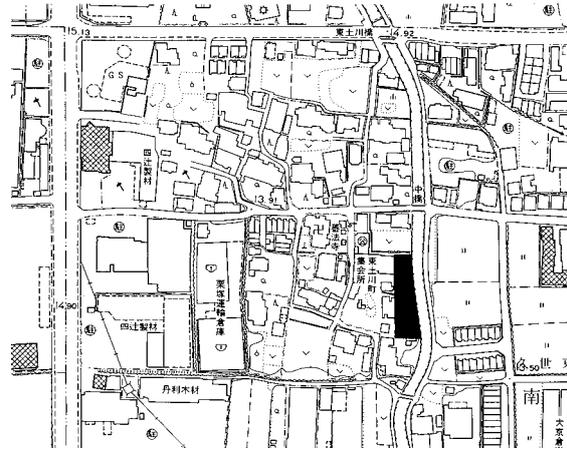


図 56 調査位置図 (1 : 5, 000)



図 57 崩壊した護岸と土壌による応急修理

井戸などが密集して集村化した中世後期の村落が明確になり、この傾向は近世前半まで継続する。その後の遺構は明確ではないが、明治期には集村化した村として地図で確認することができる。

今回の調査は 4 月 19 日から開始したが、西側の住宅が未完成で予定地を一括では調査できないため、建設の進行にあわせて拡張する予定で進めた。6 月 14 日にはトレンチを 100 m² 拡張できたが、まだ北西部約 50 m² は未着手部分として残った。このような状況で、6 月末から 7 月初頭の集中豪雨に遭遇した。この豪雨で発掘調査に隣接する未改修の護岸が、川底が抉れることで約 100 m にわたり崩壊した。当初はトレンチを埋めもどし、護岸の補強を行ってから再開する案を河川課に提案したが、工事を先行しないと民家に影響が及ぶとのことで、トレンチを調査完了以前に明け渡すこととなった。この段階で、当初のトレンチでは、戦国期までの調査を終え、拡張部分では近代の調査途中であった。

遺構 古墳時代・長岡京期・室町時代後期・近世・近代の各時期の遺構を検出した。遺構種別では、川、溝、柱穴、井戸、土壇などがある。

良好な土層断面は存在しないが、D-2 区の中央部、X=-116, 203.5 m ラインの西寄りでの観察では、第 1 層-褐色砂泥層 (10YR4/4)、第 2 層-褐色砂泥層 (10YR4/6)、第 3 層-褐色砂泥層

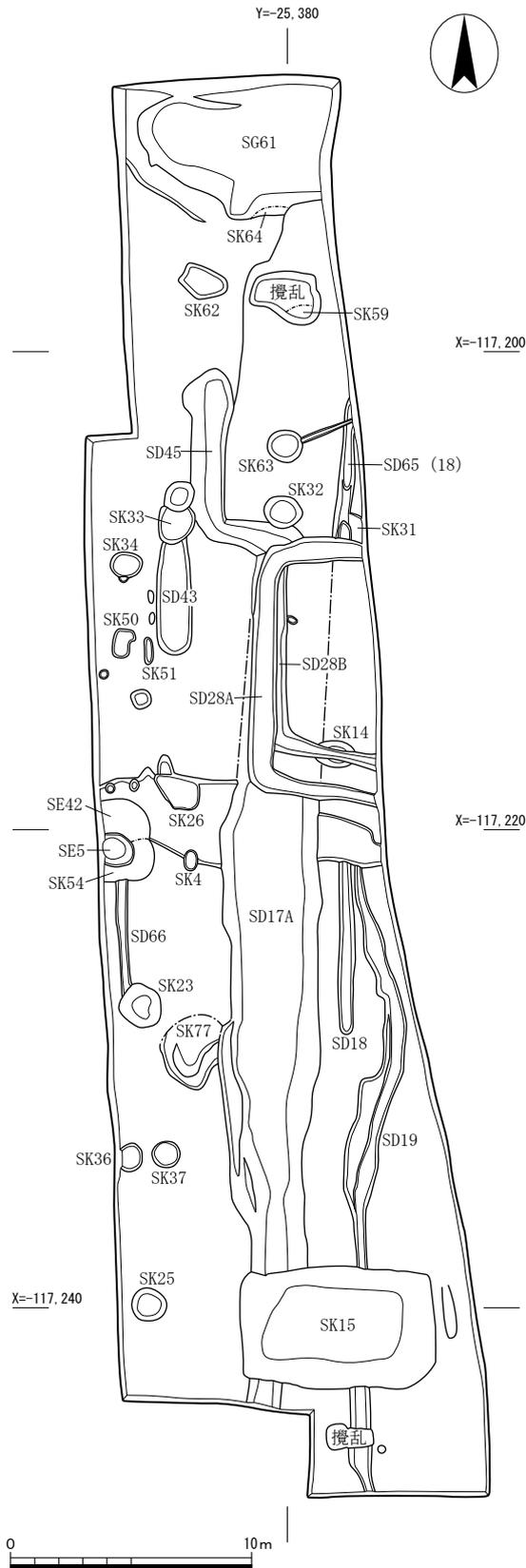


図58 遺構平面図 (1:300)

で埋めたものと判断した。

中世の遺構 戦国期の遺構は、幅3mの南北溝SD17、土壇、柱穴などが検出されている。

(10YR4/4)、第4層—灰黄褐色泥砂層(10YR2/5)であるが、いずれも近代・近世の土層である。遺構検出は第4層上面で行った。

宅地の境界 宅地の境界は花崗岩間知石を積んでいた。この下層は上層の水分の影響で土色に変化していたが、明確な溝などの施設は存在しなかった。D-1区と2区の境も前述と同じく花崗岩であったが、川側の東部には方形の南北2.5m、東西2.8m以上の池(SG61)が存在し、南・西辺は花崗岩で護岸していたが、北辺は未施工であった。

近世・近代の遺構 井戸には、SE5・42・63などがある。SE5・現代井戸は近年まで使用された井戸で、後者はコンクリートを側に回し、SE5は漆喰で側を固めてあった。SE42はSE5に先行し破壊されているが、近世の遺物が少量出土している。その他、SK25・36・37・23なども検出時の判断では井戸と考えたが、浅く井戸側も存在しないことから土壇と判断した。所属時期は近代から近世である。

溝には、SD28・46などがある。SD28・46は同一場所で掘り変えられており、SD46が先行する。SD28は、南北10.0m、東西4.5m分を検出した。方向はやや東に振れる。堆積土層は5層あるが、腐植土を含む土層が多い。出土遺物は、木製桶の部材が中心で、土器は少なかった。SD46は、北西部から水を取り込んで南流させ、SD28とほぼ同一位置の北から川に落としている。出土遺物は少ないが、唐津焼などがある。

SK15は、東西8.0m、南北4.7m、深さ1.0mの方形土壇で、埋土は床土や耕作土と推定される土層であり、砂を掘り取った後に不要な土

S D 17 は幅が 3 m 前後で、延長 60 m を確認したが完掘できたのは 1 / 3 程度である。規模は、幅が 3.0 ~ 3.5 m 前後、堆積層は大きく 2 時期に分かれる。下層は泥砂層で流水痕跡があるが、上層は粘土層で溝を埋めた土層である。出土遺物は、戦国末期の瀬戸製品が少量ある。南部は砂取りの土壌で大きく破壊されている。この遺構は C - 1 区から検出しており、総延長 170 m になる。

長岡京期の遺構 東三坊坊間東小路を検出した。緊急に検出したため、検出範囲は一部である。東側側溝 S D 65 (18) は、延長 5 m を検出し、幅は 0.7 m 前後、深さ 0.1 m であった。西側側溝 S D 66 も、延長 5 m を検出し、幅は 0.7 m 前後、深さ 0.1 m であった。東溝の座標値は、北で $X=-117,205.7\text{ m}$ ・ $Y=-25,377.6\text{ m}$ 、南で $X=-117,226.0\text{ m}$ ・ $Y=-25,377.6\text{ m}$ である。東溝では底に土器ブロックが 5 箇所あり、須恵器杯 b、土師器蓋は接合できる状態で出土している。西溝の座標は、北で $X=-117,222.2\text{ m}$ ・ $Y=-25,387.0\text{ m}$ 、南で $X=-117,227.8\text{ m}$ ・ $Y=-25,386.8\text{ m}$ である。したがって、相互の距離は側溝の心々で 9.3 m になる。

古墳時代の遺構 トレンチ中央部で前期の土器を多く採集しているが、遺構としては土壌が 1 基ある。検出範囲では、東西 2.7 m、南北 2.2 m 以上、深さ 0.5 m、堆積土層は 3 層に分かれ、上層から須恵器杯など完形に復元できる多くの遺物が出土したが、中・下層からは土師器が主体で少ない。

遺構 遺物の中心は近世で、室町時代後期、鎌倉時代、長岡京期、古墳時代も少量ある。室町時代後期から近世初期の遺物には、土師器皿、備前焼播鉢、丹波焼播鉢、信楽焼播鉢、唐津焼碗・皿、中国製染付碗・皿などがある。木製品では、S D 46 出土の桶の底板や側板、下駄などがある。鎌倉時代では、中国製陶磁器、瓦器碗、土師器などが出土している。長岡京期の遺物は、須恵器杯・蓋・壺、土師器碗・杯・蓋などがある。古墳時代の遺物には、土師器、須恵器杯身・蓋・甕・壺などがあり、須恵器杯は完形に復元できる。以下に代表的なものを掲載する。

S D 45 出土の土師器皿 (1 ~ 4) は、口径 10.0 ~ 11.4 cm、器高 1.5 ~ 2.0 cm で、見込みには凹線がある。3・4 には灯明皿としての使用痕がある。鍋 (5) は口径が 29.8 cm、器高は 7 cm 前後と浅い器形である。唐津焼皿 (6) は胎土目で、口径が 11.3 cm ある。S D 44 からは、土師器皿 (7) と、唐津焼皿 (8)、天目茶碗 (9)、備前焼播鉢 (10) が出土している。土師器皿は器高 10.5 cm で、内面は右回りにナデるが、中世都市京都の土器に比べ一定していない。器壁の厚いことが特徴である。S D 27・28 からは唐津焼皿 (11)、碗 (12)、瓦質鉢 (13) が出土している。唐津焼はいずれも胎土目である。近代の池 S G 61 からも戦国期の遺物が少量出土し、唐津焼皿 (14) がある。S D 56 からは完形の土師器皿 (15) が出土した。口径 11.5 cm、器高 2.5 cm で、端部が立ち上がり、わずかに外反する特徴から 11 世紀後半に属する。これも胎土・調整から、在地の土器と判断される。

古墳時代の遺物は、一部トレンチ北部の包含層から出土したものもあるが、大半は S K 77 から出土した。須恵器蓋 (16)・杯 (17 ~ 21)・甕 (22)、土師器甕などがある。須恵器蓋は頂部が平らでロクロヘラ削り調整されている。杯身は口径 11.0 ~ 12.8 cm で、2 法量に分かれる。かえ

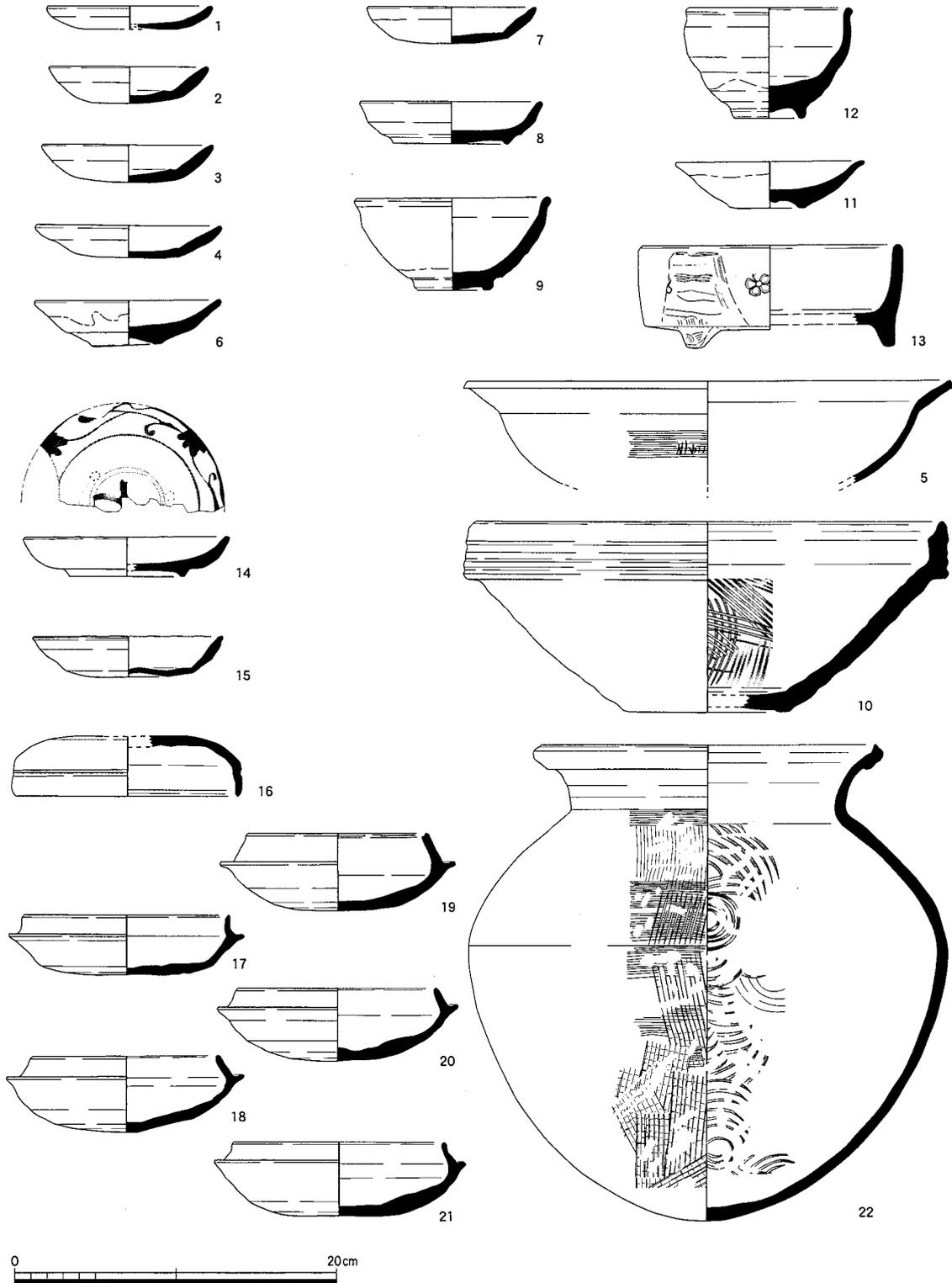


図 59 出土土器実測図 (1 : 4)

りの立ち上がりは鋭いものと緩やかなものがある。

甕は口径 20.7 cm、器高 29.8 cm で一部の破片を欠くが、全体の形状は復元できる。外面は並行叩き目で調整し、内面は同心円の叩きの後にナデている。

小結 今回の調査は、D-1 区と D-4 区間の調査地点の D-2・3 区で成果が期待されたが、自然災害のため、満足な成果を得ることができなかった。

近世の遺構には、S D 28・46がある。この溝は、西羽東師川などから水を宅地に引き込む用水路で、S D 46は北東部から、S D 28は東の西羽東師川から引水している。後述するS D 17とも関係するが、6月末から7月中旬にかけて行われた災害復旧工事で、現在の中橋（古くは東口橋と呼ばれたという）から「寛永四年（1627）」銘の花崗岩橋材が出土していることから、この年には現位置に西羽東師川が流れ、石橋とした記念の碑文であることが確認できる。

戦国期から近世初頭のS D 17については、同一の河川をC-1区でも検出しており総延長300 m以上流れていたことになる。北端では現河川と平行で斜行し、やがて南行するが、直線的には流れず多少東西に振れている。現在の西羽東師川も同様の方位をたどることから、室町時代後期と現河川が同一方位で流れていたことがわかる。この河川は「山城国下久世庄絵図」『東寺百合文書』レ函384（年月未詳）にも描かれており、用水路として古くから機能していたことがわかる。

また、井戸・柱穴などの集落関係遺構の検出により、土川集落が遅くとも室町時代後期の15世紀には集村として成立していることが判明した。当地ではD-4区などの調査区同様に、中世における水田耕作の痕跡がないことから、桂川右岸に点在した、微高地のため水田開発ができず放置された土地を、14世紀段階（13世紀後半までさかのぼる例も想定できる）に集落として開発し、その後の拠点として利用したことが見通しとして提示できる。

古代の遺構では、東三坊坊間東小路が推定されていたが、予定の位置で条坊を確認した。東溝の座標値は、北で $X=-117,205.7\text{ m}$ ・ $Y=-25,377.6\text{ m}$ 、南で $X=-117,226.0\text{ m}$ ・ $Y=-25,377.6\text{ m}$ である。東溝には底に土器ブロックが5箇所あり、須恵器杯b、土師器蓋は接合できる状態で出土している。西溝の座標は、北で $X=-117,222.2\text{ m}$ ・ $Y=-25,387.0\text{ m}$ 、南で $X=-117,227.8\text{ m}$ ・ $Y=-25,386.8\text{ m}$ である。したがって、相互の距離は側溝の心々で9.3 mになる。

東土川町内には、山下正男によって東土川城が想定されていたが、これまでの調査では関連遺構を検出していない。同じ町内の別地点で該当する地割りを探すと、中橋から170 m西の正方形の地割りが目に付く。大正11年の都市計画図では、中橋通に南端を接し、西辺は乙訓郡条理の里界線で、各辺が50 mの正方形になる。乙訓郡の環濠集落は一辺が70 m前後の単郭が基本で、このエリアに想定できる可能性を持つ。

また、現地に立つと集落内の小道が条理と合わないことに気づく。条理地帯における斜行ラインの成立には幾つかの原因が考えられるが、多いのは斜行河川に規制されて、耕地も斜行することである。またこれが面的に広がれば、先行条理の可能性もある。しかし、東土川町内の斜行する道路・畦畔はこの部分が相対的に微高地であったことに起因するものと考えられる。室町時代後期に本格的な集村形態の集落を構える時、中橋通など幹線道路は条理にあわせて施工したが、二次的な区画や道路は、任意に設定したことが想定される。

今回の調査では、調査地点の旧所有者が近隣に住まわれていたので、古い景観について話を聞き、橋の古い名称など往古の集落を復元する手がかりを得ることができた。関係者に感謝をいたします。

（百瀬正恒）

註 山下正男『京都市内およびその近辺の中世城郭』 京都大学人文科学研究所 1986年

VI その他の遺跡

16 京都大学構内遺跡 (図版1・25)

遺構 本調査は、平成2年(1990)より施行されている都市基盤河川改修事業白川改修工事に伴う発掘調査である。

これまで同工事に伴い7次の立会・発掘調査を実施しており、縄文時代後期から室町時代にかけての遺構・遺物を確認している。特に縄文時代後期から弥生時代前期の遺構および縄文時代から弥生時代の遺物包含層を確認していることは、北白川扇状地における遺構群の展開を考察する上で大きな成果となっている。

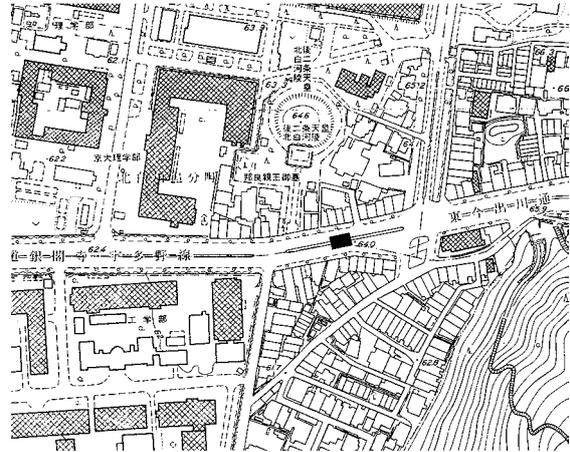


図60 調査位置図 (1:5,000)

今年度の調査区は、平成9年度調査区(7次調査)の西に位置し、交差点を挟んで西に、平成7年度調査区(5・6次調査)がある。また、交差点の北側に接するマンション建設にさいして良好な縄文時代遺物包含層および、弥生時代前期の遺構を立会調査において検出している。

調査は9月24日から開始し10月13日に終了した。調査面積は65㎡であった。工事との関係から安全対策を事前に施したため、調査区内に腹おこしなどが設置された条件の中での調査となった。

遺構 現路面下約1.8mまで、覆鋼板架構工事のために盛土を除去した。基本層位は、除去後

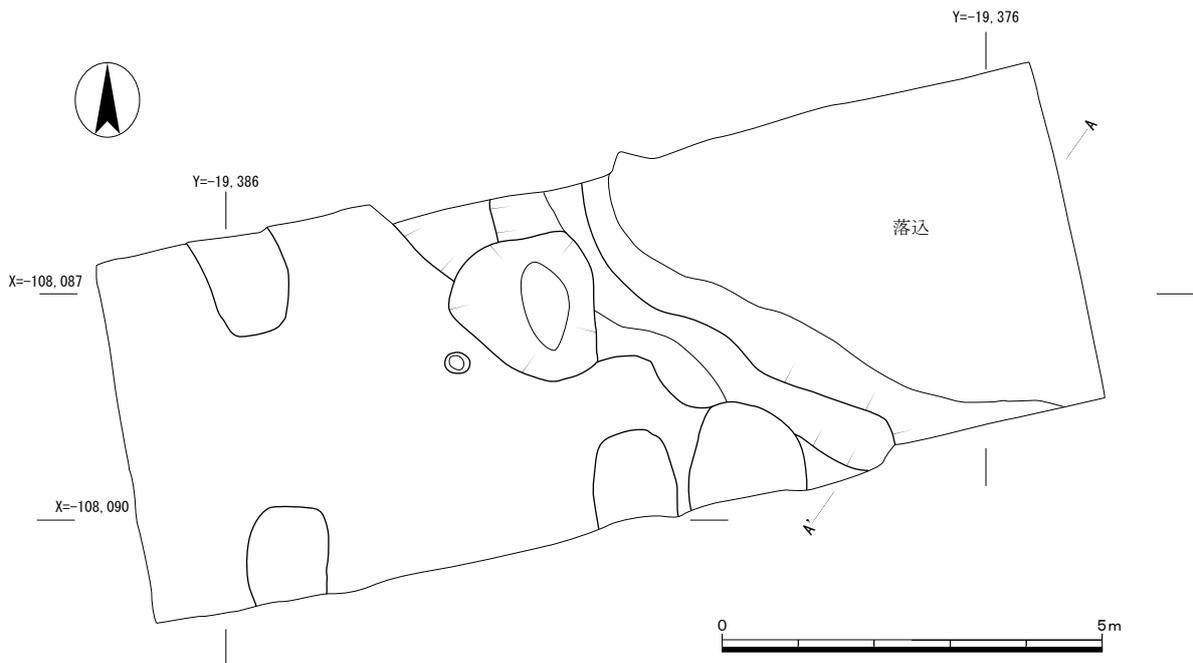


図61 遺構平面図 (1:100)

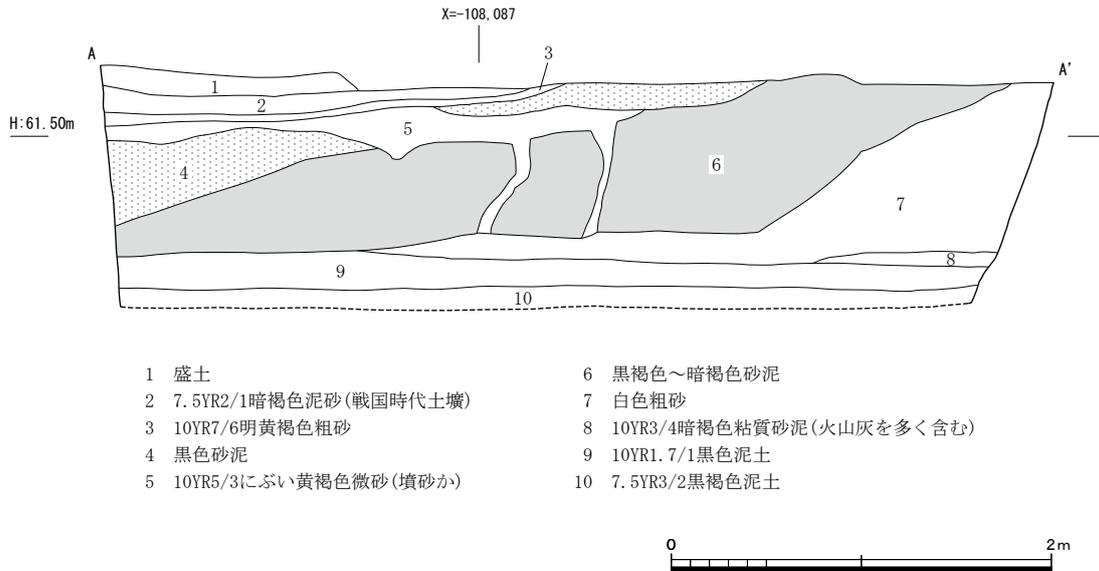


図62 基本層位図(1:40)

の上面に明黄褐色粗砂層が薄く残る。この層は既往の成果から弥生時代以前の土石流に伴う堆積と考えられる。以下、調査区西側では、白色粗砂層があり、東に黒色砂泥層が堆積する。黒色砂泥層は東南では薄く堆積し、北東に向け急な傾斜を持って堆積する。白色粗砂層は約1mほど堆積し、その下層に黒色泥土層が堆積しているが、遺物は包含していない。白色粗砂層から黒褐色泥土層の間で(標高61mと標高60.5m)2層の火山灰層を観察したが、火山灰は特定していない。

遺構 弥生時代の土器はすべて前期、畿内第I様式に属する壺・甕であるが、小破片であり縄文時代晩期の土器と混在して落ち込み上層より出土する。

縄文時代晩期の土器は、凸帯文土器で、晩期末の滋賀里IVから長原式の時期であろう。

縄文時代後期の土器は、落ち込み下層部分から出土した。土器は条痕調整による粗製の甕が主体であるが、磨消縄文を施す破片も見受けられ、中津式から北白川上層式と思われる。

サヌカイト剥片は出土したが、石器となる遺物の出土はない。

小結 これまでの調査では、縄文時代後・晩期、弥生時代前期の土器棺墓や縄文時代後期の集石遺構など、縄文時代から弥生時代の旧地形を復元する上で欠くことのできない成果を得ている。今回の調査で検出した遺構は、北東側へ下がる谷状の落ち込みおよび遺物包含層を検出するにとどまった。前回(7次)と今回の調査区は吉田山の西側の基部にあたり、当時の集落本体は、既往の調査成果からも、当該地より西に位置するものとみてとれる。

今回の調査では竪穴住居などの遺構を検出することはできなかったが、追分町縄文遺跡・京都大学構内弥生遺跡・上終町遺跡など比叡山西南麓に成立する遺跡群の展開を考える上で、このような小規模面積の調査であっても、調査を継続していくことが必要であろう。

(南出俊彦・菅田 薫・平方幸雄)

17 六波羅政庁跡 (図版1・26～29)

遺構 1998年度に引き続き、京都国立博物館の敷地内で発掘調査を実施した。調査地点は平安時代後期の法住寺殿、鎌倉時代の六波羅政庁、桃山時代以降の方広寺などの遺跡の推定地にあたる。本年度の調査対象地は、新館西側のドライエリア北半部および南門券売所部分で、それぞれ9区、10区として調査を行った。9区のドライエリア部分の現地地形は、南から北へ低くなっているため、方広寺の整地層は削平されている可能性が高く、下層の各時期の遺構が主な

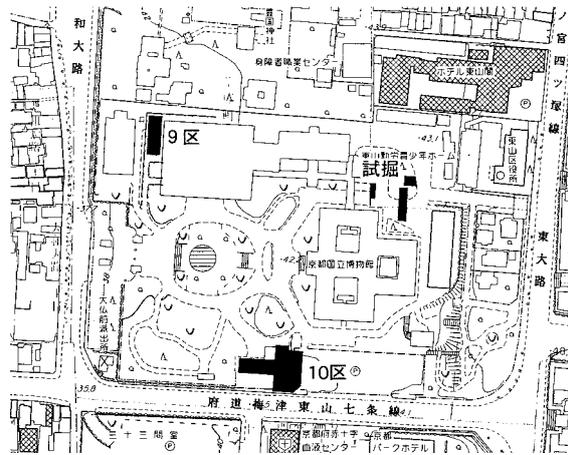


図63 調査位置図 (1:5,000)

調査対象となることが予想された。また10区の南門券売所部分は、1区(1998年度調査)で検出した方広寺南門から蓮華王院南大門にいたる南北道路に該当する。方広寺創建時には、寺域を含め周辺の大規模な整備を行っていることが既存の調査などから推定でき、これに関する桃山時代から江戸時代の遺構の検出が期待できた。また七条通を挟んだ南東(現パークホテル)の発掘調査では、平安時代末の墓と推定される遺構を検出し、南西の三十三間堂(蓮華王院)境内の試掘調査でも平安時代の遺構の残存が良好であるなどの成果があった。

調査の結果、9区では室町時代から鎌倉時代の遺構を検出した。10区では江戸時代の方広寺南門より延長する道路敷きおよびその東側溝、方広寺創建時整地層、桃山時代の湿地状遺構、道路敷き、溝、室町時代から鎌倉時代の堀状遺構、溝、土壇、柱穴、井戸、平安時代の溝、土壇など各時代の遺構を多数検出することができた。

この他、新館東側、仮設収蔵庫建設予定地の試掘調査を実施した。当地点は1998年度の調査で検出した方広寺南辺石垣、石組み溝および回廊の延長上に位置し、寺域の東限に該当する可能性もあった。そのため3箇所調査区を設置し調査を行った。その結果、方広寺関連の石組みおよび整地層を検出し、周辺の遺構の残存状態は良好であることを確認した。

遺構 調査区ごとに調査成果を示す。

9区 調査区は現状では南から北に低くなっており、方広寺整地層は削平されていた。調査区の基本層序は、新館建設時の盛土層が10～30cm、その下層は中世の遺物包含層が40～50cmほどある。北部ではこの土層も削平され、盛土層直下が地山となる。検出した遺構は、鎌倉時代から室町時代の建物、溝、柱穴、土壇などである。

調査区東側で掘立柱建物1棟(建物69)を検出した。建物はさらに東に延長する可能性があるが、確認したのは東西1間(1.6m)×南北8間(柱間0.7m)で、建物内の西側南北柱列に沿って幅15～30cm、深さ約3cmの溝を伴う。建物は検出面から約40cmほど地山を掘り下げて造られており、貯蔵庫と考えられる。埋土からは14～15世紀の遺物が出土している。

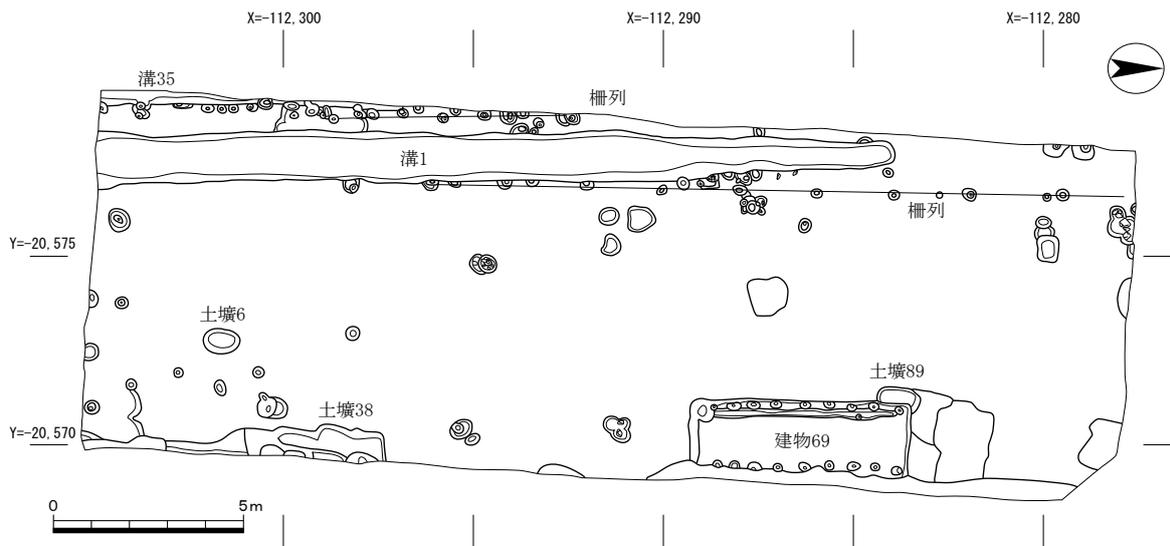


図64 9区遺構平面図(1:200)

調査区西側では南北溝2条を検出した。溝35は西壁に沿って東肩口のみを検出した。検出面での規模は幅40cm以上、深さ15～20cm、長さ10m以上で、南北とも調査区外へ延長する。溝からは14世紀の遺物が出土した。その位置から1998年度に8区で検出した溝の延長と考えられるが、出土遺物は溝35の方がやや古い。

溝1は幅70～150cm、深さは調査区南端で70cmだが、北部では削平されて20cmとなる。調査区外南に延びる。溝35よりやや古い13世紀の土器類がまとまって出土した。また、溝に沿って多くの柱穴を検出し、南北方向に2列の柵列を復元することができた。柵列の柱穴からは14世紀の遺物が出土している。

柱穴は、素掘りのもの、根石を据えるもの、柱まわりに礫をめぐらせるものなどがあるが、建物などの復元はできない。検出した土壇のうち、調査区南部東端の土壇38、建物の北で検出した土壇89から14～15世紀の土器が出土している。また調査区南側で検出した土壇6からは、14世紀の土器類が出土した。

10区 調査区は新券売所建築計画にしたがって設置した。調査区の基本層序は調査区西側で、上から現代盛土層50～60cm、旧券売所建設時および本館建設時整地層50～60cm、江戸時代中期から末期整地層30～70cmで、この下の地表面下約140cmで方広寺関係の路面を検出した。路面下は道路敷きに伴う整地層が30～40cmあり、その下は100～150cmに及ぶ一括の黄褐色砂泥層があるが、これは秀頼による方広寺周辺の一連の整備事業に伴う整地層と考えている。ただし調査地点の旧地形は調査区東が高く、中央から西に向かって急激に傾斜しており、この秀頼期の整地層は調査区西半部の低地を埋めるように堆積している。したがって調査区東半部では、現代盛土層および本館建設時整地層の直下が現室町時代の整地層となり、地表面から80～100cmを測る。方広寺に関係する桃山時代から江戸時代の整地層は削平されていると考えられる。

桃山時代から江戸時代(第1・2面) 第1面 調査区西半部で路面およびその東側溝を検出した。路面は小石と砂により敷設され、検出した規模は幅約5.5mで、上面には轍も数条確認で

きた。東側溝は幅約 1.5 m、路面肩口からの深さ約 30 cm で、護岸の痕跡と考えられる杭を数箇所検出した。いずれも南北約 8.5 m にわたって検出し、それぞれ調査区外に延長する。路面は 1 面確認したのみだが、東側溝は上下 2 層あり、上層からは江戸時代末、下層からは江戸時代初頭の遺物が出土している。西側溝はなく、道路より西へ向かって緩やかに傾斜していたようである。道路敷きからは瓦以外の遺物に乏しく時期を確定するのは困難だが、堆積の状況から方広寺創建以後、江戸時代前期に属するものと推定する。なお路面の標高は 39.8 m で現在の蓮華王院南大門に通じる道路とほぼ同じである。この他路面に伴う黄褐色整地層上面で、柱穴などを数

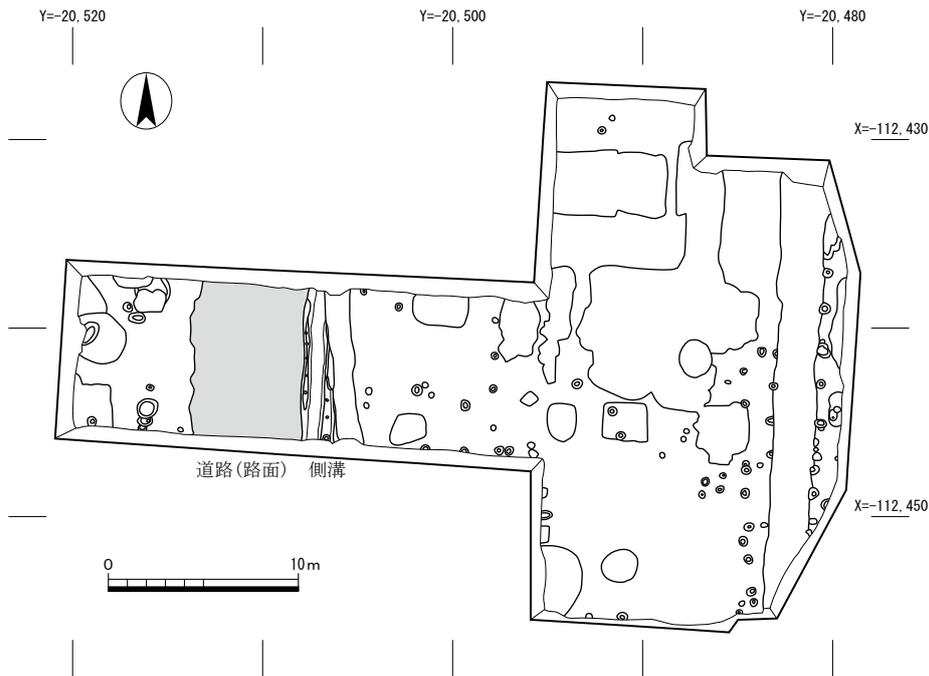


図65 10区第1面遺構平面図(1:400)

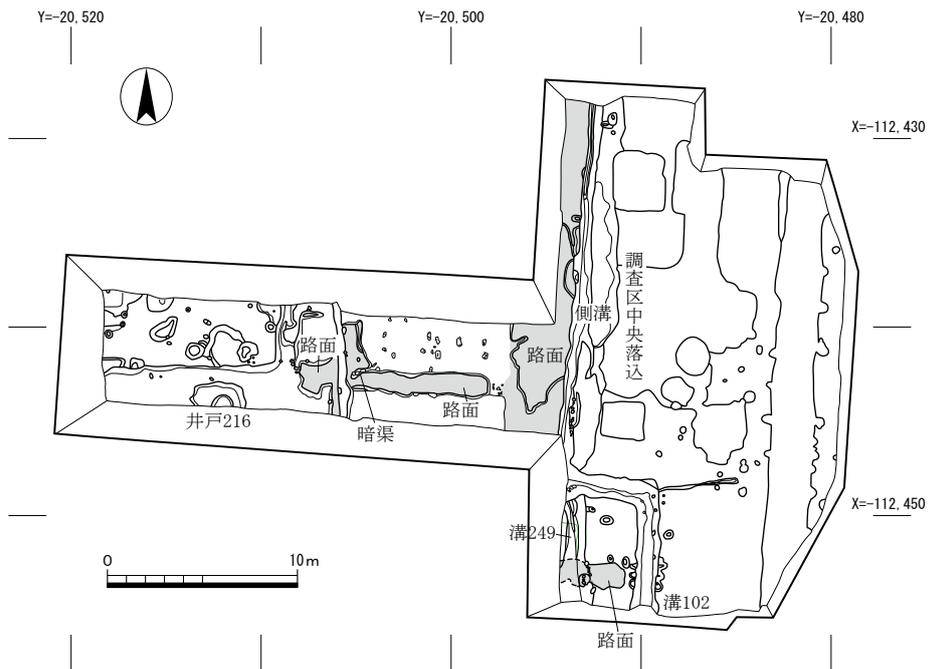


図66 10区第2面遺構平面図(1:400)

基検出しているが、建物などの復元にはいたっていない。

第2面 秀頼期の整地層（黄褐色砂泥整地層）直下も路面状の遺構を確認した。調査区中央付近で西へ向かって急に落ち込んでいる。路面はこれに沿った南北方向と、さらに西に延長する東西方向のものを確認した。南北方向のものは幅約 3 m で、東側落込の傾斜下に幅 50 ~ 80 cm の側溝がある。東西方向のものは幅約 1 m の小径である。路面の粘土の上に小石を叩き締めて

堅固に造られており、部分的には2～3面確認できた。東西小径の延長はやや不明瞭だが、さらに西側に広がる路面状に叩き締めた部分が、南北方向の道路になる可能性がある。またこの部分では、路面状遺構の下層で東西から南北に鉤型に曲がり、調査区南に延長する板で蓋をした石組み暗渠を検出した。

これらの路面は、調査区中央以西に広がる湿地直上に敷設されている。湿地の上面からは16世紀後半の土器が比較的まとまって出土しており、さらにこの上層に秀頼期の黄褐色砂泥整地層があるため、第2面で検出した路面は方広寺創建時のもので、秀吉期に属するものと推定する。また調査区北東部は一段高くなっている。ここは柱穴などの遺構を検出したが、建物の復元にはいたらなかった。また西半部の壁際で井戸216を検出したが、壁が崩落する危険があったため完掘できず、詳細は不明である。

調査区東半南西部で、鉤型に曲がる溝102を検出した。溝は幅1.2～1.5m、深さ1.0～1.3mでそれぞれ調査区南、西に延長する。下層には腐植土が堆積し、16世紀末の土器と共に箸、曲物、下駄などの木製品が出土した。この溝は路面の東側溝と合流している。合流地点の対岸にあたる南側には護岸のための大きな礫が数個設置しており、五輪塔の一部も使用されていた。また東西方向部分には両肩口に3対の柱穴があり、ここに簡易の橋が設けられ、さらに橋から西方向に路面を持つ小径がある。この路面の下層からは南北溝249の東肩口を検出した。幅2.4m以上、深さ約1.0mで、南は調査区外に延長し、北は溝102に削平される。遺物は室町時代末期から桃山時代の土器類が少量出土しており、溝102と時期差がないことから、溝249はほどなく埋まり路面が造成されたと考えられる。

この他東半部では遺構は検出していないが、先述の中央落込肩口には、16世紀末期の土器類と金属滓や鞆の羽口を含んだ焼土と炭からなる層が堆積していた。

室町時代中期から後期（第3面）遺構は調査区西半部で多く検出した。調査区中央の落ち込み部分で、南北溝162を検出した。規模は幅70cm、西肩口からの深さ15cm、長さ12m以上あり、北は調査区外に延長し、南は北肩口を検出した東

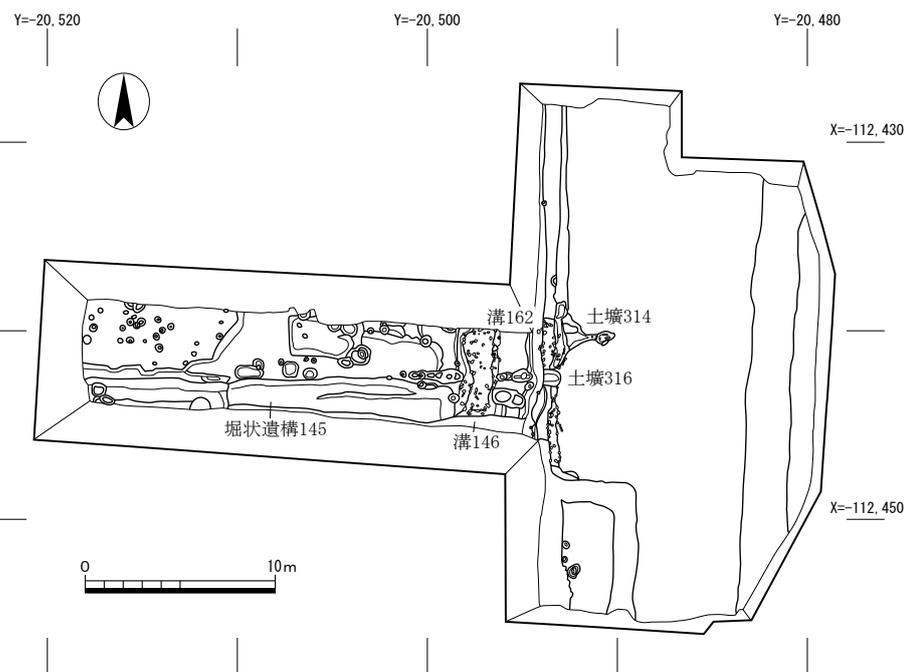


図67 10区第3面遺構平面図(1:400)

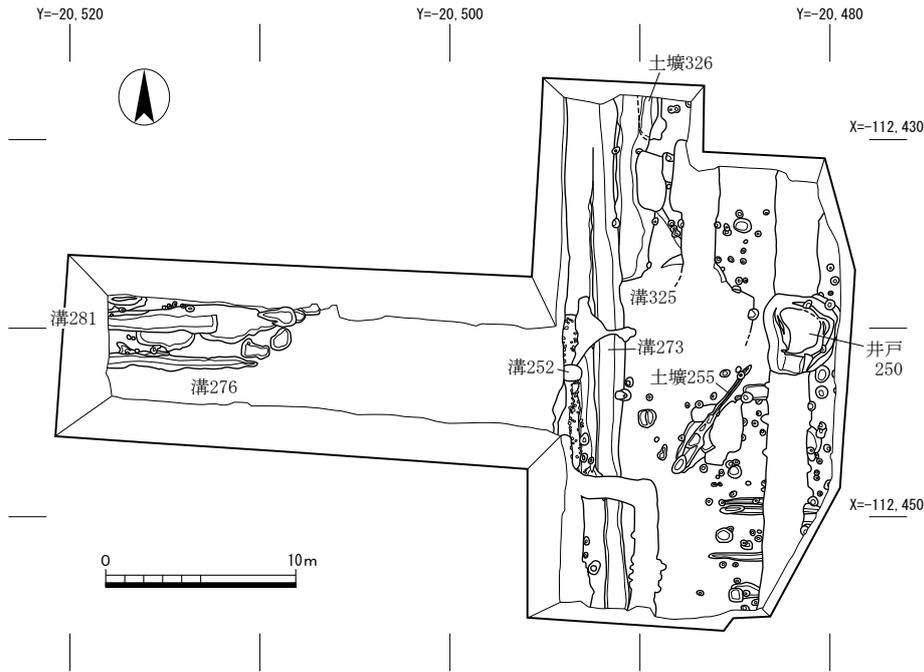


図68 10区第4面遺構平面図(1:400)

西溝 146 に合流する。また中央落ち込み部分で、東西に長く中央でくびれて西に広がる土壇 314 を検出した。検出面からの深さが 60 cm で、底には礫が敷かれていた。上面は削平されて基底部分のみが遺存している。東の斜面

から流れ落ちた水は西側の窪みに溜り、さらに土壇 316 から溝 162 に注ぎ込む一連の排水施設と考えられる。

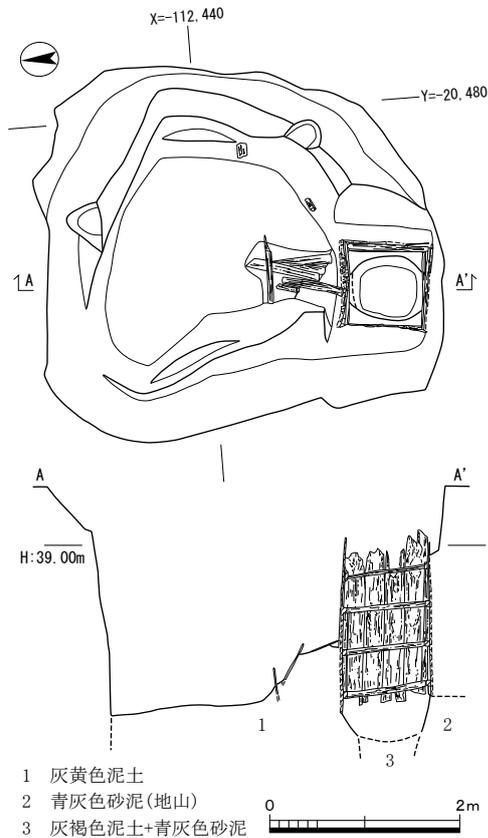


図69 井戸250実測図(1:80)

西半部南側で東西方向の堀状遺構 145 の北肩口を検出した。南肩口は調査区外となり未確認だが、幅 2 m 以上、検出面からの深さ約 50 cm、長さ 18.5 m 以上で、西は調査区外に延長する。さらに南壁沿いには溝 146 が重複する。いずれも腐植土が堆積しており、土器、瓦類の他木製品も出土した。堀状遺構 145 の北肩口に沿って、木材が遺存している杭穴を数基検出した。この他北西部の高まり部分で柱穴を検出したが、建物などの復元はできなかった。

平安時代から室町時代前期(第4面) 調査区東半部で、井戸 250 を検出した。検出面での掘形の規模は約 4 m の隅丸方形で、掘り下げると数基が重複していることがわかった。このうち南端部の 1 基を良好な状態で検出し、一辺が約 90 cm の方形縦板組みであることを確認した。横棧 4 段が遺存し、縦板には幅 20 ~ 25 cm、残存長 180 cm の材を一辺に 4 枚用い、これを補強するのに薄い板材を添える。木枠より下は直径 70 cm の円形の掘り込みを確認したが、曲物などは遺存していなかった。木枠内からは 13 世紀の土器、瓦類や漆器などが出土した。掘形埋土からも少

量の遺物が出土しているが、ほとんど時期差はみられない。

調査区東半部中央では最小幅 20 cm、最大幅 180 cm、長さ約 7 m、深さ 12 cm の土層 255 を検出した。基軸が北東方向に振る細長い土層である。底部には粘土を貼り、焼土の堆積があることから、窯の基底部の可能性があるが、関連する遺物は一切出土していない。またその他の遺物も乏しいため、時期も確定できない。

中央落ち込み部分では、南北溝を 2 条検出した。いずれの溝も斜面に沿っているため、東西の肩口には 40 ～ 50 cm の高低差が生じる。溝 273 は幅約 1.2 m で、南北それぞれ調査区外に延長する。溝 252 は幅約 0.9 m、長さ約 10 m で両端は削平されて消滅している。西肩口は拳大の礫や瓦片を粘土で固めて造成している。いずれも 14 世紀の遺物が出土した。

調査区北西部の高まり部分では、東西溝 2 条を検出した。溝 281 は幅 90 cm、深さ 30 cm、溝 276 は幅 50 ～ 60 cm、深さ 15 cm あり、共に西は調査区外に延長する。溝 281 からは 14 世紀、溝 276 からは 12 世紀代の遺物がまとまって出土している。

この他調査区西半部で土層を、東半部では柱穴を多数検出し、これらの遺構からは 13 ～ 15 世紀の遺物が出土している。東半部北では平安時代の遺構、南北溝 325 とこの溝と重複する土層 326 を検出した。いずれも 9 ～ 10 世紀の土器が出土した。

試掘調査 新館東側の仮設収蔵庫建設予定地を試掘調査した。3 箇所（試掘 1 ～ 3 区）に調査区を設置して調査した結果、それぞれの調査区で方広寺整地層と考えられる土層を確認することができた。付近の基本層序は、上からアスファルト敷きも含めた現代盛土層が 20 ～ 50 cm、本館建設時の整地層が 10 ～ 20 cm で、その下層に方広寺整地層が堆積する。一部断ち割って土層を観察したところ、方広寺整地層は厚さ 10 ～ 50 cm で、試掘 1 ・ 2 区南部では整地層は確

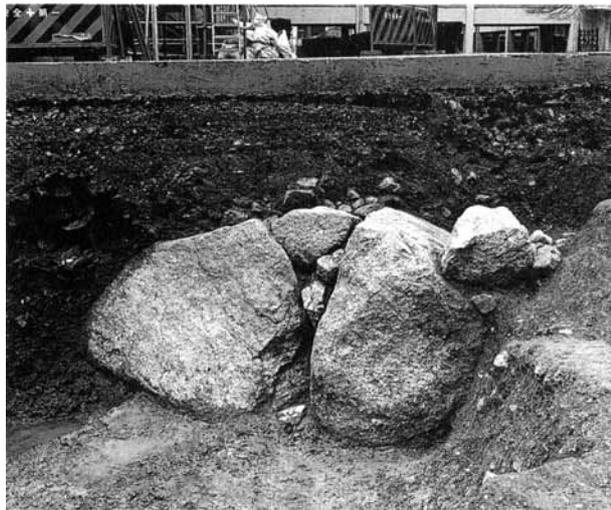


図 70 試掘 1 区石組み（南東から）

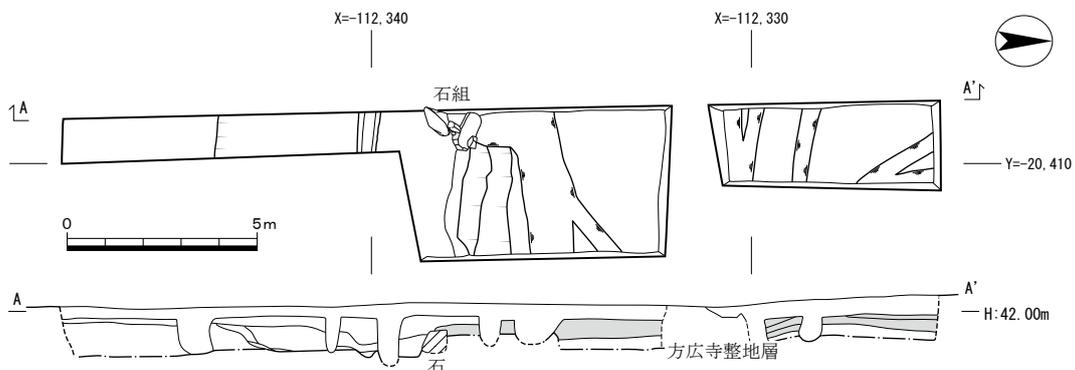


図 71 試掘 1 区遺構実測図 (1:200)

認できず、現地表面から約40cmで黄褐色粘質土層の地山であった。

試掘1区では、石組みを検出した。一辺80cm以上の石2個を組んだもので、裏込めに拳大の礫と粘土をつめる。調査区西へ延長するが、これより東で石は確認できなかった。石の面は南面せず、南東を向くことからここから東へは延長しない可能性がある。またこの石組みを北肩口として幅約7mの堀状の落ち込みがあり、埋土は最下層に粘土が約10cm堆積するが、最終的には寛政元年(1789)の大仏殿焼失時のものと推定できる焼けた瓦で埋まっていた。またこの堀状遺構の底で東西方向の溝を検出したが、遺物は出土しなかったため、時期は不明である。この他方広寺上面で遺構は検出できなかった。なお、1998年度に調査を行った方広寺南門付近と比較すると、整地層上面レベルは約80~90cm高く、石上面レベルも約1m高い。また検出した石組みは南辺石垣の延長よりやや北に位置し、ほぼ回廊南雨落溝延長線上にある。

遺構 出土遺物は整理箱に192箱出土し、土器類が大半を占める。

桃山時代から江戸時代初頭の遺物は土師器、焼締陶器、国産施釉陶器(瀬戸、美濃など)、瓦質土器、輸入陶磁器類(白磁、明染付)、瓦類、石製品(砥石、石仏、石塔)などがある。10区の中央落込焼土層、第2面路面直下の湿地状堆積、第1面の方広寺関連の路面、側溝などから出土したものである。中でも落込焼土層、湿地状堆積の上層から出土した土器類は、16世紀末期の美濃焼天目茶碗、灰釉皿、信楽焼の播鉢などを含む良好な一括資料である(図72)。この他注目される遺物として、中央落込斜面に堆積した炭・焼土層から出土した大量の金属滓、鞆の羽

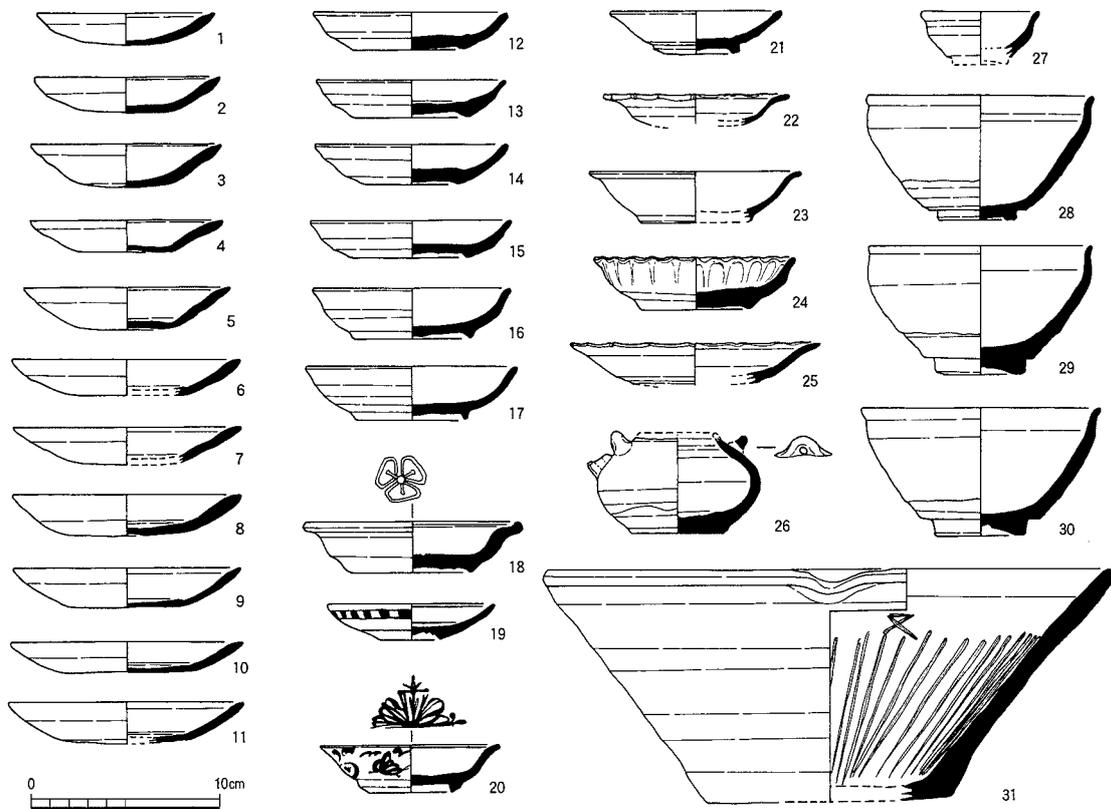


図72 10区落込焼土層・湿地状堆積上面出土土器実測図(1~11:土師器 12~18:焼締陶器 19・20:染付 21~23:白磁 24~30:施釉陶器 31:焼締陶器)(1:4)

口といった鑄造関連遺物がある。また湿地状堆積や溝 102 からは、箸、下駄、曲物、漆器などの木製品が出土している。

室町時代の遺物は土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶器（古瀬戸）、輸入陶磁器（白磁、青磁、青白磁、褐釉陶器）、瓦類、金属製品（銭貨）、木製品（箸など）がある。大半は 10 区東半部の柱穴および整地層から出土したものである。南東部に堆積していた整地層は土師器を多く含んでいたが、小片が多かった。また、西半部湿地状堆積からは箸や木簡などが、下層の堀状遺構からは瓦類が比較的多く出土した。

鎌倉時代の遺物は土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶器（古瀬戸）、輸入陶磁器（白磁、青磁、青白磁、褐釉陶器、緑釉陶器）、瓦類、金属製品（銭貨、釘）、滑石鍋、木製品（井戸杵、箸、曲物、漆器など）がある。9 区の溝 1、10 区の井戸 250 出土の土器類は良好な一括資料である（図 73）。また井戸からは井戸杵の他、箸、曲物、漆器などの木製品が多数出土している。井戸杵には加工痕のある転用材が多く使用されている。

平安時代の遺物は土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦類があり、大半は鎌倉時代以降の遺構、整地層から出土した混入遺物である。10 区の溝 325、土壌 326 からは平安時代前期の土師器皿、須恵器壺・甕などが出土している。土壌 255 からは鎌倉時代の土器類と共に黒色土器や緑釉陶器の破片がまとまって出土した。また室町時代の遺構、整地層からの出土ではあるが、「右坊常」「右坊」などの文字瓦の破片も出土している。これらは調査地点から約 500 m 南

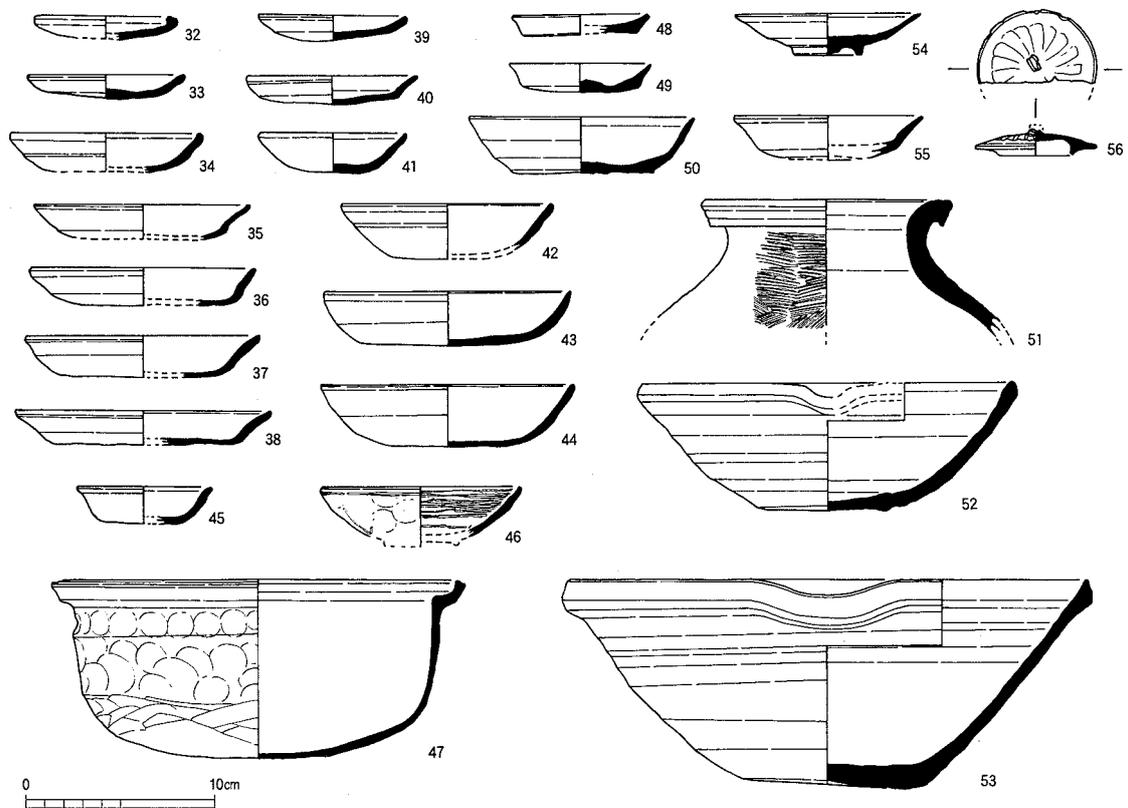


図 73 10 区井戸 250 出土土器実測図
 (32～44: 土師器 45～47: 瓦器 48～53: 須恵器 54: 白磁 55: 青磁 56: 青白磁) (1:4)

にある平安時代中期の池田瓦窯で焼成されたものである。

古墳時代の遺物は主に井戸 250 から出土し、土師器の高杯、須恵器の小片がある。

小結 9区では方広寺の整地層は削平されていたが、室町時代の貯蔵庫と考えられる建物や、鎌倉時代の溝、柵列など、方広寺造営以前の当地の利用状況を知る資料を得ることができた。このうち鎌倉時代の遺構や遺物は、六波羅政庁との関連を考える上でも貴重な資料となる。

10区では方広寺関連の遺構を良好な状態で検出し、1998年度の成果と共に方広寺およびその周辺を復元するための良好な資料を得ることができた。

今回検出した路面は、方広寺南門から蓮華王院南大門にいたる南北道に該当し、さらにこの道路は秀頼期の整地層上面に敷設されていることから、方広寺南門、蓮華王院南大門、太閤堀の築造など秀頼による一連の大仏殿再建に伴う周辺整備の一つといえる。さらに秀頼整地層の直下では、室町時代から桃山時代の湿地上に路面、溝などを検出し、秀吉による方広寺創建時にも一定の整備事業が実施されたものと推定できた。これらは秀吉が天正16年(1588)に方広寺建立を開始し、秀吉の死後、秀頼が引き継いだ慶長4年～同17年(1599～1612)の大仏殿再建事業に関わる遺構である。

調査区西半部の厚さ1.5mに及ぶ秀頼期の整地層に注目すると、当地の利用方法が方広寺創建当初と再建時で大きく異なることが興味深い。すなわち東から西へと傾斜する地形を、創建時にはテラス状に切り出して平坦面を造り出しているのに対し、その後は一期に盛土をして埋め、大規模な造成を行ったようである。このような状況は方広寺南辺調査区でも同様で、創建時に石垣の基底部は地山を切り込むような形で据えられるが、その後比較的早い時期、おそらく秀頼再建時には、東へと緩やかな斜面をつくり出すように盛土されている。いずれの調査でも、方広寺創建当初およびその直前の湿地の堆積を確認していることから、有効に土地を利用するためにも、付近一帯の大規模な整地は必須だったのだろう。

また調査区中央落込斜面には炭と焼土による層が堆積し、ここから大量の鑄造関係遺物が出土した。この堆積の直上に秀頼期整地層が堆積することから、秀頼に事業が受け継がれた前後に周辺で金属製品の鑄造が行われたことが推定できる。今回の調査では鑄造遺構の検出はなかったが、1998年度に方広寺南門南西部で秀頼期のものと考えられる鑄造遺構を検出していることから、方広寺に関する金属製品の鑄造が、寺域の南側の当地域で行われていた可能性が高い。

室町時代には急な落ち込み地形を利用して溝や堀状遺構が造られるなど、この地を活発に利用していたことがうかがえる。また鎌倉時代に属する井戸や溝からは、良好な一括資料を得ることができた。法住寺殿に関連する顕著な遺構は検出できなかったが、平安時代前期にさかのぼる遺構も検出しており、法住寺殿以前の当地利用状況を知る手がかりを得た。

試掘調査ではこれまでの調査と同様、方広寺整地層を確認し埋設管などによる現状の攪乱がない限り、非常に良好な状態で方広寺関連遺物が検出される可能性が高いことがわかった。また検出した石組みは方広寺南辺延長付近に位置し、さらに寺域の南東隅を示す可能性がある。

(田中利津子・近藤知子・大立目一)

18 中久世遺跡 (図版1・30)

遺構 今回の調査は、集合共同住宅建設工事に伴うものである。当調査地は、縄文時代から室町時代にいたる複合遺跡である中久世遺跡の西部に位置する。平安時代から室町時代にかけては、東寺領の下久世荘が営まれていた地域でもあり、周辺ではこれまでに弥生時代（竪穴住居・方形周溝墓・河川）、古墳時代（竪穴住居・溝）、奈良時代から室町時代（建物・井戸・溝）など多くの遺構が検出されている。

今回の調査では、方形周溝墓、竪穴住居、掘立柱建物、井戸、土壌、溝などを検出した。これらの遺構には、1から番号を付している。

遺構・遺物 調査区の地形は平坦で、標高16.5m前後である。基本層序は上層に耕土が25cmあり、その直下は黄褐色砂泥層(2.5Y 5/4)の地山となる。今回、遺構はすべてこの地山である黄褐色砂泥層の上面で検出した。以下、時期別に遺構の概要を述べる。

弥生時代 方形周溝墓1基、土壌2基を検出した。ここでは、方形周溝墓1の概要のみを記す。調査区の西側で検出した。周溝墓の平面形は隅丸方形をなす。規模は周溝内法で北西-南東間約10m、北東-南西間約9mで、周溝の幅は0.5~1.8m、深さは検出面より0.9mを測る。遺物は、周溝内から中期の壺形土器が破片となって出土した。

古墳時代 竪穴住居1基、溝3条、土壌2基を検出した。ここでは、竪穴住居7の概要のみを記す。調査区の東部で検出した。規模は一辺約8.5m、支柱穴を3基確認した。各柱間は約5m、壁溝は幅0.3m、深さ0.15mを測る。遺物は土器片が少量出土している。

飛鳥時代から奈良時代 掘立柱建物3棟、柵2列、土壌の他多数の柱穴を検出した。ここでは建物10の概要のみを記す。調査区の西側で検出した東西棟である。東西7.2m(3間、8尺平均)、南北4.8m(2間、8尺平均)を測る。柱掘形は、一辺0.6~1.0mの方形で、深さは0.2~0.4mを測る。

平安時代 井戸2基、土壌、溝などを検出した。

小結 今回の調査では弥生時代、古墳時代、飛鳥時代から奈良時代、平安時代後期の各遺構を検出したことにより、中久世遺跡の様子を知る上で重要な資料を得ることができた。中久世遺跡とその南東に隣接する大藪遺跡周辺では、弥生時代から現代にいたるまで、連綿と集落が営まれていた状況が明らかとなった。今後とも綿密な調査を継続する必要がある。(出口 勲)

『京都市内遺跡発掘調査概報』平成11年度 2000年報告

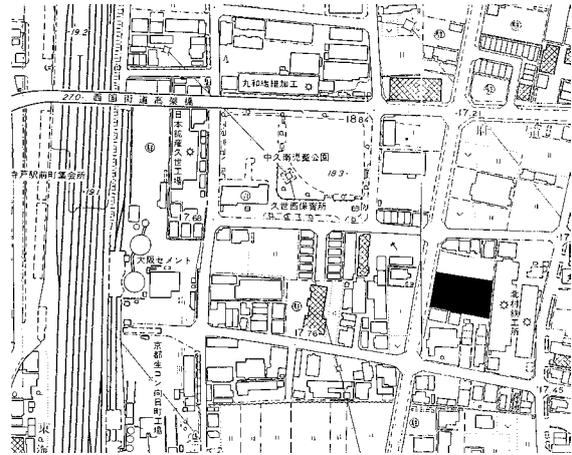


図74 調査位置図 (1:5,000)

19 大藪遺跡 (図版1・31・32)

遺構 この調査は、南区久世地区に計画された街路建設工事(向日町上鳥羽線)に伴うものである。調査は平成9年(1997)から継続して実施されており、すでに久世殿城町地区(A区)の調査は終了している。^{註1}今年度は大藪町地区の調査に着手した。当地は中央を大藪街道が南北に貫き、調査予定地が2分されている。したがって、街道の西側をB区、東側をC区とした。今年度は主にB区の調査を実施し、一部C区の調査も行った。

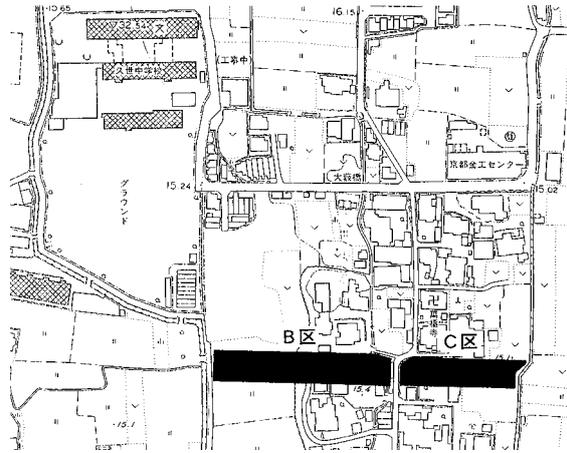


図75 調査位置図(1:5,000)

B区は殿城町と大藪町の境界水路から大藪街道までの約120m間である。ほぼ中央に南流する農業用水があり、これを現状のまま維持する必要があった。また、調査区内に排土置き場を確保する必要もあった。このため、先の水路で調査区を東西に分け、2回に分けて調査を実施することでこの問題に対処した。調査区は東側をB1区、西側をB2区とした。

C区は翌年度の調査予定であったが、C区西端に下水道本管の堅坑が建設されることが決定した。このため堅坑部分のみを先行して調査することとなり、ここにC1区を設けて調査を行った。調査はB区の調査が終了した後、進入路を確保して実施した。

遺構・遺物 B区、C区の順にその概要を述べる。

B区 調査前のB区は、上述した農業用水路を境に東側(B1区)は住宅地、西側(B2区)は水田であった。地形は東側が高く、西側の水田は約1mほど低くなっている。この水田は周辺では最も標高の低い水田である。これまでに実施した調査成果から、この低地は古い河川の痕跡を示すものと推測されていた。調査の結果、推測通りにB2区では河川の流路を検出した。また、B1区は河岸の微高地にあたり、ここで弥生時代から江戸時代の遺構を検出した。

B1区の基本層序は、上層から近・現代の整地層30~60cm、黄褐色粘質土層(10YR5/6)などからなる江戸時代の整地層30~60cm、にぶい黄褐色粘質土層(10YR5/4)の地山からなる。ほとんどの遺構は地山であるにぶい黄褐色粘質土層の上面で検出した。遺構面の標高は14.6m前後でほぼ平坦である。

B2区の基本層序は、上層に現代の耕作土層約20cm、その下に旧耕作土層と考えられる暗灰黄色砂泥層(2.5Y4/2)30~40cm、暗灰黄色砂泥層(2.5Y5/2)10~20cm、灰オリーブ色微砂層(7.5Y4/2)30~40cmが続く。さらにその下には河川の堆積と考えられる灰オリーブ色砂礫層(5Y5/2)や灰色細砂層(7.5Y4/1)などが90cm前後ある。河床の地山は、緑灰色粘土層(7.5GY4/1)、あるいはその下に堆積する暗緑灰色砂礫層(7.5GY6/1)である。

検出した遺構は弥生時代後期、平安時代後期から室町時代、桃山時代から江戸時代のものがあ

る。以下、時期別に遺構・遺物の概要を述べる。

弥生時代 B1区で後期の竪穴住居を1棟(SH1)検出した。調査区の北端に位置し、およそ南側半分を調査した。後世の遺構に壊されているため残存状況が悪く、壁溝の一部と柱穴2箇所を検出したにとどまる。復元すると直径7m前後の円形プランを持つものと考えられる。埋土も削平されてほとんど残存していないが、床面には炭化した木材と焼土が広がっており、焼失した住居であると推測できる。

この他に、柱穴や土壌がまとまっている部分が2箇所認められ、さらに2棟ほどの竪穴住居が存在していた可能性がある。これらの遺構から後期の土器が少量出土している。

平安時代 B1区の中央部で後期の土壌(SK2)を1基検出している。形状や深さから井戸であったと考えられるが、井戸側は認められなかった。埋土から後期の土師器、瓦器、白磁などの土器類がまとまって出土している。

鎌倉時代から室町時代 この時期の遺構は主にB1区で、掘立柱建物、柵列、井戸、溝、堀などを検出し、今回の調査で最も多い。これらの遺構はB1区の西端と東部にある南北方向の堀(SD3・4)で区画されている。堀の内部に展開する建物群は重複関係と方位から2時期に分けることができる。古いものは、北でやや東に振った建物(SB5・6)で、それぞれ調査区北部と西部で確認した。SB5は東西4間×南北1間以上でさらに北へ延びる。SB6は東西2間×南北1間以上でさらに南へ延びる。新しいものは室町時代後期と考えられ、比較的大きい建物(SB8)とやや小ぶりの建物(SB7)が約7.5m離れて、南側の軒を連ねて並んでいる。SB7は東西4間×南北3間、SB8は東西6間×南北5間と推測されるが、いずれも柱間の寸法にばらつきがあり、後世の遺構に破壊されているため判然としない。柱穴の底部には人頭大の石を入れるものも認められる。SB8北側には雨落ちと考えられる溝(SD9)が配置され、さらに溝を東へ延長した部分には柵(SA10)が並んでいる。SA10の南、SB8の東側には園池と考えられる池(SG13・14)が、中央に細い溝を介して南北に並んでいる。これらの池とSD4の間には堀に並行して柵(SA11)が並んでいる。また、SB7の南側には井戸側に桶を利用した井戸(SE12)が掘られている。

遺物を多く出土した土壌(SK15・16)などがある。SK15からは鏡の鋳型8枚が重ね合わさった状態で出土した。1枚の直径は約13cm、厚さ2cmの円盤状を呈しており、おそらく2枚が1セットになり、計4セット分であると思われる。粘土や砂などの混入した荒型の上に「マネ」と呼ばれる細かい粘土を貼り付けており、ここに文様が施されたと考えられる。鋳型同士が接着しており文様は明らかでない。SK16からは土師器、瓦器、輸入陶磁器などの土器類が多量に出土しており(図77)、瓦器の比率が高いことが特徴的である。この他の各遺構からの遺物は、土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、白磁、青磁などの土器類、鞆羽口などの土製品、瓦類、曲物、下駄、木錘、箱、井戸枠として用いられた桶などの木製品、小刀、刀子、銭貨などの金属製品、砥石、石鍋などの石製品が出土している。

桃山時代から江戸時代 B1区の東部で柱穴、土壌、井戸などを検出した。柱穴は3棟ほどの

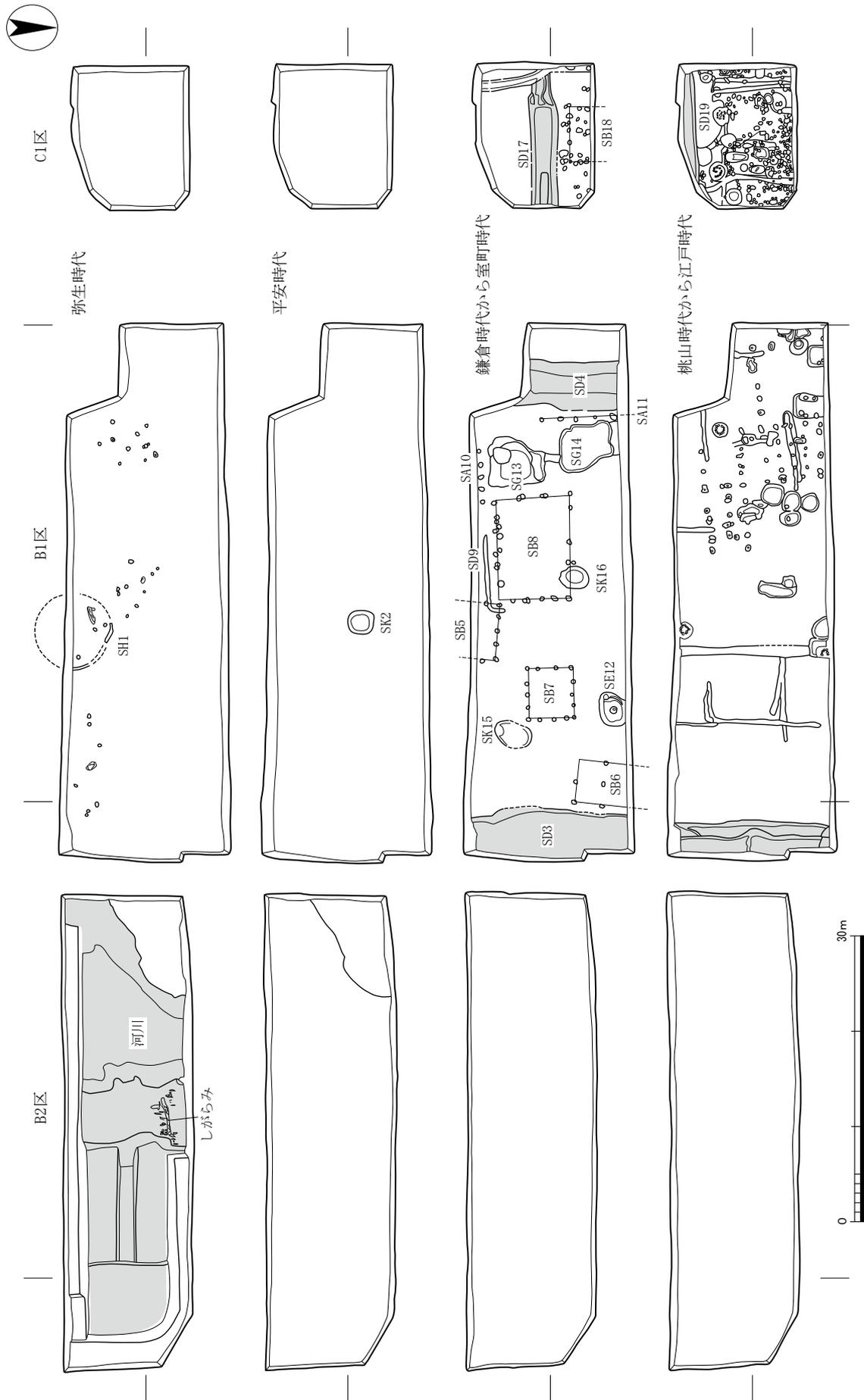


図76 主要遺構配置図 (1:600)

建物にまとまると考えられるが、重複したものが多く判然としない。井戸、土壇などの遺構から、土器類土師器・陶器・磁器、木製品下駄・鋏・柄杓・羽子板、石製品石臼・五輪塔、銭貨などが出土している。

その他、B2区で検出した河川は、最も下層の砂礫層から縄文時代後・晩期の遺物が出土している。河川を埋めている砂礫層から出土する遺物の大半は、古墳時代から奈良時代のものであるが、平安時代中期の遺物も少量ながら出土している。したがってこの河川は、縄文時代の終わり頃に形成され、平安時代中期頃の大規模な洪水によって埋没したものと考えられる。

また、河川の中ほどには多数の杭を打ち込んだしがらみ状の遺構が作られているが、上記の理由から正確な時期は不明である。

C区 今回実施したC1区は、B1区と大藪街道を挟んだ東側にあたり、調査前は住宅地であった。ここもB1区から続く微高地にあたる。当地の基本層序は、上層から近・現代の整地層50～60cm、江戸時代の整地層である黄褐色粘質土層(10YR5/6)20～50cm、にぶい黄褐色粘質土層(10YR5/4)の地山からなる。大半の遺構は地山であるにぶい黄褐色粘質土層の上面で検出した。遺構面の標高は14.7m前後でほぼ平坦である。

検出した遺構は、鎌倉時代から室町時代、桃山時代から江戸時代のものがある。遺構密度は今回調査した地区では最も高い。以下時期別に遺構・遺物の概要を述べる。

鎌倉時代から室町時代 この時期の遺構には、掘立柱建物、柵、溝、堀などがある。これらの遺構は調査区のほぼ中央にある東西方向の堀(SD17)で区画され、南側が居住空間であると考えられる。ここでは多数の柱穴を検出した。数棟の建物が展開すると考えられるが、後世の遺構との重複が著しく、建物として復元できたのは1棟(SB18)である。SB18は東西3間×南北2間以上でさらに南側に延びると考えられる。柱間は不揃いで、柱穴内に石を入れたものも認められる。

遺物はSD17から土師器の皿がまとまって出土している。(図77)。この他に各遺構から土師器、瓦器、白磁、青磁などの土器類が出土している。

桃山時代から江戸時代 この時期の遺構には、掘立柱建物、柵、溝、井戸、堀などがある。中世に存在した東西方向の堀(SD17)は埋めたてられ、新たに北側へ約6m(心々距離)の位置に堀(SD19)が開削されている。南側はやはり居住空間として利用され、井戸、柱穴などが多数認められる。遺構の重複が著しいため建物は復元できなかった。

遺物は土壇、井戸、堀、柱穴などから、土師器・陶器・磁器などの土器類、柄杓・曲物・箸・木球・井戸枠に用いられた桶板などの木製品、漆器などの漆製品、銭貨・鎌などの金属製品、石臼などの石製品などが出土している。

小結 今回の調査成果は二点をあげることができよう。第一点は弥生時代後期の竪穴住居を検出できたことである。確認したのは1棟であるが、さらに2棟ほどが存在していた可能性がある。平成9年(1987)には調査区の北約70mの地点で弥生時代後期の大型竪穴住居1棟を検出しており、周辺ではこの時期に集落が営まれていたものとみられる。また、前年度の調査では殿城町

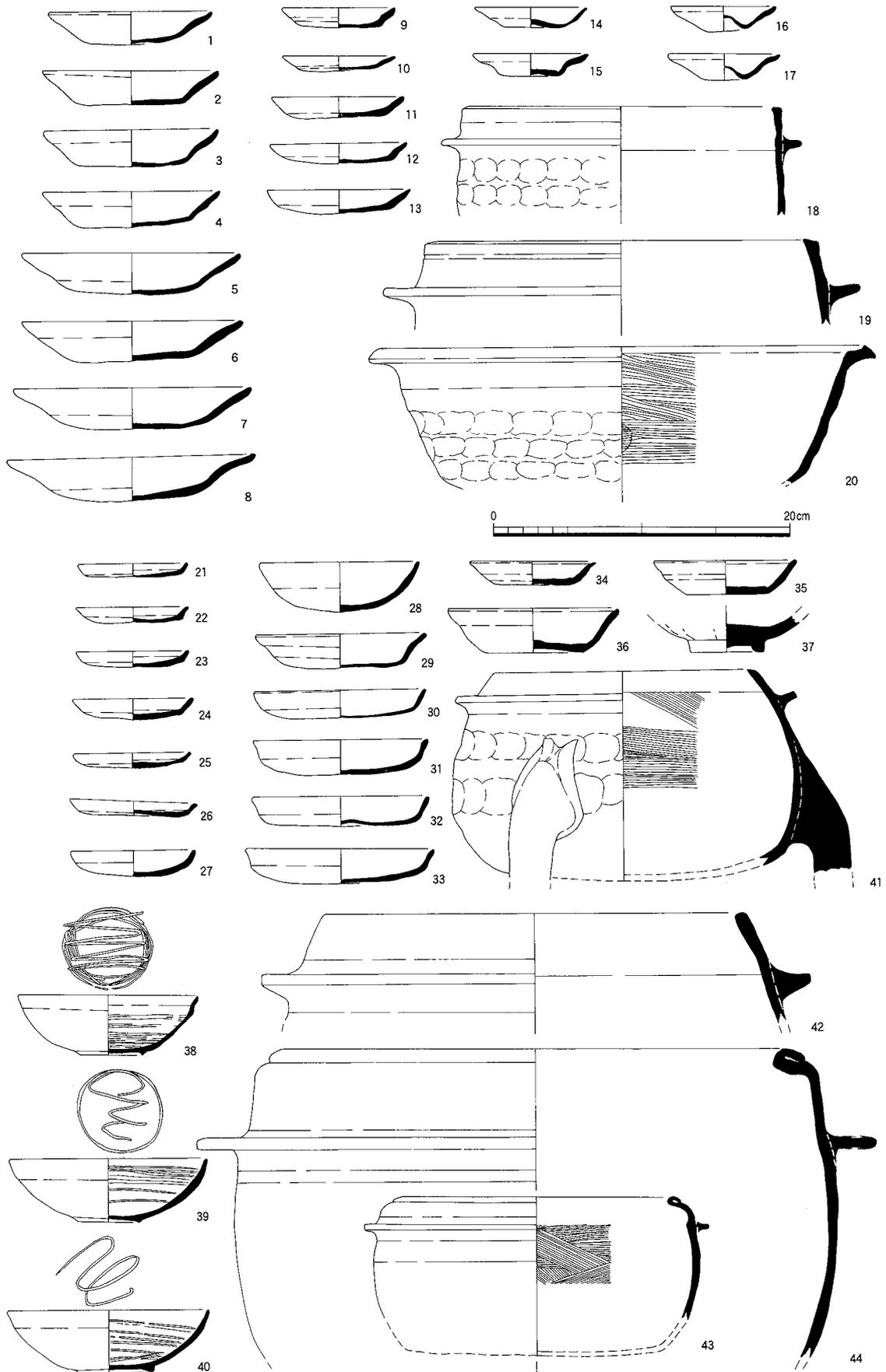


図77 出土土器実測図(1~20: C1区SD17 21~24: B1区SK16) (1:4)

地区（A区）で弥生時代後期の竪穴住居からなる集落の一部を確認している。これらの成果を考え合わせると、大藪遺跡ではB2区で検出した河川を挟んで両岸に集落が展開していたことになる。現段階では両岸の集落の関係や規模、構成などは明らかにできておらず、今後の課題である。

第二点は中世の遺構群が検出できたことである。調査では建物や井戸、土壇など各種の遺構を多数重複して検出しており、鎌倉・室町時代を通して連綿と集落が営まれた状況が明らかとなった。今回、配置が明らかにできたのは室町時代後期の遺構のみであるが、堀で区画された中に建物、井戸などが計画的に整然と配置されている様子がうかがえる。また、園池が造られるなど、豊かな精神生活の一端が垣間みえる。この時期に形成された堀は現在も一部踏襲されており、大藪集落の原形がこの頃すでに形成されていたことを示している。

今回、井戸の可能性のある平安時代後期の土壇を1基検出した。この時期の遺構は他には確認することができなかったが、井戸であれば周辺に居住施設が存在したはずである。昨年度実施した殿城町地区（A区）の調査においても、平安時代後期の井戸を1基検出しており、大藪・上久世などの庄園集落形成が平安時代末期までさかのぼる可能性も指摘できる。この点の解明も今後の課題である。

（吉崎 伸・出口 勲・西大條 哲・宮下則子）

註1 西大條 哲・出口 勲・吉崎 伸「大藪遺跡」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
（財）京都市埋蔵文化財研究所 2000年

註2 鈴木廣司『大藪遺跡発掘調査概報』昭和62年度 京都市文化観光局 1988年



図78 B2区しがらみ検出状況（北東から）

20 醍醐廃寺 (図版2-2・33)

遺構 平成9年(1997)の立会調査の成果を参考に、調査対象地に8箇所のトレンチを設定し、遺構の有無を確認する試掘調査(本概要2章Ⅲ-10)を実施した。その結果、7トレンチで中世の石敷き遺構を検出したため、その部分について発掘調査を行うこととなった。

調査は、醍醐廃寺および過去3度の調査で明らかになった室町時代の溝や、平安時代後期から鎌倉時代の軒平瓦などに関連した遺構の有無を明らかにする目的があった。

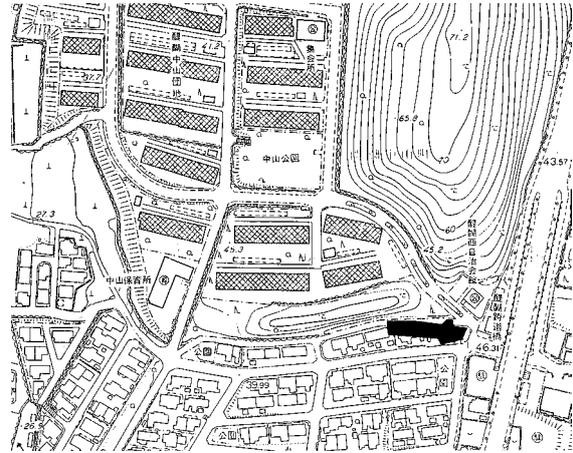


図79 調査位置図 (1:5,000)

遺構 市営醍醐東団地内の調査地は、中山丘陵の南端東側の枝稜線をまたぎ、西方に傾斜する一帯を含む場所である。ここは、醍醐寺総門から西へ200mの丘陵の稜線にあたるところで、小栗栖へ抜ける峠道となっているところである。

基本層序は、団地造成時の盛土層が東端の稜線部0.1mから西端で2.5mほどあり、旧表土層、近代・近世の堆積土層が続く。その下は、中世の粘質土層と礫混じりの砂泥層が互層をなして堆積する。さらに下には、黒色系の古墳時代以前とみられる粘質土層があり、地山は大阪層群によって形成されている。検出した遺構について概略を述べる。

近世・近代 団地造成時の盛土層と旧表土層を機械で除去した後に、調査地を東西に縦断する

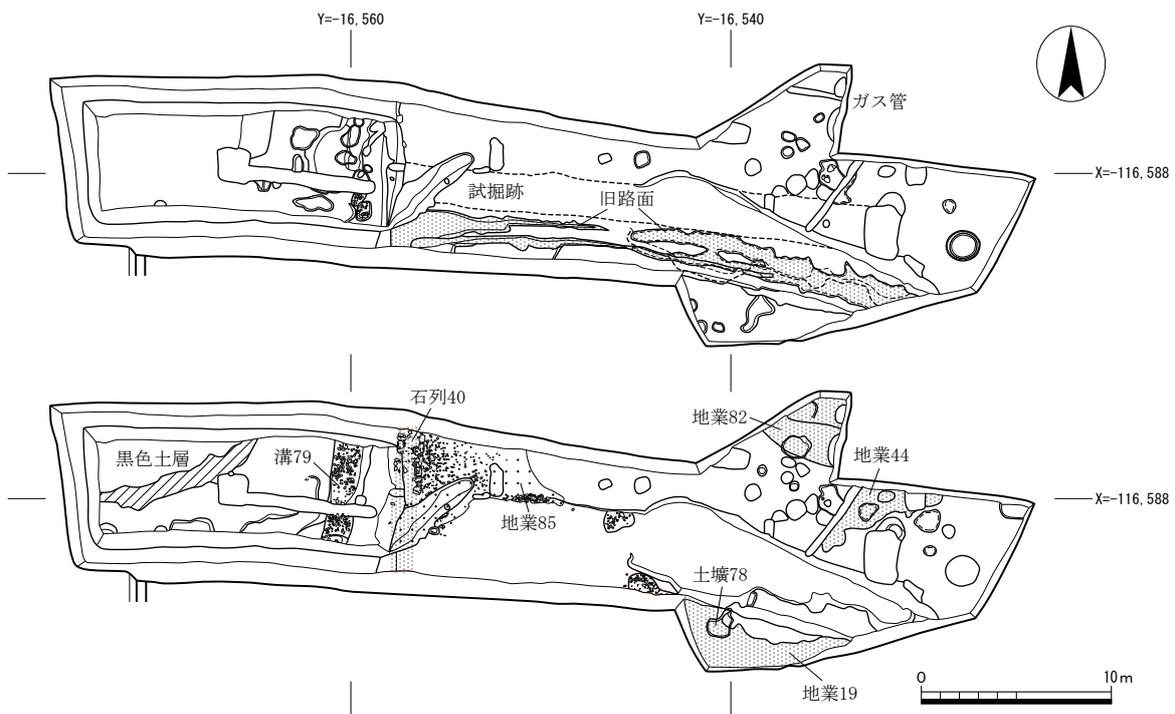


図80 遺構平面図 (1:400)



図81 調査地形と旧地形 (1:2500)

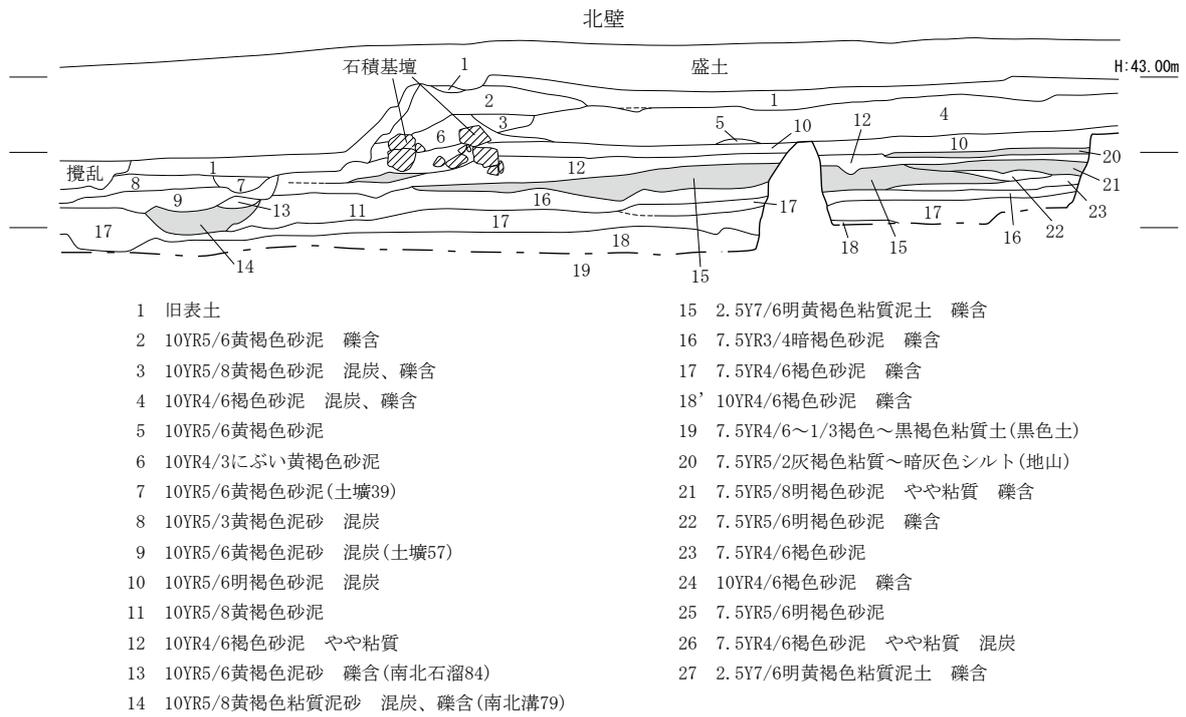


図82 第2面築地と周辺遺構実測図 (1:100)

旧路面が検出された。この路面は峠部分を切りとおして傾斜を緩くしている。また洪水などによって抉り取られた路面の修復に礫を投入して、さらに黄褐色粘質土を貼り付けて改修した痕跡がある。出土した遺物から近世までさかのぼれるが、その下に路面の痕跡を検出していない。

平安時代後期から鎌倉時代前期 団地造成期の埋土層とその下の旧表土層と近世包含層を除去したところ、試掘段階で検出していた拳大の礫を敷き詰めた地業（地業 85）と、その西端に 0.6 m 大の石を 2 列に配した築地（石列 40）、その西に平行する側溝（溝 79）を検出した。また、調査地の東側で、旧路面を隔てた南北に礫と粘質土を敷き詰めた地業を検出した。

調査区西側の地業は、南北側溝の東端から調査地東 20 m に及ぶ版築で、平坦面を形成している。黄褐色の粘質土層と褐色砂泥層を互層にして、その上に拳大の礫を敷き詰める。この地業は築地の東側に 5 m ほど広がっていた。東側は近世か、団地造成時に削平されたと考えられる。この地業は南西方向に溝状の修復地業があり、築地の東側の寺域は近世にも機能していたと思われる。

地業の西を画する築地はほぼ南北に延びる。2 列の石積み基壇は幅 1.4 m で、外に面をあわせている。東側のものは 7 列で 3.2 m、西側のものは 2 列で 1.3 m を検出した。大きな石積み基壇は 2 段に、小さいものは 3 段にして上面をあわせたと推定できる。石材はチャートである。基礎石を検出中に瓦片を数点検出しているため、築地には瓦を葺いていた可能性もある。

石積み基壇に並行する側溝は、粘質土層で斜面を形成している。側溝は東西幅 1.5 m、南北 6.0 m 以上ある。深さは最深部で 0.3 m であり、底部には拳大の礫を敷き詰めてある。

調査地東側で検出した地業は、寺域内の築地内側に位置し、建物の痕跡と考える。地業 82・44・19 がそれに該当する。これらの遺構は、北側の中山丘陵の南端部の枝稜線にあたり、低い場所には礫を混入して地業を厚くし、平坦面を形成（地業 19）している。

遺物 遺物は整理箱 12 箱を数える。そのうち瓦は 2 箱分である。旧路面に沿って近世の遺物が多く出土している。地業や築地に伴うものでは平安時代後期から鎌倉時代前期の土師器を中心とした遺物がある。

近世の遺物には染付、輸入磁器、施釉陶器、焼締陶器、瓦質陶器、土師器、また小型の壺や滑石の鍋もある。瓦には棧瓦がある。また、陶質の人形や釘・鎌などもある。

室町時代の遺物は土師器、瓦質陶器、焼締陶器、施釉陶器、磁器などがあるものの量は少ない。個別の遺構に伴うものはない。

平安時代後期から鎌倉時代前期の遺物には土師器、灰釉陶器、焼締陶器、輸入磁器、瓦などがある。土師器は地業 19 などからまとまって出土した。瓦は巴文軒丸瓦が地業 44・82 から出土している。石列 40 付近や地業 44 からは平・丸瓦が複数出土している。地業 19 の土壇 78 部分から、平安時代末から鎌倉時代前期の土師器を中心に、須恵器鉢、須恵質

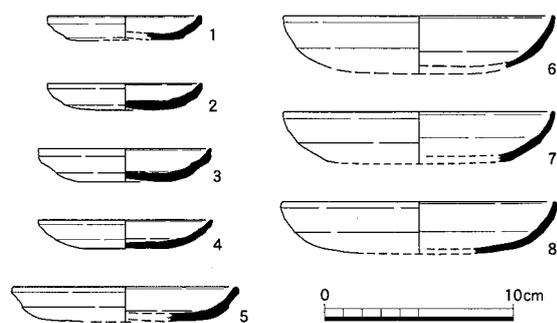


図 83 土壇 19 出土土器実測図 (1 : 4)

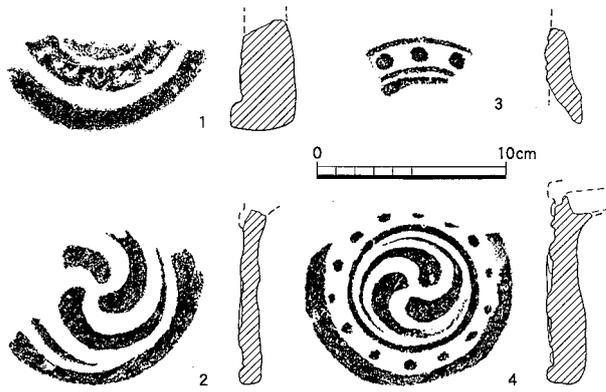


図84 出土軒丸瓦実測図(1:4)

東播捏鉢、青白磁合子身、滑石鍋、釘、瓦を採取している。地業44からも同様な遺物が出土している。また、平坦面を造成する整地層も、平安時代後期から鎌倉時代前期の遺物が出土している。

小結 この調査地は、下醍醐の現総門の西方約200mに位置する。醍醐寺の子院は平安時代後期から鎌倉時代前期にかけて造営されている。検出した築地、地

業に伴う遺物も同時代のものである。このことから、遺構と遺物を下醍醐の子院に伴うものではないかと想定した。下醍醐の子院について造営時期と敷地に限定して文献にあたり、平安時代後期から鎌倉時代前期に存在していた子院に関連した堂宇で、今回の調査地に近接するものを摘出して当該建物の比定を試みた。その結果、当該地でその寺域の一部の存在が想定される子院として越智堂を想定した。

越智堂について、杉山信三氏の見解にしたがって越智が地名を指すなら、大智院が最初に建てられたところである。^{註1}『山城名勝志第十七』には一言寺の北に越智西というところがあり、地藏堂があるところが越智堂の跡としている。また一言寺は南郷保(ミナミノサト)にあったと記している。^{註2}現在の地名に醍醐一言寺裏町があり、その西北に醍醐南里町がある。『山城名跡巡行志第六』には南里は大路東の南三町ほどのところとある。^{註3}大路東は『三宝院西門前二町計南也』としている。したがって越智堂は、大路東の南西域で、中山丘陵の南端部に近い大路西にあったとできる。越智堂の願主は白河・鳥羽両法皇に多くの建物を寄進している藤原基隆であり、供養の導師は定海である。九間四面の堂があつて、丈六の阿弥陀堂如来九体を安置していた。他に地藏堂、釈迦堂、三重塔、経蔵、鐘楼があつたともある。越智堂がこの地区に展開したとすれば、その寺域の一部が調査区と重なる可能性は高い。

(津々池惣一・布川豊治)

註1 杉山信三『院家建築の研究』吉川弘文館 1981年

註2 「一言寺 在菩提寺坤舊記云南郷保一言観音・・・」

註3 「南里所名在大路東南三町計」

21 史跡醍醐寺境内 (図版2-2・34)

遺構 醍醐寺境内の下水道工事に伴う埋蔵文化財調査を実施した。調査地を大きく5区に設定した。調査の都合上、各調査区を必要に応じてブロックに分けた。

この調査地は、五重塔の南の東西道路、すなわち現在の光台院の東側から女人堂付近まであり、上醍醐への参道でもある。南大門に関連する遺構や子院の存在が想定された。その結果、近世の整地層と平安時代末から鎌倉時代前期に属する瓦溜や柱穴を伴う整地層を検出した。また、縄文時代後期の土壌とそれに伴う土器片を検出した。

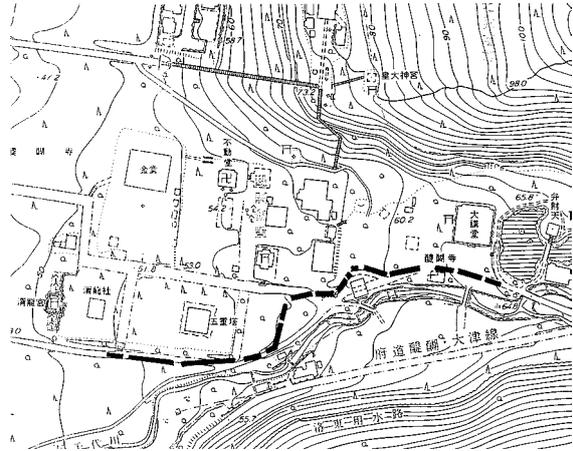


図85 調査位置図 (1:5,000)

2区の調査で検出した柱穴とそれに伴う整地面を保存することになり、ルート変更に伴う試掘調査を行った。調査区は3箇所設定し、南から試掘A・B・C区とした。

また、消火栓鉄管などのため下層が調査できなかった部分を重点に、下水道敷設工事に沿った立会調査も行った。

遺構 まず、1～5区の調査で得られた遺構を立会調査の結果も含めて述べる。

1A区 近世の瓦を含む路面が深さ1.0mにある。その下に、上水道工事に伴う調査で検出された室町時代の瓦溜に切られた形で、平安時代後期から鎌倉時代前期の瓦溜(瓦溜2)が検出された。南北1.0m以上、東西3.0mある。瓦は遺物整理箱に7箱出土した。この瓦溜は、南大門といわれていた付近にあり、近世の路面の下に土壌状に存在する。単なる整地層ではなく、南大門より南下する通路に伴う遺構の可能性も考えられる。

1B区 現代層の下に近世の路面が続く。その下に平安時代後期から中世の瓦を包含する薄い層がある。その下は地山である。それを切る形で石溜りの溝(溝3)が東西方向に走る。14世紀代の遺物があり、中世の暗渠の可能性もある。さらにその下からは、縄文時代の土器を含む土壌(土壌4)を検出した。東西1.2m、南北0.5m以上のものである。

1C区 上水道の塩化ビニールパイプが調査地を縦断しており、その下は未調査である。近世の路面は薄くなるが、1C区にも続いている。その路面下は、東端から10mほどは近世の砂礫層である。それより西は地山である。その地山を穿つ形で、時期不明の石溜りの土壌(土壌10)がある。東西2.5m、南北0.4m以上の規模である。さらに古い遺構としては、縄文土器を伴う土壌(土壌5～9)がある。土壌5・6は同一の遺構で、南北1.0m以上、東西2.0mの土壌である。縄文時代後期中津式の土器を含む。遺構の性格は不明である。土壌7～9は径0.5m大の土壌である。検出した遺物や層序から土壌5・6と同時期のものと考えられる。性格は不明である。

2A区 径5cmの塩化ビニールパイプが調査地を縦断しており、0.3m以下は掘削ができな

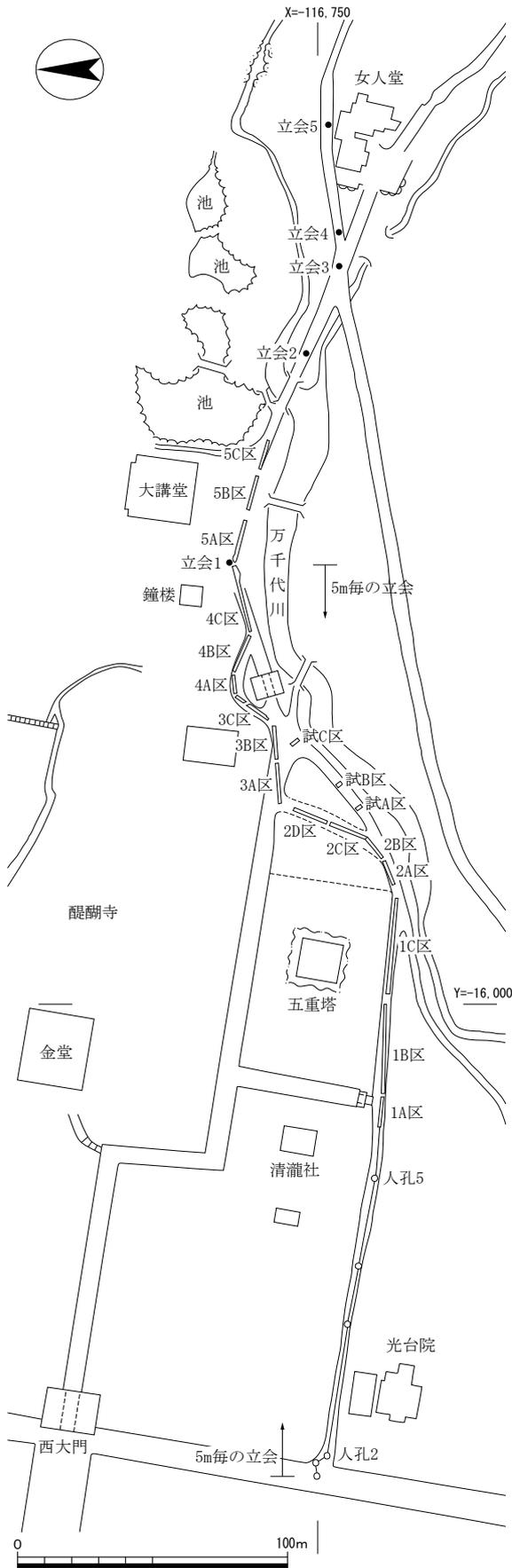


図86 調査区配置図 (1:2500)

かった。盛土層下の砂礫は1C区の東端で検出している自然堆積の砂礫層である。

2B区 近世の堆積層の下に平安時代末から鎌倉時代前期に造られたと考えられる土壇状遺構と、それに伴う柱穴、地鎮跡の可能性を持つ土壌を検出した。土壇状遺構(地業)は2B区のほとんどに及んでいる。東隣の深砂川(現万千代川)の洪水による砂礫層下で検出した。一番下に拳大の礫を敷きつめ、その上に12世紀後半の土師器を含む褐色土を敷き、最後に黄褐色の粘質土のシルトで覆っている。地業の粘質土を穿つ形で0.2mの礎石を伴う径0.3mの柱穴3基(柱穴2・9・10)が検出された。東隣は川で、建物の端にある束柱の可能性はある。その建物より時期が下がると思われるが、根固め石の痕跡と考えられる土壌(土壌3・5)がある。土壌3は調査区南寄りで検出し、長径0.8m、短径0.5mを測る。土壌5は調査区の北東で検出し、径1.0m前後を測る。土壌12(2C区土壌37)は2B区北端と2C区南端で検出した。南北1.2m、東西1.0mの円形であり、上記地業を穿った形で造られている。遺物は土師器皿と青白磁合子がある。青白磁合子の下に土師器が置かれた状態で出土しており、地鎮に関する遺構の可能性もある。

2C区 2B区で検出した土壇状遺構は2C区全域に広がっている。一部断ち割ったところ、黄褐色の粘質土の下には平安時代末から鎌倉時代初頭の土器を含む拳大の礫敷きがあり、その下が地山になることを確認した。礎石を伴い確実な柱穴と思われるものが2基(柱穴25・29)ある。礎石は約0.4m、柱間は3.0mで、五重塔と同一方向である。その他、柱穴と考えられるものに柱穴16・22・

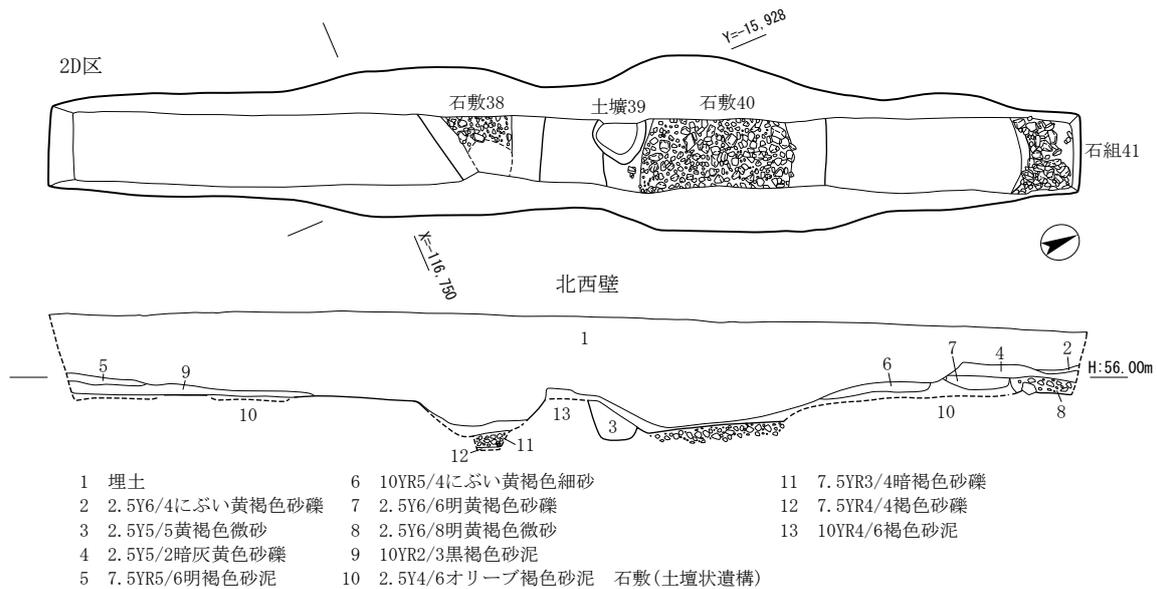
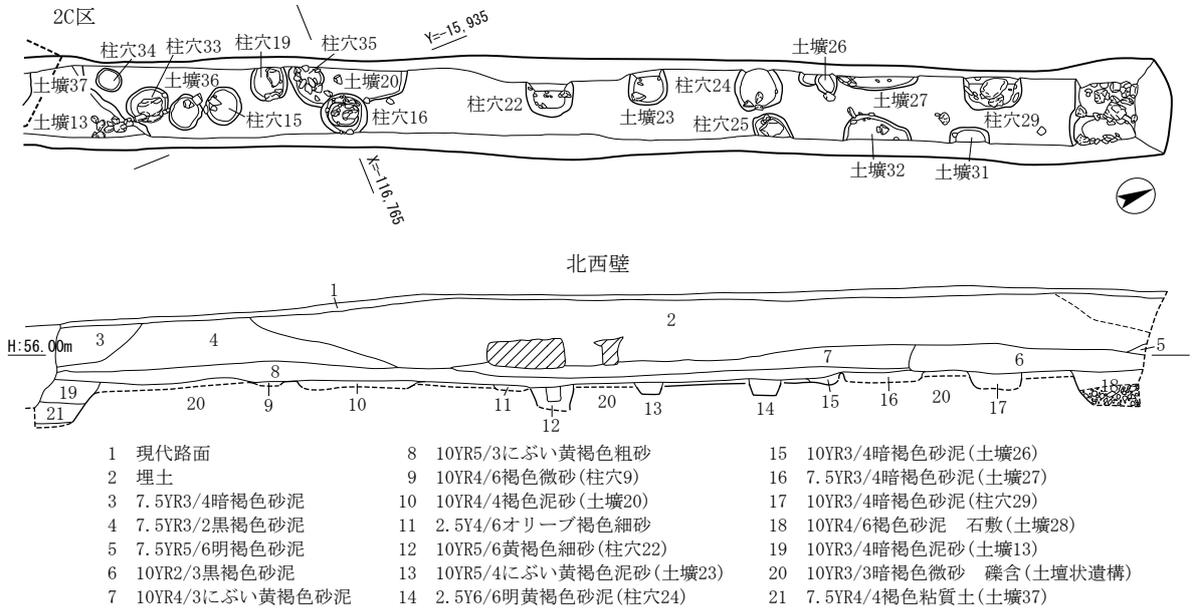
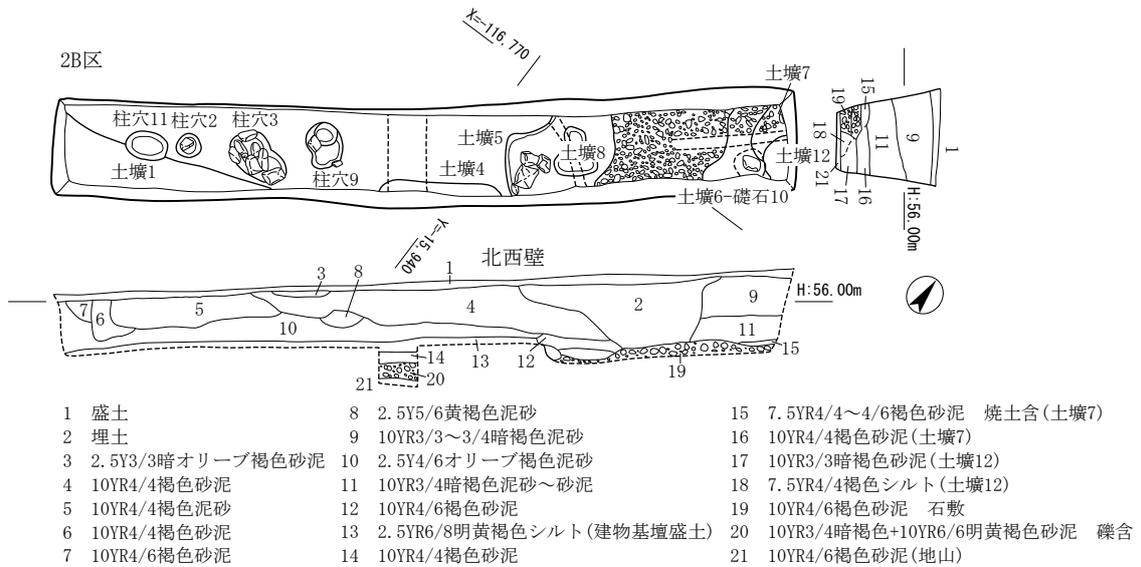


図87 遺構実測図 (1:100)

33がある。その他に、2B区で検出したのと同じ土壌13（2B区土壌7）が土壇状遺構を穿っている。その下に土壌37（2B区土壌12）がある。

2D区 土壇状遺構は2D区北端付近まで続いている。北端では、東西に走ると思われる礫敷き（石組41）を検出した。拳大の礫を高さ0.2m積み上げている。北側が東西に流れる側溝と上醍醐への参道となっており、子院を画する築地に伴うものか、側溝の護岸に関連する施設と考えられる。

3A区 東半部は防火用水の鉄管が走り0.5m以下は調査ができなかった。調査地東から西に向かつては砂礫に覆われている。洪水による削平を受け、調査地の北側は挟られ、砂礫層が堆積している。砂礫層下の深さ0.4m下で整地層を検出した。整地層は砂礫層の南側の肩部を形成している。調査区西端から東へ10m広がっている。整地層は東側で砂礫層によって削平される。この砂礫層は東の深砂川の氾濫に伴う東西流路を形成している。砂礫層からは棧瓦が出土しており、近世の砂礫層と断定した。

3B区 露出していた石列の下は砂礫層で覆われ、砂礫層を区切る北側の肩部（整地層）を検出した。砂礫層は西に傾斜しており、西端では深さ1.5m以上、幅2.0m以上を測る。したがって、砂礫層は万千代川がこの地点で直行した流路となり、堆積したものである。なお、この石列は下の近世の砂礫層より上にあるので、近現代に造られたものと考えられる。東側の山門にとりつく石段の一部とみられる。

3C区 南半部は上水や防火用水のパイプが縦横に走り、0.3m以下は調査が不可能であった。3B区から続く路面下の砂礫層は調査地の南端で北端部を検出した。整地層は、深さ0.2mから下に0.15mほどの厚さで検出された。その下は砂礫層となっている。

4A区 3区から続く整地層は続行する。

4B区 整地層は同様に続行する。整地層は2層に分かれており、深さ0.2～0.8mに及ぶ。調査地東端では、整地層を切る形で砂礫層を検出した。砂礫層底部からは近世の瓦片が出土している。

4C区 東半分は塩化ビニールパイプが縦断している。掘削はその面までしかできず、中央部で0.8m、東端では0.2mまでであった。4B区で検出した砂礫層は、東方向に徐々に深くなる。したがって、調査地東半部は砂礫層のみとなり、整地層は削平されている。整地層からは平安時代後期の軒平瓦の他、三島唐津焼の破片が出土している。

5A区 西端では深さ1.5mで整地層の上面が認められるが、東に進むにしたがって砂礫が深くなる。

5B区 西端では1.7mの深さで砂礫層となる。5B区全域が同様の様相を示す。

5C区 一部で深さ1.5mまで掘削したが、路面とその直下は全面砂礫層である。水道の鉄管が調査地を縦断しており、一部を除いて深さ0.3mまでの掘削となった。

試掘調査区 どの調査区も川岸寄りに砂礫層が堆積するが、試掘A・B区については、深さ1.5mで中央から西に黄褐色の粘質土による整地層が検出された。試掘C区については調査区内の西

側 1.0 mより西寄りに、粘質土の整地層が検出された。その結果、2区で検出した整地層は現在の万千代川岸近くまで存在することがわかった。しかし、その上に堆積する砂礫層が、川に近づくにしたがって深くなっている。

遺構 出土した遺物は、縄文時代後期中津式に属する土器がある。1 B・C区からの出土である。大きさは細片で十数個ある。

平安時代後期から鎌倉時代前期に属するものは土師器（図 88 - 1 ~ 5）、緑釉陶器、青白磁合子（6）、瓦などがある。特に、青白磁合子は蓋と思える小片もあり、身はほぼ完形である。3つの小壺をそなえた子持ちタイプのものである。中国景德鎮系列の産であろう。類品では広島県厳島出土のものや1997年度調査で宇治白川金色院に関連する経塚からも出土している。

瓦は遺物整理箱に7箱ほど出土している。南大門の1区の瓦溜からのものがほとんどである。軒瓦もあり、中房に巴文を置く複弁八葉の河内産軒丸瓦など醍醐寺特有のもの

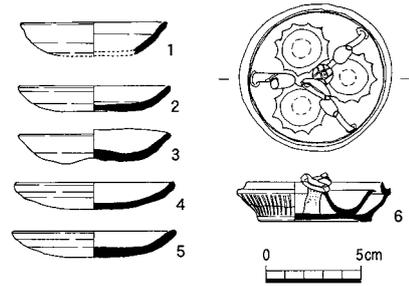


図 88 出土土器実測図 (1 : 4)

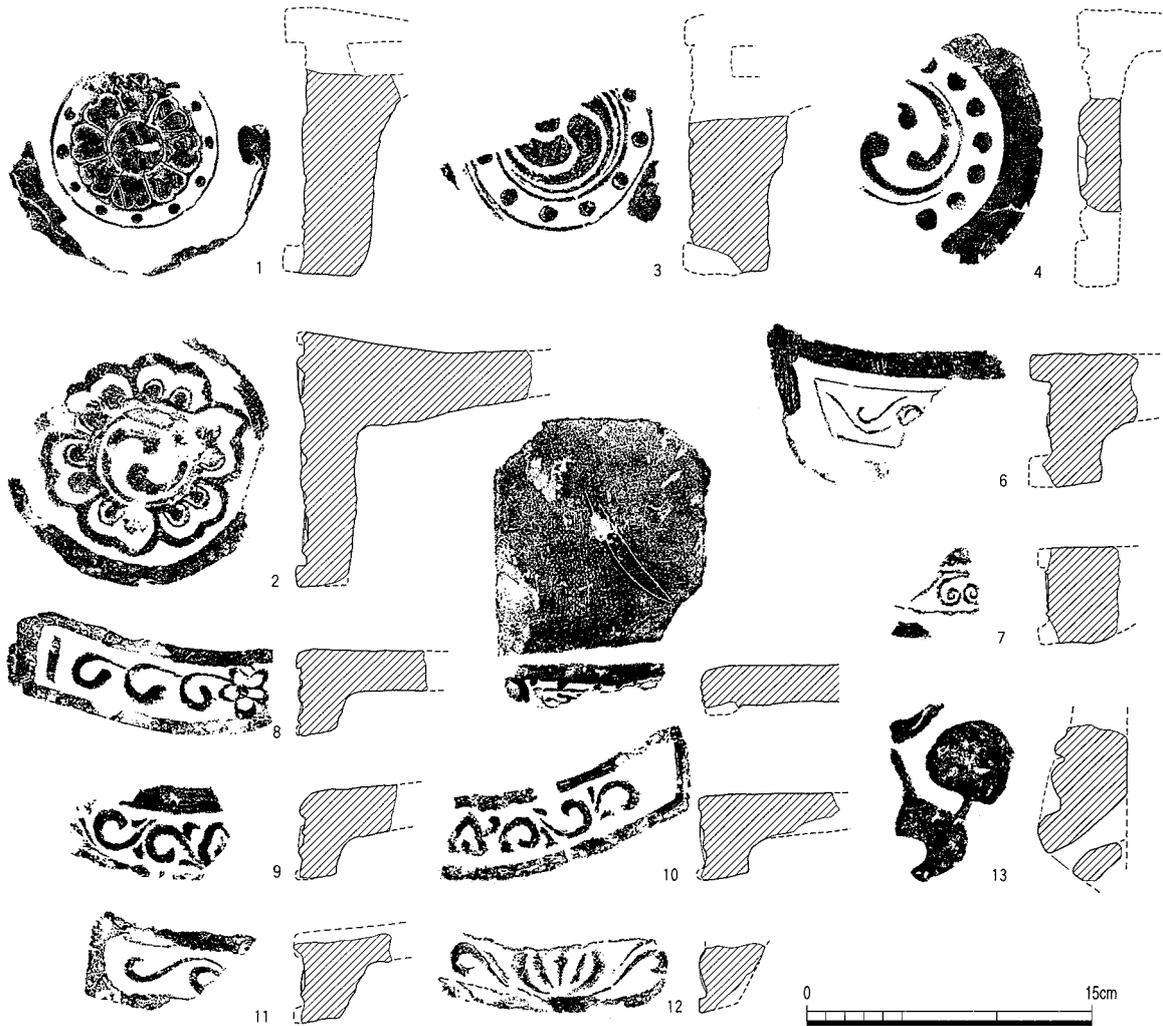


図 89 出土軒瓦実測図 (1 : 4)

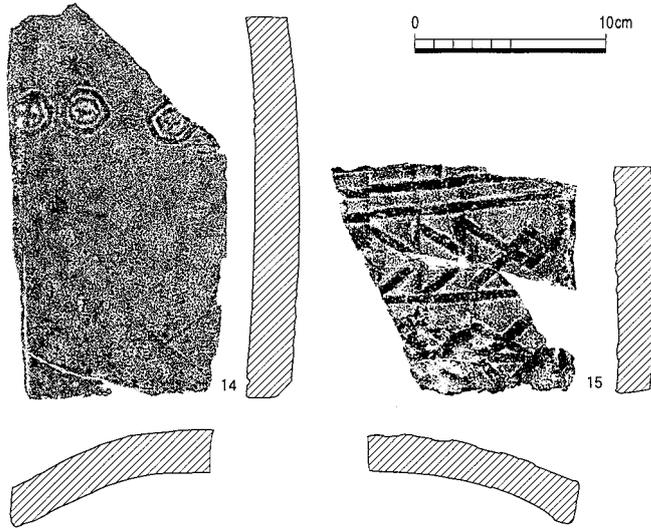


図90 出土平瓦実測図(1:4)

もある。

近世の遺物には染付や三島唐津の破片などが少量ある。また棧瓦などもある。これらは、主に近世の砂礫層からの出土である。

小結 五重塔東隣の調査地、すなわち2区で検出した遺構を中心に検討する。

(1) 土壇状遺構が子院のほぼ全域にあることは、特定の建物の基壇だけではなく、子院域全体にも平坦面を形成するために整地を行ったと考え

えざるを得ない。

(2) 建物の規模などは不明であるが、明らかに礎石を伴う柱穴が何個かあり、子院の存在はほぼ確実である。

(3) 整地面と柱穴の造営時期は平安時代末期から鎌倉時代前期に属する。

建物については醍醐寺の14世紀代の指図で五重の塔東に釈迦院、その東に報恩院があるとされている。釈迦院は西谷というところにあり、「水本」と号したとされている。近世には報恩院ともいわれていたとされている。^{註1} 報恩院は、35代座主である憲深(1192～1263)、すなわち報恩院流祖の時代に建立されたと考えられる。『醍醐寺新要録』にも「或古記云、極楽坊事 慶長五年(1253)八月之比、號報恩院云々」とあり、13世紀半ばには存在していたと考えられる。

また、『醍醐寺新要録』には、五重塔の東に隣接し、かつ報恩院の西に、承元4年(1210)供養の「観心院」があったと記載されている。釈迦院の創建時期が不明であるので即断はできないが、遺構と遺物との関係から、13世紀代には五重塔の東には「観心院」が存在したと考えられる。^{註2} その東に隣接して報恩院があったと想定できる。(津々池惣一)

註1 『山城名勝志』卷第十七

釈迦院 在西谷號水本 今伝報恩院

報恩院 號極楽坊 在下醍醐深沙橋邊 今日釈迦院

… 報恩院者下ノ醍醐炎魔堂ノ向ヒ也本ハ號ス極楽坊 …

註2 『醍醐寺新要録』卷第十二 観心院篇

一 號塔東房事 寅云、坊跡事、東門ノ南、五重塔婆ノ東ニ當ル 寺家築地之外也。

依テ號塔東房ト敷。古キ繪図ニ報恩院ノ西方ニ相並テアリ。

但當時ノ躰ハ深砂川流入テ屋敷ノ辰巳角欠テ三角也。…。

一 堂本尊事 古記云、東塔房下野阿闍梨新堂供養 承元四年五月十八日 …。

22 下三栖遺跡 (図版1・35)

遺構 調査は、油小路通共同溝敷設工事に伴う発掘調査である。同工事に伴う周辺の調査は平成5年(1993)より立会調査^{註1}が実施され、その成果を踏まえて平成8年(1996)から立会調査^{註2}や発掘調査が継続して行われ今回が5次調査となる。

調査地は宇治川北岸域にあたる。東には東高瀬川、濠川などが南流し、周辺には酒造工場や関西電力横大路変電所などが建ち並ぶ。西に国道1号線、北に府道大津・淀線(大手筋通)、南に外環状線などの主要幹線道路が通る。

今回の調査地は、1996・1997年度発掘調査地に西接し、1998年度発掘調査地に南接している。1996・1998年度の調査では鎌倉時代の建物・溝、奈良時代の竪穴住居などの集落に関わる遺構^{註3}を検出している。また1997年度の調査では中世から近世の流路、鎌倉時代の柱穴・溝・井戸などの遺構^{註4}を検出している。今回の調査は、それらの調査成果を踏まえ、関連する遺構・遺物の検出を主眼に調査を行った。調査は北から1区と2区に分け、1区は9月から重機を用いて現代盛土層・耕作土層を除去し、中世の遺構面から調査を開始した。2区は11月から重機により1区と同様に除去し、1区と並行して調査を進め2000年1月28日に完了した。

遺構 1区の基本層序は現代盛土層・近世耕作土層の下に第1面の黄褐色砂泥層(2.5Y5/3)、その下に第2面のにぶい黄褐色砂泥層(10YR5/3)、第3面は褐色砂泥層(10YR5/3)で、第4面はにぶい黄褐色粘土層(10YR4/3)である。

第1面で検出した遺構の総数は200であった。遺構は柱穴を含むピット群、土壇、墓、溝などである。鎌倉時代後期にあたる13世紀中頃から後半とみられる遺構が大半を占める。溝には溝1・2・40・48がある。溝は南北方向で、北をやや西に振る。特に溝1・40は、幅が0.8～1.7m、深さ0.25～0.40mと規模が大きい。柱穴を含むピット群、土壇はこの溝間に集中する。溝間のやや南では検出した柱穴群から掘立柱建物1が想定できた。南北・東西ともに3.1mの規模で、やや西傾する。土壇74・75は南北に細長い方形の土壇で、土師器、瓦器などが多量に出土した。南半では墓とみられる土壇169を検出した。規模は全長1.85m、幅0.86m、深さ0.3mで、土壇内には土師器、瓦器碗などの土器類の完形や銭貨(宋銭)、刀子が出土しており墓の可能性が高く、また木棺に使われたとみられる鉄釘が10数本も出土している。

第2面での遺構は総数は613と、遺構密度が高い。遺構は鎌倉時代前期から中期にあたる13世紀前半から半ばで、遺構には柱穴を含むピット群、土壇、溝、井戸などがある。調査区の北半部では舌状に張り出す溝590を検出した。溝幅は最大長で1.0m、深さ0.5m。東端では分流し

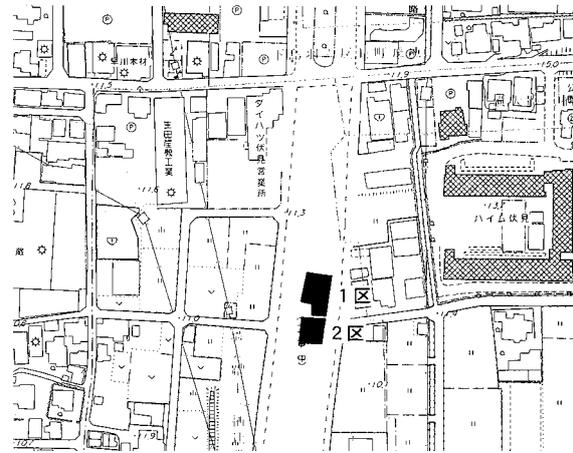


図91 調査位置図(1:5,000)

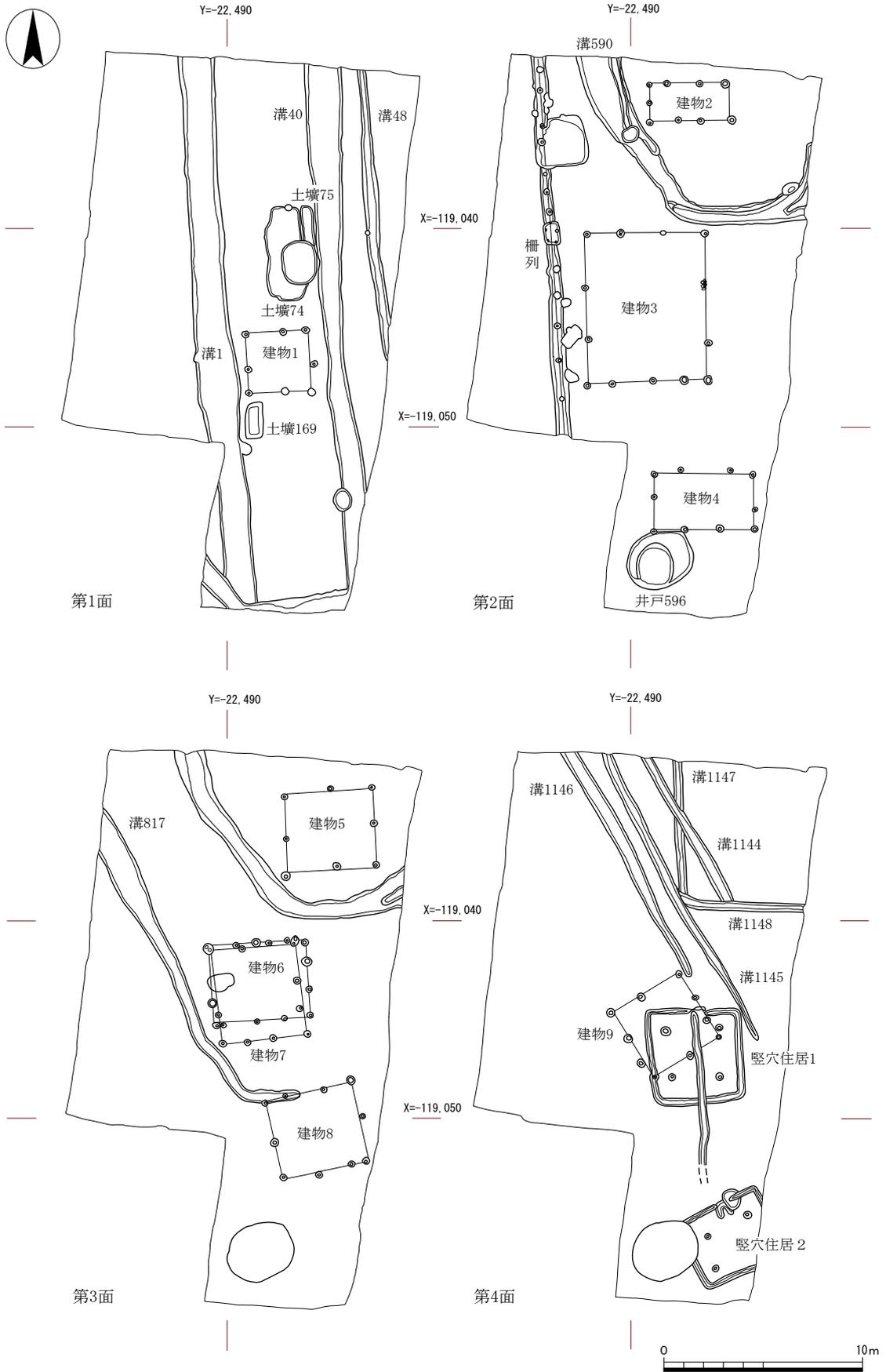


図92 1区遺構平面図 (1:300)

調査区外の東と北に延びる。さらに北端でも調査区外の北に延びる。柱穴を含むピット群、土壌は南西隅の一部を除く全面で検出した。調査区のほぼ中央部の柱穴群から掘立柱建物3が想定された。南北7.5 m×東西6.0 mの南北棟で、方向はやや西傾する。さらに溝590以北の柱列群から南北2.0 m×東西4.0 mの東西棟である掘立柱建物2が想定される。建物方向はほぼ真北である。さらに調査区南半部で掘立柱建物4の南北2.3 m×東西5.0 mの東西棟も想定した。建物南では井戸596を検出した。井戸は円形の素掘りで底に曲物を据えていた。また西半部では建物群と同一方向の柵列を南北19 mにわたり検出した。

第3面で検出した遺構の総数は326基であった。遺構は柱穴を含むピット群、土壌、溝、掘立柱建物などである。平安時代末期から鎌倉時代前期にあたる12世紀後半から13世紀前半の遺構が主体である。第2面で検出した舌状に張り出す溝590は、最大幅1.5 mと広がる。溝590の北に位置する掘立柱建物5は南北4.0 m×東西4.5 mの東西棟で、やや西傾する。北西から南東方向の溝817は南半で東折する。柱穴、土壌などの遺構は溝817以東に集中する。掘立柱建物6は南北4 m×東西5 mの西傾する東西棟である。掘立柱建物7は南北5.0 m×東西4.3 mで、建物6と重複する同一方向の南北棟であるが、柱穴の切り合い関係から建物6廃絶後の建物である。掘立柱建物8は南北4.0 m×東西4.5 mの西傾する東西棟である。

第4面の検出遺構の総数は192であった。遺構は柱穴を含むピット群、土壌、溝、掘立柱建物、竪穴住居などがある。遺構の時期は古墳時代後期から奈良時代にあたる6世紀後半から8世紀である。ほぼ中央部で検出した竪穴住居1は一辺4.5 mの隅丸方形を呈する。周囲には壁溝がめぐる。柱穴は4本で中央北端に竈が造られている。その北西には、竪穴住居1と同一方向の溝1147・1148を検出している。調査区の南端では竪穴住居2を検出した。南北3.8 m×東西4.5 mの長方形を呈する。住居の北西隅は第1面の井戸596に切れ、南東部は調査区外の東に延びる。柱穴は3基検出した。周囲には壁溝がめぐる。竈は中央北端より東にある。住居の方位は西

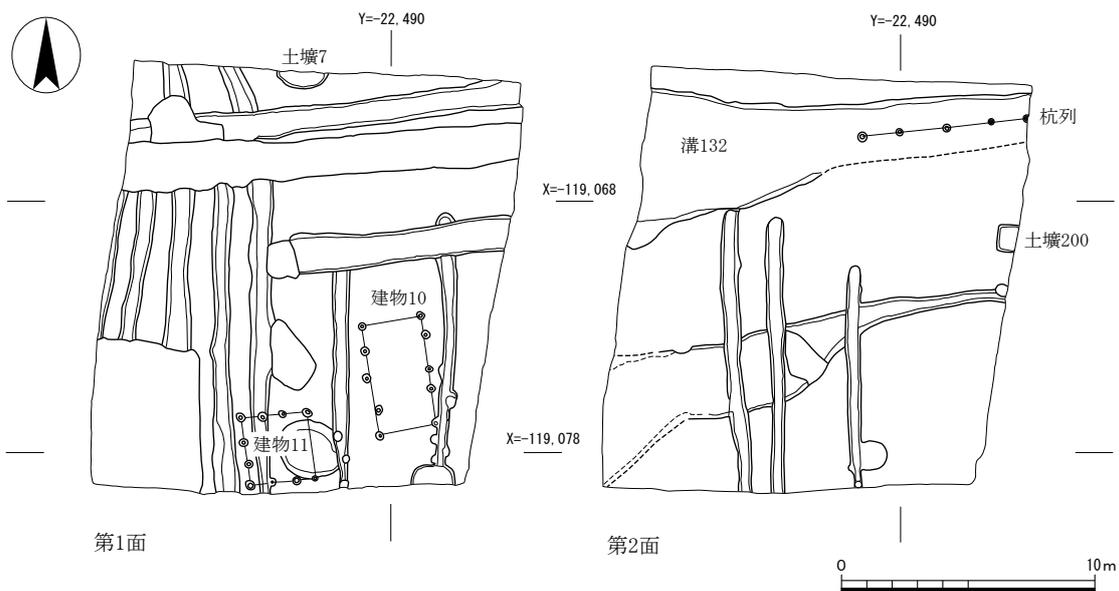


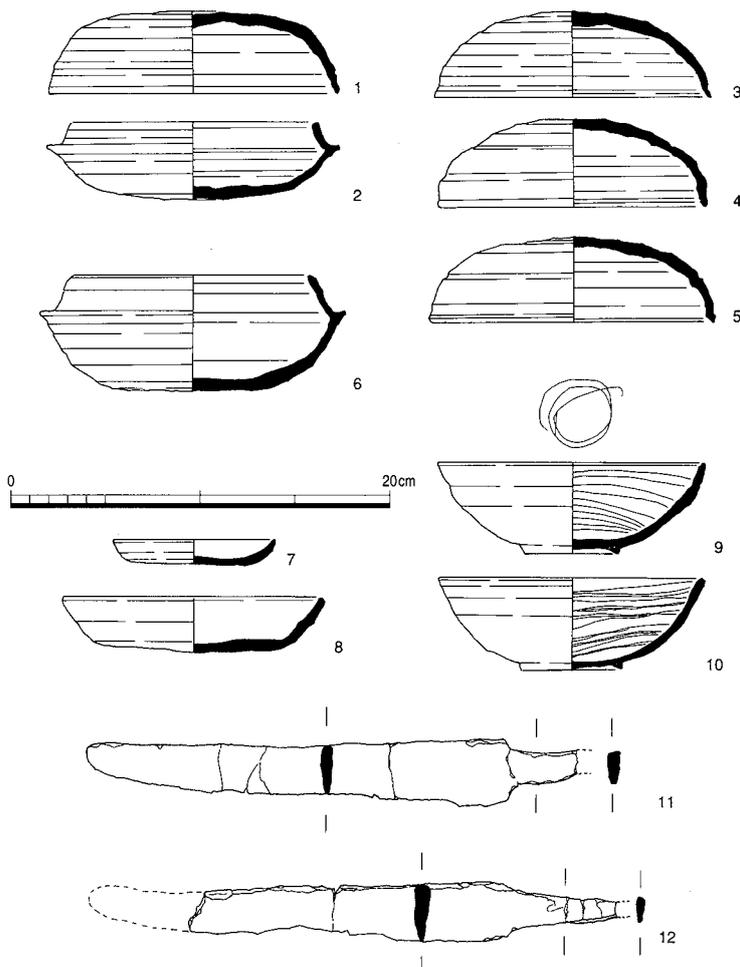
図93 2区遺構平面図 (1 : 300)

に傾く。溝 1144～1146 は北西から南東方向に流れを持つ奈良時代の溝である。柱穴、土壇などの遺構は、中央部に重複状態で密集していた。掘立柱建物 9 は奈良時代の溝群と同一方向の建物で、規模は南北 3.9 m×東西 4.0 m である。

2区は現代盛土、近世耕作土層の下で第1面、第2面を検出した。1区の南西部に堆積する旧流路跡を示す砂・礫層が全面に認められ、その上層に1区と同一の第1面である黄褐色砂泥層が広がる。第2面はオリーブ褐色細砂層 (2.5Y4/3) である。

第1面の遺構総数は130である。鎌倉時代後期から江戸時代の遺構を検出した。遺構には柱穴を含むピット群、土壇、溝、掘立柱建物などがある。鎌倉時代後期の柱穴・土壇・溝は南半部の東に集中する。掘立柱建物 10 は南北 4.3 m×東西 2.5 m の西傾する南北棟である。その西に掘立柱建物 11 が同一方向に並ぶ。建物 11 は南北 2.6 m×東西 2.5 m である。北端部で検出した土壇 7 は、土師器皿・瓦器碗の完形が多量に投棄された土壇で、規模は東西幅 2.0 m、南北長 0.6 m 以上である。北半部の東西溝群、西半部の南北溝群は江戸時代の耕作に伴う溝である。また第1面では、近世初頭に起きたとみられる地震による北西から南東方向に斜めに走る噴砂を数条確認した。

第2面で検出した遺構総数は73である。古墳時代後期から鎌倉時代中期の遺構を検出した。



遺構には柱穴を含むピット群、土壇、溝、墓がある。鎌倉時代中期の東西溝 132 は、現用水路により大きく削平を受けていたが、西端部で南肩と北肩の一部が残存していた。幅 5.6 m、深さ 1.0 m の大規模な溝である。溝内の東側では関連する杭列を東西 6.5 m にわたり検出した。

北半部の東端では古墳時代後期の墓とみられる土壇 200 の一部を検出した。規模は幅が 0.9 m、長さ 0.8 m 以上で、形状は長方形とみられる。攪乱を受けて基底部分が残存していた。土壇内からは副葬品とみられる須恵器杯蓋・身が合わさった状態で1セットと、蓋の完形品が出土した。

図 94 出土遺物実測図 (1～5: 2区土壇 200、
6: 1区ピット 1248 7～12: 1区土壇 169) (1:4)

遺物 遺物は整理箱に120箱出土した。出土した遺物は弥生時代から江戸時代までである。大半が土器類で他に瓦類、金属製品、木製品、石製品などがある。

土器類には土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、弥生土器がある。各土器を器種別にみると土師器には皿・台付皿・高杯・甕・壺・羽釜・器台、

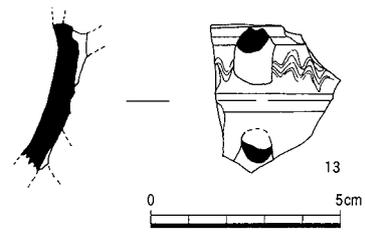


図95 1区溝2出土須恵器実測図
(1:4)

須恵器は杯身・杯蓋・瓶子・平瓶・鉢・片口鉢・甕、瓦器は椀・皿・鍋・甕・盤・火舎、焼締陶器は甕・鉢、輸入陶磁器は白磁椀・皿、青磁椀・皿・合子、青白磁合子。瓦類は軒丸・平瓦が数点あるがわずかである。金属製品は鉄釘、刀子、銅製煙管、銭貨などがある。木製品は板材、漆器がある。石製品には砥石、滑石鍋・羽釜がある。また鑄造に関連する坩堝もある。遺物を時期別にみると鎌倉時代前期から後期(13～14世紀)にかけての土器類が多く、その大半が1区の第1・2面の遺構群から出土している。遺構群から出土した土器類には土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器があるが、瓦器が多くを占める。

1区の第1面で検出した木棺墓とみられる土壌169からは土師器皿(7・8)、瓦器椀(9・10)・皿の完形と共に刀子(11・12)、棺材に使われた鉄釘、さらに「政和通寶」「開元通寶」などの宋銭が13枚出土している。また土壌74・75からは多量の土師器皿、瓦器椀などが出土し、完形品も多くみられる。輸入陶磁器は白磁椀、青磁椀・椀・合子などで、白磁椀は口縁部が玉縁状のものが多。同安窯系の青磁皿、龍泉窯系の青磁椀も比較的多い。南北溝1・40からは土師器皿、瓦器椀と共に特殊な用途に用いられたとみられる土師器台付皿が出土した。また溝1からは瓦器のミニチュア羽釜、青磁合子も出土している。溝2より1点であるが古墳時代中期の須恵器把手付椀が出土した(13)。一部に波状文が残る。

2区の第2面では土壌200の底部から古墳時代後期の須恵器杯蓋・身が1セットと蓋の、いずれも完形品(1～5)が出土した。また調査地一帯のベースとみられる砂層からは弥生土器壺が出土している。

小結 今回の調査成果を、隣接する既調査の結果に重ね合わせ、大きく3点に要約して以下にまとめておきたい。

まず第1に鎌倉時代の集落の一部を示す建物、溝、井戸、土壌などの遺構群の検出があげられる。1996年から1998年にかけての隣接地の発掘調査においても、同時期の遺構群が多数検出されている。特に2区に西接する1996年度調査では、紀伊郡条理4条の15・16坪の坪境の溝と、15坪内の掘立柱建物、井戸、土壌などが検出されている。今回の調査では、2区第2面の北半部で坪境溝の東への延長部を検出した。また南接する1998年度調査で検出された同一の南北溝3条も検出しており、15坪内の集落状況がさらに明らかになった。16坪内にあたる1区第2面では、南北の柵列と同一方向に掘立柱建物3棟、南端には井戸が配置された状況が判明した。建物3は規模からみて主屋で、建物4は副屋と考えられ、主屋・副屋と井戸を1単位として柵で囲んだ屋敷地の様相を確認している。また建物3を囲む舌状に張り出した溝SD590は、さらに北・東側

に延びる状況を示しており、調査区外にも建物が存在する可能性が高い。1区に西接する1997年度調査では当時期の遺構面が自然流路の砂礫層で、明確な遺構は井戸と流路・溝の検出にとどまっている。1区の西側では北西から南東方向の同一の流路を検出しており、この流路は16坪に立地する集落全体の区画に関係していた可能性が高い。

第2に古墳時代後期の竪穴住居2棟を検出したことである。竪穴住居を検出した1区は粘土層の堆積が厚く、かなり地盤が安定したところである。粘土層は断ち割り断面の観察から、調査区外東に厚くなる状況を示していた。今回検出した竪穴住居は集落の西端で、中心部はさらに調査区外の東側と考えられる。また1996年度調査では奈良時代の竪穴住居2棟を検出していることから、集落の変遷を考える上でも興味深い。2区北側の東端では、同時期の木棺墓の基底部が残存していた。調査外の東側に墓域の存在を示唆する事実として重要である。

第3に出土遺物の様相については、13世紀代の瓦器碗の出土量が多く、次いで土師器皿、瓦器羽釜、須恵器、焼締陶器、輸入陶磁器などがある。同時代の平安京内の土器の出土状況からみると、土師器と瓦器の関係が逆転しており、瓦器碗の使用・流通が今回の調査地と京内では異なる。ただ瓦器碗以外では輸入陶磁器も一定量出土しており、京内との類似も指摘できる。

同事業に伴う最終の発掘調査となったが、今後も周辺部の調査の必要性はいうまでもない。特に今回の調査地より東側に集落の重層的な広がりが予想される。東方への下三栖遺跡の範囲拡大が必要であろう。

(加納敬二・近藤章子)

註1 「調査一覧表 93 T B 456」『京都市内遺跡立会調査概報』平成6年度
京都市文化観光局 1995年

註2 尾藤徳行・竜子正彦「下三栖遺跡(96 T B 183)」『京都市内遺跡立会調査概報』平成8年度
京都市文化観光局 1996年

註3 桜井みどり「下三栖遺跡」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998年
南出俊彦・小森俊寛「下三栖遺跡」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
(財)京都市埋蔵文化財研究所 2000年

註4 百瀬正恒「下三栖遺跡」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998年

23 伏見城跡 (図版1・36・37)

遺構 今回の調査は、仮称桃山特別養護老人ホーム等整備事業に伴う発掘調査である。

調査地はJR桃山駅の南側に位置し、事前の試掘調査によって遺構の存在が確認された。また調査区南西側に隣接するマンション建設に伴う発掘調査(昭和62年度)では、町屋の一部を検出している。

これらのことから、今回も同様の遺構の検出が期待された。調査区南側を通る立売通に沿って、東西に細長い1トレンチを設定した。また

2トレンチは、試掘調査で検出した調査区西側の段差を確認するために設定した。

調査の結果、1トレンチでは慶長10年(1605)の火災によって焼失した町屋と、その後の変遷を明らかにした。2トレンチでは、この北側に存在したと考えられる武家屋敷との境界が判明した。

遺構 現在の立売通は、調査地に接する地点でやや南に屈曲しているが、これは鉄道の引き込み線の敷設に伴って行われたもので、本来はJR奈良線の線路を横断して直線的に延びていたものである。このため、調査区の東部では立売通の路面・側溝が検出されている。

基本層序は、鉄道敷設に伴う盛土層(約2m)、耕作土層(約0.2m)、江戸時代後期の遺構面、江戸時代中期、安土桃山時代の各遺構面となる。最終遺構面の標高は約37mである。

第1面は江戸時代後半から明治時代の遺構面である。立売通の路面・北側溝・耕作に伴う溝な

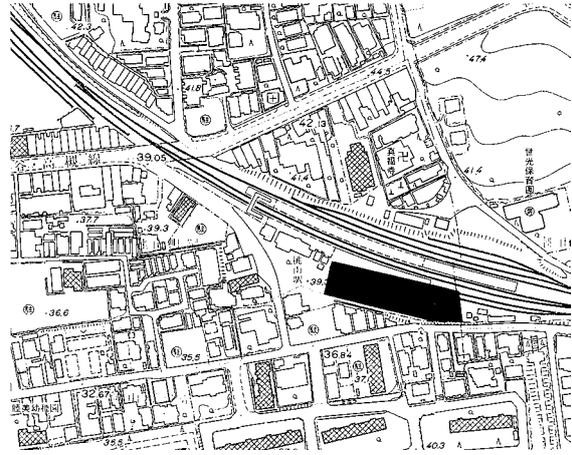


図96 調査位置図(1:5,000)

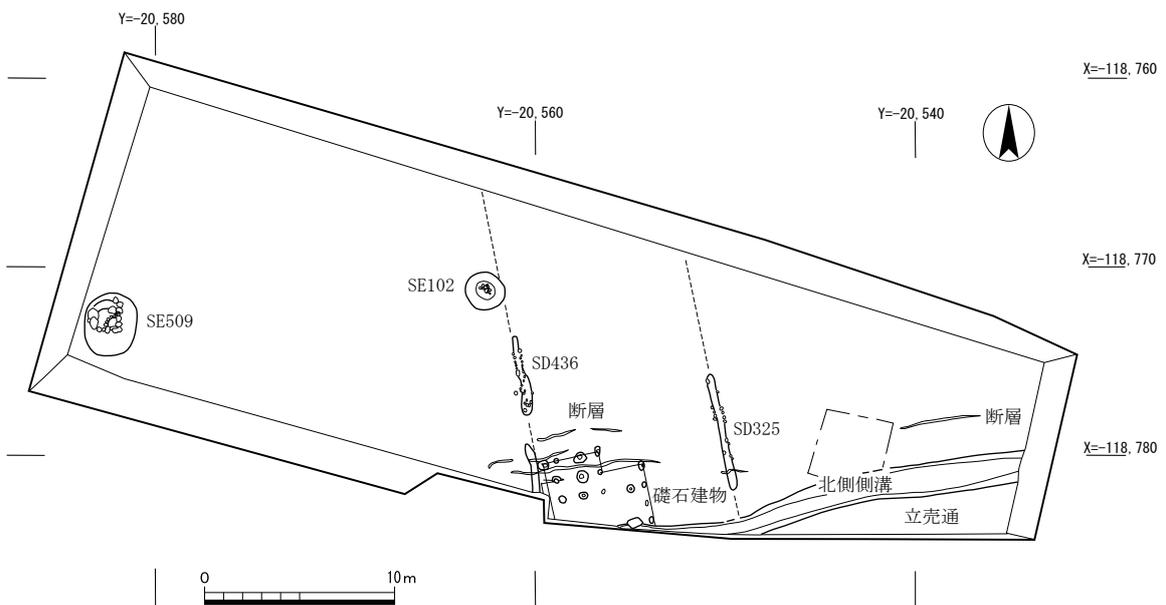


図97 1トレンチ第2面遺構平面図(1:400)

どを検出している。耕作に伴う溝は幅約0.3～0.5mで、東西・南北方向で検出した。

第2面は、江戸時代前半の遺構面である。礎石建物・井戸・立売通の路面・北側側溝などを検出している。礎石建物は立売通北側溝に面し、間口5m・奥行4mを測る。S D 325・436は立売通北側溝に直交する区画溝である。幅約0.4m、溝間の距離は約6mを測る。1トレンチ南西隅で検出したS E 509は、方形の石組井戸である。掘形径2.5m、石組みの一边は2.5～3.0mを測る。北東側の石組みは崩れており、階段状に粗く積み直している。S E 102は円形の縦板組みの井戸で、約0.2mの石が多く並べられていた。この石は、井戸廃絶時のまじないの一種と考えられる。第2面では、地震による東西方向の地割れと噴砂を検出している。琵琶湖西岸を中心とした寛文2年（1662）の地震によるものと考えられる。

第3面は、慶長10年の火災面である。礎石建物6棟、井戸、立売通路面・北側側溝などを検出した。遺構面では火災の跡を示す多量の炭と共に、熱を受けて赤く変色し割れた礎石と、赤く焼けた土間を検出した。この遺構面は、伏見城の城下町造営当初の遺構面である。断ち割り調査の結果、北西から南東に下がる傾斜地を北側で削り、南側で整地層を最大0.3m土盛りすることによって平坦面を造成したことが明らかとなっている。

立売通の路面にも帯状に焼け跡が残っており、これは火事の際に、建物などが路面に倒れ込んで焼けた痕跡と考えられる。路面は数回にわたって修復が行われたようで、断面観察によって何層にも重なった路面の石敷きを確認した。また轍の跡を修復したと思われる幅約0.3mの溝状に見える石列なども検出した。側溝は幅約0.7～1.0mで、長さ約20m分を検出した。

町屋の建物は、6棟（5軒分）を検出した。すべて礎石建ちの建物であった。建物は町屋の特徴である細長い土間を持つ。

建物1は、間口6m・奥行15mを測り、土間は幅1.2m・奥行6.5m分を検出した。土間は建物の東側に位置する。建物2は、間口4.6m・奥行9mを測る。土間は幅1.2m・奥行6.5m

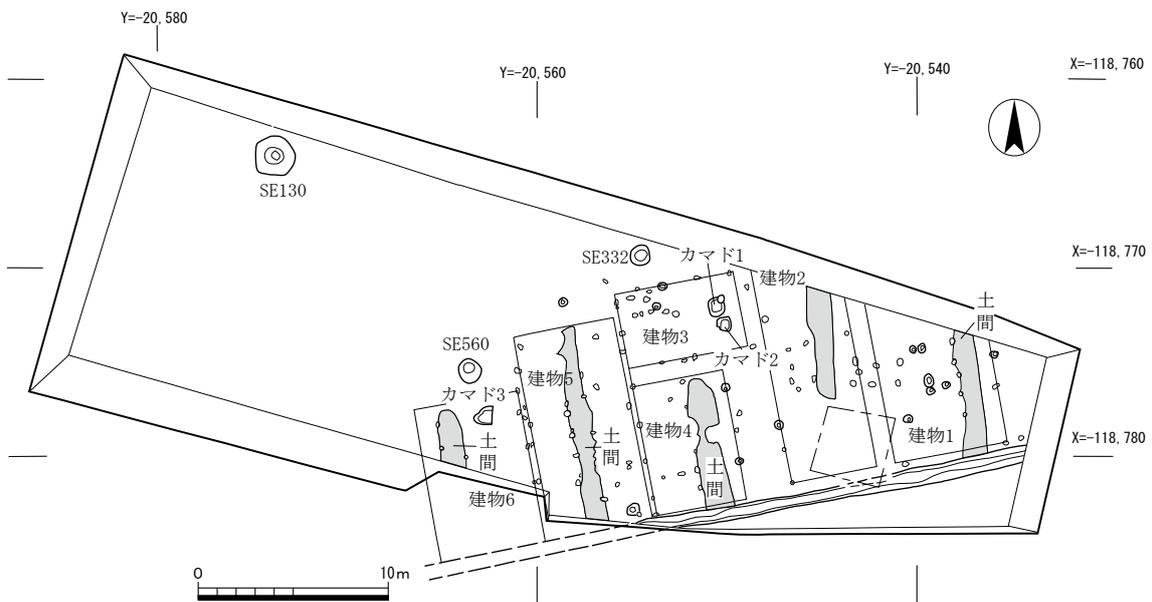


図98 1トレンチ第3面遺構平面図（1：400）

を検出した。土間は建物の東側に位置する。建物3は、東西6m・南北4mを測る。東の壁際では、竈が南北に2基（1・2）並んで検出されている。竈はそれぞれ幅・奥行き共に1mを測る。建物の壁際では厚さ0.2mの土壁の痕跡を検出しており、土壁作りの建物と考えられる。建物4は、建物3に対する主屋と考えられ、間口4.9m・奥行7mの建物である。建物2との間には、幅約2.5mの空地があり、これは建物3への通路と考えられる。床下の湿気抜き用と思われる小石を詰め込んだ直径0.5mの土嚢を検出した。

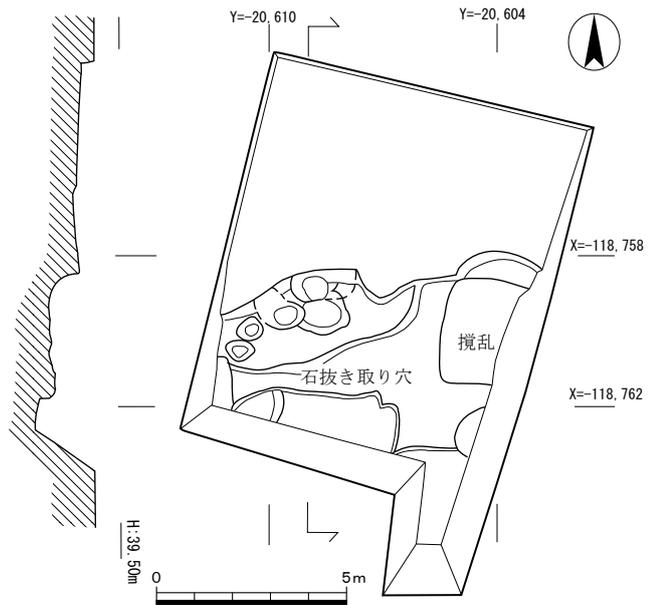


図99 2トレンチ遺構実測図（1：200）

建物5は、間口5.6m・奥行きは11mを測る。土間は建物中央に位置し、幅1mを測る。土間西側の建物内には礎石がほとんどなく、この部分は床が存在しなかったと考えられる。建物6は、建物の北半で幅4.6m・奥行7m分の土間を検出している。この建物だけ土間が西側にあり、カマド3は、土間の東側に位置している。

井戸は、建物3と6の北側で確認し、構造は共に円形の縦板組みである。S E 560が径約1m、S E 332が径約1m、深さは約2mを測る。S E 130は径2mの円形縦板組みの井戸である。

2トレンチでは、町屋と武家屋敷とを画する石垣の痕跡を確認した。南北約1.5mの段差に東西に連続する直径約1mの不整形な土嚢群があり、石垣の石の抜き取り穴と考えられる。抜き取り穴は、4.5mの幅で南北3列に検出しており、低い石積みを3列に階段状に並べたものと考えられる。この石垣は、立売通と平行しており、立売通からの距離は約30mを測る。これが、町屋の奥行きの規模となる。

遺構 安土桃山時代以降の遺物がほとんどである。少量なら室町時代前半の遺物も出土する。ここでは、現在整理中ではあるが、慶長10年火災の焼土層（火災後の整地層）からの出土遺物の概観を述べる。出土土器類の総破片数は約1000点で、土師器と瓦質土器が30%ずつを占め、中国製磁器が約10%、唐津と美濃・瀬戸製品がそれぞれ5%、焼締陶器は備前が8%、信楽が3%、丹波が1%となる。瓦類・土器類ともに火熱を受けた痕跡のあるものが多く、一定量が出土している。周辺の武家屋敷で使用されていたものが、火災後の整地の際に混じり込んだものと思われる。この瓦の存在を考慮すると、土器類の町屋と武家屋敷で使用されていたものが混在していると思われる。土師器は、器形や調整の特徴から3つに分かれる。（1・2）は内部底面の圈線が明瞭で、京都都市遺跡でも一般に出土するものである。（3・4）は厚手で内部圈線が不明瞭、口縁部の調整も粗い。胎土には砂粒を多く含む。（5・6）は内部底面の圈線が不明瞭であるが、薄手で作りも丁寧である。輸入陶磁器には青磁、白磁（10）、青花（7～9・11）がある。青花

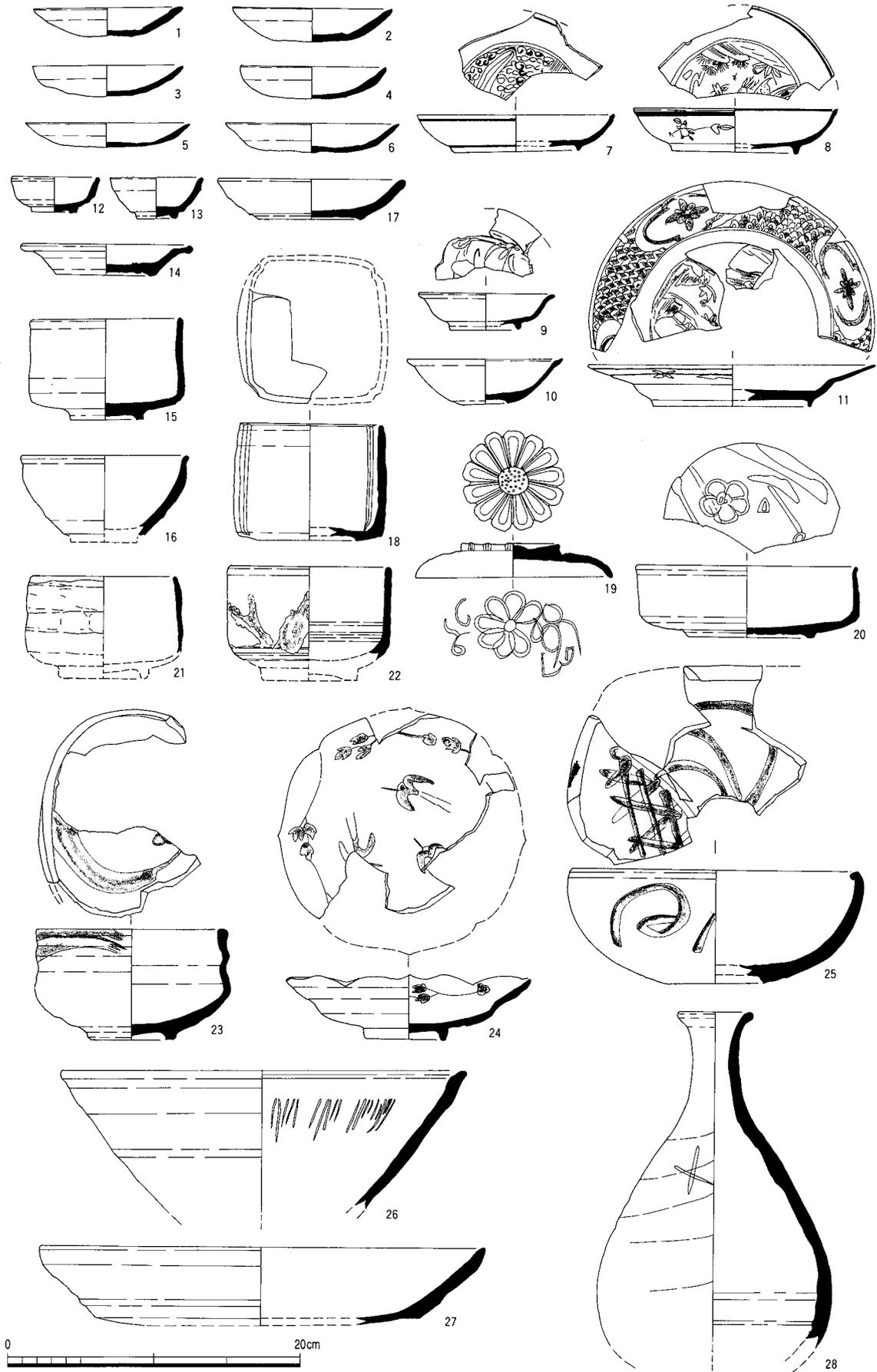


图 100 烧土层出土土器実测图 (1:4)

は粗製・精製共に出土するが、芙蓉手のものはない。瀬戸・美濃製品（12～20）では天目茶碗（16）や折縁の灰釉皿（14）などと共に志野の皿（17）・向付（18）、黄瀬戸の蓋（19）・向付（20）がある。焼締陶器は備前が主体となる。信楽播鉢（26）、丹波盤（27）、備前徳利形の瓶（28）などがある。唐津焼は椀（23・25）・皿類（24）の底部には胎土目が残し、鉄絵を施した大型品もある。京焼と思われるものには軟質施釉陶器椀（21・22）がある。瓦質土器には瓦燈・火鉢・鉢などがある。

小結 今回の調査の結果、江戸時代の立売通路面と北側側溝、立売通に面した町屋や、町屋と武家屋敷の境界の石垣痕跡を確認することができた。

伏見の城下町としての歴史は、天正20年（1592）に、豊臣秀吉が指月の丘に城を建設したことにはじまり、指月城と呼ばれている。この城は、文禄5年（慶長元年・1596）の大地震によって倒壊し、城は木幡山に移され、大規模な城郭・城下町が建設されたと考えられている。第3面で検出した火災面は、『鹿苑日録』などの文献史料にもみられる慶長10年（1605）の立売町一帯の火災によるものであることが、出土遺物からも確認できた。今回の調査地は、最初の伏見城である指月城の南側に隣接していたと考えられる。

町屋は第3面（17世紀）から存在しており、建物の裏に通じる細長い土間（通り庭）を持つ礎石建物であった。平入りの建物と考えられる。町屋の屋地の奥行き規模は、1トレンチの側溝と2トレンチで検出した石垣の痕跡から約30mであることが確認できた。この奥行きの規模は現在の伏見の町に残る街区の規模と同じであり、この30m・15間という規模が城下町の町割りの基本的な大きさといえる。

建物などの各遺構の方位は10度西に振っているが、これは今までの伏見城関連の発掘調査ではあまり例がなく、ほとんどは正方位に近いものである。ただし、府立桃山高校内の調査で、下層遺構の検出例がある。この遺構は指月城段階のものと考えられており、上層遺構では正方位に近い遺構方位となっている。木幡城の建設に伴って町割りが再編されたと考えられている。現在の伏見の町に残る街区もほとんどが正方位に近いものであるが、調査地周辺の大手筋より南側が歪んだ方位を持っている。今後、指月城の位置とその城下町を復元する上で、考慮すべき問題となる。

第3面より下層において、遺構は確認されなかった。今回検出された町屋が伏見城造営のどの過程で造られたかは明らかではない。しかし、これより古い遺構が存在しないことから、この地の伏見城城下町としての土地利用のはじまりは、町屋によると考えられる。第3面の町屋の存続時期は、遅くとも豊臣秀吉による木幡山の築城時には成立し、慶長10年の火災によって消失する。

以上、町割り・町屋の規模を明らかにするなど、伏見城城下町の一端が明らかになり、今後その姿を復元する上で重要な成果を得ることができた。

（桜井みどり・南 孝雄）

註 長谷川 達「伏見城跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第8冊
（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1983年

第2章 試掘・立会調査

I 平成11年度の試掘・立会調査概要

平成11年度試掘・立会調査件数は全部で12件であった。このうち試掘調査が7件、立会調査が4件、確認調査が1件であった。試掘調査のうち3件が発掘調査に移行し、第1章で報告されている。立会調査の中には、市内一円で年間を通して行っている国庫補助事業に伴うものが1件として数えられているが、これについては『京都市内遺跡立会調査概報』平成11・12年度に報告されているのでこれを参照いただきたい。

平安宮・京跡 平安宮朝堂院・豊楽院跡（1）の調査は、配水管敷設替えに伴う立会調査で、豊楽院・朝堂院の北部と朝堂院西部を、東西・南北に断ち割る形で実施されたものである。造営位置を動いていない顕著な遺構の検出はなかったが、朝堂院修式堂付近で凝灰岩がまとまって出土するなど、多くの事実が判明した。また、千本通竹屋町の交差点付近で行われた立会調査（2）では、良好に整地層が残存していることが再確認されている。宮内の遺跡残存状況は、家屋部分比べて道路内での残りが良好な場合があり、こうした敷設工事に伴う調査は今後も継続実施する必要がある。

東寺講堂須弥壇の試掘調査（3）は、講堂諸仏の修復時期にあわせて、本尊の大日如来台座部の沈下を防ぐ補強工事前の、版築の状況などを調査したものである。小面積の調査ではあるが、講堂須弥壇の変遷、地山面の確認、さらには造営計画時に設置されたとみられる杭の発見など、多くの事実が判明した。平安京左京九条四坊の試掘調査（4）は都市再開発整備に伴うものである。付近は鴨川に近く、その氾濫原であることを確認した。

その他の遺跡 史跡仁和寺御所跡の調査（8）では、寺城南東隅で江戸時代の南北方向の築地を検出している。JR複線化工事に伴う法性寺跡・貞観寺跡（9）の立会調査は、長区間にわたり実施した。稻荷山西麓は多くの寺院遺跡が連続しており、その一端ではあるものの、多くの知見を得ることができた。

今年度試掘・立会調査の中で特筆すべきは、平安京造営当初からその位置を踏襲してきた東寺講堂須弥壇の調査であろう。平安京復元にさいして、東寺南大門・金堂・講堂・食堂・北大門の南北中軸線は、何にもまして欠かすことのできないものとなっている。その一つである講堂中心本尊の座す真下に、東寺造営の基準というべき杭の発見は、平安京発掘史の中でも最大級の成果とって過言ではなからう。

（長宗繁一）

II 平安宮・京跡

1 平安宮朝堂院・豊楽殿跡 (図版1)

経過 中京区丸太町通一筋南通りの、七本松通から千本通他地内において、京都市水道局によって配水管敷設替え工事が計画された。工事は、周知の遺跡である平安宮の朝堂院と豊楽院を縦断・横断する計画となっており、朝堂院の龍尾壇・白虎樓・修式堂・永寧堂、豊楽院の西華堂・東華堂など平安宮内での主要な建物の検出が予想された。このため、京都市埋蔵文化財調査センターの指導により、施工業者福田建設・盛重建設の協力を得て、立会調査を行った。

調査は、試掘掘り、仮設管の埋設工事、本管工事、枝管工事、旧管撤去工事に伴い、図 102

のようにNo. 1～121 地点までの番号を付け、断面観察、図面作成、写真撮影、遺物採集などを行った。調査面積は約 900 m²、総延長は約 1500 m で、調査は平成 11 年 (1999) 5 月 10 日から 9 月 3 日までの間に行った。

遺構 現地形は、南北通と東西通が交差するNo. 65 地点の標高は 42.77 m で、これから西の七本松通までは約 0.5 m 低くなり、南の二条通までは約 3.5 m 低くなる。平安宮関連の遺構は「豊楽殿」北側で整地層を検出したが、江戸時代に粘土を採取した土取穴が多く、平安時代の遺構はほとんど残っていなかった。

No. 1～18 地点では、現地表下 1.5～2.0 m まで近世の盛土層であった。No. 1・3 は豊楽院西限、No. 14～16 は「西華堂」に推定されたが、No. 18 地点で検出されたコンクリート蓋の暗渠から西側は、現地表下 2 m まで近代の盛土層であった。

No. 19～35 地点では、豊楽院の「豊楽殿」と「清暑堂」間の渡り廊下に推定される。No. 23 地点 (図 103) のように、現地表下 0.2～0.7 m で多くの凝灰岩の破片や瓦を含む整地層を検出したが、調査地点の多くは近代の攪乱があり、該当遺構は検出されていない。

No. 36～52 地点では、豊楽院の「東華堂」に推定される位置で、現地表下約 0.4 m で地山となる。この地山の粘土を採取したと考えられる近世土取穴から、多くの遺物が出土した。

No. 53～71 地点では、朝堂院の「白虎樓」に推定される。No. 57 地点では地表下 0.35 m、No. 65 地点では地表下 0.6 m で地山が検出されたが、他の地点では、近世の攪乱を受けていた。

No. 72～85 地点では、朝堂院の「龍尾壇」南の空白地域にあたる。No. 72・76・85 地点 (図 103) では、地表下 0.5 m で地山が検出され、粘土を採取した近世の土取穴から多量の瓦が出土

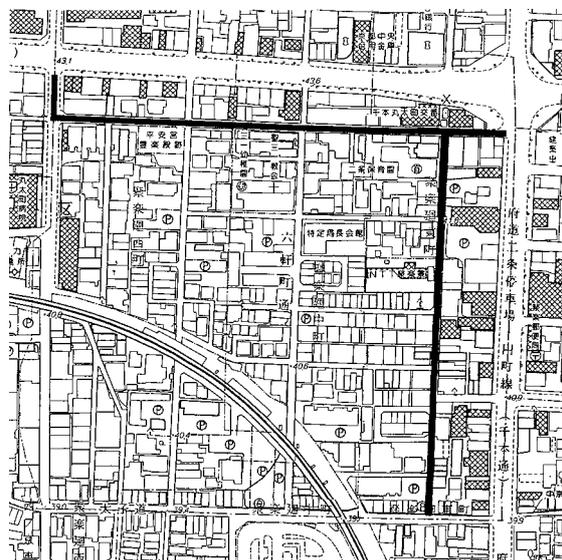


図 101 調査位置図 (1 : 5, 000)

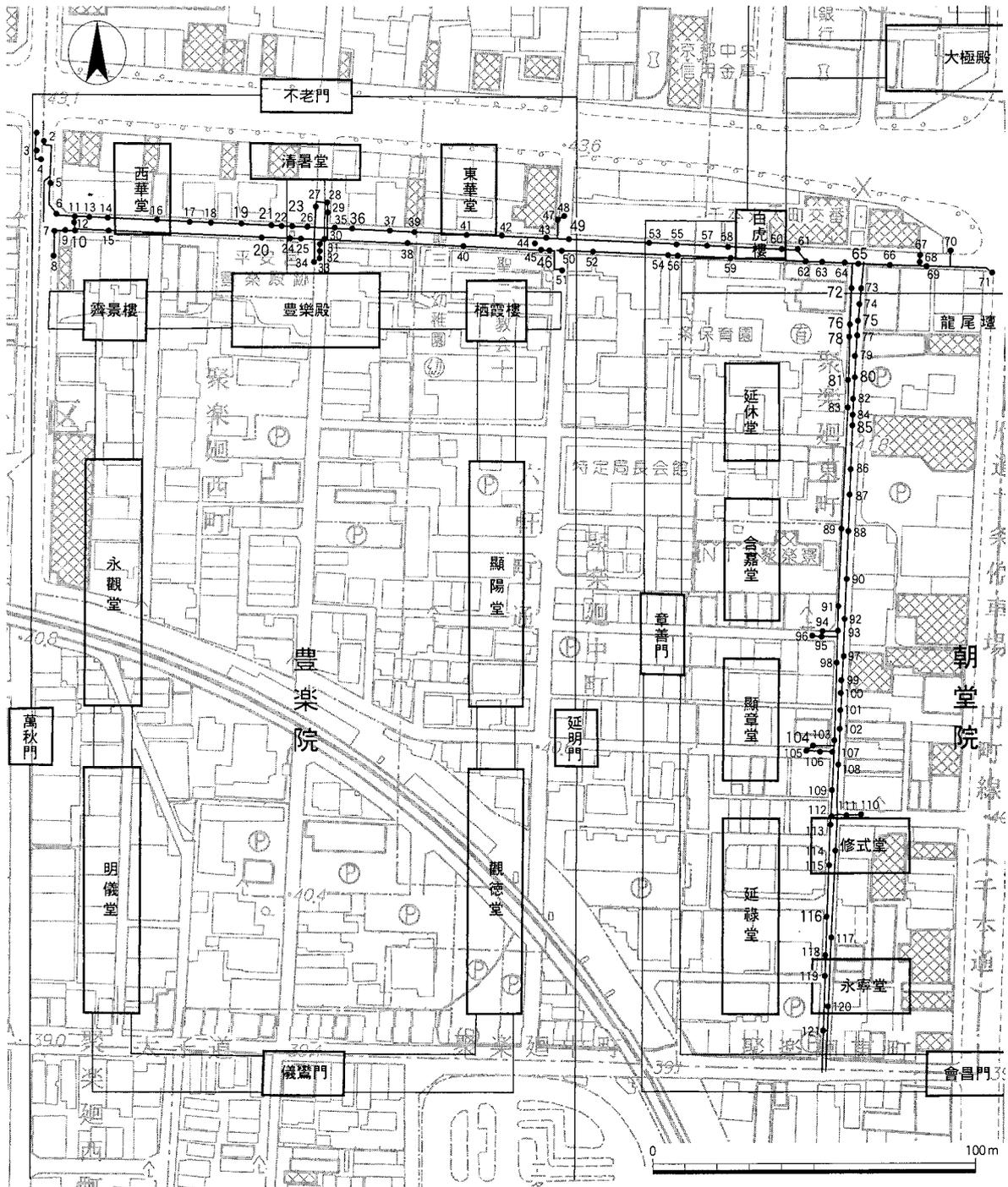


図 102 遺構検出地点位置図 (1 : 2, 000)

した。

No. 86 ~ 109 地点では、「顯章堂」東の、特にNo. 103 ~ 107 地点から遺物が多く出土した。

No. 110 ~ 115 地点では、「修式堂」に推定される。地表下 0.2 m で、一辺 0.3 m の凝灰岩を 5 個検出した。1971 年の下水道工事の時検出された凝灰岩の基壇の延長であるが、原位置ではないものと考えられる。遺物は少ない。

No. 116 ~ 121 地点では、「永寧堂」に関連するものは検出されていない。

遺物 遺物整理箱 61 箱のうち、平安時代の遺物は大半が瓦類や凝灰岩片で、土器類はほとん

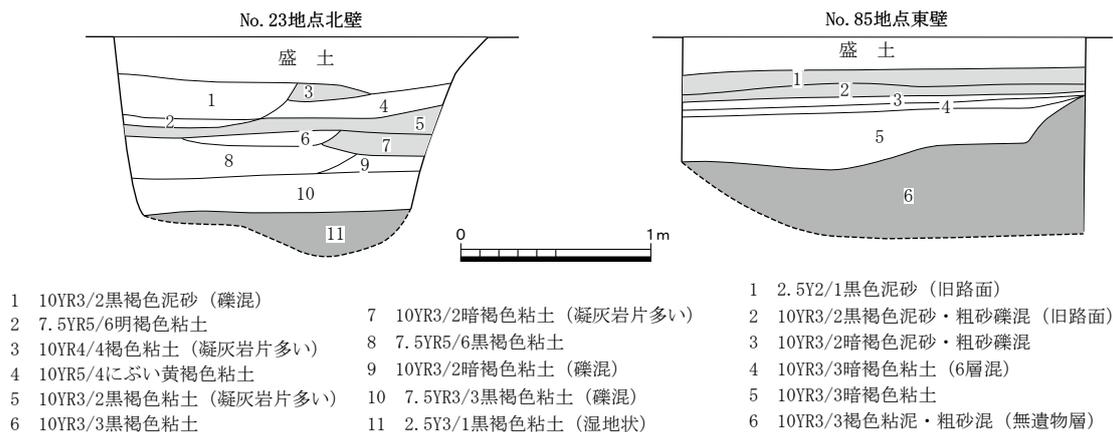


図103 No. 23・85地点断面図（1：40）

ど出土しなかった。「豊楽殿」北側、「栖霞樓」北東、「龍尾壇」南の空白地域、「顕章堂」東側、「修式堂」の5地域から遺物が出土した。その他に、近世の土取穴や近・現代の攪乱埋土から、中世の土師器皿、江戸時代の瓦、陶器、染付などが出土した。また、黒色土器、白磁、高杯、埴塙、鋳型、甌、砥石、七輪、碇子、天目、泥面子、煙管なども出土している。

「豊楽殿」の北側では、No. 23・29地点の整地層から少量の土器類、瓦類、凝灰岩の小片が出土した。また、旧管理土などから多くの瓦・凝灰岩片が出土した。その中には（1～4）の瓦がある。また（図107）のように、面取りの加工痕が残る長辺30cm以上の凝灰岩の破片が数点出土した。これは豊楽院で使用されたものが、以前の配水管埋設工事時に埋め戻されたものと考えられる。

「栖霞樓」北東側では、多くの瓦が出土した。その中には（5・6）の軒瓦がある。

「龍尾壇」南の空白地域では、多量の瓦と凝灰岩片が出土した。それらの中には（7～9）の瓦がある。また、緑釉瓦の小片も数十点出土した。

「顕章堂」東側では、多くの瓦とともに、（20）の鬼瓦片が出土した。

「修式堂」付近では、石列を3個検出した。昭和46年（1971）秋の下水道工事に伴う立会調査^{註1}で検出された凝灰岩の基壇延石列の延長であった。しかし、一辺30cmほどの大きさなので、近代の側溝工事で割られ、移動されたものと考えられる。また、下水管や旧水道管理土からも、30cm角の凝灰岩の切石が出土した。さらに「修式堂」南側から（21）の軒丸瓦が出土した。

5・7は平安時代前期のもの、1・2・4・8～17・19・21は平安時代中期のもの、6は平安時代後期のものである。3・20は平安時代前半に属するとみられる。

8・10・11・13・15～17・19は南都関係（興福寺・法隆寺）の瓦に類例が認められる。1・3～5・7・14・20は西賀茂瓦窯・栗栖野瓦窯などの官窯で生産されたものである。8は亀岡市篠で生産されたものである。

複線唐草文軒平瓦（1）は河上瓦窯の製品に近いが、近似するのは釈迦谷廃寺出土品である。外区の珠文が小さい。No. 19地点出土。

「門司」銘丸瓦（2）は12と同じく、格子叩きを施し、中間に「門司」銘を平行して入れている。類例には「警固」「平井」などがあり、北九州の地名を冠する瓦屋を示すと思われる。搬入瓦である。

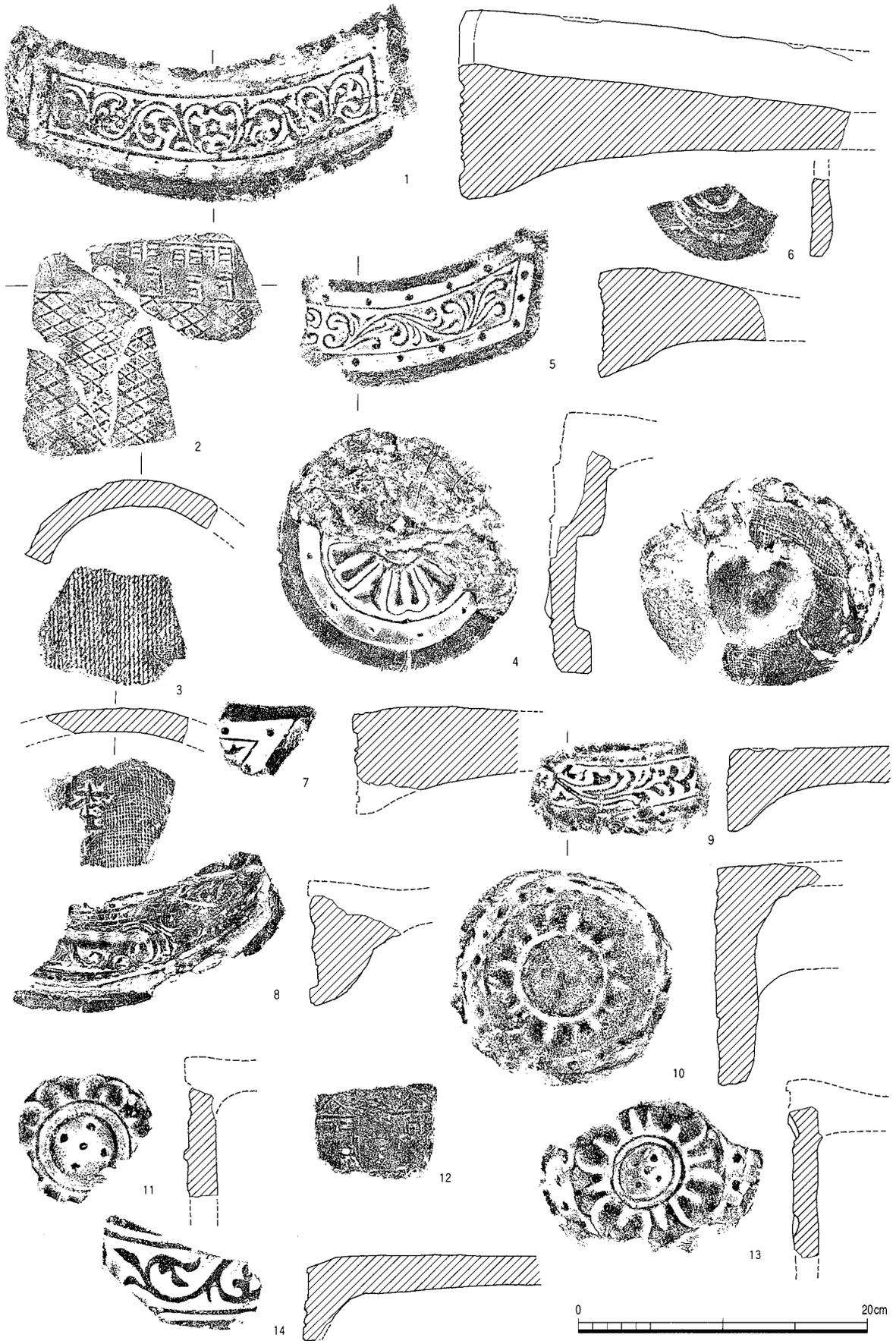


图 104 出土瓦実測图 1 (1 : 4)

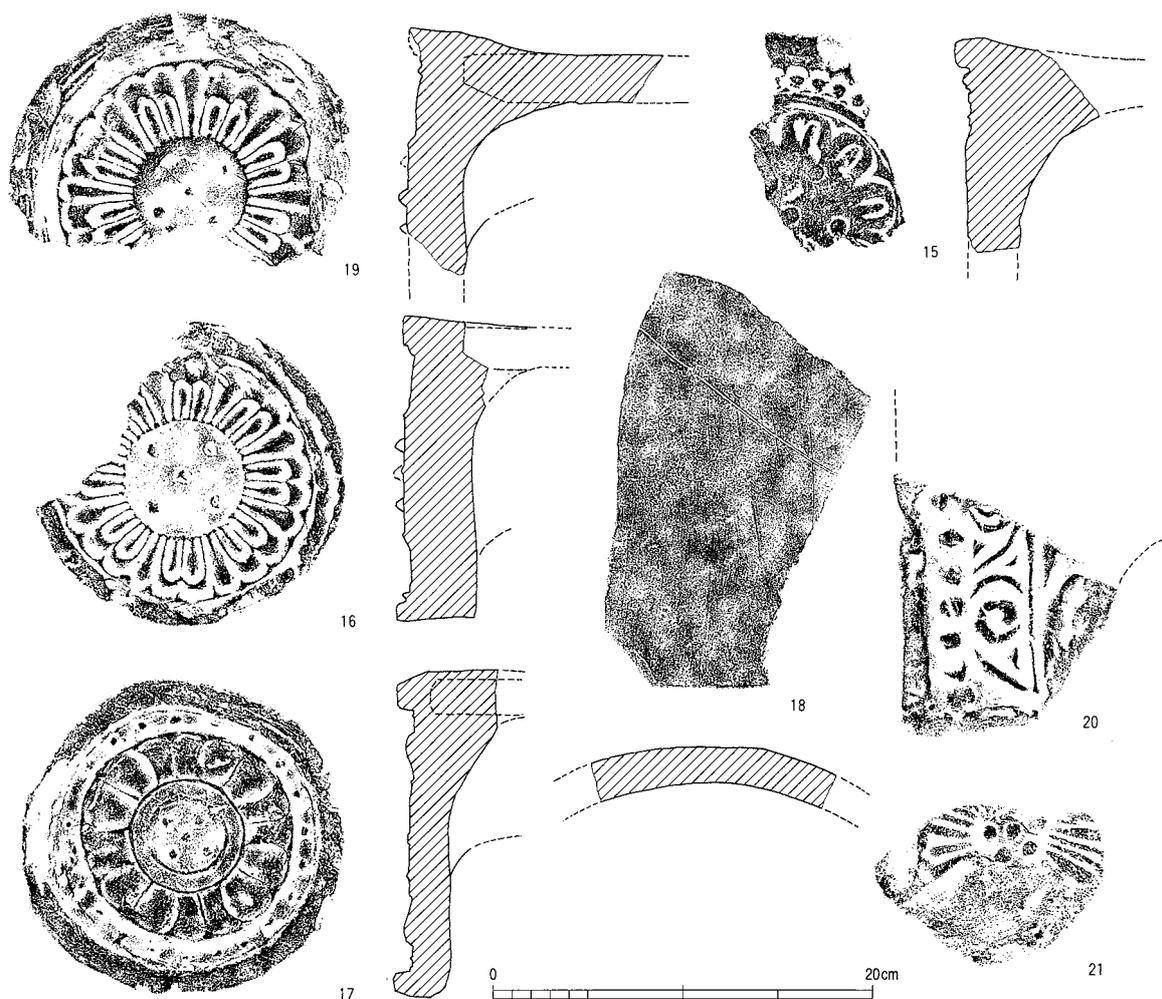


図 105 出土瓦実測図 2 (1 : 4)

No. 20 地点出土。

「木工」銘平瓦 (3) は凹面に木工寮銘を入れるもので、栗栖野瓦屋が木工寮支配を受けた時のものか。No. 21 地点出土。

複弁蓮華文軒丸瓦 (4) は裏布、一本造り。不完全な形で瓦当面と筒部が接合されているもので、粘土が筒部と一体化していないのが特徴である。No. 36 地点出土。

均整唐草文軒平瓦 (5) はC字対向の中心線から左右に展開する三葉の蕨手である。No. 46 地点出土。

巴文軒丸瓦 (6) は小型の瓦で、文様は不明瞭に入り、左巻きである。No. 49 地点出土。

緑釉唐草文軒平瓦 (7) は粗い砂粒を多く含む硬い焼きになっている。No. 75 地点出土。

唐草文軒平瓦 (8) は瓦面の文様の仕上がりが浅く乱れている。外区の珠文は細かく密である。顎裏面に粗い縄目タタキが入り、篠瓦窯の製品である。No. 75 地点出土。

唐草文軒平瓦 (9) は小片で全体を決しがたい。No. 76 地点出土。

複弁蓮華文軒丸瓦 (10) は全体に磨耗が進み、花文様ははっきりしない。No. 76 地点出土。

複弁蓮華文軒丸瓦 (11) は中房に 1 + 4 の蓮子を配する。17 と同じだが、13 とは大きさが異なる。外区の珠文は小さい。この外側に一条の圈線が入り、外周に至る。No. 76 地点出土。



图 106 出土軒瓦

「門司」銘丸瓦(12)は2と同じ銘のものである。No. 78 地点出土。

複弁蓮華文軒丸瓦(13)は中房に1+4の蓮子を配し、内区を二重線によって画し、四つの花卉の弁間文も複弁によって示す。珠文はしっかりしている。No. 78 地点出土。

均整唐草文軒平瓦(14)は折り曲げ式で太い唐草文である。No. 80 地点出土。

単弁蓮華文軒丸瓦(15)は中房と内区の区画がはっきりしないまま花卉に至り、外区との間には細い圏線と太い圏線の二条がある。外区の珠文は大きく、竹筒状で密に入れる。No. 80 地点出土。

複弁蓮華文軒丸瓦(16)は中房に1+4の蓮子。2と同文であるが、范型が少し小さい。No. 80 地点出土。

複弁蓮華文軒丸瓦(17)は中房に1+4の蓮子を配する。11と同じだが、13とは大きさが異なる。外区の珠文は小さく、この外側に一条の圏線が入り、外周に至る。No. 80 地点出土。

平瓦(18)は凸面をナデて仕上げ、一線のへら書きがある。No. 80 地点出土。

複弁蓮華文軒丸瓦(19)は中房に1+4の蓮子。複弁が長く伸び長大である。圏線は花卉をなぞる様にめぐる。No. 81 地点出土。

唐草文鬼瓦片(20)は外区部に唐草文をめぐらしている。No. 104 地点出土。

複弁蓮華文軒丸瓦(21)は中房に1+6の蓮子。中心部のみの小片である。No. 116 地点出土。

凝灰岩(図107)は縦38cm、横18cm、残存長33cmである。加工面は鉄分で変色し7.5YR7/8黄褐色を呈しているが、内部は5Y4/1灰色である。凝灰岩中には、長石粒や直径0.2~2.0cmの黒色・灰色の小礫が多数含まれる。軟質で、奈良県二上山北側の穴虫峠どんずる坊の産と思われる。豊楽院の塀と西華堂の間の上水旧管理土から出土したが、昭和62年(1987)の豊楽殿発掘調査時の延石・地覆石・羽目石とは、大きさが異なっている。No. 10 地点出土。

出土瓦が1箇所の瓦窯のものでないことから、平安時代中期には官窯だけでは生産と集中管理ができなくなり、官窯以外の寺院付属瓦窯や須恵器窯、大宰府支配の瓦窯からの応援をあおぐ必要にせまられたとみられる。このことは、官窯の生産体制が縮小して、需要にこたえられない段

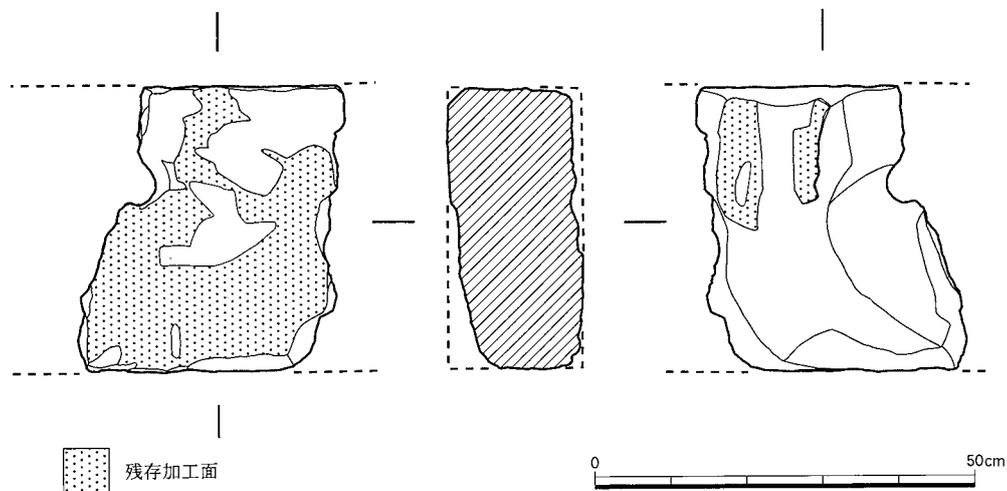


図107 出土凝灰岩実測図(1:10)

階になったものと考えられる。

小結 今回の立会調査で明らかになったことは、平安宮の遺構面が地表下 30～90 cmと浅いため、道路部分は江戸時代の土取穴で削平され、近代になって上下水道管の埋設工事で攪乱を受けていたことである。しかし、江戸時代の土取穴には周囲の瓦をまとめて廃棄しており、瓦類の出土は多い。

「豊楽院」で検出した整地層は、「豊楽殿」から「清暑堂」への渡り廊下の版築部分が後世の削平を受け、下層部が残ったものとする。買い上げになった「豊楽殿」公園北側の民有地の地表は、道路部分より高くなっているため、渡り廊下部分の残存の可能性は高い。また、「東華堂」付近の地山は浅く、周囲の民有地で遺構が遺存している可能性は高い。

「朝堂院」部分では、明確な遺構を検出できなかった。しかし、地山の残存していた「白虎樓」周辺、「龍尾壇」南側、側溝や上下水道などによる攪乱を受けていない「修式堂」付近の民家の敷地内には遺構が残存しているものと考えられる。 (南出俊彦・吉村正親・尾藤德行)

註1 伊藤玄三「平安宮朝堂院の遺構－延祿堂・修式堂－」『古代文化』第24巻第8号
(財)古代学協会 1972年

註2 鈴木久男「平安宮豊楽院(1)」『平安京跡発掘調査概報』昭和63年度
京都市文化観光局 1989年



図108 111地点朝堂院修式堂跡凝灰岩出土状況(北から)

2 平安宮朝堂院 (図版1)

経過 上京区千本通の竹屋町通交差点から夷川通交差点間の歩道部分において、京都市水道局により配水管布設替え工事が計画された。対象地は平安宮の中央部南側、朝堂院の南部分から会昌門を通り應天門に至る地点である。

調査は試験掘り、仮設管埋設、本管工事に伴いNo. 1～43の地点で断面観察を主に実施。適宜、写真撮影・遺物採集を行った。

遺構・遺物 千本通歩道下には、明治時代以降に造られた花崗岩による石積み側溝が全域にわたって確認された。また、下水道・ガス埋設管と並行する個所も多く、調査ポイントの大半は攪乱層であった。

比較的良好な層が認められたのは、竹屋町通交差点部分であった。No. 2・3地点で整地層とみられる黄褐色から褐色系の粗砂・砂泥層の堆積が、現代の路面直下(地表下0.35m)で確認できた。またNo. 5地点の地表下1.53mで、土壌とみられる深さ約0.1mの落込みを検出した。埋土からは布目痕のある平瓦が出土しているが、時期を決定するにはいたっていない。

出土・採集した遺物の大半は平安時代の平瓦であるが、出土層位の原位置を保つものはほとんどなく、近・現代の攪乱層か石組みの溝内からの出土である。瓦のほかには、竹屋町通交差点No. 3地点、出世稲荷前No. 23地点、竹屋町通西入No. 31地点の3箇所から凝灰岩の破片が出土している。

小結 今回の調査では、調査区のほとんどが近代の石組み側溝、旧埋設管による攪乱があり、竹屋町通交差点部分で整地層および土壌状の落込みを検出したにとどまる。

ただ既往の調査から、竹屋町通交差点付近は遺構の残存状態が比較的良好である。今回の調査で整地層を検出したことは、これが再確認された。近辺の今後の密な調査に期待する。

(吉本健吾)

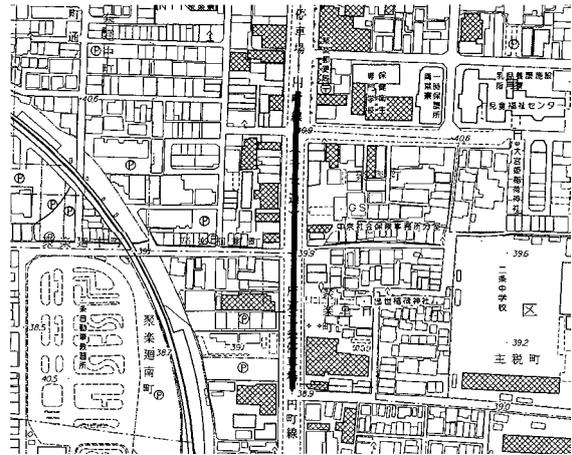


図109 調査位置図 (1 : 5,000)

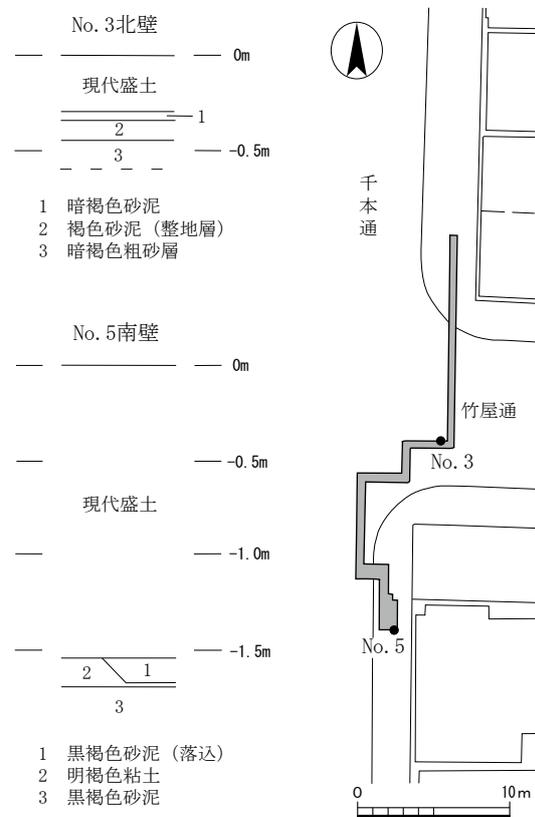


図110 No. 3・5地点位置図・柱状断面図 (1 : 500)

3 東寺講堂須弥壇 (図版1・38)

経過 調査区は東寺講堂須弥壇上の大日如来台座下部の八角形に組まれた石組みの内側である。今回の調査は平成10年度に実施した予備調査の後を受け、基壇の下部までを対象に、版築の状況や埋納遺構などの有無確認を目的とした。前回の調査で確認されていた北部土壌の壁面観察によると、現須弥壇上面から-80cmまでに、焼瓦や焼土を多く含む層が観察でき、数層の堆積が認められた。調査は中心を通るクロスセクションで、北東から時計回りに1～4区に分け、これらの土層を徐々に掘り下げながら進めた。

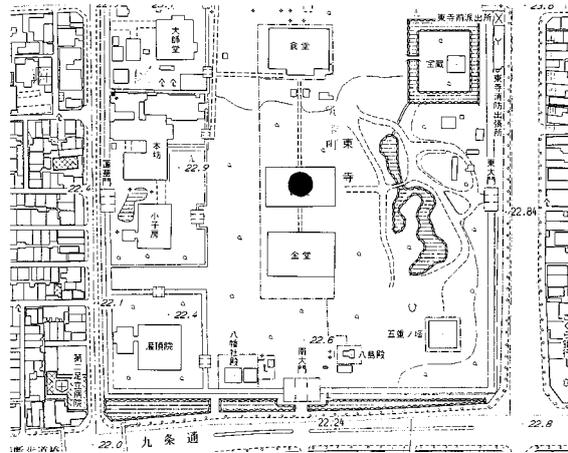
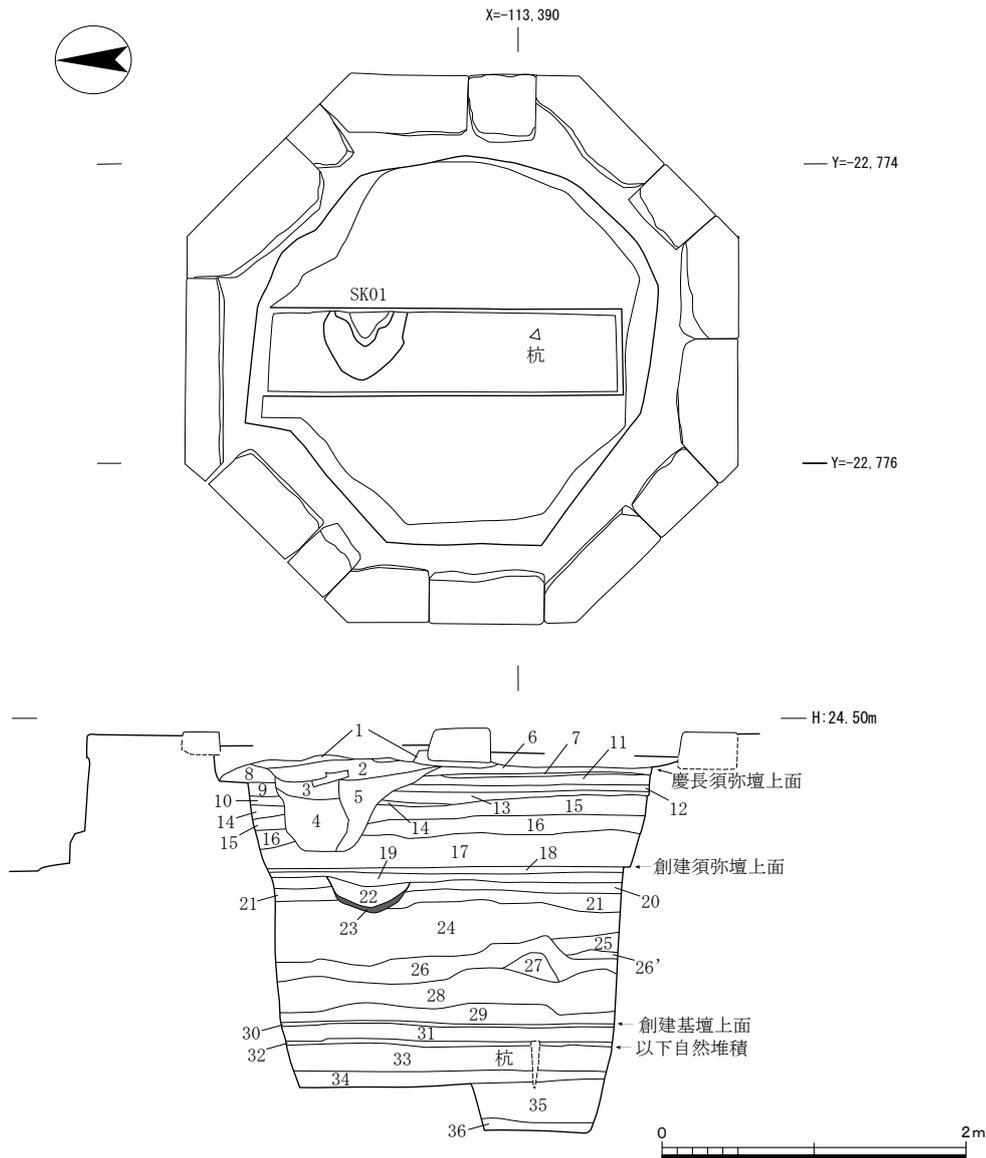


図111 調査位置図 (1:5,000)

遺構・遺物 焼瓦や焼土を含む土層を約70cmほど掘り下げると、堅く締まり、火を受けた痕跡のある面を検出した。この時点でここまでの土層を記録した後、クロスセクションを取り外し調査区全面を観察したところ、調査区南1/3より北側はあまり火を受けていないことを確認し、また数箇所朱の痕跡を認めた。この面を文明十八年(1486)に火災を受けた須弥壇すなわち創建須弥壇上面と考え、以下は中央南北方向に幅約60cmのトレンチを設定し断ち割りを行った。上面から約10cm下げたあたりで暗褐色の粘質ブロックを含む層に変わるが、その上面に木質の痕跡が残る部分があり、その面で炭化物を多く含む土壌(SK01)を検出した。須弥壇の積土は、上部約25cmでは薄く均一にならされた数層の版築が認められたが、それ以下は20～50cmと比較的厚い単位で積まれている。これを掘り下げ、上面から約1.1mで再び堅く締まった平坦な面が現れた。この面が創建時の基壇上面と思われる。さらに15cmほど掘り下げたところ、自然堆積層と思われる粘質土層を確認し、この面直上から打ち込まれた杭を検出した。杭の木質は腐食して空洞化しており、周囲の土に痕跡が残っていただけであったが、形状や木目などの痕跡はよくとどめており、材を断面三角形に割り裂いた長さ35cmのものであったことがわかる。杭跡を石膏で型どりし、復元できるようにした。また掘り出した版築土はすべて土壌に入れ保存した。

遺物はほぼすべてが瓦類で、その大部分が須弥壇再建時の版築土からの出土である。多くの瓦に火を受けた痕跡が認められる。焼土はスサを多く含む壁土や瓦下地で、瓦と共に火災により生じたものと推測される。また微細な破片ではあるが、緑釉が施された瓦が出土している。このほか再建須弥壇の土層中から「富寿神寶」が1枚出土した。

小結 調査の結果、創建時および再建時の須弥壇とその版築の状況を確認することができた。創建時の須弥壇から上部には焼土、焼瓦、壁土などを多量に含む積土層を検出し、その最上部に数枚の版築層を確認した。この面にまでの焼土などを含む積土が、文明十八年の火災の後に再建された須弥壇版築で、この最上面が慶長度の須弥壇と考えられる。創建時の須弥壇上面の火



- | | | | |
|----|---|-----|--|
| 1 | 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (漆喰片多量に含む) | 19 | 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 (炭混) |
| 2 | 10YR4/2~4/3にぶい灰黄褐色に近く堅く締まった粘質土 (礫・漆喰片含む) | 20 | 10YR6/4にぶい黄褐色砂泥・2.5Y5/6黄褐色砂泥・10YR3/2黒褐色粘質土 |
| 3 | 10YR3/4暗褐色砂泥 (漆喰含まず礫少ない、堅く締まる) | 21 | 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 (凝灰岩の細片混) |
| 4 | 10YR4/4褐色シルト (2.5Y5/3黄褐色シルト、7.5YR2/2黒褐色シルトブロック、漆喰混) | 22 | 10YR5/6黄褐色砂泥 (護摩跡土壇) |
| 5 | 7.5YR3/4暗褐色砂泥 (焼土・漆喰片含む) | 23 | 炭化木片、薄板状のものが多い |
| 6 | 10YR5/3にぶい黄褐色シルト | 24 | 10YR3/2黒褐色粘質土 (10YR5/4にぶい黄褐色砂泥混) |
| 7 | 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 (2.5YR暗褐色シルトブロック混) | 25 | 7.5YR4/4褐色砂泥 |
| 8 | 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥・10YR3/2黒褐色シルト・5YR4/6焼土 | 26 | 10YR4/4褐色砂泥 |
| 9 | 7.5YR4/3褐色シルト・10YR2/3黒褐色シルトブロック | 26' | 10YR5/8黄褐色砂泥 |
| 10 | 焼土・10YR2/3暗褐色砂泥 | 27 | 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 |
| 11 | 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 (暗褐色砂泥混) | 28 | 7.5YR4/3褐色粘質砂泥 |
| 12 | 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 (黒褐色粘土がマーブル状に混じる) | 29 | 10YR5/3にぶい黄褐色粘質砂泥 |
| 13 | 10YR4/4褐色砂泥 (炭・焼土混) | 30 | 10YR4/4褐色砂泥 (堅く締まる) |
| 14 | 10YR2/3黒褐色粘質土 | 31 | 10YR3/3暗褐色粘質砂泥 |
| 15 | 焼土・7.5YR5/4にぶい褐色砂泥 (堅く締まる) | 32 | 10YR4/3褐色砂泥 (堅く締まる) |
| 16 | 7.5YR5/4 (15層よりやや赤み帯びる、瓦片多く含み上面が堅く締まる) | 33 | 10YR4/6褐色粘質砂泥 (以下自然堆積層) |
| 17 | 7.5YR4/4褐色砂泥 | 34 | 10YR5/4にぶい黄褐色粘質砂泥 |
| 18 | 10YR4/4 (堅く締まった整地面、創建須弥壇上面) | 35 | 10YR5/3にぶい黄褐色シルト |
| | | 36 | 2.5Y5/2暗黄灰色砂泥 |

図112 遺構実測図 (1 : 50)

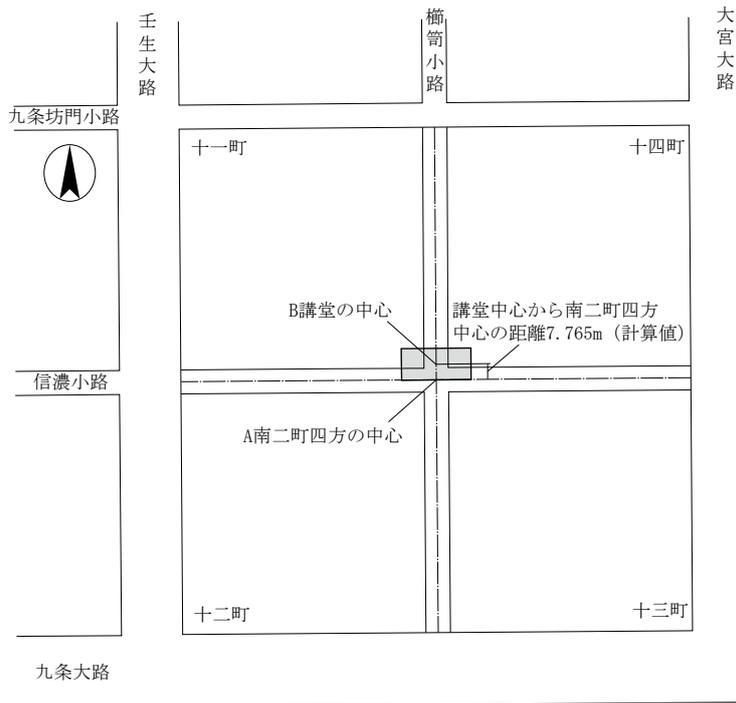


図113 木杭位置関係図（模式図）

災の形跡は、調査区南1/3より北側ではあまり顕著でなく、これらはおそらくこの場所に如来台座が置かれていたためと考えられる。またこの面の数箇所朱の痕跡を認めた。また創建須弥壇の化粧土直下に検出したSK01は薄板状の炭化木を多量に含んでおり、護摩の跡と推測できる。須弥壇完成直前に何らかの修法が行われたことを示すものであろう。さらに基壇最下層で割り付け杭とみられ

る木杭痕跡を検出したが、その位置は講堂の中心とほぼ一致している。この杭の座標と平安京条坊の数値モデル (Model 60/1990) により導き出した東寺南半部の中心位置 (櫛笥小路中心線と信濃小路中心線の交点) の座標とを比較した結果、東西方向で東に 0.11 m 東、南北方向では 7.52 m 北への差が確認できた。ここで検討基準とした Model 60 には ±1 m 程度の標準偏差が見込まれており、東西方向の差は無視できる数値としてよく、講堂東西中心は櫛笥小路中心線、つまり東寺寺域東西心に揃うことが改めて確認できた。残る南北方向の 7.52 m について検討すると、講堂の南および北の外側柱筋間の距離が 15.53 m、したがって講堂中心から南柱筋までの距離は 7.765 m となり南北方向のズレと近い数値が得られる。このことから講堂は、信濃小路中心線すなわち東寺寺域の南部 2 町四方の南北心に南柱筋を揃えて配置された可能性が極めて高いと考えられる。この想定にたてば、平安京条坊の数値モデルとの差は、0.245 m (南) となり、東西方向と同様に偏差の幅に十分収まる結果が得られる。

今回の調査では創建、再建時の須弥壇とその地業を確認することができた。調査範囲内では目的の一つであった埋納遺構などを検出することはできなかったが、創建時の護摩跡や杭跡の検出は予想外の発見であった。須弥壇版築の状況は記録とほぼ一致しており、東寺の変遷を知る重要な手がかりが得られた。また杭跡の発見から、東寺寺域に対する講堂の位置や平安京条坊との関連なども明らかになり、重要な成果を得られたといえよう。 (平尾政幸)

4 平安京左京九条四坊 (図版1)

経過 本調査は、東九条福祉地域まちづくり計画に伴う埋蔵文化財の試掘調査である。今回の調査対象地は平安京左京九条四坊十一町に該当する地域である。

調査トレンチは調査対象地約 5000 m²に対し、6箇所 315 m²のトレンチを設定した。今回の調査は、平安京関連遺構および平安時代以前の遺構などの残存状態を確認することを目的とした。

遺構 1 トレンチは大半が攪乱であったが、東半部最下層の地表下 1.0 m で中世の遺物と平安時代の土師器皿を含む鴨川の氾濫堆積層が認められた。

2 トレンチは、中・近世の耕作に伴う南北溝と近世の東西溝を検出した。

3 トレンチは、中・近世の遺構面下層に、江戸時代初期の氾濫堆積層がみとめられた。また、3 トレンチの断ち割りでは、幅 3.0 m、深さ 3.5 m まで掘削したが、出土遺物がなく、氾濫の時期を確定できなかった。

4 トレンチは遺構は認められなかった。

5 トレンチは、江戸時代中期から後期 (18 ~ 19 世紀) の蛇行した氾濫堆積層が認められた。

6 トレンチは、江戸時代の遺構面下層に室町時代の氾濫堆積層が認められた。

遺物 今回の調査で出土した遺物は、整理箱で 1 箱であった。土器類が多く、大半は中・近世の土器類であった。平安時代の土師器、須恵器、青磁、灰釉陶器なども出土したが、これらの遺物は河川の氾濫層に含まれていたものである。中世の遺物は、鴨川の氾濫層に含まれる土師器、陶器、磁器などがある。江戸時代の遺物は、土師器、瓦器、瓦、天目茶碗などがある。ほかに木片類がある。

小結 調査の結果、1 トレンチは鴨川の氾濫層が認められた。2・3 トレンチも時期差のある氾濫層が認められた。5・6 トレンチは江戸時代の遺構と室町時代の氾濫層を検出した。

今回の調査では、各トレンチとも、平安時代の明確な遺構は確認できなかった。2 トレンチで検出した溝群は中・近世の耕作に伴うものである。

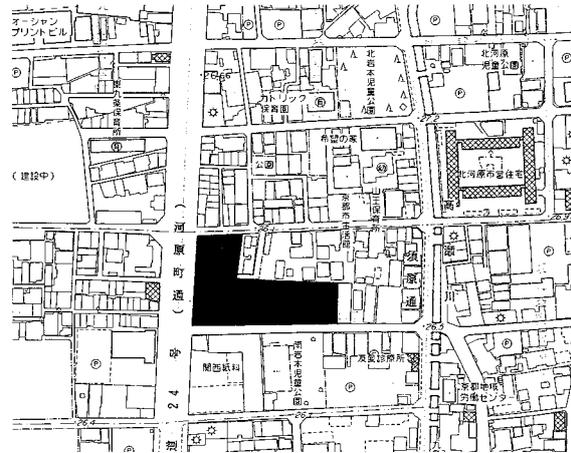


図114 調査位置図 (1 : 5, 000)

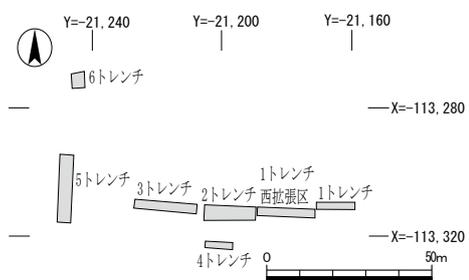


図115 調査区配置図 (1 : 2000)

(永田宗秀)

5 平安京右京六条一坊（図版1）

経過 調査は、京都市立朱雀第三小学校の増改築工事に伴う試掘調査である。調査対象地は平安京右京六条一坊八町の北西部にあたる。調査では、調査地西部に1区（幅3m、長さ5m）、南部に2区（幅3m、長さ3m）、東部に3区（幅3m、長さ5m）の3つの調査区を設定した。検出した遺構については発掘調査に備えて掘り下げは最小限にとどめた。

遺構 1区では地表面から1.0mで江戸時代の耕作土層、1.2mで平安時代から中世の遺構面と溝2条・土壇1基を検出した。2区では地表面から1.1mで平安時代から中世の遺構面と土壇2基を検出した。3区では地表面から0.8mで江戸時代の耕作土層、その下で平安時代から中世の遺構面と土壇1基を検出した。

遺物 出土遺物は土器類のみで、土師器、白色土器、須恵器、陶器、磁器がある。遺物包含層や攪乱層から出土した。時期は平安時代中期から中世・江戸時代にわたり、大半が江戸時代に属する。

小結 調査結果から、当地域には平安時代から中世の遺構面・包含層が良好に残存していることが明らかとなった。遺構面は、東から西へ傾斜している。ただ、遺構面の深さからみて、既存の校舎・プールなどの部分では、基礎による削平を受けていると考えられる。遺構面上では明確な平安時代の遺構を検出することができなかったが、出土遺物から当該期の遺構が残存している可能性は高い。

（上村和直）



図116 調査位置図（1：5,000）

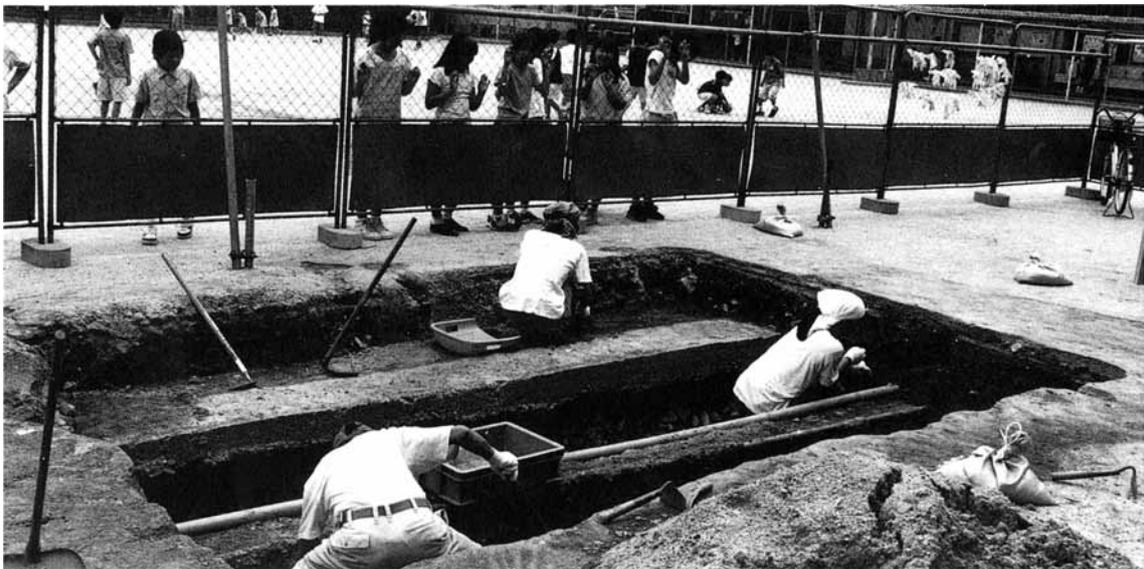


図117 3区調査状況（南西から）

Ⅲ その他の遺跡

6 鳥羽離宮跡 (図版1)

経過 今調査は社会福祉法人清和園城南ホームの改築工事に伴う試掘調査である。建物や埋設管の位置、コンクリート部分を考慮して、幅2 m、長さ10 mの逆L字形に設定した。

調査の結果、本御塔跡の礎石根固め跡を検出した。調査は、発掘調査(本概要1章Ⅲ-11)に移行した。

遺構・遺物 現地表面から20 cmほどで一辺70～100 cmの方形掘形を有する礎石の根固め跡4基を検出した。掘形内には拳大の河原石と粗

砂を入れているが、放り込んだだけのようで、石と石の間に空隙がある。南北方向で3基並び、柱間は南から300 cmと390 cm、東西方向で210 cmを測る。さらに西側では攪乱されているため平面では確認できなかった。南壁断面で観察するとさらに西側490 cmのところ根石跡が認められる。南北方向の柱列に沿って西側を一部拡張したが、柱跡は検出できなかった。

平安時代後期の遺物が整地層から少量出土している。土師器皿・瓦器・白磁・灰釉瓦が少量みられる。中世の遺物は認められず、江戸時代に属する遺物が、整地層や土壌から出土した。染付・焼締陶器・瓦などで、江戸時代中期以降である。

小結 調査区は、昭和43年(1968)に実施された発掘調査概要の図面によると、当時遺存していた本御塔基壇跡にあたり、東向きの本御塔の柱痕跡と一致する。建物は基壇上に建てられ、礎石の根固めはかなり深い掘形をもつことがわかった。概要の実測図では多くの礎石が図示されているが、柱の部分だけ根石を入れたと思われる。本御塔の基壇は完全に削平され跡形もないが、礎石の痕跡が残っていることが明らかとなった。

本御塔は天明八年(1798)と天保十四年(1843)の安楽寿院所蔵の古絵図によると、もともとは安楽寿院陵(鳥羽天皇陵)にあった。慶応年間の御陵整備に伴い、現存している法華堂建築の折、御陵の北側に移築されたものである。移築の時、建て方が悪かったのか、昭和36年の第2室戸台風によって壊れ、基壇のみが残されていた。昭和43年の城南ホーム建築に伴う発掘調査では、金堂跡とその周辺に調査区を設けているが、本御塔基壇は測量のみで、発掘調査は行われていない。調査地は天明と天保の古絵図をみると何も画かれていない空き地である。現在のところ五輪塔のみが現地保存され、古絵図にみられる金堂と鐘楼は前松院に移築され、安楽寿院となっている。

(前田義明)

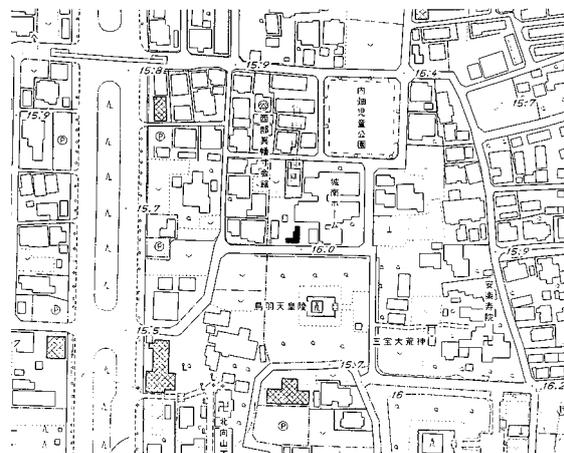


図118 調査位置図(1:5,000)

7 長岡京左京九条四坊（図版2-1）

経過 調査地は、京都競馬場北西外周道路敷地内で、長岡京では左京九条四坊四～六町にあたる。調査地周辺では、平成10年（1998）に競馬場内で試掘調査を行い、湿地堆積を発見した。調査地南方の立会調査では新淀城関係の遺構を検出した。

今回の試掘調査では、長岡京条坊の条坊・宅地の遺構を検出すると共に、周辺の調査と合わせて当地の変遷を明らかにすることを目的とした。長岡京条坊道路跡を中心として北から3区

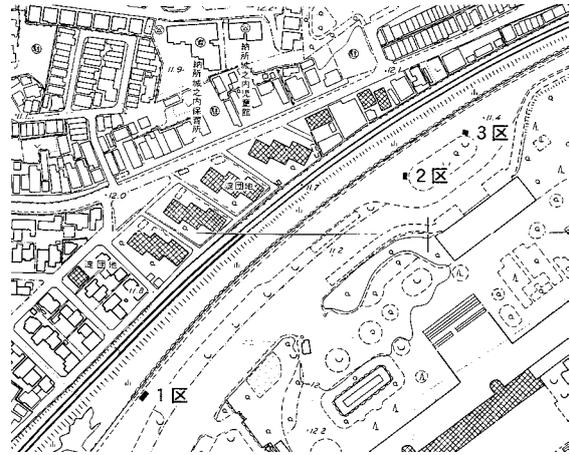


図119 調査位置図（1：5,000）

（東四坊坊間小路西側溝推定地、 5×7 m）、2区（九条条間南小路南側溝推定地、 5×7 m）、1区（九条大路南側溝推定地、 3×15 m）の3箇所の調査区を設定した。

遺構・遺物 調査地はほぼ平坦地で、現標高は11.4 mである。いずれの調査区も競馬場拡張時の盛土層が2 m前後あり、その下は1区で灰褐色泥砂層（無遺物層、上面標高9.3 m）、2区で褐灰色粘土層（厚さ0.1 m、無遺物層）・明黄褐色砂層（無遺物層）、3区で灰色泥砂層（厚さ0.25 m、無遺物層）・暗オリーブ灰色粘土層（無遺物層、木質・炭化物等含む）である。

いずれの調査区も出土遺物はない。

小結 1区では盛土層下で遺構面と推定できる層を検出したが、明確な遺構・遺物は確認できなかった。2・3区では盛土層下で砂層または泥土層を確認し、流路または湿地と推定した。この状況は、競馬場内の試掘調査結果と同様である。

以上のことから、調査地周辺は一部陸地があったものの湿地と想定でき、競馬場拡張時に2 m前後の盛土が行われたことが明らかとなった。調査地道路と京阪軌道との間（旧河川、現駐輪場）は、道路面から約2 m（標高9.65 m）下がっており、この面が旧地表面と推定できる。

（上村和直）

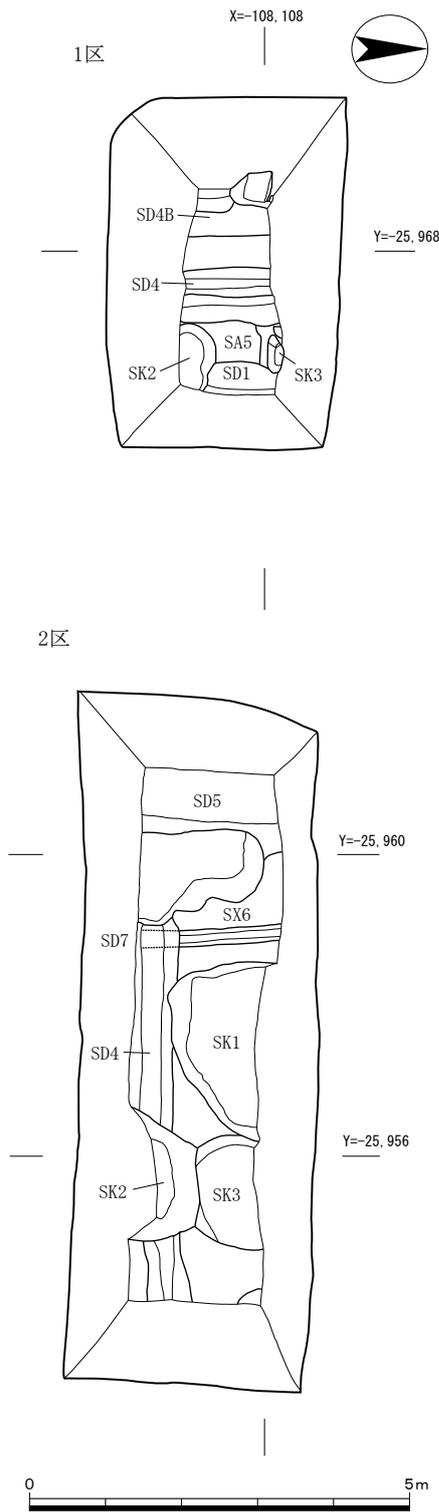


図121 遺構平面図 (1 : 100)

皿などがある。主として1区の各遺構から出土する。出土土師器による時期判定では、江戸時代前期後半、17世紀後半代の範囲に収まるとみられる。同中期の遺物は、土師器皿、土師質陶器壺・鉢、陶器皿・椀、磁器椀・皿・鉢・花生・急須、「仁清」銘陶器皿がある。同後期の遺物は土師器皿、陶器椀・皿、磁器椀・皿・鉢、塗漆された板材などがある。明治時代以降の遺物は、陶器鉢、磁器椀・皿、硝子製品、壘類、プラスチック類などがある。

小結 仁和寺は、孝行天皇の勅願として仁和2年(886)に大内山の麓に起工される。宇多天皇の代に至り、先帝孝行天皇の一周忌を兼ねて仁和4年(888)8月17日に落慶供養を修している。宇多天皇は、昌泰2年(899)に讓位出家、仁和寺第一世寛平法皇と称された。その後、平安時代を通じての仁和寺は、一帯に70以上の堂塔、院家、子院を広げ、隆盛を極める。応永2年(1119)4月14日の火災で多数の堂宇を焼亡したものの、仏像や宝物は南御堂、円堂や経蔵に収容され、難を免れて法灯を護持している。

しかし、戦国時代に至ると、応仁の戦乱に巻き込まれ、応仁2年(1468)9月4日に東軍細川勢によって全山を焼討ちされている。復興の発願は第十九世覚道法親王に至って発せられ、織田信長は天正3年(1575)11月に山城国西院の100石を新地として寄進、旧地復興が企画された。江戸時代初めの寛永11年(1634)に、第二十一世覚探法親王が幕府に出願、これを受けた将軍徳川家光は21万両を寄進、京都御所の紫宸殿、清涼殿、常御殿を移築、五重塔などの完成をみて、天保3年(1646)10月に現在地に落慶供養している。

検出した南北方向の築地基礎と内外雨落溝は、江戸時代前期後半、17世紀第4四半期には遺棄埋没している。

天和3年(1683)に作成された『仁和寺伽藍総絵図』にみえる西面築地塀は、現在の京都市建設局作製1:500地図上の位置とほぼ一致する。このため寛永再建時に縄張りされた仁和寺の寺域は、延宝3年(1675)以降、天和3年(1683)までには、西方へ約8m前後拡張されたとみられる。調査で検出した築地塀と内外の雨落溝は、寛永再興時の仁和寺西面築地とこれに伴う諸施設とみてとれる。

(平田 泰)

9 法性寺跡・貞観寺跡（図版1）

経過 この調査は、J R奈良線複線化工事に伴って実施したものである。この調査区域には法性寺跡、極楽寺跡、番神山古墳、深草坊町遺跡、貞観寺跡、嘉祥寺跡などの遺構があるものと予想された。

今回の調査は、工事の進展にあわせ、三度の調査を行った。一度目は進入路を造成するための深掘、二度目は杭打ちのための削り出し、最後がパネル板はめ込みに伴う深掘で、一度で完成する工法でなかった。そのため各段階に渡って立会調査を行い、断面観察と図を追加せざるを得なかった。調査の結果、深草法華堂の遺構などを検出した。

A区は法性寺跡、B区は極楽寺跡、C区は番神山古墳、深草法華堂、深草坊町遺跡、D区は深草法華堂跡、貞観寺跡、嘉祥寺跡にあたる。調査位置図（図122）には推定寺域を示した。

断面観察は、調査対象の全線において実施し、おおむね10mを単位として土層を記録し、写真を撮撮影を行った。計74地点で土層観察ができた。A区は20地点、B区は中央部が盛土であったので5地点、C区は32地点、D区は10地点を図面に記録した。また観察地点は、J R奈良線の起点である木津駅から京都までの軌道距離表示に従って、後日、復元できる様にした。

遺構 A区 平安時代の布目瓦や須恵器などが検出されたものの、期待された法性寺に関する遺構を確認することはできなかった。No.1地点（33,115m）付近とNo.2地点（32,870m）付近からは、中世の遺物包含層があり、その下から弥生時代から古墳時代の遺物が出土する遺物包含層が確認された。弥生時代から古墳時代にかけての遺構に関しては、鳥羽街道駅付近No.4～6地点（32,600～23,640m）の遺構は、深草相深町で確認された遺跡が当調査区に及んだものとみられる。三ノ橋川付近No.3地点（32,740m）の遺構は、少数の遺物が採取されたのみであったが、近隣にある月輪遺跡に関係するものと思われる。一方、稲荷駅北側No.7地点（32,340m）の大

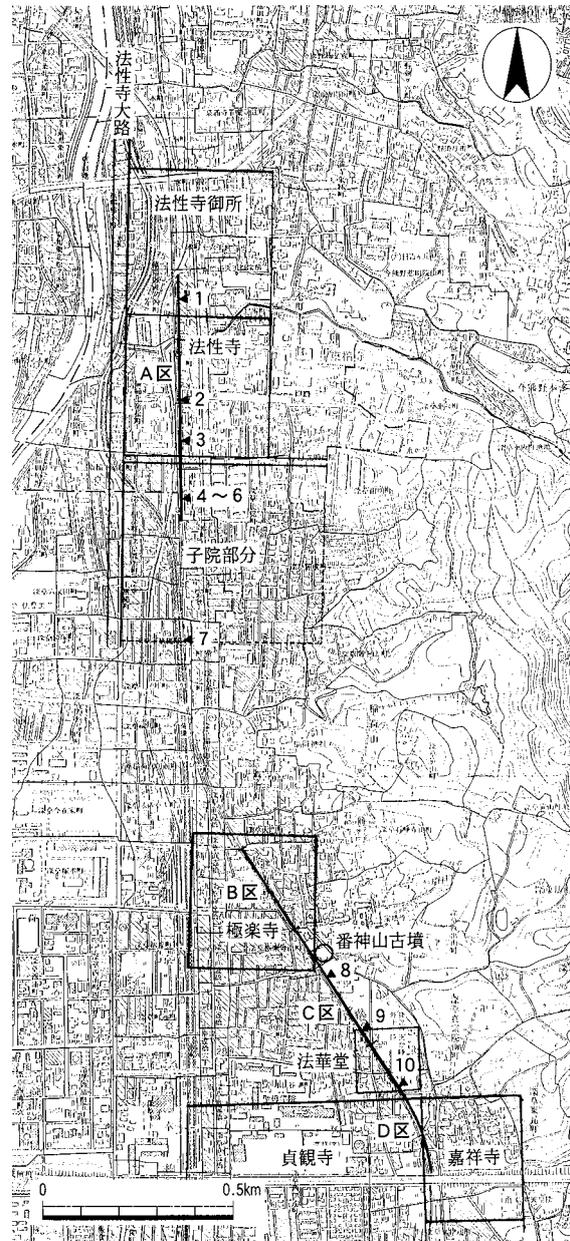


図122 調査位置図（1：20,000）

きな土壌から、伏見人形と型が多量に検出された。この付近は、伏見稻荷の門前町の西裏側にあたる地で、一括して土壌に投棄したものと思われる。

B区 現在、立命館中学校・高等学校の通学路となっている地点は、中央部の谷を埋めて線路が造成されていることから、大門踏切のある北端と宝塔寺門前付近での土層観察を行ったが、極楽寺の堂塔に関係する遺構は確認できなかった。大門踏切付近で、平安時代から中世の遺物は出土したが、混入遺物である。深掘り調査したが、地表下 200 cm で沼状の灰色泥土層が確認された。時代は特定できなかったが、極楽寺の池とみられる。

C区 番紙山古墳は、線路が古墳の前方部を切断する形となっていたため、推定墳丘部の断面観察を行った。現状では 100 cm の盛土があり、南北幅は 9 m、南側に隣接する民家との高低差は 175 cm ほどあった。古墳の推定周濠部南側は、近世に地山まで削平されて耕作地化したため、遺構を確認できなかった。対応する北側にも周濠と思われるものはなく、地山となっていた。推定墳丘部分は、100～125 cm ほどあったが、遺構・遺物は確認されなかった。

瑞光寺西側にある切通し部分 No. 8 地点 (31, 280 m) で、14～15 世紀の土師器がまとまって出土する土層が確認された。その下から地山に掘り込んだ、幅 280 cm の土壌が検出され、飛鳥時代の平瓶と、2 個の石が確認された。番神山古墳南部からも、飛鳥時代の土師質の甕片が検出されている。この地は、七面山からの小河川に沿った高台にあたり、飛鳥時代の遺跡が存在するものと思われる。

深草法華堂跡は、No. 9 地点 (31, 120 m) 付近から、円座を持つ小型礎石が出土し、その掘形には布目瓦が入っていた。現在は十二帝陵と呼ばれている深草法華堂の旧境内が、この付近まで広がるものとみられる。

D区 第二坊踏切周辺からは、中世から近世にいたる遺物包含層が確認された。また十二帝陵に隣接する No. 10 地点 (30, 910 m) 付近で、現在の道路と平行して東西に走る溝が検出された。坊町で確認された遺構の南端を区切るものとみられる。平安時代末には、貞観寺と嘉祥寺に北接する十二帝陵付近に、相当の区画規模をもつ寺院が建立されていたものと思われる。また現在、十二帝陵の南を走る東西道路は、平安時代末には陵の南に添って作られており、この道路を挟んで貞観寺と嘉祥寺が建っていたものと思われる。

遺物 今回の調査による遺物は、断面観察と掘削工事中の遺物採取を中心として、整理箱に 7 箱出土した。大半が中世から近世にかけての遺物であり、そのほとんどが陶磁器、土師器、瓦であった。

A区 ほぼ全調査区域から、平安時代の遺物が出土した。法性寺に関係すると思われる布目瓦は、主に三ノ橋川以南の地から採取された。この中にはよく焼き締まった巴文軒丸瓦 (2) やヘラ描きのある丸瓦、格子叩き瓦が確認された。このほかにも、調査区の北端と鳥羽街道駅周辺からは須恵器や灰釉陶器碗などが出土した。

平安時代末期から中世にかけては、伏見街道添いに町屋が形成され、そこから投棄されたと思われる土師器や瓦器、焼締陶器などの日常雑器類が多量に出土した。この町屋は近世になって

さらに発展し、瓦や土師器、焼締陶器、染付のような雑器のほか、磁器や天目茶碗などの高級品もみられるほどになっている。特に稲荷門前では、伏見人形やその型（3）が一括して多量に出土した。また近世の五輪塔が伏見街道に交わる東西道路付近で検出された。

一方、三ノ橋付近で、弥生時代の高杯や壺・甕と、飛鳥時代の須恵器

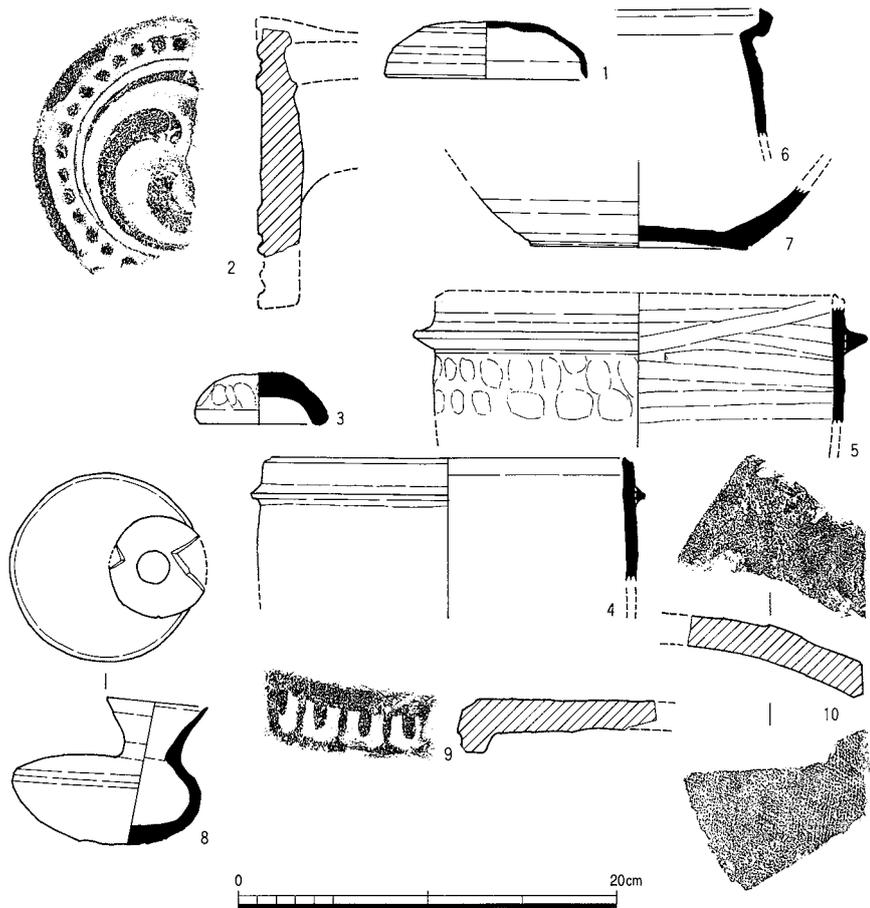


図123 出土遺物実測図（1～7: A区 8: C区 9・10: D区）（1:4）

（1）が検出された。月輪遺跡に関係したものとみられる。鳥羽街道駅以南の地からも、弥生時代や飛鳥時代の甕や甔が出土した。こちらは、西に隣接する深草相深町遺跡にかかわるものとみられる。

B区 極楽寺が存在していた時期の遺物は、大門踏切付近で平安時代の灰釉陶器片と中世の土師器片が少量確認された。宝塔寺門前付近では、浅い掘削に留まったために近世以降の遺物しか採取されなかった。

C区 番神山古墳の南側で、飛鳥時代と思われる土師質の甕片が確認された。特に瑞光寺境内地からは、地山に掘り込んだ土壙があり、同時代の須恵器平瓶（8）が出土した。その土壙の直上には、中世（14～15世紀）の遺物包含層が確認された。また瑞光寺南に広がっている畑地には、中世の土師器片が散布していた。

D区 礎石が確認されたNo.9地点（31, 120 m）以南の地から、平安時代の布目瓦や灰釉陶器碗片などが検出された。特に十二帝陵に隣接する地点から、平安時代末の剣頭文軒平瓦（9）が確認された。この北にあたる第二坊踏切付近では、中世の包含層があり、土師器や山茶碗が確認された。貞観寺跡と嘉祥寺跡からは、平安時代中期の布目瓦（10）が1点のみ検出された。

小結 法性寺は、延長3年（925）に藤原忠平によって建立された寺院であり、撰関家の庇護をうけ、平安時代から鎌倉時代にかけて隆盛したことが知られる。当寺は、北は法性寺大路一ノ

橋（泉涌寺通）、南は稲荷山、西は鴨川、東は東山山麓にわたる広大な敷地を占めたと推定される。当調査区では、A区がその跡地に入る。今回の調査では、法性寺に関する遺構は確認できなかったが、布目瓦を中心として多くの遺物が検出されたことから、この地が法性寺の境内地に含まれていたものと推定される。平安時代末期以降は、伏見街道添いに町屋が形成されたことが知られている。このことで法性寺、さらに東福寺から分離される形になったものと思われる。このことで、寺院に関する遺物が少なくなり、日常雑器類を中心とした遺物が多くなったものと推定される。

三ノ橋川と、鳥羽街道駅付近に弥生時代から飛鳥時代にかけての遺構が検出されたが、前者は月輪遺跡、後者は深草相深町遺跡が当調査区まで広がるためとみられる。

極楽寺は、平安時代の初め、藤原基平が実母の墓がある当地に、延暦寺浄土院を模して、母の追善供養のために創建したとされる。広大な寺域寺有し、定額寺として認められていたが、平安時代後期には衰微した。正確な寺域も不明で、近世、極楽寺村と呼ばれていた地域一体を占めていたとされる。当調査区では、B区とC区のほぼ全域がその推定地にあたる。B区では、調査区域のほぼ全域が盛土になっていたため、極楽寺に関する遺構や遺物を確認することはできなかった。ただ石峰寺と宝塔寺の間は浅い谷状になっていたが、その地を深掘りしたところ、池状の土層が確認された。江戸時代の古絵図によれば、宝塔寺門前の北側に池が描かれており、この池状の土層はこの池とみられるが、この池が極楽寺と関係した可能性は残る。

番神山古墳は、江戸時代元禄年間（1688～1703）に描かれた「古絵図」には番神山と明記されており、また大正11年（1919）の地図でも、はっきりと盛土が形記入されている。その地図によると東側に後円部をもつ前方後円墳の形をしている。当古墳は、稲荷山の西麓、七面山から舌状に派生する丘陵の西端に立地している。稲荷山には、前期から後期にかけての古墳があるが、番神山は最も平地に張り出し、かつ最大の規模を持つものとして注目される。今回の調査では、赤黄色砂層の地山の直上に黄色の泥砂層を確認した。この泥砂層は古墳の北や南からも検出されており、墳丘部分が盛り上がっていた。一方、番神山の南、現瑞光寺境内地から、地山を直接掘り込んだ土壌があり、飛鳥時代の平瓶が大きな石に挟まれる形で出土している。

安樂行院は、明治27年（1894）に廃寺となり、跡地は深草十二帝陵として管理されている。持明院殿の御堂であった安樂行院が、深草の地に移ったものとされているが、確証はない。持明院は、康和年中（1099～1104）に、藤原道長の流れを汲む基頼が自らの邸内に持仏堂を建て、息子の通基が九品阿弥陀仏を安置して安樂行院と称したのが始まりとされる。その後、持明院統の中心寺院として発展したものの、南北朝期の戦乱や、応仁の乱にまきこまれ、延焼し、衰微したとされる。持明院は南北朝時代以降は再建されず、安樂行院は寺地を他の寺院に取られてしまい、近世、泉涌寺の塔頭である来迎院に移されている。なお明治に廃絶した安樂行院は、近世、当地にあったと推定されていた当院を偲んで造られた寺院である。ただこの地に深草法華堂と呼ばれる寺院が、嘉元2年（1302）には存在していたことは明らかで、この堂は持明院統歴代天皇の分骨が安置される場所となっていた。このことから持明院と関わりを持ち、衰微していた安

楽行院の名を冠する寺院が建立されたのではないかと思われる。今回の調査の結果、前述の法華堂は寺院としてかなりの規模を持つものと推定された。礎石が確認された地点を北端とし、現十二帝陵の南を走る東西の溝を南端とすると、南北に約 200 m を測ることができる。またこの区域内から、平安時代後期の布目瓦・剣頭文軒平瓦が出土した。瑞光寺境内や南の畑地には中世から近世にかけての土師器が散布していたが、これらの遺構からは陶磁器などが出土することから、別の遺構であり、法華堂に関するものではないかと思われる。また第二坊町踏切がある東西道路は、平安時代末には、十二帝陵の南土塀に沿って造られていたことを確認することができた。

嘉祥寺は、仁明天皇の菩提を弔うため、息子の文徳天皇が清涼殿を移築し、天皇の山陵のある当地に建立した寺院である。一方貞観寺は、藤原良房が、娘明子が産んだ清和天皇（惟仁親王）の加護のため建立した寺院で、当初は嘉祥寺西院と称していたが、貞観 4 年（862）、貞観寺として独立したものである。貞観寺は、本寺たる嘉祥寺よりも、大いに隆盛しており、広大な寺域に多くの伽藍が配置されたことが知られている。9 世紀以降、摂関家は当寺の北に極楽寺や法性寺を建立したこと、また嘉祥寺は朝廷の崇拝が仁和寺などに移ってしまったことなどから、急速に衰退したものである。今回の調査の結果、十二帝陵以南の地から布目瓦が 1 枚確認されたのみで、両寺院に関係する遺構は確認できなかった。推定地内の調査区ほぼ全域が地山まで削平され、耕作地化されており、中世や近世の遺構はもとより、平安時代の遺構も残存していなかった。

（吉村正親）

10 醍醐廃寺（図版2-2）

経過 調査地は、醍醐中山からほぼ南方向に延びる丘陵尾根で、そこから西に下る丘陵の斜面および谷状地帯を含む。『京都市遺跡地図』では「醍醐廃寺」の隣接地にあたる。

今までの調査では、1997年度調査で醍醐廃寺に関連すると思われる溝や柱列と白鳳時代の瓦・土器などを検出している。また、中世醍醐村に関連すると思われる濠を1996・1997年度調査で検出している。

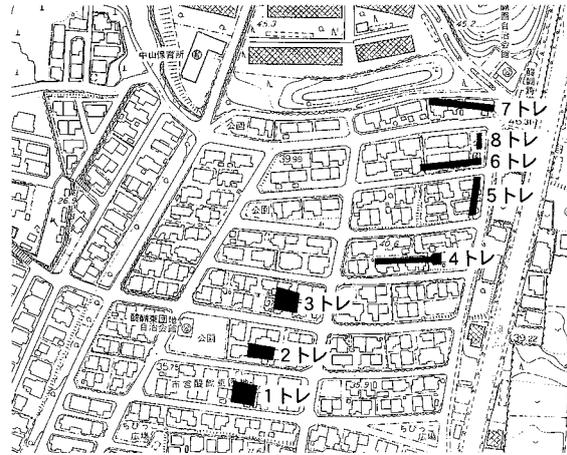


図124 調査位置図（1：5,000）

調査は試掘調査から行い、発掘調査（本概要1章VI-20）に移行した。今回の調査では、醍醐廃寺に関連する遺構・遺物を検出することを主目的とし、1996年度立会調査において平安時代後期から鎌倉時代前期にかけての軒平瓦などを検出した整地層付近での当該期の遺構の検出に努めた。調査は平成9年（1997）の立会調査の成果を参考に、調査対象地に8箇所の試掘トレンチを設定し遺構の有無を確認した。

遺構 各トレンチごとの調査結果を報告する。

1トレンチ $15\text{ m} \times 13\text{ m} = 195\text{ m}^2$ 。団地造成時の埋土層が6.0 mに及び、観察面はトレンチ底で1.5 m四方であった。当地点は住宅造成以前に沼状地形であったと思われる、深さ6.0 mの土層下には暗青灰色の泥土層が0.5 mほど堆積し、その下はシルト層があり、遺構は検出できなかった。

2トレンチ $15\text{ m} \times 6\text{ m} = 90\text{ m}^2$ 。団地造成時の土層は3.0 mほどある。その下に旧表土層が0.1 mあり、その下はシルト層である。遺構は認められなかった。

3トレンチ $5\text{ m} \times 13\text{ m} = 65\text{ m}^2$ 。団地造成時の土層は5.0 mほどあった。その下は0.6 mほどがシルト層で、さらに黒灰色の泥土層が続くが、それ以上の掘削は危険でとりやめた。遺構として特定できるものはなかった。

4トレンチ $40\text{ m} \times 3\text{ m} = 120\text{ m}^2$ 。調査地東側30 mほどは丘陵部の地山である。西側10 mほどが旧表土層、遺物包含層（3時期）が残り、その上が団地造成時の盛土層となっている。包含層からは14世紀代の瀬戸灰釉おろし皿が出土している。包含層は、谷地形に堆積した土層である可能性がある。

5トレンチ $3\text{ m} \times 25\text{ m} = 75\text{ m}^2$ 。中山丘陵の稜線上にあたり、表土層直下に地山（大阪層群）が検出される。遺構なし。

6トレンチ $40\text{ m} \times 3\text{ m} = 120\text{ m}^2$ 。調査地の西側10 mほどが西に傾斜する地形となっており、団地造成時の盛土層下に、旧表土層、遺物包含層がある。それより東側は、地山が露出している。旧表土層からは桃山時代から江戸時代の遺物が出土している。遺物包含層からは中世の土師器が

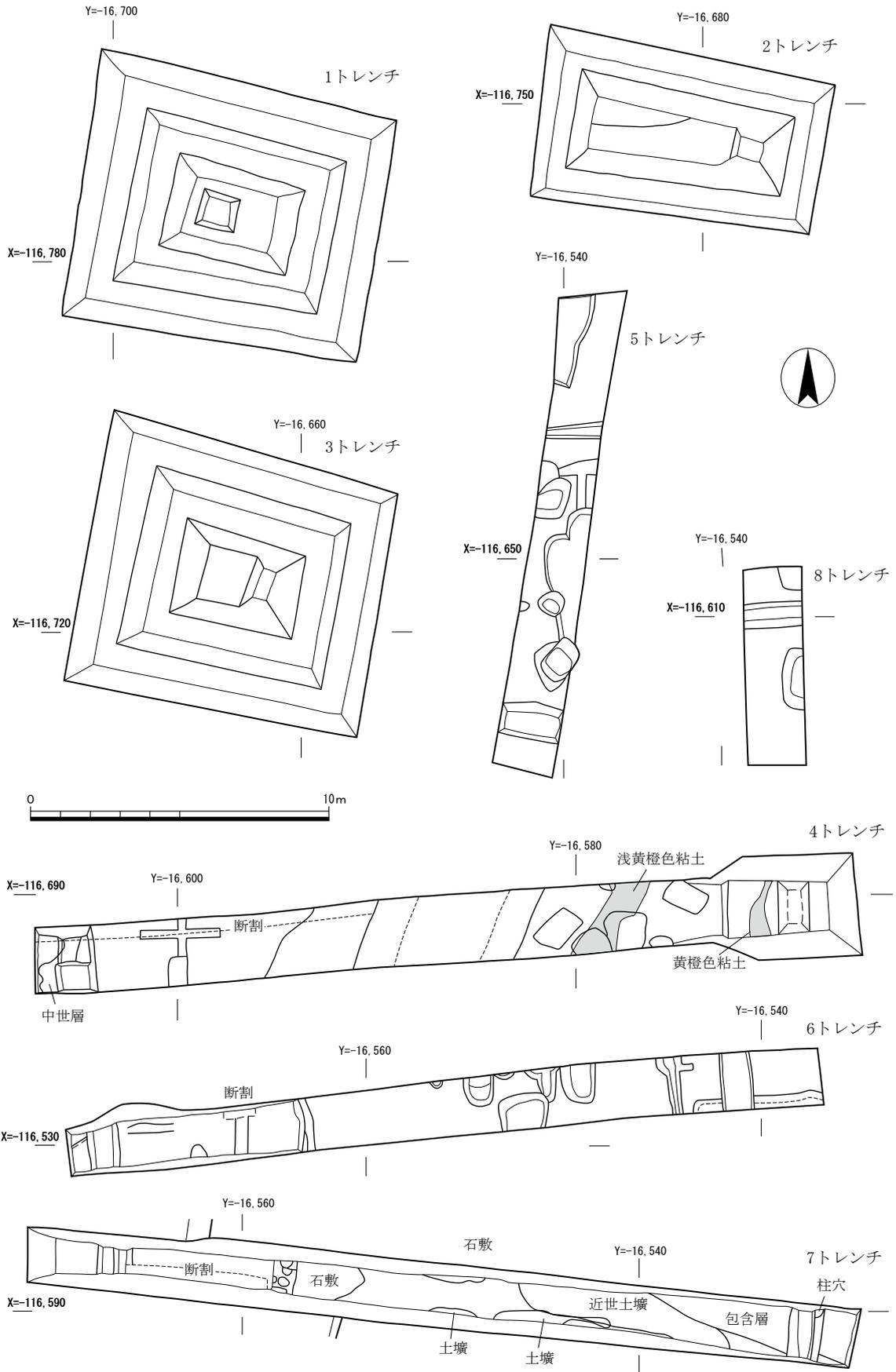


図125 遺構平面図 (1 : 200)

検出されているが、遺構として特定できるものはない。遺物包含層は、斜面造成時の二次堆積の可能性はある。

7 トレンチ $40\text{ m} \times 3\text{ m} = 120\text{ m}^2$ 。西端から 10.0 m の幅で盛土層と旧表土層の直下に遺物包含層が厚さ 0.5 m で堆積する。トレンチ西端より東に 10 m ほどにある段差を境に、東側に広がる平坦地では南北 2.0 m 以上、東西 3.0 m の石敷き（地業か）遺構を検出した。また、そのすぐ東側にトレンチ北端に沿って 3 m ほどの幅で石敷きの一部と思われるものもある。そこから調査区の東端まではほぼ中世の包含層で覆われている。瓦片や土師器・須恵器片が出土している。この地点は立会調査で剣頭文軒平瓦が出土している付近であり、今回も平安時代後期の土師器片が散在しており、遺構の存在が想定される。

8 トレンチ $3\text{ m} \times 10\text{ m} = 30\text{ m}^2$ 。丘陵部の尾根にあたる位置にあり、表土に地山（大阪層群）が露出している。

以上、1～3 トレンチの3箇所については掘削深度が予想通り深く、調査面積が限られたこともあり、明確な遺構は検出できなかった。また、4～6・8 トレンチについても団地造成時の削平などを受けており、明確な遺構は検出できなかった。しかし、7 トレンチについては明確な包含層や礫敷遺構などの存在が確認された。

遺物 出土した遺物で、古いものは平安時代後期から鎌倉時代前期の遺物がある。主に、7 トレンチの石敷きや東側の包含層からのものである。土師器皿・須恵器甕や瓦などがある。

近世の遺物は7 トレンチの旧表土層下の整地層、特に石溜めの遺構に伴い、染付や瓦質土器・施釉陶器・瓦などを検出している。

小結 今回の調査では醍醐廃寺に関連する遺構・遺物は検出できなかった。また、中世醍醐村に関連するものも検出できていない。

しかし、検出した石敷きの遺構は、中世の建物の痕跡の可能性はある。調査地の全域に散見する平安時代後期から鎌倉時代前期の遺物から判断しても、当該期の遺構の存在が考えられる。

（津々池惣一・布川豊治）

11 久我東町遺跡（図版1）

経過 本調査は、羽東師橋関連道路改良工事に伴う試掘調査である。調査対象地は桂川右岸域の伏見区羽東師志水町他地内に所在する東西約200m、南北約6.5mの道路改良予定地であるが、南側の農道を除く北側耕作地部分3.5mが対象となる。これまでに実施された久我東町遺跡の第3・4次発掘調査では、14世紀代を中心とする大規模な環濠集落が検出されている。今回の調査地西端部がその南東に隣接することから、当該地に想定できる遺構分布、調査手順



図126 調査位置図（1：5,000）

などを考慮して、耕作地部分を11区に分け、東から西へ1～11区として調査区（東西8.0～10.2m×南北2.0～2.2m）を設定した。東の1・3区を先行調査した結果、現代耕作土層の下の旧耕作土層の重なりと、湿地状堆積土層を確認するにとどまった。同時に、出土遺物が少ないことなどから2区の調査をとりやめ、4～6区を遺物採取を目的とした手掘りの調査区（2m×2m）へと設定を変更した。また、7・8・10・11区の調査結果も1・3区と同様であることから、9区の調査もとりやめた。重機掘削・遺構検出・写真撮影・GPS測量・断面実測・平板測量などの作業を行い、埋め戻して試掘調査を終了した。

遺構 東端の1区から西端の11区にいたるすべての調査区で、桂川の旧流路あるいは後背湿地と考えられる湿地状堆積土層を検出した。各調査区の基本層序はほぼ同様である。現代耕作土層が20～35cm、にぶい黄褐色砂泥から粘土層の旧耕作土層が55～90cm（3～8層）、灰黄褐色泥土から粘土層が25～30cm、その下が灰色泥土から粘土層の湿地状堆積土層となる。1区で

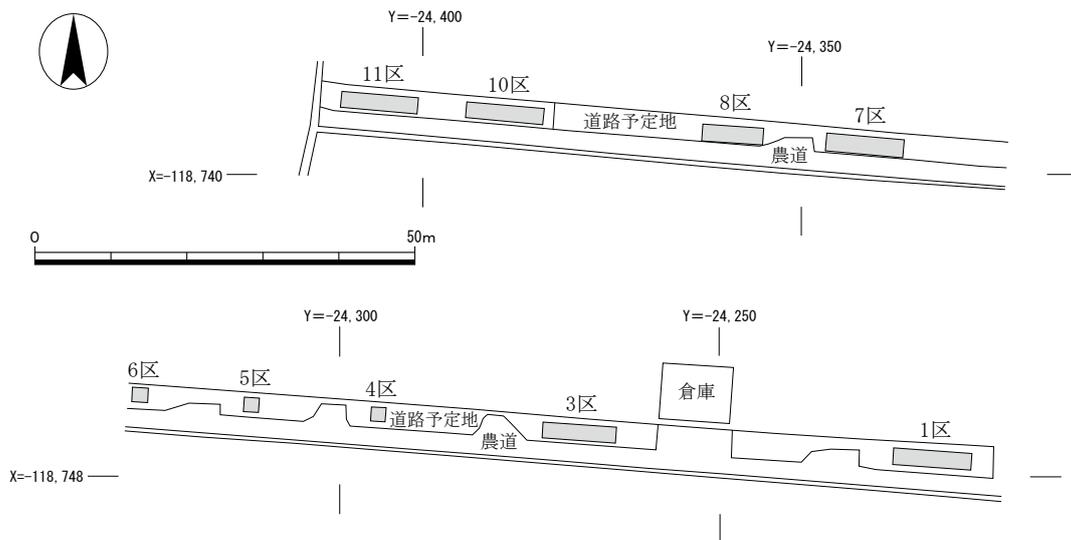


図127 調査区配置図（1：1000）

地表下 280 cm まで確認している。11 区の西端部に関しては、以前に農機具倉庫などがあった関係から、現代耕作土層の上に盛土がなされている。湿地状堆積土層検出面の標高は 10.4 ～ 10.7 m である。

遺物 出土した遺物は土器類が整理箱にして 1 箱である。湿地状堆積土層上面より中世の瓦器羽釜、旧耕作土層より中世の瓦器椀、近世の土師器、染付、施釉陶器が出土しているが、いずれも小片であり、量も極めて少ない。

小結 環濠集落の東限の確認、環濠と流路との関係や切り合い関係の確認が期待された。結果としては、久我東町遺跡第 5 次調査の東進区間立会調査の成果を追認するかたちとなった。湿地状堆積土層は西端の 11 区のさらに西へと延びており、環濠集落およびその関連遺構との関係を捉えることができなかった。湿地状堆積土層の時期は、近世以前と考えられるが、詳細は不明である。今後の周辺調査に期待したい。 (鎌田泰知)

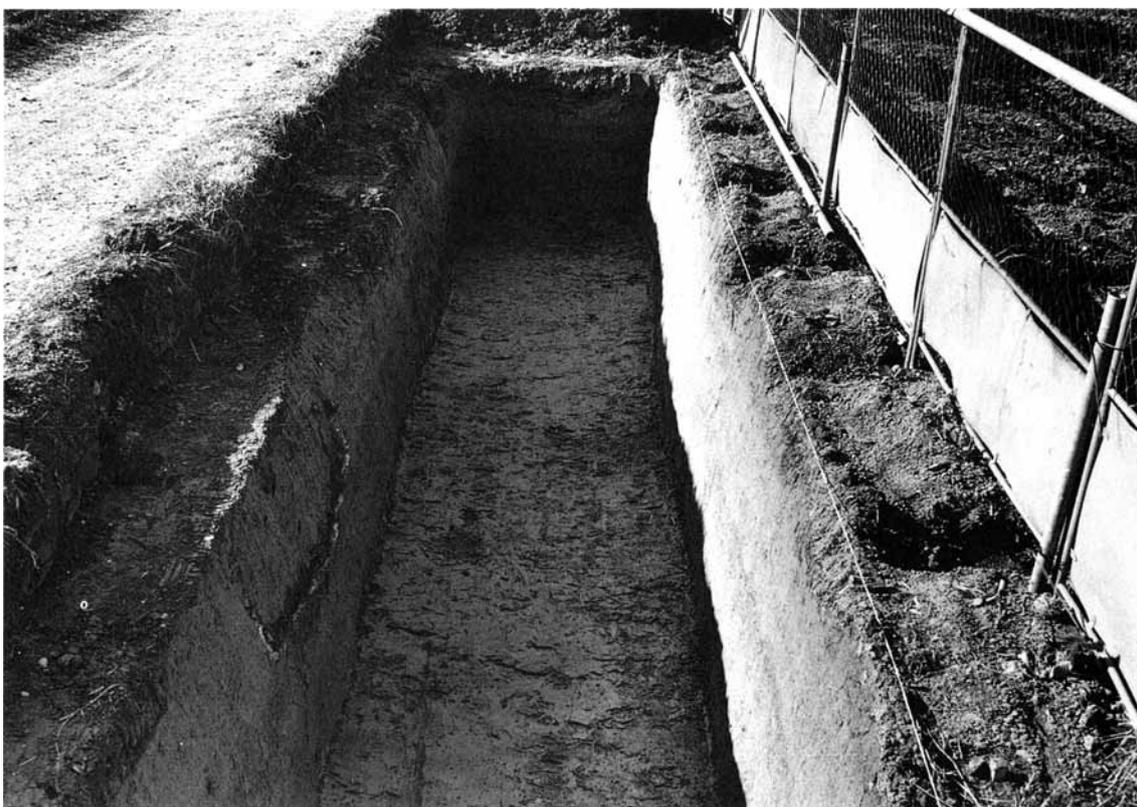


図 128 3 区全景 (東から)

12 京都市内遺跡

経過 京都市内に点在する遺跡該当地に対する小規模開発およびガス・水道などの埋設工事を対象として、文化庁の国庫補助を得た立会調査を実施している。平成11年度は合計222件であり、市内を便宜的に11に地区分けした。調査件数は表1のとおりである。この章では主要な成果を概述するが、詳細は、平成11年（1999）4月1日から12月28日までの調査分は『京都市内遺跡立会調査概報』平成11年度に、平成12年（2000）1月4日から3月31日までの調査分は平成12年度に報告している。

表1 国庫補助による立会調査件数一覧表

地 区	4～12月	1～3月	計	地 区	4～12月	1～3月	計
平安宮	71	17	88	南・桂地区	6	4	10
平安京左京	107	32	139	洛東地区	16	6	22
平安京右京	64	23	87	鳥羽地区	13	12	25
洛北地区	20	8	28	伏見・醍醐地区	15	7	22
太秦地区	4	5	9	長岡京地区	11	1	12
北白川地区	13	3	16	合 計	340	118	458

遺構・遺物 植物園北遺跡では古墳時代前期の竪穴住居2棟を検出した。1棟は断面による確認で、壁溝と炉とみられる焼土・炭の堆積を確認した。平安時代の土壌や攪乱により規模は明らかにできなかった。他の1棟は3方を攪乱によって削られ、南側壁溝のみを確認したが、面的に調査することができた。南側壁溝はほぼ直線で検出しており、方形の平面形を持つ竪穴住居とみられる。炉・柱穴の検出はできなかった。床面および埋土から古墳時代前期の土師器が出土している。

平安京右京五条一坊六町の調査では池沼状を呈する堆積層から「細工所飯事×」と記された墨書木簡が出土した。木簡とともに出土した遺物は、土師器皿、須恵器杯・甕、黒色土器椀、瓦が出土しており、平安時代前期に比定できる。木簡はその積文から請飯木簡とみられ、また平安時代前期の文献に「細工所」という文字はみられないが、延喜式などに記載される内匠寮の中の「細工」に関わるものと推定でき、興味深い資料を得ることができた。

平安京左京六条三坊八町では溝、土壌などを検出している。そのうち東西方向の溝2条は位置的にみて樋口小路北側溝および内溝にあてられる。この溝はいずれも室町時代後期に位置付けられるが、内溝からは、土器などの遺物とともにヒトの頭蓋骨、イノシシの下顎骨、イヌの歯や肢骨が出土しており、興味深い資料といえる。

その他、近世の調査では伏見城城下町で前田利家邸と平松八右衛門邸を画す石垣と多量の金箔瓦が出土した土壌を検出した。また仙洞御所・女院御所の調査では、安政期造営以降の境界築地、宝永・寛政期造営の御文庫に伴うとみられる雨落ち溝などを検出しており、御所造営の変遷をみるうえで貴重な考古学的な成果を得ている。

(菅田 薫)

第3章 資料整理

1 測量

はじめに

京都市埋蔵文化財研究所では、平成11年度より発掘調査における基準点設置にGPS測量を導入した。大きな理由としては、「これまで使用していた基準点の多くが消失した」「開発により基準点間の視通の確保が困難になった」「測地成果2000への対応」があげられる。

GPSとは

GPSとは、米国によって開発された、人工衛星による航法支援システムである。現在の運用形態は、6つの円軌道に各4個の衛星を配置する24衛星システムからなっている。軌道高度は約20,000km、周期は約11時間58分である。GPSは宇宙部分(Space Segment)、利用者部分(User Segment)、制御部分(Control Segment)から構成される。

GPS本来の利用方法は、「単独測位」であり、一台のGPS受信機を用い、電波が衛星から出発した時刻と受信機に到着した時刻を別の時計で測定し、その時間差と光の速度を利用して受信機の時刻や位置を計算するものである。その精度は、C/Aコードを用いた場合で数メートルといわれている。

測量などの高精度測量を目的でGPSを用いるには、1ppm程度の精度が求められるため、単独測位では不可能であり、一般には相対測位(干渉測位)と呼ばれる方法が使われる。干渉測位とは、衛星からの電波を複数の受信機で同時に受信し搬送波の位相を測定することにより、受信機の相対的な位置関係を求める観測方法である。従って少なくとも受信機の一機は座標が既知である点に設置する必要がある。

RTK (Real Time Kinematic) 方式

干渉測位の場合、受信機から衛星までの距離を搬送波位相を用い測定し、受信機が置かれている基線のベクトルを計算する。しかし、位相測定値には波数不確定の問題があり、何らかの方法を使い、位相の整数部分つまり、「整数値バイアス(integer ambiguity/bias)」を決定する必要がある。そのため、これまでの干渉測位では時間により衛星の配置が変化することを利用して整数値バイアスを決定する「スタティック測位」と呼ばれる観測方法が主流であり、そのためには30分から数時間の観測時間が必要だった。さらに計算結果はすべての観測が終了した後に後処理として行わなければならない、数km程度の短基線を測る場合、その運用効率は必ずしも高いとはいえなかった。

しかし、GPS受信機の性能が向上し、解析用の計算機とソフトの能力も向上したことにより、既知点に設置されているGPS受信機から求点側のGPS受信機に測定データを送り、実時間で解析し成果が得られるRTK方式が米国で開発された。この方式で測れる基線長は10km程度と

あまり長くはないが、観測する領域を京都市内に限定すれば十分であると判断し、国内における実績はほとんどないにも関わらず積極的に導入した。

導入経過

まずはじめに、GPSの受信アンテナを研究所の屋上に設置し、既存の1級基準点を使用して「スタティック測位」を行い座標を確定した後に、電子基準点として運用を始めた。RTK方式で必要とされる既知点(Reference)と求点(Rover)の通信は、携帯電話(Docomo)を使って行い、そのためのソフトウェアは自作した。

ジオイド補正

GPSで求められる3次元の位置は、WGS-84と呼ばれる準拠楕円体におけるものである。しかし現在、国内の測地系で使われている準拠楕円体は、「Bessel1841」であり、WGS-84とは異なっている。このため、GPS受信機内部、もしくは解析ソフトにおいて、楕円体変換が行われる。しかし、標高(海拔)に関しては、海水面を基準にした等ポテンシャル面を使用しているため、GPSで計算された値はそのまま使えず、何らかの方法を使いジオイド高を求めて補正する必要がある。なお、標高及び楕円体高とジオイド高には以下のような関係がある。

$$H = h - N$$

H : 標高(海拔)
h : 楕円体高(WGS-84)
N : ジオイド高

ジオイド高は重力異常などの影響を受け、場所によって異なるという特徴があり、容易には決定することが困難である。通常は複数の標高が既知であるから点を計測してジオイド高を推測す



図 129 GPS 作業風景

ることが行われるが、それではRTK方式のメリットがほとんどなくなるため、筆者は国土地理院の発行している「ジオイド96」を使用してGPSの観測値を補正するソフトを開発し、解析的にジオイド高を求めることにした。解析ソフトの評価として、京都市管理の水準点を計測してみたところ、成果値と計算値との較差はRMSで15mm程度であり、GPSの性能から考えると必要十分だと思われる。

作業上の問題

従来から行ってきた光波側距儀を使用する測量から比べると、GPSによる測量は視通の確保が不要であり、迅速な基準点設置が可能になった。しかしその反面、全ての観測がGPS受信機とソフトウェアで処理されるため、そのままでは結果の検証が困難である。特に非常に短時間で整数値バイアスを決定するRTK方式では、GPS衛星の幾何学的配置や個数が悪く、さらに付近の建物や木々によるマルチパスの影響で誤った結果を出すこともしばしばあった。そのため、現場では、最低2点以上の基準点を設置し、それぞれのポイントで観測較差がある一定範囲に入るまで観測を続け、さらに基準点間のベクトルを計算値と実測値から比較して2重のチェックを行っている。この作業により、誤った観測値を採用する確立は非常に小さくなった。

今後の展開

国土交通省国土地理院では、明治時代から使われてきている日本測地系を、人工衛星観測による最新の測量成果から設定された世界測地系である「測地成果2000」に移行することを表明している。日本測地系は設定された時代が明治時代であり、当然ながら当時の測地学的理解や測量技術の制約を受けており、さらに現代に至るまでに地震や地殻変動による基準点網の歪みも重なり、その差は京都において400m以上である。当研究所が過去から使用している基準点も例外ではなく、今後、旧測地系に於いて計測された座標データを新測地系にコンバートして行くことが必要である。

(宮原健吾)

2 保存処理

出土木製品の受入れ状況

本年度の木製品の受入れ状況は、大型・小型木製品を合わせて合計2現場であった。内訳は、平安京右京北辺四坊(97 HK-GS 2)、平安宮・平安京右京(97 HK-UX 1)である。

木製品保存処理

3 m・5 m含浸槽では、前年度開始で本年度処理終了したものと、本年度より保存処理を開始し、現在処理継続中のものがある。

表2 保存処理済み一覧表

遺跡名	調査記号	遺跡名	調査記号
平安京左京三条一～四坊	92 HK-FR 6	平安京左京七条二坊	94 HK-WI 2
平安京左京四条一・二坊	92 HK-UH	平安京右京九条二坊	94 HK-ZM
平安京右京八条二坊	93 HK-YC 3	法金剛院境内	95 HK-IV
平安京左京八条三坊	94 HK-EF 2	法金剛院境内	96 HK-JV
平安京左京八条三坊	94 HK-EF 7	平安京右京七条二坊	97 HK-YJ
平安京左京八条三坊	94 HK-EG		

金属製品の受入れと保存処理

梅ヶ畑祭祀遺跡(97 UZ-UM)と、下三栖遺跡(99 FD-SS 5)の金属を受け入れた。

土層転写

1999年9月28日に、平安京左京六条三坊(98 HK-PP)の土層(約1 m²)を、エポキシ系合成樹脂(トマックNR-51)を用いて、転写・取り上げ作業を行い、10月までパネル貼りの作業を行った後、京都市考古資料館の常設展示に使用した。

遺構の現地仮保護強化

1999年6月8日、平安京左京北辺四坊(99 HK-GS 4)の漆喰遺構の保護強化を現地で行った。この作業は、現地において一定の期間遺構を保護強化する目的である。使用した薬剤は土壌強化剤(OM 50)で、これを遺構に散布した。

獣骨取り上げ

1999年6月9日から、平安京左京(99 HK-EQ)の獣骨を、発砲ウレタンを使用し取り上げを行った。

地鎮具(賢瓶)の本体・内容物の調査

1999年10月から、平安京左京北辺四坊出土賢瓶の本体と内容物の処理と分析を行った。

本体の開封の前に、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターにおいてX線透過写真を撮り、内容物の有無の確認を行った結果、穿孔された玉と数個の小玉類が認められた。

本体の材質は、村上隆氏(奈良国立文化財研究所飛鳥藤原調査部)により光X線分析の結果、蓋・

胴体ともに銅と亜鉛の合金（真鍮）であり、亜鉛の成分含有が15%前後の数値を示し、真鍮の中でも黄金色に近い色調になるものである。

X線透過写真で確認された内容物のうち、水晶体を肥塚隆保氏（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター）により、顕微鏡観察を行い、曇りが無いため良質の水晶体（3個）であると認められた。穿孔玉は、松井章氏（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター）により顕微鏡観察の結果、象牙年輪が観察されたため象牙（1個）と同定した。小玉については、和田浩爾氏（三重大学水産学部）により肉眼および顕微鏡観察の結果、全個体アコヤガイ天然真珠（38個）で、構造等の違いから真珠層真珠・稜柱層真珠・輝層真珠および複合真珠であることが判明した。

上記以外のもので、和紙があり北野信彦氏（くらしき作陽大学）同定の結果、楮の繊維（3個）であることが判明した。また、賢瓶内に水があったため、和紙の繊維質が柔軟な状態になっていたため、下鳥羽収蔵庫の真空凍結乾燥機を用いて保存処理し、形状の維持をした。他に金属の箔粉が多数あるが、数個を北野信彦氏に材質分析を依頼し、分析個体すべての成分が金であることが判明した。他に、種子が数種、検出されたが、北野信彦氏による分析で、稲穀（12粒）・胡麻（約390粒）・麦（約25粒）・小豆（約65粒）であると判明した。このほか、種類の特定できない植物質（五葉や五香と呼ばれるもの）が多数検出されているが、未調査である。

修羅の保存処理

昨年度から引き続き、PEGによる保存処理を行った。

本年度は、修羅大に対して、1999年5月26日に30%から35%に濃度を上げた。8月20日に35%から40%に濃度を上げた。11月17日に40%から45%に濃度を上げた。

修羅小に対して、1999年8月20日、PEG 400（液状）15%溶液をバキュームカーを用いて排出し、修羅本体・含浸槽内部の洗浄の後、新たにPEG 4000（粉末）の15%溶液に変換した。

修羅大・小とも、12回のねじれ計測・クラック計測を行い、重量測定は大は22回、小は23回行った。この間、3月2日には第5回目の修羅保存処理検討委員会を開催し、前年度（1998年）の保存処理内容の報告を行った。

（卜田健司）

3 復元彩色

復元遺物の彩色

本年度の復元彩色は、遺物復元が総計 96 点であった。内訳は下表の通りである。

表 3 復元彩色件数一覧表

内 容	調査記号	点数	内 容	調査記号	点数
国庫補助概報	98 BB-UZ 286	6	貸出ほか	81 HK-FB	1
	99 BB-RH 18	6		93 BB-HR 450	1
	99 HK-OG 1	9		92 HK-UH	1
調査概要	98 HK-NG	1		84 HK-GK 6	14
資料館展示替え		13		95 HK-XF 2	12
貸出ほか	96 HK-OB 2	30		93 HK-GN 2	2

復元彩色の指導

遺物復元の他に、平成 11 年（1999）6 月 9 日から 6 月 12 日まで沖縄県文化庁教育課に出向し、首里城跡京の内出土の輸入陶磁器の復元彩色を指導した。（出水みゆき）



図 130 首里城跡京の内出土陶磁器の彩色指導

第4章 普及啓発事業等報告

1 普及啓発および技術者養成事業

文化財講演会の開催（京都市考古資料館開館20周年記念講演会）

日 時 平成11年12月11日（土）午後1時30分～4時45分
会 場 京都アスニー（京都市生涯学習総合センター）4Fホール
講 演 「京都の桃山文化」 京都市歴史資料館 館長 村 井 康 彦
「桃山陶器の成立と展開」 名古屋大学名誉教授 樽 崎 彰 一
主 催 京都市・財団法人京都市埋蔵文化財研究所
後 援 京都新聞社・KBS京都・NHK京都放送局
参加者 約350名

現地説明会などの開催

- 1) 平成11年6月10日「平安京跡（元修徳小学校跡地）」（報道発表のみ）
- 2) 平成11年6月25日「京都御所参観者用便所整備工事に伴う調査成果」（報道発表のみ）
- 3) 平成11年7月10日「京都和風迎賓施設第3回」（参加者 約250名）
- 4) 平成11年8月28日「伏見城立売通町屋跡」（参加者 約260名）
- 5) 平成11年11月13日「東土川遺跡」（参加者 約45名）
- 6) 平成11年11月20日「大藪遺跡」（参加者 約70名）
- 7) 平成11年11月27日「中臣遺跡」（参加者 約45名）
- 8) 平成12年2月19日「平安京跡（御池西進）」（参加者 約75名）
- 9) 平成12年3月20日「平安京跡（西京商業高校）」（参加者 約1,200名）

埋蔵文化財調査報告書など出版物の編集・刊行

- 1) 「京都市内遺跡発掘調査概報」平成11年度
- 2) 「京都市内遺跡立会調査概報」平成11年度
- 3) 「平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要」
- 4) 「研究紀要 第6号」

「リーフレット京都」(No.123～134)の発行

- ・No.123 生活・文化9 「平安京の石製帯飾り具」
- ・No.124 発掘ニュース35 「中世京都の賑わい—平安京左京八条三坊三町の調査—」
- ・No.125 発掘ニュース36 「鞍馬二ノ瀬町の中世埋蔵銭」
- ・No.126 考古アラカルト18 「発掘調査の進め方—西市外町の調査を例にとって—」
- ・No.127 信仰・祭祀9 「井戸を埋める」
- ・No.128 生産・技術6 「焼 継」

- ・No. 129 考古アラカルト 19 「考古資料館開館 20 周年を迎えて」
- ・No. 130 遺跡を訪ねて 2 「北方浄土の山里に行く」
- ・No. 131 発掘ニュース 37 「排水施設をもった大型住居」
- ・No. 132 発掘ニュース 38 「京都御所の築地跡」
- ・No. 133 土器・瓦 15 「丸底小鉢考」
- ・No. 134 発掘ニュース 39 「発掘成果をふりかえって 1999」

京都市遺跡巡り「鳥羽離宮跡見学会」

日 時 平成 11 年 11 月 13 日（土） 午後 1 時～ 4 時

内 容 城南宮斎館で鳥羽離宮跡の発掘調査成果を、説明および遺物の展示説明した後、
発掘調査現場、鳥羽離宮跡主要施設跡などの見学を行った。

参加者 56 名

研究所などへの派遣

- 1) 平成 11 年 4 月～ 12 年 3 月（毎月開催） 於：向日市（京都府埋蔵文化財調査研究センター）
「長岡京連絡協議会」
資料課長 長 宗 繁 一
調査課 百 瀬 正 恒
" 吉 崎 伸
" 上 村 憲 章
" 出 口 勲
- 2) 平成 11 年 5 月 21・22 日 於：前橋市（群馬大学）
「日本考古学協会第 65 回総会」 調査課 百 瀬 正 恒
- 3) 平成 11 年 7 月 2・3 日 於：奈良市（奈良国立文化財研究所）
「埋蔵文化財写真技術研究会」 資料課 村 井 伸 也
" 幸 明 綾 子
- 4) 平成 11 年 7 月 10 日、9 月 18 日、1 月 29 日 於：東京都（江戸東京博物館）
「埋蔵文化財行政研究会」 総務課事業係長 辻 純 一
- 5) 平成 11 年 9 月 18・19 日 於：東京都（青山学院大学）
「第 20 回貿易陶磁研究会」 調査課 百 瀬 正 恒
- 6) 平成 11 年 9 月 28 日 於：高岡市（富山県工業技術センター）
「光造形研究会」 資料課 宮 原 健 吾
- 7) 平成 11 年 11 月 19 日 於：枚方市（建設省近畿地方建設局）
「埋蔵文化財調査支援機器の開発に関する第 4 回研究会」
総務課事業係長 辻 純 一
- 8) 平成 11 年 10 月 2・3 日 於：京都府（京都府立るり溪少年自然の家）
「京都府埋蔵文化財研究会第 7 回大会」 調査課長 鈴 木 久 男
調査第 3 係長 前 田 義 明

調査課 内 田 好 昭

〃 田 中 利津子

9) 平成11年12月2・3日 於：京都市（京都国立博物館）

「古代・中世における流通・消費とその場」 調査課 平 尾 政 幸

10) 平成11年12月17日 於：奈良市（奈良国立文化財研究所）

「遺跡情報管理に関する検討の研究集会」 総務課事業係長 辻 純 一

11) 平成12年2月10日 於：東京都（東京大学工学部）

「考古学GISワークショップ」 総務課事業係長 辻 純 一

資料課 宮 原 健 吾

（金島恵一）

2 京都市考古資料館状況報告

開館 20 周年記念 常設展展示替えの実施（平成 11 年 12 月 1 日オープン）

20 周年を記念し、老朽化がみられる常設展ケース内の改装並びに展示替えを実施した。

改装についてはケース内壁紙の張り替え、ケース天井板および展示台などの取り替えを実施し模様替えを図るとともに、写真パネルを全面的に入れ替えた。

展示替えは、時代別コーナーを遺跡写真パネルと出土遺物を組み合わせた構成とし、ここ 10 年間の遺物を中心に約半数を入れ換え、新たに「土に刻まれた京都の歴史コーナー」に地層断面のはぎとりパネル（平安京左京町尻小路路面）を設置するなどし、約 700 点の遺物で再構成した。

また、テーマ展示コーナーを「京都の鑄造遺跡」に展示替え、JR 京都駅周辺の発掘調査で出土した鎌倉時代から室町時代にかけての鏡や銭貨などの鑄型を中心に展示した。

オープン展示コーナーについても、新たに常滑や備前焼の大型の甕などを展示し、実際に手に触れて観察できるように充実を図った。

オープン展示コーナーについても、新たに常滑や備前焼の大型の甕などを展示し、実際に手に触れて観察できるように充実を図った。

なお、展示替えにあたり、11 月 9 日から 11 月 30 日の間、臨時休館した。

開館 20 周年記念 「文化財講座」外部聴講システムの設置（平成 11 年 10 月から）

考古資料館文化財講座は昭和 61 年 5 月の開講以来、講座数も 120 回以上を数え、毎回多くの参加を得て開催しているが、会場の 3 階会議室が狭小であるため、窮屈な状況であった。

今回、これを改善するため 1 階展示室情報コーナーに新たに 48 インチ大型モニター設備を設置し、講座の内容を同時に放映することにより、会場以外でも受講ができるよう外部聴講システムを設置した。また、情報コーナーのビデオ映像など情報提供の充実も図った。

速報展の実施

1) 「中臣遺跡で新たな発見」（平成 11 年 6 月～8 月）

平成 10 年 6 月から継続して調査を実施している勸修市宮住宅敷地内、中臣遺跡の調査成果を速報した。今回の調査で、5 世紀末から 6 世紀前半の古墳と墓、7 世紀の集落跡を発見した。速報展では、古墳から出土した須恵器の杯や有蓋高杯、墓から出土した「鳥足文」タタキをもつ百濟系土器の壺などを展示した。

2) 『古織様』の京屋敷」（平成 11 年 8 月～）

平成 8 年から 9 年にかけて実施した京都市立堀川高校内の調査成果を速報した。この場所は、藤堂和泉守高虎の京屋敷跡にあたり、また、桃山時代から江戸時代初期の大名で茶の湯の宗匠であった古田織部の屋敷跡を高虎が拝領したものであり、調査の結果、17 世紀初頭の土器や陶磁器が出土した。速報展では、青織部・総織部や志野などの美濃の焼物や備前・唐津・高取などの桃山陶器を展示した。

京都市考古資料館開館 20 周年記念事業の実施

1) 開館20周年記念 小・中学生夏期教室「バスで行く洛西の遺跡めぐり」の開催

日 時 平成11年8月26日(木) 午後1時30分～4時45分

主 催 京都市・財団法人京都市埋蔵文化財研究所

内 容 毎年開催している小・中学生夏期教室を20周年記念事業として実施し、史跡天皇の杜古墳、史跡檜原廃寺跡および洛西竹林公園(旧二条城跡石造物群)の発掘調査により出土した遺跡・遺物をバスで巡り見学を行った。

参加者 43名(小学生36名 中学生7名)

※ 夏期教室「バスで行く洛西の遺跡めぐり」スナップ写真展の開催

日 時 平成11年9月4日～9月19日

会 場 京都市考古資料館

2) 開館20周年記念 文化財講座「バスで行く洛西の遺跡めぐり」の開催

日 時 平成11年9月25日(土) 午後1時～4時45分

主 催 京都市・財団法人京都市埋蔵文化財研究所

内 容 毎月、一般市民を対象に開催している文化財講座の桃山陶器シリーズと併せて9月に実施している現地講座を20周年記念事業として開催し、史跡天皇の杜古墳ほかを2コースに別れてバスで巡り、見学を行った。

(見学場所は「小・中学生夏期教室」と同じ)

受講者 160名

文化財講座の開催

平成11年度の連続講座は、記念講座として開催中の特別展示「続・洛中桃山陶器の世界」をテーマとし、「桃山陶器」を多方面から取り上げ、8回にわたり解説している。

1) 第117回 平成11年4月24日 (受講者 88名)

「平成10年度京都市域の調査成果」 調査課長 鈴木久男

開館20周年記念講座「桃山陶器」第1回

「和歌が記された織部向付」 調査課 堀内寛昭

2) 第118回 平成11年5月22日 (受講者 75名)

「平安京右京三条二坊十四町の調査」 調査課 南孝雄

開館20周年記念講座「桃山陶器」第2回

「京都市内出土の東南アジア陶磁について」 調査課 能芝勉

3) 第119回 平成11年6月26日 (受講者 91名)

「山科本願寺の調査」 調査課 吉村正親

開館20周年記念講座「桃山陶器」第3回

「特別展示列品解説」 考古資料館 原山充志

4) 第120回 平成11年7月24日 (受講者 80名)

「大藪遺跡の調査」 調査課 吉崎伸

- 開館 20 周年記念講座「桃山陶器」第 4 回
「桃山時代以前の国産陶器について」 調査課 平尾 政 幸
- 5) 第 121 回 平成 11 年 9 月 25 日 (受講者 160 名)
開館 20 周年記念「バスで行く洛西の遺跡めぐり」 調査課長補佐 平方 幸 雄
京都市埋蔵文化財調査センター 長谷川 行 孝
考古資料館 原 山 充 志
- 6) 第 122 回 平成 11 年 10 月 23 日 (受講者 94 名)
「方広寺跡の調査」 調査課 田 中 利津子
開館 20 周年記念講座「桃山陶器」第 5 回
「焼成技術から見た桃山陶器」 館 長 村 田 耕太良
- 7) 第 123 回 平成 12 年 1 月 22 日 (受講者 90 名)
「伏見城(上板橋通)の調査」 調査課 小 松 武 彦
開館 20 周年記念講座「桃山陶器」第 6 回
「桃山時代の中国・朝鮮陶磁について」 担当課長 永 田 信 一
- 8) 第 124 回 平成 12 年 2 月 26 日 (受講者 89 名)
「京都地方・簡易裁判所の調査」 調査課 上 村 和 直
開館 20 周年記念講座「桃山陶器」第 7 回
「織豊期の国産陶磁」 調査課 百 瀬 正 恒
- 9) 第 125 回 平成 12 年 3 月 25 日 (受講者 103 名)
「京都御所東方公家屋敷群跡の発掘調査」 調査課 丸 川 義 広
開館 20 周年記念講座「桃山陶器」第 8 回
「桃山陶磁と建築」 資料課長 長 宗 繁 一

考古資料の貸出

- 1) 継続貸出分 32 件 686 点
- 2) 新規貸出分 18 件 284 点

関係機関への参加

- 1) 平成 11 年 4 月 27 日 於：京都市（職員会館かもがわ）
「平成 11 年度第 1 回京博連幹事会」 館 長 村 田 耕太良
- 2) 平成 11 年 6 月 29 日 於：京都市（京都市国際交流会館）
「平成 11 年度京博連総会」 館 長 村 田 耕太良
- 3) 平成 11 年 7 月 15・16 日 於：奈良市（奈良ロイヤルホテル）
「関西博物館連盟第 139 回例会」 副館長 村 木 節 也
- 4) 平成 11 年 7 月 30 日 於：京都市（職員会館かもがわ）
「平成 11 年度第 2 回京博連幹事会」 副館長 村 木 節 也
- 5) 平成 11 年 9 月 29 日 於：京都市（職員会館かもがわ）

- 「平成11年度第3回京博連幹事会」 館長 村田 耕太良
- 6) 平成11年12月22日 於：京都市（京都アスニー）
- 「平成11年度第4回京博連幹事会」 館長 村田 耕太良
- 7) 平成12年1月20日 於：京都市（京都市学校歴史博物館）
- 「平成11年度京博連会員研修」 考古資料館 多田 清 治
- 8) 平成12年3月23日 於：大阪市ほか（キッズプラザ大阪ほか）
- 「平成11年度京博連他都市博物館施設への視察研修」 館長 村田 耕太良

博物館学芸員課程実習生の受け入れ

1) 資料館業務、文化財写真撮影、情報処理、保存処理および印刷についての実習

京都造形芸術大学	1名	平成11年8月31日～9月3日
京都女子大学	2名	〃
立命館大学	3名	〃
京都橘女子大学	4名	〃
京都精華大学	3名	〃

2) 資料館見学

奈良大学	31名	平成11年6月6日
佛教大学	38名	平成11年7月21日
大阪市立大学	34名	平成11年7月27日

入館状況

表4 入館者数一覧表

月	開館日	一 般		団 体		合 計	一日平均
		12才以上	12才未満	12才以上	12才未満		
4月	26	1,115	58	189	0	1,362	52.4
5月	26	1,103	81	160	54	1,398	53.8
6月	26	983	61	144	20	1,208	46.5
7月	27	1,065	53	225	0	1,343	49.7
8月	26	1,166	98	43	63	1,370	52.7
9月	26	1,002	25	271	0	1,298	49.9
10月	27	1,380	30	171	0	1,581	58.6
11月	6	321	0	0	0	326	54.3
12月	23	1,300	26	393	0	1,719	74.7
1月	24	1,213	26	90	0	1,329	55.4
2月	25	1,618	56	189	0	1,863	74.5
3月	27	1,679	33	150	24	1,886	69.9
計	289日	13,945人	552人	2,025人	161人	16,683人	57.7人

※11月9日から11月30日の間、常設展示展示替えのため臨時休館

(金島恵一)

3 役職員名簿（2000年3月31日現在）

（1）役員名簿

役員名	氏名	職名
理事長	坪倉 讓	京都市文化市民局長
専務理事	岡崎 道晴	京都市文化市民局文化部担当部長
理事	石野 隆司	京都市文化市民局文化部長
	井上 満郎	京都産業大学教授
	上田 正昭	財団法人世界人権問題研究センター理事長
	川上 貢	財団法人京都市埋蔵文化財研究所所長
	田辺 昭三	神戸山手大学教授
	角田 文衛	財団法人古代学協会理事長・古代学研究所所長
	西川 孝治	京都大学名誉教授・滋賀県立大学教授
	橋本 福一	京都市埋蔵文化財調査センター所長
	村井 康彦	滋賀県立大学教授・京都市歴史資料館館長
	森口 源一	京都市文化市民局文化部文化財保護課長
	和田 晴吾	立命館大学教授
監事	伊本 俊男	京都市会計室長
	廣瀬 伸彦	税理士・京都府監査委員

（2）職員名簿

	氏名	職名		氏名	職名	
	川上 貢	研究所長（理事）	調査部 調査課	鈴木 久男	調査課長	
	田辺 昭三	嘱託（理事）		平方 幸雄	課長補佐	
総務部 総務課	三宅 典雄	総務部長		（総務部総務課長補佐兼職）		
	辻 博	総務課長		菅田 薫	調査第1係長	
	金島 恵一	庶務係長代理		磯部 勝	調査第2係長	
	辻 純一	事業係長		前田 義明	調査第3係長	
	上村 京子	主任		辻 裕司	調査第4係長	
	本田 憲三	〃		本 弥八郎	調査第5係長	
	夏原美智代	〃		平田 泰	統括主任	
	上田 栄治	〃		久世 康博	〃	
	西大條 哲	〃	木下 保明	〃		
佐藤 正典	事務職員	鈴木 廣司	〃			

	氏名	職名
調査部 調査課	百瀬 正恒	統括主任
	吉村 正親	〃
	加納 敬二	〃
	平尾 政幸	〃
	上村 和直	主任
	丸川 義広	〃
	吉崎 伸	〃
	真喜志悦子	〃
	岡 ひろみ	〃
	田中利津子	〃
	能芝 勉	〃
	能芝 妙子	〃
	鎌田 泰知	〃
	小松 武彦	〃
	竜子 正彦	〃
	伊藤 潔	〃
	出口 勲	〃
	藤村 敏之	〃
	山口 真	〃
	津々池惣一	〃
	南出 俊彦	〃
	太田 吉男	〃
	堀内 寛昭	〃
	大立目 一	〃
	小檜山一良	〃
	近藤 章子	〃
	布川 豊治	〃
	永田 宗秀	〃
	宮下 則子	〃
	吉本 健吾	〃
網 伸也	調査研究技師	
内田 好昭	〃	
高橋 潔	〃	
山本 雅和	〃	
南 孝雄	〃	

	氏名	職名	
調査部 調査課	小森 俊寛	調査研究技師	
	長戸 満男	〃	
	上村 憲章	〃	
	近藤 知子	〃	
	桜井みどり	〃	
	清藤 玲子	〃	
	東 洋一	〃	
	藤村 雅美	〃	
	モンペティ恭代	〃	
	小谷 裕	〃	
	尾藤 徳行	〃	
	大立目道代	〃	
	西村 洋子	〃	
	法邑真理子	〃 (1999. 6. 30 退職)	
	端 美和子	〃 (1999. 8. 30 退職)	
	高 正龍	〃 (2000. 3. 31 退職)	
	調査部 資料課	長宗 繁一	資料課長 (資料係長事務取扱)
		菅田 悦子	主任
		出水みゆき	〃
		児玉 光代	〃
		卜田 健司	〃
		宮原 健吾	調査研究技師
村井 伸也		〃	
村上 勉		〃	
幸明 綾子		〃	
大槻 明義		〃	
中村 享子	〃		
中村 敦	担当係長		
永田 信一	担当課長		
考古資料館	村田耕太郎	館長	
	村木 節也	副館長	
	原山 充志	調査研究技師	
	多田 清治	〃	

表5 平成11年度発掘調査一覧表

	契約番号・遺跡名・略記号	所在地	期間	面積	委託者	調査員	備考
平安 京 跡	1 10-025.11-004 平安京左京北辺四坊 98HK-GS003	上京区京都御苑3 (旧ゲートボール場跡地)	98.08.27 ～99.07.28	1,670㎡	建設省近畿 地方建設局	平田 小檜山 小松	
	* 11-015.12-003 平安京左京北辺四坊 99HK-GS004	上京区京都御苑3 (饗宴場跡地)	99.04.19 ～00.06.16	7,630㎡	建設省近畿 地方建設局	丸川、木下 能芝勉 藤村雅ほか	報告書刊行 予定
	* 9-018.10-003.11-008 平安京左京二条四坊 97HK-NG001	中京区丸太町通 柳馬場東入	97.10.01 ～99.02.26	4,000㎡	最高裁判所事 務総局	上村和 山本	平成10年度 で報告済み
	2 11-020 平安京左京三条二坊 ・史跡旧二条離宮 99HK-U0002	中京区二条城町他地内	99.08.30 ～99.11.12	60㎡	京都市	長戸	
	3 10-030.11-009 平安京左京六条三坊 98HK-PP001	下京区新町通松原下る 富永町110-1 (修徳小学校)	98.09.29 ～99.10.01	1,310㎡	京都市	平尾、山口 藤村敏 大立目道	
	4 11-044 平安京左京七条二坊 ・名勝滴翠園 99HK-WI007	下京区堀川通花屋町下る 本願寺門前町地内	00.01.17 ～00.02.10	15㎡	宗教法人 浄土真宗本願 寺派本願寺	近藤知	
	5 10-052.11-006 平安京左京八条二坊 99HK-EQ001	下京区油小路通 塩小路下る東油小路町 地内	99.04.01 ～00.06.18	200㎡	社団法人近畿 建設協会	近藤章 加納	
	6 11-038 平安京右京一条二坊 99HK-JE001	中京区西ノ京円町55-1	99.11.01 ～00.03.25	1,568㎡	株式会社 ニノミヤ	小森 南出	
	7 11-016 平安京右京三条一坊 99HK-UU003	中京区西ノ京船塚町他 地内	99.07.07 ～00.03.01	818㎡	京都市	伊藤 真喜志 鎌田	
	* 11-013.12-004 平安京右京三条二坊 99HK-RA003	中京区西ノ京東中合町1	99.07.08 ～00.03.31	4,670㎡	京都市	鈴木廣 網 清藤	報告書刊行 予定
8 11-033 平安京右京六条一坊 99HK-XF016	下京区中堂寺南町地内	99.09.29 ～99.10.26	230㎡	住宅・都市整 備公団	永田宗 藤村敏		
9 11-034 平安京右京六条一坊 99HK-VG002	下京区中堂寺北町23 (朱雀第三小学校)	99.08.09 ～99.12.09	810㎡	京都市	山本 上村和 太田	11-027 試掘	
鳥 羽 離 宮 跡	10 11-014 鳥羽離宮跡 99TB-TB141	伏見区竹田浄菩提院町76	99.05.17 ～99.07.21	181㎡	京都市	小森	国庫補助
	11 11-036 鳥羽離宮跡 99TB-TB142-2	伏見区竹田内畑町53	99.08.28 ～99.10.12	200㎡	社会福祉法人 清和園	小谷 前田	11-025 試掘
	* 11-032.12-006 鳥羽離宮跡 99TB-TB143	伏見区中島秋ノ山町地内	99.11.02 ～00.06.07	710㎡	京都市	南 尾藤	平成12年度 で報告予定

	契約番号・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	委託者	担当者	備考
中臣遺跡	12 10-022.11-002 中臣遺跡 98RT-NK079	山科区勸修寺 東栗栖野町31他	98.10.02 ～00.03.14	9,856㎡	京都市	内田 高、東 堀内寛	
	* 11-028.12-005 中臣遺跡 99RT-NK080	山科区勸修寺 東栗栖野町地内	99.11.08 ～00.05.19	722㎡	京都市	東 磯部 高	平成12年度 で報告予定
長岡京跡	13 11-035 長岡京左京一条三坊 99NG-SD	南区久世東土川町他地内	99.09.16 ～99.12.28	350㎡	京都市	百瀬	B2区
	14 11-012 長岡京左京一条三坊 99NG-SD	南区久世東土川町他地内	99.06.21 ～99.11.15	600㎡	京都市	上村憲	C2区
	15 10-055.11-007 長岡京左京一条三坊 99NG-SD	南区久世東土川町178他	99.04.19 ～99.09.02	650㎡	京都市	百瀬 鎌田	D2・3区
	16 11-026 京都大学構内遺跡 99KS-BA008	左京区北白川追分町地内	99.09.24 ～99.10.13	65㎡	京都市	南出菅田	
	17 11-022 六波羅政庁跡 99RT-AA004	東山区茶屋町527	99.07.01 ～00.03.24	1,025㎡	建設省近畿地 方建設局	近藤知 田中 大立目一	
	18 11-029 中久世遺跡 99MK-DG001	南区久世中久世町 四丁目37	99.07.21 ～99.10.01	320㎡	京都市	出口	国庫補助
	19 11-010 大藪遺跡 99MK-OG002	南区久世大藪町他地内	99.07.06 ～00.03.21	1,700㎡	京都市	吉崎、出口 西大條 宮下	
	* 11-040.12-007 西飯食町遺跡 99TB-SC001	伏見区深草池ノ内町13	99.12.20 ～00.10.31	734㎡	京都市	上村憲 鎌田	平成12年度 で報告予定
	20 11-039 醍醐廢寺跡 99FD-DD005	伏見区醍醐西大路町地内	99.09.16 ～99.11.29	473㎡	京都市	津々池 布川	11-024 試掘
	21 10-024.11-003 史跡醍醐寺境内 98FD-DT003	伏見区醍醐伽藍町、 東路町地内	98.07.23 ～99.08.06	320㎡ 455m	京都市上下水 道事業管理者	津々池 布川、菅田 竜子、吉本	発掘・立会
	22 11-037 下三栖遺跡 99FD-SS005	伏見区横大路 下三栖辻堂町地内	99.08.24 ～00.02.08	710㎡	京都市	加納 近藤章	
	23 11-011 伏見城跡 99FD-MO002	伏見区桃山町立売 1-6他	99.05.13 ～99.09.06	970㎡	社会福祉法人 健光園	桜井 南	10-049 試掘

表6 試掘・立会調査一覧表

	契約番号・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	委託者	担当者	備考
平安宮跡	1 11-021 平安宮豊楽院・朝堂院跡 99HK-UW001	中京区九太町通一筋南通、 七本松通～千本通他	99.05.10 ～99.09.03	1,485 m ² 立会	京都市上下水道事業管理者	南出尾藤	
	2 11-045 平安宮朝堂院跡 99HK-UW002	上京区千本通 (竹屋町通～夷川通) 地内	99.12.07 ～00.02.29	293 m ² 立会	京都市上下水道事業管理者	菅田吉本 竜子	
	3 11-047 東寺講堂須弥壇 99HK-TG	南区九条町1	00.01.17 ～00.01.25	7 m ² 確認	宗教法人 教王護国寺	平尾	
	4 11-017 平安京左京九条四坊 99HK-BQ001	南区東九条南岩本町地内	99.07.01 ～99.07.12	315 m ² 試掘	京都市	永田宗本	
	5 11-027 平安京右京六条一坊 99HK-VG001	下京区中堂寺北町23 (朱雀第三小学校)	99.06.28 ～99.07.09	41 m ² 試掘	京都市	上村和	発掘に移行 1章II-9
その他の遺跡	6 11-025 鳥羽離宮跡 99TB-TB142	伏見区竹田内畑町53	99.06.28 ～99.07.08	38 m ² 試掘	社会福祉法人 清和園	前田	発掘に移行 1章III-11
	7 11-023 長岡京左京九条四坊 99NG-YE001	伏見区納所町	99.08.16 ～99.09.03	115 m ² 試掘	京都市	上村和	
	8 11-041 史跡仁和寺御所跡 99UZ-NG002	右京区御室大内33	99.10.14 ～99.11.05	40 m ² 試掘	宗教法人 仁和寺	平田	
	9 10-051.11-005 法性寺跡・貞観寺跡ほか 99FD-RS002	東山区本町十七丁目 ～伏見区深草瓦町	99.03.01 ～00.01.21	1,460 m ² 立会	西日本旅客鉄道株式会社	吉村	
	10 11-024 醍醐廃寺 99FD-DD004	伏見区醍醐西大路町地内	99.07.06 ～99.08.20	930 m ² 試掘	京都市	津々池布川	発掘に移行
	11 11-031 久我東町遺跡 99NG-KM001	伏見区羽束師 志水町他地内	99.12.15 ～99.12.28	137 m ² 試掘	京都市	鎌田	
12 11-001 京都市内遺跡 99BB-	京都市内一円		立会	京都市	菅田竜子 吉本	国庫補助	

表7 平成8年度その他契約一覧表

No.	契約番号	内容	遺跡名・所在地	委託者	調査員	備考
1	11-018	修羅保存 処理	特別史跡特別名勝（金閣寺）鹿苑寺庭園 北区金閣寺町1	宗教法人鹿苑寺	卜田、大槻	
2	11-042	整理	鳥羽離宮跡 伏見区竹田浄菩提院町76	京都市	小森	国庫補助 11-014分
3	11-043	整理	中久世遺跡 南区久世中久世町四丁目37	京都市	出口	国庫補助 11-029分
4	11-046	測量	安楽寿院境内地 伏見区竹田内畑町74	京都橋史跡研究会	宮原	
5	11-048	測量	上総町遺跡 北区小山上総町（大谷大学構内）	関西文化財調査会	宮原	
6	11-049	測量	平安京跡 中京区西洞院通錦小路下る螭螂山町464-1	古代文化調査会	宮原	
7	11-050	報告書	京都市内遺跡 京都市内一円	京都市		国庫補助